
白馬探の大切な人

洋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白馬探の大切な人

【Nコード】

N7999A

【作者名】

洋

【あらすじ】

探偵甲子園から1年。自分の推理に自身を無くしていた白馬だったが、『彼女』との出会いで彼は変わっていく。生まれて初めて実感した『大切な人』の存在……。しかし彼女の宝石をめぐる陰謀が、やがて悲劇へと発展してしまう。様々な人間関係が複雑に交錯する中で、白馬は怪盗キッドや服部平次までもを巻き込んで、運命を変えるために奔走する……！

プロローグ（前書き）

白馬の相手は原作無視のオリジナルキャラですので、気分を害す
であろう方はご遠慮下さい。

また、後々明らかになることですが、ある事情がキツカケで白馬の
性格が原作と激変しています。違和感を感じられる方がいらっしや
るかもしれませんが、そのような苦情はご遠慮下さいますよう、よ
ろしくお願い致します。

プロフィール

若宮葵 わかみやあおい 18歳 私立宝崎学園高等部3年

宝石店や美術館の経営を手掛ける若宮グループの会長、若宮英吾 わかみやえいご の長子長女【4歳下の妹、椿 つばきあり】

イギリス留学内定済み

法律の勉強をして、将来は国際的に活躍する政治学者になるという夢を持つ

恋愛経験なし

白馬探 はくばたくる 18歳 ロンドン市内のハイスクールに留学中

警視庁のトップ・警視総監の御曹司（一人息子）

日本でもイギリスでも数々の難事件を解決している高校生探偵

恋愛経験なし

プロローグ（後書き）

初めまして。お目を通して頂き、ありがとうございます。

一応、こんな感じの二人の設定です。白馬が恋するのはオリキャラ
ですので、抵抗がある方はご注意ください。

では、本編をどうぞ^^

第1話 衝撃

「…は？」

葵はあまりの驚きで思考が完全に停止した。たっただいま父から聞いた言葉が理解できない。

聡明な葵の思考を一瞬にしてパニックに陥れたその言葉は、温かな緑の庭が見渡せるリビングでの穏やかな朝食の空気を一変させた。右手ではバターがついたナイフ、左手では香ばしい焼き上がりのトーストを持ったまま、葵は身動きさえ忘れた。そんな葵が瞳を大きく見開いて見つめていることに気を留める様子もなく、父英吾はコーヒーを一口飲んだ。

葵はつい先ほどの、あの理解不能の言葉が発せられる前の、普通の父と娘の会話をしていたときと全く変わらない様子でコーヒーを飲む父親を見つめた。じつくりと熱いコーヒーを味わってカップを置いた英吾は、平然と葵を見据えて言った。

「早くバターをぬりなさい」

はっと我に返った葵は手元を見た。先ほどすくいとったバターが、ナイフの上で溶けかけていた。戸惑いながら顔を上げて父を見てから、とりあえずトーストにぬった。ゆっくりと全体に広げながら、葵は父とのやりとりを思いかえした。

平日より遅めに起きた土曜日の朝。ほぼ同じ時間にテーブルにいた父と自分。いつも通りの他愛もない会話を交わしていたら、唐突に父が切り出した。

「葵、お前は婚約することになる」

コンヤク…？こんやく…？こんやく…？

バターをぬり終わって、トーストとナイフを皿に置いて再び父を見上げた。

こんやく…婚約！？

やっと脳が認識した。婚約。男女が結婚の約束をすること。自分が、他の男性と結婚の約束をするということ…。

そこまで行き当たって、また思考が停止しかけたとき、英吾が満足そうに話し始めた。

「いきなりですまんが、昔から考えていたことなんだ。相手は、私の高校、大学時代の同級生で、今は警視總監をやってる人の息子さなんだ。お前と同じ年だよ。父親の影響で犯罪学に興味を持って、長い間イギリスに留学しているらしい。頭脳明晰で、高校生探偵として日本でもイギリスでも数々の難事件を解決していて…」

「あつあの、お父様…」

葵の驚きと戸惑いと絶句と混乱の表情をすべて無視して続く父親の話を、葵はやつとのこと中断させた。

「あの、いきなりすぎてまだ信じられないというか、実感がないんです…。本気でおっしゃってるんですよね？」

「本気だ。」

「わかりました。しかし、なぜ結婚なのですか？紹介とかお見合いならまだ理解できますが、会ったこともない方といきなり結婚だなんて…。それに私はまだ高校生です。」

その問いに、英吾は笑って答えた。

「なにもすぐ結婚するわけじゃないから心配するな。まだ婚約だけだ。それに、さっきも言ったが、このことはかなり昔から向こうの家と真剣に考えていたんだ。決して軽はずみではない。あちらの息子さんが18歳になったのを機に、本格的に実現させようということになったな」

どうやら本当に本当らしい。

しかもかなり嬉しそうだ。

相当楽しみだったのだろう。

そうは思ったものの、葵はまだ信じられなかった。イギリス留学が内定し、向こうの大学と将来への希望に満ちていたのに、勝手に決まっていた婚約。今どき、未成年の娘を勝手に婚約させるなんて非

常識なことがあるのだろうか？明治大正あたりを舞台にしたラブロマンス小説でよくある話のようではないか。

ヒロインのお嬢様が、親に無理やり婚約させられる。ひそかに思合っていた幼馴染みがヒロインと駆け落ち。二人は身分違いの愛に苦しむ。

というような。まあ自分は愛や恋といったものはほとんど未経験だから少し違うが。…だが今は平成。若者たちは自由になり、恋愛結婚が普通になっている。結婚年齢の高齢化、それに伴う少子化が問題になっている、平成時代だ。

なのに婚約？この私が？（客観的にはお嬢様らしいが）一般庶民のこの私が？まだ高校生の私が？

疑問と困惑の感情が頭の中でぐるぐるまわる。だが、次の父の言葉は、その中に更に驚愕という感情を加えた。

「ということ、明日あちらの家にあいさつに行くからな」

葵はもう絶句だった。返す言葉も思い付かず、口を開けたままただうなずいた。葵の了解に満足した英吾は、またコーヒーを一口飲んで新聞を広げた。葵は相変わらず口を開けっぱなしで、新聞に隠れた父を見つめ続けた。

しばらくののち、新聞をたたんで脇に置いてから、英吾が言った。「早くトーストを食べなさい」

言われて初めて気付いたように、葵はさっきバターをぬったトーストを見た。バターは完全に溶けて液体となり、トーストに染み込んでいる。

機械的にそれを持ち上げ、一口かじる。何の味もしない。

葵は父を見上げた。

娘がトーストを食べたのを見届けると、

「ではちよつと書斎で仕事を片付けてくる」と言い残して席を立った。

取り残された葵は、ぼんやりと冷めきったトーストを眺めていた。

使用人の老人・安藤が、英吾の皿を下げに来た。事のなりゆきをすべて見ていた彼は、葵を気遣って声をかけた。

「お嬢様：大丈夫でございますか？」

葵は安藤のほうを見たものの、言葉が思い浮かばない。生まれたときから世話をしてくれたこの老人の深い瞳は、心底心配そうだった。

お互いに戸惑っているとき、妹の椿が朝食を食べにリビングに降りて来た。

「姉さま、安藤さん、おはようございます」

それにあいさつを返したのは安藤だけだった。蒼白な姉の顔を見て、椿は驚いた。

「ね、姉さま！？具合がよくないのですか!？」

「いえ、そうではないのだけれど……」

そこから先は何と表現していいかわからず、葵はまた黙ってしまった。

椿の不安そうな顔を見兼ねて、安藤が事情を説明した。

それを聞いて言葉を失ってしまった椿と、安藤、葵の間に沈黙が訪れたとき、ふいに葵が立ち上がって言った。

「ごちそうさまでした。部屋へ戻ります」

葵はトースト一口の朝食を終え、ふらふらと自室に続く階段を昇って行った。

困り果ててかける言葉も見つからない椿と安藤が、その後ろ姿を黙って見送った。

第1話 衝撃（後書き）

まだ白馬は存在しか出てきません。何とも非現実的な設定ですが（汗・）気が向いたら、次回も読んでやって下さいませ m（| |）

第2話 姉妹

2階の自室に戻った葵は、ベッドの端に腰を降ろして俯いていた。爽やかな朝の風がカーテンを揺らして流れ込み、葵の茶色く波打つ髪を軽やかに踊らせている。

しかし逆に、本人の表情は重く沈んでいた。

一人で落ち着いて考えているうちに、だんだんと頭の中が整理されてきた。

自分は父の旧友の同い年の息子と婚約する。婚約だけだから、日常生活にさほど変化はないだろう。したがって自分は予定通りイギリスに留学できる。相手も普段はイギリスで過ごしている。そして明日、その相手に会いに行く…。

本当に、何て急でかつ非常識なんだろう。

葵は溜息をついた。

自分が見ず知らずの相手と婚約しなければならない理由がどこにあるというのだろうか？まだ高校も卒業していないというのに。これからのキャンパスライフを楽しんで、自分で素敵な相手を見つけようと思っていたのに。

また溜息。今度は涙と一緒に。

浮かんだ涙をこぼさないよう、葵は上を向いた。

泣いてはいけない。泣いたら、きっと父が憎くてたまらなくなってしまう。

朝の風が、涙で湿った目にしみた。

それから昼までは何も手につかなかった。勉強しようにも、数式や英文は頭に入らず、大好きな本を読もうにも、文章を目でなぞるだけで、話が全くわからなかった。

仕方なく、出窓に肘をついて考え事に沈んだ。

やはり何をしても考えてしまう。明日には、相手と対面する。正式に両家の間の関係が成立するのだ。

…そんなの絶対にいやだ。いやだ。いやだいやだいやだ！

いくら父の友人の息子だとしても、本気で恋愛をした人とでない結婚なんかしたくない！

父には、女の気持ちかわからないのだろうか？父だって、母とは恋愛結婚だったはずだ。

こんなときに、母の助けが欲しかった。こんなときこそ、誰よりも、母に側にいて欲しかった。

だがそれは叶わない。一人ぼっちだ。

葵と椿の母、華代は、8年前にがんで亡くなった。葵が10歳、椿が6歳の時だった。

亡き母の優しい笑顔がまぶたの裏に甦り、我慢しきれなかった涙があふれた。

お母様…

抑えられない気持ちでいっぱいになり、葵はベッドに飛び込んだ。枕に顔をうずめて、泣き声押し殺す。自分の嗚咽が聞こえるだけの暗闇で、葵は心の中で何度も母を呼んだ。

やがて昼になり、安藤が控え目に部屋に来て昼食ができたと伝えた。

放心状態だった葵は、無意識に部屋を出て階段を降り、リビングのテーブルについた。英吾は急用だそうで、昼食時は外出中だった。

姉妹二人で、静かに昼食をとった。

時折気まずそうに椿が姉を見上げたが、葵は心ここにあらずといった状態で、ただ黙々と食べていた。掛ける言葉が見つからず、仕方なく椿も食べることに集中した。

こんな姉の姿は、母が亡くなってからは一度も見たことがなかった。

姉は、母を亡くしたときまだ6歳だった自分を本当に大切にしてくれた。葵に育てられたと言ってもいいくらいだ。世話や遊びの相手という面でもそうだが、普通の子供が母親から学ぶ精神的なことを、椿は姉からすべて学びとっていた。思いやり、優しさ、愛情…。

そして葵は、普通の母親が子供にすることのすべてを、椿にしてくれた。

泣いていたら抱きしめてくれたし、怪我をしたら心配してくれた。いけないことをしたら叱ってくれた。椿の成長を、まるで自分のことのように喜び、見守ってくれた。

葵は椿の姉であり、母親でもあった。

そんな責任感と優しさを備え、弱音をはいたことのなかった姉が、今はこんなに弱ってしまっている。

自分にとっては母親でも、やはり姉も母親が必要な歳なのだ。

すっかり元気をなくしてしまった葵を見ながら、椿もまた、亡き母を思うのだった。

第3話 前夜

それから午後は、明日の準備に追われていた。

使用人やメイドが、英吾から言いつけられたものをいろいろと揃えてきたので、微調整をしたのだ。

着ていく服を決め、履いていく靴を決め、身に着けていくアクセサリーを決めて…。

使用人やメイドたちは、それぞれ複雑な表情だった。

安藤を始めとする年配のものは、何となく嬉しそうというか安堵しているような様子を時折見せるものの、表情には悲しみに似た何かが浮かんでいた。

一方で比較的若いものたちは、明らかな不満と疑念が顔に出ている。

葵よりも4、5歳年上の若いメイドの綾^{あや}が、葵の首に花をかたどった上品なネックレスをつけながらつぶやいた。

「どうして旦那様は、お嬢様にこんな酷なことをなさるのでしょ

う…」

その言葉を聞いた葵は、静かに思った。

やはり皆、お父様に対して私と同じことを思っているのね

しかし、自分の気持ちを知ってくれている人がいることを知っても、葵の心は晴れなかった。

思ってくれていても、この状況ではどうしようもない

葵はもうほとんど投げやりになっていた。あの父のことだ。何を言っても考えを変えることはないだろう。もう、どうしようもない。諦めて従うしかないのだ。

そう思っ、葵が今日十数回目の溜め息をついたとき、年配のメイドの多江^{たえ}さんが綾をたしなめた。

「綾や、旦那様を悪く言うんじゃないよ。旦那様なりに、これが最も良いとお思いになつてのことなんですから。奥様のために
も
」

「多江さん…！」

今度は多江さんの言葉を安藤がたしなめた。というか遮った。

安藤の言葉に多江さんはしまった！という顔をした。そして慌てて「失礼しました…！」

と言うとそれきり黙ってしまった。平然と、葵の足下の箱からがさがさと靴を出している。

安藤も、何ごともなかったかのよう何枚ものドレスをてきぱきと片付けている。

他の年配のものたちも何の変化を見せない。だが何となく、彼らの中の雰囲気が変わったように思える。

若いものたちは、不思議そうに顔を見合わせた。葵もさっぱり意味がわからなくなった。

母のため？この婚約が、母のためということなのか？母はもうこの世にいないというのに…

それにその言葉を、安藤が遮ったのも気になる。

だがそれ以来、彼らがそれらしい素振りを見せることはなく、順調に支度は済んだ。

夕食は、親子3人でとった。英吾は葵に明日の詳細を話していた。

「あちらは白馬という方だ。明日は朝10:30に家を出る。白馬邸までは車で15分もかからん。それから息子さんも交えて4人で昼食をとることになっている」

「はい」

英吾の説明に、葵は落ち着き払ってただ返事を返す。さつきからそんなやりとりが続いている。

夕食の席で父に姉の婚約について抗議しようと思っていた椿は、姉があまりにも平然と父の言うことに返事を返しているので、話を切り出せなかった。

夕食が終わっても姉に声を掛けることができず、姉が自室に帰るのをただ見つめていた。

姉は、今何を思っているのだろう。本当に婚約に応じるのだろうか。

もう諦めてしまったのだろうか。本当にそれで良いのだろうか…？
父と姉の考えていることが全くわからない中で、椿はそんなことを延々と考えながら眠りについた。やがて夜は更け、日付が変わり、秋の美しい月が空を移動し、月明りがだんだんと太陽の光に変わって、若宮家と白馬家にとっての運命の朝が訪れた…

第4話 始まり

昨日の夕食と同じような雰囲気朝食をとり、親子3人はこれから始まる一日の支度のために自室へ散っていった。

英吾の姿が見えなくなった後で、一緒に階段を昇りながら椿が葵に言った。

「姉さま、あの…本当に…行くんですか？」

眠れなかったのか、充血して腫れている目で弱々しく椿をとらえてから、葵は力無く微笑んで言った。

「ええ。相手の方がせっかく招いて下さってるのだから」

「でも…でも姉さま、そうしたら本当に姉さまは…婚約を…。結婚相手を決められてしまうんですよ…！？」

椿の言葉に葵の微笑みはほんの少し陰った。

だが椿がそれに気付くか気付かないかのうちに葵は椿を追い越して階段を数段昇り、踊り場で振り返った。

階段を昇る間に微笑みは少し明るくなっていた。

「でもきつと、お母様は喜ぶから」

「…え？」

葵に追いついて踊り場に立った椿は目を見開いて姉を見た。

葵がまた階段を昇り始めたので、遅れないよう小走りで横に並んだ。前方を見つめたまま葵が続けた。

「昨日、綾が『お父様はひどいことする』って言ったら、多江さんが言ったの。『これはお母様のためなんだから』って」

椿は言葉が出ないようなので、そのまま続けた。

「私には言っただけいけないことだったみたいで、安藤さんがそこで多江さんを黙らせたから詳しくはわからないけれど、きつとお母様もこうなることを望まれてたことだと思ふの。だからいいのよ」「二人はそこでちょうど階段を昇りきった。

「確かに辛いことだけど、お母様が喜ぶって考えたら少しはいいことだっと思ってきてきたの」

椿はどんな顔をしていいのかわからなかった。目の前で優しく微笑む姉が、けなげだった。

椿は無言で頷いた。それを見た葵は、満足そうに椿に笑いかけ、自室のドアの中に入って行った。

椿はしばらくそのドアを見つめていたが、やがてゆっくりと歩きだし、自分の部屋のドアを開けた。

昨日の夕食で伝えられた通りの時間・10:30に、若宮家の屋敷の表門が開いた。

清楚なワンピースとボレロに身を包み、いつになくしとやかにメイクをした葵が、父と並んで出てきた。

正面に停まった黒塗りの高級車に乗り込む。そのとき、葵がいつも身につけているネックレスが朝の光にキラリと光った。

ドアを閉め、窓越しに、不安そうな表情の妹に微笑みかけた後、葵は白馬邸に向かって出発した。

車が走り去った後、椿と他の使用人たちが門の中へと引き返していく様子を、影からじつと伺っている人物がいた。

大きなサングラスの奥の鋭い目は、門の横の表札に視線を移した。

その目はつい先ほどは、葵の長い髪と、彼女の胸のネックレスを見逃さなかった。

やがて椿たちが完全に見えなくなると、その男は携帯電話を取り出してボタンを押した。数秒の間があり、その男は電話の向こうの相手に話し始めた。

「もしもし。…いえ、今は仕事じゃないんですけど、どうしても

今伝えたいことがあります」

そこで男は一呼吸置くと、ニヤリと笑って言った。

「見つけましたよ、重要な手掛かりを。8年目にして、やっと」

その言葉に電話の向こうの人物が何か答えているのだろう。男はしばらくはい、はい、と返事をしていった。そして最後に勝ち誇ったように告げた。

「間違いありません。この目で見ただんです。『若宮』って苗字の屋敷で、華代にそっくりな若い女をね。それに、華代と同じネットワークスをしてたんです！」

第5話 出会い

「そのネックレス、してきたのか」

葵は胸元の宝石を見ながら、英吾が言った。

葵は隣りに座る父のほうを向き、静かに答えた。

「はい。お母様の形見ですから」

「…そうか」

細くて白い指で、そっとペンダントトップ持ち上げた。英吾もそれを見つめる。

さながら海を思わせる深い碧で、縦に長くカットされた宝石には、女神のような姿をかたどったシルバーの飾りが巻き付いている。どんな光も碧く透かしてしまうかのように思われるその美しさは、宝石、というより、鉱物というもつと自然な響きのほうが合っている。葵は父に謝った。

「すみませんお父様。他にいろいろと用意して頂いたのに、結局いつも通りこれを選んでしまいました」

英吾は優しく微笑んで答える。

「いいんだ。おまえが一番気に入っているんだから。形見を身に着けて婚約ができて、華代も大いに喜ぶよ」

またお母様のことが出た…

葵は父の発言の中の『母のための婚約』という響きを敏感に感じとった。

いつの間にか、車は葵の知らない区域を走っていた。周りの看板や標識から、葵の住む市内ということにはわかったが、全く見たことのない景色だった。

英吾も窓の外を見て言った。

「もうすぐそこだ」

その言葉通り、車が角を曲がって少し走ると、大きな茶色の屋敷が

見えてきた。本当に、若宮邸を出発してから15分もかかっていない。こんな近いところにここまで立派な屋敷があるのに今まで気付かなかったのが不思議だった。

やがて若宮親子を乗せた車は屋敷の正面の蔽かな門をすべるように抜け、駐車スペースらしきところで停車した。

車から降りた二人の耳に、門が閉まる音が聞こえた。

その音は、葵の視界から色を奪った。

葵は瞬間的に思った。

閉じ込められた…！

それは檻に入れられたような感覚だった。もう逃げられない。自分は、婚約という名の鎖に繋がれ、この広大な白馬邸に閉じ込められたのだ。

高いレンガの塀に囲まれた白馬邸の庭は、美しかった。あちこちで花が咲き乱れ、低い生け垣が様々な形に手入れされて散らばっている。その生け垣に縁取られた何本もの小道は、一旦中央の豪華な噴水のスペースに集まり、そこからまた枝別れして、最終的に屋敷の正面玄関に通じる一本の広い道になっている。

だがそんな庭の景色も、葵には檻の中につくられた色のない偽物の外の景色にしか見えなかった。檻の中の獲物が逃げないよう、機嫌をとるためのおもちゃだ。

そのおもちゃの庭の中を、葵はいつの間にか父に付いて歩いていた。屋敷が近付くにつれて、檻の恐怖がどんどん膨らんでいって、噴水を通り過ぎる頃にはもう堪えられなくなっていた。葵は全身の震えが止まらなかつた。

そのとき、一人の老人が葵の前を歩く英吾に話しかけた。服装からして、使用人のようだ。二人は話で盛り上がっている。

葵の頭の中で声が響いた。

逃げない…！！

葵はさっと噴水の後ろに隠れた。二人が気付いていないことを確認

し、一目散に駆け出した。すぐに少し高めの生け垣に身を隠す。そのままかがんで移動し、さっきの位置からは完全に見えないところまで来た。

深呼吸して、気持ちを落ち着かせる。すると目に涙が浮かんできた。

お父様お母様、ごめんなさい。でも私はやっぱり無理です

葵はとにかくここから逃げようと思った。もう門は閉まっているし、周りはレンガの塀だ。裏口を探すしかない。

そう思っただけで潜んでいた生け垣を走り抜けたとき、目の前に突然人があらわれた。

葵は驚いて声を出しそうになった。相手も目を見開いてこちらを見ている。

葵と同じくらいの歳に見える青年で、ひよろつと背が高い。ふんわりした明るい茶髪が風に揺れる中、碧い瞳でこちらを見ている。濃紺のスーツのポケットに手を突っ込み、花壇の花を見ていたようだ。もとから動揺していた葵は、この青年がどんな立場の人なのか疑問に思うのも忘れて即座に聞いた。

「あのっ……ここから抜け出せる裏口とかをご存じありませんか!？」
青年はしばらく、必死の形相で息を弾ませている葵をぼかんと見つめていたが、はっと我に返って言った。

「こっちです」

すると葵の手を掴み、だつと走り出した。葵は繋がれた手に戸惑いながらも、転ばないよう注意して一緒に走り出した。

彼に引つ張られて走りながら、葵は奇妙な感覚に陥った。彼についていけば檻とは永遠に無縁なような気がする。彼が檻から助けてくれる、ただ一人の人なんだと。

根拠はないが、そう思った。

葵はそんな自分の考えに戸惑った。どうしてこんなことを思うのだろう?今会ったばかりの、見ず知らずの人なのに。

青年の、風に髪をなびかせた後ろ姿を見つめながら呆然と思った。

でも確かに、偽物の庭の中で、彼だけは生きているように感じた。繋がれた手に、熱を感じる。この人は偽物じゃない。事実、彼の碧い瞳は、色を失った葵の視界でもはつきりとわかったのだから。

青年はレンガ塀づたいに庭を駆け抜け、屋敷と塀の間に葵を招き入れた。

速度をゆるめることなくひたすら走り、屋敷の裏側まで来た。日の当たっている正面とは逆に、じめじめと暗い場所だった。

そこにはレンガ塀の一部に人ひとりが通れるほどの小さな門が取り付けられている。

そこまで来てやっと足を止めた青年は、急いで門を開けて葵を外に出した。

「さあ、早く！」

門から塀の外に出た葵は、青年を振り返った。頭が混乱していたが、何とか声を出した。

「あの…ありがとうございます」

「どういたしまして」

青年はそこで初めてにつこり笑った。何だか安心できる笑顔だった。緊張や恐怖や混乱が抜けた葵は、少し頬を緩ませて深く頭を下げた。そのまま走って道の向こう側に渡った。背後で、門の閉まる音がする。あの青年が閉めているのだろう。それは檻に閉じ込められる音ではない。檻から出されて自由になった音だった。

その音が鳴りやんだときには、葵はもう大きな道を曲がって白馬邸の周りの視界から消えていた。

だが、門の閉まる音は、葵に安心感を与えただけではなかった。それよりも大きな罪悪感が、真っ黒な手のように葵の心を押し掴みにした。

自分は父と、父の大切な友人と、その息子と、お互いの家で働いてくれている人たち、そして母にまで、何てひどいことをしてしまっ

たのだらう。

知らず知らずのうちに溢れていた涙は、視界を曇らせる。まとも
に周りが見えない中で、葵は堪えがたい孤独感に襲われ、その場に
うずくまった。

第6話 ワトソン

つい先ほど、いきなり

「この家から抜け出す道を教えてくれ」

と言ってきた女性を逃がした裏門を閉めながら、茶髪で色白の青年は道を渡って建物の影に消えていくその女性の後ろ姿を見つめていた。

彼女の華奢で弱々しい体は、昼前の高い太陽の下では一層頼りなかった。

暗い気持ちを背負ったようなその背中が見えなくなっても、青年はしばらく彼女が消えたあたりをぼんやり眺めていたが、やがてきびすを返した。

左手に分厚い手袋をはめ、木々を見上げて声を掛けた。

「ワトソン。」

その木々の間からさっそうと一羽の鷹が舞い降り、手袋をした彼の左腕にとまった。

そのまま歩きながら、彼女のことを考える。

気分を晴らすために、庭の隅の花壇の花を見ていた。

ざざっという音がしたかと思うと、突然生け垣の影からその人が出てきた。

最初に見えたのは、強い風に舞う茶色い髪だった。

その人の、驚きで大きく見開かれた目が、しっかりと自分をとらえた瞬間：動けなくなった。

彼女から、目が離せなくなった。

綺麗な人だった。波打つ髪に縁取られた白い顔……。すっつと鼻が高く、鮮やかに紅い、ふっくらした唇。そして…目。

この世界のどんな海よりも深く、この世界のどんな空よりも澄んだ、漆黒の瞳。

一瞬、その瞳の中に墜ちたと思った。

だが気付いたら、彼女の手を握って走っていた。

次にその瞳と向き合ったのは、去り際にお礼を言われたときだった。あのときの、気を許したようなやわらかい微笑みが頭から離れない。

青年は溜め息をついた。そして自分の左腕で、鋭い目でこちらを伺っている鷹に向かってつぶやいた。

「あの人を逃がして良かったと思うかい？ワトソン」

ワトソンは短く喉を鳴らした。青年は苦笑しながら歩き去った。

第7話 再会

葵は大通りをフラフラとさまよっていた。

勢いで逃げ出してきたはいいが、よく考えたら白馬邸は葵の来たことのない区域にあるのだ。それに、車で入って来た表門とは正反対にある裏門から出たので、通って来た方向も全くわからなくなっていた。

動揺していたため、とにかく近くの大きい道に走り込んだが、完全に迷ってしまった。

でも葵には、そう思った思考はあっても危機感がなかった。先ほどひとしきり泣いたせいで放心状態になっていて、ただ足を動かしているだけだ。

心に風穴ができたような虚無感。葵はどうしていいかわからなかった。檻から自由になったとはいいが、戻る場所がないのだ。家に帰るわけにもいかない。実のところ、葵がさまよっているのは、そうだったことが原因だからだと言うほうが正しい。

どれくらい時間が経っただろう。向かってきた黒塗りの車が、葵の横に停まった。

運転席から安藤が降りて来て、葵に駆け寄った。

「お嬢様！お探ししましたよ！旦那様からいなくなったと連絡をつけて…」

安藤の姿を見て、やっと孤独感から解放された葵はまた泣き出した。安藤は、葵の生まれる前から若宮家の使用人で、いつだって両親と同じくらい側にいてくれた人だ。

そんな安藤を前にして、人目をはばからず葵は泣いた。

かなりの高齢で曲がりかけの腰を伸ばし、安藤は葵の肩をそっと抱いて言った。

「帰りましょう、お嬢様」

しかし葵は涙声で首を振った。

「どこに？ねえ、安藤…どこに帰ればいいの？みんなにひどいことをして…私に帰る場所なんかはないのにつ…一体どこに帰れっというの…？」

安藤はまた言った。

「家へ、帰りましょう。旦那様の言いつけです。それに、椿様がお待ちですよ」

何も答えない葵を、安藤は車に乗せて走り出した。

若宮邸の門の前では、そわそわと椿が待っていた。

やがて道の向こうに安藤の車を確認すると、走り寄って来た。車が停まると、後部座席から姉がよろよろと出て来た。

うちひしがれた表情の姉を、椿は何も言わずに抱き締めた。

椿は自室で、ひたすら涙を落とす葵に付き添っていた。

床にくずおれ、うつむいてしゃくりあげる姉は、今にも倒れるのではないかと思われるほどに弱っていた。

ノックがあり、ドアの外から安藤の声がした。

「葵様、椿様、よろしいでしょうか。旦那様がお話をなさりたいと

…」

葵はとても話せる状態ではなかったので、椿が返事を渋っているといきなり英吾がドアを開けた。背後で安藤がうるたえている。

葵は怒られると思い、まともに父の顔が見れなかった。

謝ろうにも声が出ない。自分のした最低行為に、反省の姿も見せられないなんて…

たまりかねた椿が英吾に言った。

「お父様！いくらなんでも、姉さまがかわいそうすぎます！どうして無理やりこんなこと」

だが、椿はそこから続けられなくなった。戸口にたたずむ父の表情

には、怒りや失望などは全く見られなかった。ただ、葵に心底申し訳なさそうな顔を向けているだけだったのだ。

葵がやっとのことで顔を上げた。英吾は彼女の涙に濡れた蒼白な顔を悲しげに見つめた。そして次の瞬間、彼女に向かって深く頭を下げた。

葵はあまりの驚きで泣くことも忘れてしまった。

一同が啞然として見つめる中、英吾は言った。

「すまない、葵。許してくれ…。お前の気持ちを無視して勝手に決めて、悪いとされている。しかしこの婚約は、若宮家と、お前と、そして華代のためにも、どうしても必要なことなんだ。わかってくれ…」

しばらくののち、葵が静かに言った。

「いえ、私がいけなかつたのです。ごめんなさい、お父様」

英吾は頭を上げた。

「でも、もう決心がつかしました…。婚約を、お受け致します。二度と今日のように逃げたりは致しません」

しっかりと言い切った葵の強い瞳から、最後の涙が一滴流れ落ちた。椿が『そんな…』という表情で見つめているのを無視し、葵は父の言葉を待った。

英吾は、安堵の中にまだ申し訳なさが残る顔で言った。

「…ありがとう。ならば、明日また白馬邸へ行って欲しい」

明日は月曜だが、留学という進路が決まっている葵は自由登校なのだ。

「わかりました」

その言葉を聞いて、やっと申し訳なさ顔から消えた英吾は、黙って出ていった。

その夜

葵はベッドの中で、今日会ったあの青年のことを思っていた。

檻から出してくれた、私の救世主……。でも結局、また檻に戻る
ことになりました

葵は心の中でそっと話しかけた。

誰よりも愛してくれた父の願いを受け入れないなんて、私にはや
っぱり出来なかった

眠気にぼうつとしながら、そんなことを思った。

でもせめて、明日また会えるかしら……

葵は眠りに落ちた。

朝。昨日と同じ時間に出発し、同じ道を通って、再び白馬邸の門
に入った。

無意識に、昨日青年に出会ったあたりの生け垣に目がいく。しかし、
救世主の姿は見当たらなかった。

噴水を通り過ぎ、玄関の大きな扉の前に来た。英吾がベルを鳴ら
すと、内側から扉が開けられ、若いメイドがにっこりと笑ってあい
さつをした。

広い吹き抜けの玄関ホールに入ると、昨日の老人が二人を案内した。
見事な装飾品や美術品の前を通り過ぎ、ホールの目の前のドアまで
来た。

老人が声を掛ける。

「旦那様、探ぼつちやま、若宮様がいらつしやいました。」

どうぞ、と答える男の声がして、ドアが開く。広い客間の中央のテ
ーブルの向こう側に、こちらを向いて座っている二人の男性が見え
た。

葵はお辞儀をして言った。

「始めまして。若宮葵と申します」

そして頭を上げて二人を見る。

「いやあ、君が葵さんかね！英吾が自慢するだけのことはある。す

ばらしいお嬢さんだ。昨日は体調がすぐれなくて、ここについてすぐ帰らなければならなかったそうだが、大丈夫かね？」

だが、その言葉は葵の耳には全く入っていなかった。葵の目は、その隣りの青年に釘付けだった。穏やかに微笑みながら、自分を見つめ返している、その青年…。

「さあ、座りたまえ！」

陽気な声で父と共に席についてもなお、葵はその青年から目が離せなかった。婚約を聞かされたときよりも、更に大きな衝撃が、そこにあつた。

「とうとう夢が叶ったな」

英吾が嬉しそうに言った。それに答える白馬氏。

「そうだな。さあ、早速始めよう。これが私の一人息子の、探だ」
紹介された青年が言った。

「白馬探といいます。よろしくお願いします」

明るい茶髪に、碧い瞳…。そう、昨日葵を逃がした、あの救世主だった…。

第8話 人間観察

それからしばらくは、葵と探に関する質問をお互いにし合っており上がった。

白馬警視總監は本当に嬉しそうににこにこ話す人だった。きつと素で嬉しいのだろうが、彼の笑顔には嫌味がなく、話も、彼が言葉を発するだけで盛り上がった。

しかし葵は先ほどの衝撃の事実発覚のせいですれどころではなく、話が頭に全く入って来なかった。他の3人が笑うと、それに合わせて自分もぎくしゃくと作り笑いを繰り返した。

常に頭に浮かぶのは昨日のこと……。婚約がいやで、逃げ出すのを手伝ってもらった相手が婚約者だったとは……。自分は何ということをしてしまったのか。

先ほどの白馬氏の発言によると、昨日急に葵たちが帰った理由は「体調が悪くなってすぐ帰らなければならなかった」ということにあるらしい。しかし当の婚約者はその本当の理由を知ってしまった。葵が逃げたから、という理由……。

これでは両者の間に深い溝ができてしまう。

だが、探はというと、全く動じていないようだった。時折、英吾や白馬氏の発言に気の利いた言葉をかけ、もちろん葵にも質問したり笑いかけたりと、普通すぎる態度で接している。

しかし葵は彼のそういった行動のひとつひとつに戸惑うばかりだった。

やがていい時間になり、昼食が運ばれてきた。

一同がおいしく頂いていると、突然白馬氏が言った。

「葵さん、ご趣味のほうは？」

「……え？」

あまりに突拍子もないことを聞かれ、葵は今まさに動かそうとして

いたナイフとフォークを中途半端に持ち上げたままで硬直してしま
った。

先ほどまではお互いの学校生活や将来の職業希望などについての質
問ばかりだったのに、いきなり『趣味』を聞かれたのだ。

食事をしながらこの話題つて、まるでお見合いじゃない…。この場
でとんでもない趣味を言ったりしたら一体どうなるのだろうか？例え
ば…そう、人間観察、とか。

そうは思ったものの、なるべく自然に答えた。

「あ…はい。読書が好きです。特に推理モノをよく読みます」

白馬氏に答えたつもりが、その隣りの息子のほうから返事がとんで
きた。

「僕ですよ！コナン・ドイルの作品が昔から大好きで
思わぬところで話が合った。

「私ですよ！ホームズが特に好きなんです」

僕もです、とまた返ってきた。英吾と白馬氏が関心の声を上げた。
やっと、彼とまともな話ができた。そう思って少し気持ちが落ち着
いたのも束の間、次の英吾の質問でまた心に嵐が来た。

「探くん、他にご趣味は？」

英吾が聞くと、探はあっさりと答えた。

「そうですね。あえて言うならば、人間観察でしょうか」

ええええええええ！？

葵は思わず驚愕の目で彼を見てしまった。

一体彼は何なんだ！？

もう理解の範囲を越えてしまった。

そんな葵の目に気付いたのか、探は付け加えた。

「あ、でもこれは職業柄、というか普段の癖みたいなものでして
そういえばこの人、日本でも海外でも有名な探偵なんだった。

英吾もそのことを思い出したらしく、その話題に話に移った。

彼が解決させた事件の話をいくつか聞きながら、食事は進んでいっ
た。ミステリー小説が好きな葵は、探の話に聞き入ってしまう。

しかし探はというと、事件の話をするのを嫌がっているわけではなさそうなのだが、葵や英吾が関心して褒め言葉を発すると、ひどく恐縮したり、たまたまだとか、他の誰かがいなかったら無理だったとか、こういう行為をしてしまったからいけないかったとか、何かしらの理由をつけて自分を謙遜するのだ。

葵は違和感を感じた。彼は自信に満ち、自分の能力を誇りに思い、褒められれば素直に受け止める人だと思っていたからだ。少なくともこれまでの会話の中で、葵はそう感じ取っていた。

あ、私も人間観察してる…？

思わずそんな考えが浮かんだが、無視した。

やがて食事が終わり、食後の紅茶を飲みながら談笑していると、白馬氏が言った。

「お前たちは庭に散歩でも行ってきなさい。二人でゆっくり話すがいいだろう。探、葵さんをご案内しろ」

「はい」

探は立ち上がると、葵のところまで来て手を差し出した。

「行きましよう、葵さん」

「…はい」

エスコートに差し出された手に自分の手を重ね、葵も立ち上がって探と一緒に部屋を出た。

第9話 疑念

手の熱が、昨日の記憶を甦らせる。だが、葵の少し前を歩く探は相変わらず少しも態度を変えない。

何故？どうしてこの人は何も言わないのだろうか？昨日、本当は葵が逃げたということを知っているのに、何故葵を責めないのだろうか？庭に出て小道を歩きながら、堪えられなくなった葵は立ち止まった。それに気付いた探も足を止めて振り返る。

「葵さん？」

葵は、言いたいことや疑念が頭の中をぐるぐる回っていた。

何から言えばいいのだろうか？何から聞けば、この頭の中の疑念は消えてくれるのだろうか…？

次の瞬間、葵はぱつと頭を下げた。

「昨日はごめんなさい！」

とうとう自分から話を切り出してしまった。相手は、昨日のことは知らないふりをしておきたかったかもしれない。しかし、葵は謝らずにはいられなかったのだ。

探の顔を見る勇気がなくて、頭を下げたまま続けた。

「せっかく招いて頂いたのに、その…逃げて…しまつて…」

頭上で探の声がした。

「いいんです。気にしないで下さい。あなたは人間として当然の感情に従つて行動しただけだ」

葵は顔を上げた。優しい表情の探と目が合う。

「誰だつていやなものはいやです。そしてあなたも、婚約がいやだった」

葵はかすかに頷いた。探が続ける。

「僕は、いやなことを無理にさせたくなかった。だからあなたを逃がしたんです」

最後の一言に、葵の目は大きく見開かれた。

「気付いて…いらつしやっただんですか？あるとき逃がしたのが、私…婚約者だったってこと…」

探はふつと笑って言った。

「はい」

信じられない。葵は、あるとき逃がしてくれたのが婚約者だったなんて夢にも思っていなかった。なのに彼のほうは、葵に出くわしたときすでに見抜いていたのだ。この逃げたがっている人が自分の婚約者だということ。

何という人だ。わかっていて逃がしたというのか？また疑念がひとつ増えた。

葵の表情を見て、探が言った。

「一応探偵ですからね。人間観察に慣れてるんです。見ればわかりましたよ。」

葵はまだ信じられない。

「この家から抜け出す道を探しているということは、客人の証拠。それに僕と同じくらいの歳で、しかもおしゃれをしている。そんな人は、ちょうどあのくらいの時間にうちに来ることになっていた、若宮葵さん、あなたしかいないですから」

言われてみればそうだ。きっと探偵の彼でなくとも、あの状況では誰だってわかることだ。

いかに自分が動揺していたかを指摘されたような気がして、葵は恥ずかしくなった。

「でも、それだけわかっていて…どうして私を逃がしたんですか…？」

頭の中の最後の疑念を言葉にした。

探は複雑な笑顔で答えた。

「さつきも言ったとおり、いやなことを無理にさせたくなかったんです。第一あなたは逃げたがっていた。目の前の困っている人の希望を叶えてあげるのは探偵として当然ですから」

「ではあなたは、『探偵』として私を逃がしたということですか？」

「…そういうことになりますね」
探はにつこりした。その笑顔に、葵は挑戦的に尋ねた。
「では、今私が逃げたいと頼んだら、あなたは『探偵』として逃がして下さいますか？」
探は一瞬きよとんとしたが、すぐにまた笑顔に戻って言った。
「いいえ。今は『白馬探』として、あなたを逃がしたくありません」
葵はその言葉に、何も言い返せなくなってしまった。
ただの冗談でそんなことを言っているの？それとも…？
本当に訳がわからない人だ。

二人がそんなやりとりをしているとき

英吾と白馬氏の二人は、先ほどとはうってかわって深刻な面持ちで話し込んでいた。

白馬氏が低い声で言う。

「正直驚いたよ。葵さんがあそこまで華代にそっくりだとは思わなかった…」

英吾も同じくらい低い声で答える。

「下の樁のほうは、そこまでではないんだが…葵は生き写しだ。外見の特徴をことごとく華代から受け継いでいる」

「…あそこまで似てると、組織の奴らの目にふれたときにかなり危険になるんじゃないのか…？」

英吾は溜め息混じりに答えた。

「ああ。でも今のところ奴らの気配はない。情報は漏れていないはずだ」

「そうだな。でも逆に、奴らの情報も我々にはない」

「そこが厄介だよ…。早く正体をつき止めて潰さなければ。葵と寶石が、奴らに見つかる前に…」

白馬氏も溜め息をつく。

「全く…。警視總監にまで上りつめて、何人もの部下を走らせているというのに…。どこまで深いんだ、あの宝石の闇は」

二人はしばらく黙った。

そしてうつむいたままで、英吾が再び口を開いた。

「なあ…白馬」

「どうした？」

「昨日、葵の体調が悪くなって会わせられなかったって言ったろ？」

「…ああ」

「本当は違うんだ。あいつ、逃げたんだよ。私が見ていない隙を置いて」

白馬氏は言葉が見つからない。英吾は頭を抱えて言った。

「いくら華代との約束でも…葵を悲しませてまで無理やり婚約させることを、華代は望むのだろうか…」

白馬氏は黙って英吾の肩に手を置いた。

第10話 恋・・・？

その夜

若宮邸では。

夕食を終えた葵は、部屋でぼーっとしていた。そう、まさに文字通り「ぼー」
っとしていた。

今は『白馬探』として、あなたを逃がしたくありません
さつきからその言葉が、頭の中で何度も再現されている。彼のその
深い声が頭に響く度に、葵は現実の意識が薄れ、いつの間にか白馬
邸のあの庭に思いを馳せていた。

あの庭で彼が言った言葉。聞かされた後に多くの疑念が残る言葉。
彼はまた自分にたくさんの疑念をよこしてきた。

『探偵』として、逃げたがっている人は逃がすべき。だが例外がひ
とつ。『白馬探』として、逃げたがっている人を逃がしたくないと
きもある。

『白馬探』として…。つまりそれは、彼が一人の人間として、一人
の男として、ということ。いろいろな義務や責任に関係なく、『白
馬探』一人人として、私を逃がしたくないということ。

それって…それって………どうということ？

そのとき、背後からいきなり声がした。

「姉さまー」

葵はものすごい勢いで振り返った。入口に椿が立っていた。

「あ、ああ椿…」

「すみません。何回ノックしても返事がなかったので入ってしま
いました」

「構わないわよ。どうしたの？」

椿は葵をじっと観察した。実は彼女は、姉が心配だったのだ。今日
の夕方白馬邸から帰宅してから、何だか考え事にふけているよう

な様子はずっと続いてきた。事実、今だってさんざんノックして、ドアを開けても椿に気付かなかったくらいなのだ。

やはり婚約のことで悩んでいるのだろうと見当がついた。

「姉さま、大丈夫ですか？ やっぱりお断りなさったほうが…」

葵は椿の心配そうな表情を見つめ返してきよとんとした。

「何を？」

そう返されて、今度は椿がきよとんとしてしまった。

「だから…婚約がいやならお断りすべきだと…思いました」

葵はやつと納得がいった。

「大丈夫よ。もう決めたことだし、迷いはないわ」

だが尚も椿の心配顔は晴れない。

「でも姉さま、今日帰っていらしてからとても悩んでらっしゃるよ
うに見えます」

思ってもみなかったことを指摘され、葵は慌てた。

顔に出ていたなんて…

「大丈夫よ椿。そのことで悩んでいたんじゃないの。相手の方もい
い人だったし。ただちよつと…いやかなり？ 変わった方で…」

心配顔に好奇心が浮かんだ顔の椿に、葵は今日の探とのやりとりを
話した。

聞き終わった椿は、目を輝かせた。

「あの人のその言葉がずっと気になってね…どういつつもりで言っ
たのかしら…」

「姉さま、それは恋ですっ！」

「へ！？」

椿は真顔で断言した。

「姉さまはその方に恋をしてらっしゃるんですよ！」

そんなことを言われても、今までの人生で異性に『好き』という感
情を持ったことのない葵にはピンと来ない。さらに椿が強い口調で
続ける。

「その方のことが頭から離れないのでしょうか!？」

「ま、まあそうだけれど…でも私はただ疑問があつてあの方のことを考えているだけで…」

葵はしどろもどろだった。逆に椿は勢いを増す。

「それでもその方を想っていることには違いありません!」「
そういうものなのだろうか？」

こうして、昨夜とは全く違う雰囲気で、若宮姉妹の夜は更けていった。

第11話 図書館

波乱で始まった一週間、葵は学校へ行く気になれなかった。行っても絶対に授業に集中できない。

どうせ自由登校だし…。葵は今週いっぱい休むことにした。

その間は、家のことをいろいろやった。多江さんを手伝って庭いじりをしたり、自分で料理をしたり。

そんな葵を見て、安藤が嬉しそうに言った。

「葵お嬢様は、きつとすばらしい貴婦人におなりになるんでしょうな」

それを聞いて、ふと葵は思った。

これって花嫁修行っていうのかしら…？

変な気分だった。暇つぶしにやっている家事が、いつか探にご飯を出すための練習になっているなんて…。

自分が探の前に茶碗を置いて、『召し上がれ』と言っている姿を想像してみた。思わず吹き出してしまった。なかなかいい画だった。

相手が探なら悪くない。葵は無意識にそう思うのだった。

そうやって数日過ごしたあと、葵は市の図書館に出かけた。読書好きの葵が、物心ついたときからよく行く場所だ。

都会にはめずらしく、周りを深い緑に囲まれたのびのびした図書館だ。本を読んだり、勉強をした後に外の草木の中で息抜きをすると、いい気分転換になる。

館内ではばらくの間本を読んで過ごしたあと、葵は外に出た。

敷地内の自然は紅葉を始めており、秋の透き通った空気の中に木の葉の匂いが混じっていた。

出口から少し歩き、木立ちの中に入る。上を見上げると、葉がまばらに残る枝の間から青空が見えた。

大きく深呼吸すると、読書でこわばった体の力がすーっと抜けた。

と、そのとき、空に一羽の鳥が現れた。普段目にする鳥に比べると大きく、威厳があった。

その鳥は悠々と旋回すると急降下し、葵のいる木立ちの中に消えた。ぎよつとして、木立ちの奥に目を走らせるが、小道が葵の目の前で折れているのでその先が見えない。

ゆつくりと歩を進め、小道が終わりに差し掛かったとき、前方にさっきの鳥が見えた。近くで見るとやはり大きい。

鷹…？

誰かの腕に止まっているようだ。

やがてその腕の人物の後ろ姿が見えてきた。

その人が鷹に話しかけようと横を向いた。その横顔は…

「探さん!？」

二人はすぐ近くのベンチに腰を降ろして話し始めた。

「今日は読書に？」

探が尋ねる。

「はい。留学に向けて英語の原書を読んでたんです」

「そうなんですか」

だが葵は、そんな話がいわけではなかった。さつきからずっと、彼の左腕の鳥が気になって仕方がない。

しかし探はそんな葵の気持ちに全く気付かずに相変わらずの質問をする。

「よく来られるんですか？」

「ええ。昔から」

「僕も久々に帰国したので来てみたんですよ。僕らの街の中ではめずらしく自然が豊かな場所なので、こいつが喜ぶんです」

そう言つて探は、自分の腕の鳥を見た。

思つてもみなかったタイミングで話題がそれた。葵はすかさず聞く。

「あつあのそれ、鷹…ですか？」

探はにっこり笑つて答えた。

「そうですね。タカ目タカ科。僕の相棒です」
優しい笑顔を向けられ、あの言葉を思い出す。

『白馬探』として、あなたを逃がしたくありません
こんなふうには笑顔で言われたんだっただわ…
すると次は、椿の言葉が甦ってきた。

姉さまはその方に恋をしてらっしゃるんですよ

葵は急に顔がかーっと熱くなり、一人で慌てた。

椿があんなことを言うから、意識してしまうじゃない…

探の顔がまともに見れなくなって、視線をそらそうと思ったが、彼の次の言葉でそんな気持ちはどこかへ行ってしまった。

「名前はワトソンです。僕の『助手』ですから」

ワトソン！コナン・ドイルの小説中で名探偵・シャーロック・ホームズの『助手』として活躍した、あのワトソン！

葵は感動してしまった。まさに葵の大好きな分野だ。

「きつとすぐくお役に立つんでしょうね！」
探も自慢げに答える。

「ええ。ある事件で崖の橋が落とされて身動きができなくなったとき、僕の手紙を崖下まで届けて助けを呼んでくれたこともあったんですよ」

「えっ！？そんな事件に巻き込まれたことがありませんか？」

「しよっちゆうですよ。探偵は常に命懸けです」

こうして会話をしていると、葵にとつて探は今まで全く出会ったことのない境遇の人間だと実感させられる。葵には想像もつかないようなことを経験し、信じられないようなことを平然とこなす。しかもそれが日常茶飯事となっているのだ。初めて言葉を交わしたときから、そう感じていた。

それから、そのワトソンが活躍した『黄昏の館』での事件の話
を聞いた。

話が終わって気付くと、空は黄昏どきだった。本当に秋の空は美し

い。

「その館の外壁が崩れて黄金が出てきたときも、こんなふうに美しかったのですか？」

探は苦笑しながら答えた。

「いえ。自然の美しさに勝てる人工物なんてありませんよ」

葵は穏やかに微笑み返した。

「しかし、あのときはもう少しでキッドを捕まえられたのに、本当に悔しいですよ。いつもあと一步で逃げられる」

「いつも？いつもキッドを追ってらっしゃるんですか？」

「はい。僕は一応怪盗キッド専任探偵なんです。この話は、また明日して差し上げますよ」

なぜ彼がここで話を明日に延ばしたのかはすぐにわかった。

二人の側に、安藤が申し訳なさそうに立っていたのだ。

「お嬢様、旦那様がご心配なさっております。お迎えに参りました」

葵はまだ探の話の話を聞きたかったが、仕方なく帰ることにした。

だがよくよく考えると、『この話はまた明日』と言ったということは、明日も会いたいということではないか。

本気なのかどうなのか葵には判断がつかなかったが、去り際に探は言った。

「ではまた明日、この場所で」

葵は笑顔で返事を返すと、安藤について図書館を出た。

帰りの車の中で考えた。明日また、葵は彼に未知の話が聞ける。

そう思うと心が弾む。

だがふと、ひとつの疑問に行き当たった。

どうして彼は、安藤が葵を迎えに来た人物だとわかったのだろうか？彼は安藤には会ったことがないはずなのに。

出た。人間観察…。

葵は苦笑しながら窓の外の黄昏を眺めた。彼には関心させられっぱ

なしだ。

第11話 図書館（後書き）

読んで下さってありがとうございます。洋です。
この会話、後に重要になります。

第12話 僕の弱さ

次の日の午後、葵は昨日とほぼ同じ時間帯に図書館の外の木立ちに行った。

すでに待っていた探は、笑顔で迎えてくれた。

それから彼は、約束通り自分の関わった怪盗キツドの事件をいくつか話してくれた。

初めて対決したときに盗まれた名画、なんとか守り抜いたブロンズ像…。

ひとつひとつの話をする間、探は本当にいろいろな顔をした。悔しそうな顔、嬉しそうな顔、おもしろそうな顔。どれも、何かに一生懸命になっているときの表情だった。

そんな彼の横顔が、葵には眩しかった。

ある事件の話に対して葵は言った。

「そんなことを思い付くなんて、すごいですね。周りの方も關心なさったんじゃないですか？」

だが探は、その褒め言葉をすぐにかわした。

「いえ、でもそのときの刑事さんの言葉がなかったら僕は気付きませんでしたよ。僕だけの力ではありません」

まただ…

白馬邸で始めて事件の話聞かせてもらったときと同様、探は謙虚な姿勢を崩さない。だが、探のようなタイプにそんな行動は逆に不自然だった。

『まあ僕には何てことない事件でしたが』とか、『あれぐらい当然ですね』というような言葉が返ってきてそうなものだが。少なくとも、葵が小説から得ている探偵のイメージはそうだった。

探の態度はむしろ、本心からの謙虚ではなく、自信のなさから生ま

れる自己防衛のような気がしてならない。

「探さんは謙虚なんですね」

思ったことを思わず口に出してしまった。言ってから後悔したがもう遅かった。

「え？」

探が不思議そうに葵を見る。

一瞬ためらったのち、葵は言った。

「探偵の方って、もっと得意げで生意気かと思ってました」

『とくにあなたのような方は』と付けたそうとしたが、やめた。

探は笑って答えた。

「確かにそういう人もいますよ。しかし、探偵もいろいろだ。みんながそんな性格とは限りません」

そうですね、と葵も笑ってごまかしたとき、探の笑顔が少し陰った。

情けなさそうに口を開く。

「でも、僕もつい最近まではそうでしたよ」

葵は、最初からわかっていたような気がして、黙って探を見つめた。

「特に16、17歳の頃はひどかった」

探は過去の自分を笑いとばそうとしているようだが、上手くいっていないかった。笑顔は引きつり、苦笑に近い表情になっていた。それに、目が笑っていない。

探はわざとらしい明るさで話し始めた。

「僕は自分の能力に自惚れすぎていたんですよ。そして、僕の考え方にそぐわない人を片っ端から見下していた…」

とうとう探の顔から笑いが消えた。

「でも17歳のとき一度、推理を…間違えたことがあるんです。離れ小島で事件が起こったときに」

葵は迷った。きっとその事件は、探にとって深い傷となった出来事だったのだろう。そんな話を、本人に話させるなんて酷なことをしているものだろうか。思い出すだけでもつらそうなのに…。

だが葵は聞きたかった。不謹慎だとは自覚していたが、知りたかったのだ。彼の奥にあるものを。

まだ少ししか時間を共有していないのに、彼を知りたいと思った。見えない部分も、すべて。少ししか時間を共有していないからこそ、そう思ったのかもしれない。

「話して…下さいますか？」

探はゆっくりと葵に顔を向けると、決心したように頷いた。そして再び口を開く。

「あのときは東西南北から高校生探偵が集められていて、僕他に3人…いや、正確には4人の探偵が一緒にいました。夜、その中の一人が殺されたんです」

葵は黙って耳を傾ける。

「そこで僕は、間違った推理をして、犯人を誤ってしまいました。

そして、一番初めに真犯人を見つけ出したのが、探偵としては問題行動ばかり起こしていた探偵だったんです」

探は溜め息をついた。

「正直、情けなかった。自分のほうが明らかに正しいやり方で推理していたのに…。なのに、血気にはやって後先考えずに行動し、現場を荒らしたり証拠を消しそうになったりしていた彼のほうが事件を解決出来たなんて。そんな彼を『無能』だと見下したり、彼の行動を注意していた僕は、探偵としての自信をすべて崩されてしまったんです」

そこまで話すと、探はゆっくりと息を吐いた。

一番辛い部分は話し終えたのだろう。先ほどよりは少し険しさの薄れた口調で続けた。

「あれから一年ほど経ちますが、未だに僕は立ち直れない…。今まで解決してきた事件だって、僕は正しかったのかどうなのかもわからなくなってしまうたんです」

そうだったのか。だから彼は、褒められても自分を謙遜して、有頂天になることを抑えていたのだ。それによって間違いを侵すのが怖

いから…。

葵が考え込んでいる間に、探はすっかり元の調子に戻ったようだった。

先ほどとは打って変わって明るい口調で言った。

「でもおかげで気付かされましたよ。僕だけが正しいのではないということに。軽はずみに人を見下すべきではないと」

そう言っただけで葵に笑顔を向けたとき、探はぎょっとした。

葵が、半端じゃなく悲しそうな表情を自分に向けていたからだ。

「あ…おいさん？」

普段クールな探も、これにはさすがに驚いた。何故彼女がそこまで悲しそうにするのだろうか。

やがて葵が口を開いた。

「自分を責めすぎないで。今のあなたは、見ていて痛いです」

「…え？」

「『正しいこと』をするのではなく、『正しいと信じたこと』をするればいいと思います。それが間違ったことでも、自分を責める必要はないと思いますよ。あなたにはあなたなりの『考え』があります。それに従って、自分の思うとおり、自分ができることをすれば、価値のあることになる。…あくまで私の信念ですけど…私はそうやって生きてきました」

探は何も言い返せない。なぜか、彼女の言葉が胸にしみた。

「私もあつたんです、そんなときが。何をしたらいいかわからなくて、必死で正しいことを探していました。でも気付いたんです。正しいかどうかいちいち考えていたら、余計に悩むことになるだけだつて。だからそれ以来、『考える』んじゃなくて『信じる』ことにしたんです」

正しいことを『考える』のではなく『信じる』…。

その言葉を聞いたとき、探の中で何かが軽くなった気がした。胸を塞いでいたものが軽くなり、すうっと、爽やかな風が通り抜けたよ

うに感じた。

だがその軽くなった『もの』が何だかわからず、彼は葵を見た。彼女の横顔は、本当にきれいだった。きれいで、そして強かった。彼女の漆黒の瞳は、ただひたすらに、前だけを見つめていた。

探が何も言わなくなったことに気付いて、葵は我に返った。しまった。一人で勝手に長々と語ってしまった…。

「ごめんなさい！なんかお説教みたいなのをしてしまって
そう言つて探を振り返った。だが彼は、葵が思っていたのとは全く
違う表情をしていた。」

今まで一度も目にしたことがなかった、感謝の笑顔。そして、今までで一番いい笑顔。

そんな笑顔を向けられて、葵は目が逸らせなくなってしまった。何て安心できる笑顔なのだろう…。

目が逸らせない状態から、目を逸らしたくない状態になった。お互い見つめあったまま、静かに時間が流れる。

唐突に、それまで背後の木の上にいたワトソンがばさばさつと探の肩に降りてきた。

「おわっ」

彼はその衝撃で、思わず間抜けな声を出して前につんのめった。

葵も驚いて、呪縛が解けた。

心臓がバクバク鳴っている。だがその原因は、ワトソンの奇襲攻撃のせいだけではない。

あんなに誰かと見つめあったことはなかった。ものすごい熱を顔に感じた。

さつきとは逆に、探のほうを見れなくなった。

探も心なしか慌てているようだった。ワトソンを腕に落ち着かせた後も、葵のほうを見ようとせずつと上着をこそそそやっている。

やがて中から懐中時計を取り出すと、時間を確かめて言った。

「そ、そろそろ帰らなければ…なあワトソン？」

何の意味があるわけでもないのに、ワトソンに話しかける。

葵も、何か知りもしないのに急いで言った。

「わ、私も、そろそろ安藤が迎えに来る頃だわ！」

二人は同時に立ち上がった。先に葵が歩き出す。

「では、失礼します」

「お気をつけて」

そう言い切ったものの、探は背を向けて歩き出した葵を呼び止めた。振り返った葵に探が言う。

「さようなら。また明日…」

葵は素直に微笑み返して歩き去った。

第12話 僕の弱さ（後書き）

読んで下さりありがとうございます。洋です。

今回はちよつとだけ54〜55巻の探偵甲子園のネタバレです！。

実はあそこで推理を間違えたことを結構気にしてたって設定です。

もちろん話の中の『問題行動ばかり起こしていた探偵』ってのは平次です（笑）

第13話 母の寶石

それから二人は、ほぼ毎日のように会った。

結局葵は、次の週も学校を休んだ。

二人で図書館内をゆっくりと散歩したり、花を観たり、ときには何時間も黙ってお互い本を読んだり。

ワトソンを追いかけて走り回ったりもしてみた。

彼は木から木へと次々飛び移っては、木々の間から神出鬼没に現れる。その度に葵と探はあちらこちらへ振り回される。

所詮人間は鬼ごっこでは、大空の支配者である鳥類には勝てないのだ。

そのくせ、探が呼ぶとちゃんと彼の腕に戻って来る。

葵は息を弾ませてその場にしゃがみこんだ。その顔には、気まぐれな鷹に対するあきれた笑顔が浮かんでいる。

同じく探も息を切らせて、自分の腕のワトソンに言う。

「まったく…。なんでそうタフなんだお前は」

言われたワトソンは知らん顔だ。

探はあきれ笑いをしながら、少し離れたところでしゃがみこんでいる葵を振り返った。

彼と目が合った葵は、なぜだか笑いが込み上げてきた。抑えがきかなくなり、声を出して笑った。

探も笑いながら、葵の子供のような笑顔を見つめた。

顔全体で大きく無邪気に笑った彼女の笑顔を、彼は初めてかわいいと思った。

二人はしばらくそんなふうに関わり合っていた。

葵は、彼と過ごすことがこんなに楽しいと感じられる日が来るとは夢にも思っていなかった。

いきなり父から婚約しろと言われて会わされたときには、想像もつ

かないことだった。

あの頃は戸惑いと驚きしかなかった。

あまりに現実離れた状況で出会い、あまりに現実離れた人だったからだ。

だが今は違う。

彼の弱さに触れ、時間を重ねること、ありのままの彼を知った。

そして、彼の良い所もたくさん知った。だから今は、こんなに彼が素敵な人に思えるのだ。

人を知るとは、何てすばらしいことなのだろう。何て奥が深いのだろう。

葵の頭の中を、『恋』という一文字がかすめた。

恋というものも、こうやって相手を知ることから始まるのではないか、と思った。

暗い室内を、様々なモニターの明かりが照らしている。

そこは、とあるビルの一室。

広い部屋にあるのは様々な機械類のみ。

そこで二人の男が話している。

一人は、葵が初めて白馬邸へ赴いた日の朝、彼女の屋敷の前にいたサングラスの男。30代半ばで、長髪を後ろで束ねている。いかにも軽そうな男だ。

そしてもう一人は、右の頬に傷のあるやつれた男。こちらは短髪だ。見たところ40歳前後だが、それにしても皺が多すぎる。しかしそれでも、暗い光を放つ鋭い目だけが、彼の野心の強さをあらわにしている。

若いほうの男が口を開く。

「華代が死んだのに、娘がああネックレスを大事に持ってるとことはやっぱり……」

年上の男が答える。

「ああ。あのネックレスの可能性が高いな。小娘のアクセサリーになつてるくらいだから安物だと思つて相手にしてなかったが、罨だつたか」

そう言つた瞬間、二人の背後のプリンターがいきなり動き出した。

「やっと送つてきやがつたな、情報班のやつら」

年上の男のほうが一ヤツと笑つて、プリンターから出てきた紙をとる。それは、葵の盗撮写真だった。

図書館のようで、本棚の前に立つて本を見ている、ほぼ横姿の葵が写つていた。波打つ髪が背中にかかっている。

男はますます深く不気味に笑つた。

「本当に華代そっくりだな。髪や肌の色まで」

若いほうの男もその写真を見つめるが、何も言わない。

「どうした？」

年上の男が尋ねると、慌てて言つた。

「いえ、その…さすが華代の娘だなと思ひまして」

年上の男は、今度は鼻で笑つて答えた。

「ああ。並外れた美人だ。父親には全く似なかつたみてえだな」

そのときまたプリンターが動き始め、もう一枚葵の写真が出てきた。今度は正面を向き、片手に本を持っている。その胸元には、しつかりと碧い宝石が写っている。

「あつ！写ってますね。やっぱりいつも身につけてるみたいですね」

「画像解析にまわせ」

年上の男が二枚目の写真を渡すと、若いほうの男は短く返事をして急いで部屋を出ていった。

部屋に一人残つた男は、近くにあつた椅子にどっかりと腰を降ろし、両足を机に乗せた。

そのままの状態で煙草をくわえ、火を点ける。

椅子の背もたれに深く体を預け、息を吐いた。

白い煙が、数々のモニターの電気的な光に照らされて立ちのぼつて

いく。

男は最初に送られてきた葵の写真を眺め、満足そうに呟いた。

「まあ画像解析の結果を待たなくても、あのネットワークスに間違いないだろ。」

なあ、華代……。お前が死んで8年、全く手掛かりがなくなっちまったけど……」

そう言ってもう一度写真に目をやる。

「こんな忘れ形見を遺してくれてたなんてな」

彼女の情報は続々と集まってきた。

名前は若宮葵。高校3年の18歳。華代が25歳のときの子供で、長子。

イギリスのロースクールに留学が内定している。そして、最近よく会っているのは、警視總監の息子・白馬探……。

第14話 恋敵

影が怪しく動き出したことに誰一人として気付くことなく、若宮・白馬家の周囲では穏やかに時が流れていった。

さすがに葵は学校へ通うことを再開した。探は、現在イギリスのハイスクールが長期休暇のため相変わらず日本にとどまり、友人を訪ねたりしていた。

それでも二人は休日にはほとんどいつも会い、ひたすらに語り合った。『婚約者同士』としてではなく、二人の『人間同士』として。探の話は葵にとって、全てが新鮮で興味深く、そして楽しかった。今まで出会ったことのないタイプだった。話をするだけで、彼の価値観や考え方、個性の違いを強く感じ、その人間性に深く引き込まれていった。

初めて会ったとき以来、白馬父子、若宮父娘がお互いの屋敷に招かれることもしよっちゅうだった。

父親同士が心配していたよりも両家族間の仲は円満で、お互いの家の者たちもほっとして見守っていた。

そんな静かで平和な時の流れの中で、秋はいよいよその深さを増し、やがて本格的に寒くなっていた。

朝から肌寒い外気が漂っていたある日曜、一人の女性が驚愕の声を発した。

「探が・・・婚約!?!」

彼女は五条悦。若宮グループの最有力ライバルで、美術品や絵画を取り扱う五条財閥の第二子で長女である。

そして、古くから付き合いの深い白馬家の長男・探とは幼なじみ・

。。
彼女はたった今知った信じがたい事実にも、ただ呆然としていた。

同じ頃、若宮邸では……

居間のソファに腰を下ろし、親子三人は紅茶を飲みながら談笑していた。

英吾が唐突に思い出して言った。

「おおっ！！言い忘れるところだった。葵、椿、来週の日曜、白馬邸へ行くことになった」

最近は何によくあることなので、葵はその言葉を深く考えずに了解の返事をして紅茶をすすった。

だが、椿は顔中に不可思議の色を浮かべていた。

「はい……？今回は私も行くのですか？」

その言葉に葵もようやく不思議さを読み取った。

「椿にも何か用があるのですか？」

そう言いながら、葵の脳裏にある考えが浮かんだ。

・まさか椿まで婚約だなんてこと……

だがすぐに思い直した。

・いくらなんでも椿は中2だし、探さんは一人息子で他に兄弟はいらっしゃらないし・

そんなことを考えた自分がばからしくなつて、葵は思わず笑いそうになった。そしてそのままの心情で椿を見やった次の瞬間、愕然とした。どうやら椿も同じことで不安げな表情だったからだ。

父が重要な話を切り出すときは、一見大したことない内容だと思えるような雰囲気話し始め、そのギャップで相手を呆然とさせるのだ。

事実、葵が婚約を聞かされたときまさにそうだった。英吾はコーヒーを飲み、新聞を広げながら何でもないので「婚約が決まった」

と言って、葵をトーストを持ったままの状態硬直させたのだ。

姉妹がそろって不安顔をするので、英吾は悟ったようだった。苦笑しながら言う。

「そんな顔するな。椿にまで婚約しろなんて言わない」

それを聞いてひとまず安心。

英吾は続けた。

「今回の訪問はいつもと少し違うだけだ。あちらの家のパーティに招待されたんだ。だから、家族揃って行く」

若宮グループの令嬢だけあって、パーティには慣れている。葵はいつも通り尋ねた。

「どういったパーティなのですか？」

「警視総監殿の誕生パーティだそうだ。私たち友人の他にも、あちらの親戚も大勢集まるらしい」

姉妹二人は納得の返事をし、やがて自室に戻った。

「姉さま、とうとう探さんとの婚約が表沙汰になるのですね」

パーティの前夜、椿の部屋で彼女の勉強を見てやっていたとき、そんなことを言い出した。

目の前の数学の問題に集中していないと思ったら、そんなことを考えていたのか。

葵は溜め息をついて言った。

「どうして？」

椿は一層声を弾ませる。

「だって、あちらの家の親戚の方も大勢いらっしゃるのですから、姉さまを紹介しないわけありませんよ！」

「まあそうでしょうけど……。どうしてあなたがそんなに喜ぶの？」

「嬉しいことはありませんか！これでお二人は、晴れて公認の恋

人同士になれるのですから」

「恋人同士!？」

葵はすつとんきょうな声を出した。そんなこと考えたこともなかったからだ。確かに『婚約者』という認識はあったが、だからといって『恋人同士』だと思っただけはなかった。第一、葵は探のことを『恋人』として好きではないのだし……。

椿の笑顔が、意地悪そうな笑みに変わった。

「安藤さんから聞きましたよ、姉さま。この間まで、自由登校なのをいいことに学校を休んで毎日探さんに会いに行っていたそうではありませんか」

椿はとつておきの情報を披露して、一気に葵を赤面させた。

「あ、あの頃は図書館に勉強しに行っていただけよ!学校は外部受験者のための入試対策の授業しかやっていないから、自分で留学のための勉強をしたほうがいいと思って……」

だが尚も椿のニヤニヤは終わらない。

「へーえそうだったのですか。毎日『たまたま』図書館で会ったなんて、偶然ってすごいですねえ」

全く……。ついこの間まで『婚約反対』とか言っていて人一倍心配していたくせに、なぜ今はこんなにニヤニヤできるのだろう……。

明日安藤には抗議に行かなくてはいけない。

「さあさあ、余計なことを考えていないで早くこの問題を解けるようにしなさい」

「この問題は全く意味がつかめません」

「さつき説明したでしょう?」

椿はさらっと言った。

「聞いていませんでした」

葵は今にも部屋を出て行きたい衝動にかられながらも、もう一度確率計算を説明し始めた。

それが、今回はちゃんと椿の頭に入っているかどうかはお察しの通りだが……。

次の日の夕方、若宮父娘は白馬邸の門前に降り立つた。

英吾は全身ブランド物のスーツに身を包み、白髪交じりの髪をピシッとセットしている。どこからどう見てもエリート社長だ。

葵は薄い紫のワンピースドレスにシヨールをまとい、髪を頭の横で一つにまとめている。とても高校生とは思えない出で立ちである。一方椿は少女らしく、ピンクの膝丈のワンピースドレスにカーデイガンを羽織っている。

今夜の姉妹二人の衣装は、若さが頼りのメイドの綾と、微調整のプ口の多江さんの自信作だ。やはりメイドや使用人たちも椿と同じことを考え、いつもより気合いが入っているらしい。

すっかり慣れてしている英吾と葵が歩いていくあとに、椿がせかせかとついて行く。

大きな玄関扉は今夜は開け放たれ、その奥はいつにも増して豪華に装飾がなされていた。

パーティー会場には本当に多くの人が集まっていた。

均等に置かれたテーブルの間に、様々な種類の人が散らばっている。パーティーには何度も出席したことがある葵や椿でも、誰が見ても明らかな警察関係者が無数にいるその状況には違和感を覚えた。

英吾の職業上の知り合いらしき人が大勢寄ってきて、三人にあいさつをする。もちろん英吾ご自慢の葵と椿姉妹をこの上なく褒めな

がら。

しかし葵は、あまり見た目を褒められるのが好きではない。特に嬉しいとも思わないし、美しくなるために努力することが、何だかちっぽけに思えるからだ。世界にはもっと、努力して解決すべき問題がたくさんあるように思えて仕方がない。こんなことに気を遣っていないで、自分で何かしなければ、といつも思う。それに何より、葵の見た目は亡き母にそっくりなのだ。それを真っ先に思い出して、つらい思いをするのは父なのだから……。

何やら椿は、さつきから辺りをきよろきよろ見回している。

葵はこっそり言った。

「椿、はしたないわよ」

すると椿もこっそりと言い返してきた。

「姉さま、さつき探さんがいらっしやいましたよ」

「えっ!?!」

とたんに葵もきよろきよろ辺りを見回す。その顔は期待で紅潮していた。

が、しかし……。どこにも探が見あたらないと気付いたとき、椿が言った。

「はしたないですよ、姉さま」

またニヤニヤ顔だ。

こいつ、昨日に引き続きとうとう今日は騙しやがった……。思わず社長令嬢としてはあまりよろしくない言葉が心に浮かぶ。

「椿……。あなた二重人格?」

14年間一緒だったのに今さら気付くとは情けない。まだまだ人間観察が甘いのだ。それに、椿は探に会ったこともないのにわかるはずがない。どうやら推理力も足りなかったようだ。

椿は少し傷ついたような声で言った。

「そんなことありませんよ！私はただ……」

そのとき背後から、思いもかけない声がした。

「葵さん、こんばんは」

若宮姉妹は一斉に振り返った。

「探さん！」

絶妙なタイミングで現れたのは、他でもない探だった。きちんとスーツを着こなし、いつもよりいささか大人な雰囲気で見ている。

まさか今の会話を聞かれてはいなかったろうかと焦る葵。

その横で、さっきのいたずらっ子の影はどこへやら、ぽかんと口を開けて啞然とする椿。

二人にとって、まさかの展開だった。

そんなことには全く気付かず、探は椿を見て言った。

「彼女が妹さんですか？」

葵はいくらか落ち着きを取り戻して答えた。

「はい。私の四つ下の妹の、椿です」

「初めまして。白馬探といいます」

椿もなんとか笑顔で返す。

「初めまして。若宮椿です」

探はしばらく黙ったあと、感心したように言った。

「よく似てらっしゃいますね」

葵はふっと表情を和らげて答えた。

「性格は正反対ですけどね」

探も穏やかに笑い返す。

「でしょうね。あなたのような方は滅多にいないでしょうから」

心当たりがあるのか、葵は吹き出して笑った。

椿はそんな二人のやりとりを、感心して眺めていた。

先ほど自分と話していたときはまるで違う。探が来たとたんに、葵の表情が明らかに穏やかになった。

安心した笑みというか、安らいだ笑みというか……。

そんな葵の顔を、椿は見た記憶がない。

葵は椿の姉であるが、母親でもあるのだ。あんなにも無防備でかわいらしい笑顔など、椿に見せてはくれなかった。

- 姉さまも、彼の前では一人の乙女なのね……。 -
なぜだか椿はほっとした。

「探！」

そんな雰囲気に入り込んできたのは、ある女性の声だった。

振り返ると、ストレートの黒髪の女性がこちらに歩いて来る。

側にいた英吾が、驚いて体を硬くした。

「彼女は確か……」

だがその言葉は、探の声にかき消された。

「ああ、悦」

『悦』と呼ばれたその女性は、滝のようなつややかな黒髪を背中まで垂らした、葵たちと同じ年くらいの綺麗な人だった。

際がはつきりした、すっと切れ長な印象的な目をしている。

彼女は探の横に並ぶと、そのきりっとした鋭い目で、一瞬葵を見据えた。

彼女と目が合って、葵の心はざわついた。

探が紹介する。

「彼女は僕の幼なじみで、五条財閥のお嬢さんです。留学するまで同級生でした」

「初めまして。五条悦と申します」

やはりそうだ。英吾は内心でかなりあせっていた。

なんといっても相手は、若宮グループ最大にして最強のライバル、五条財閥の令嬢なのだ。

若宮グループと同じく、大手宝石店や美術館を経営する五条財閥は、その業界ではかなりの力を持っている。今までのところ若宮グループとは、抜きつ抜かれつの繰り返して、いい勝負である。そんな両家の関係は、良いはずがない。その令嬢がわざわざあいさつに来るなんて、何か企みがあるに違いない。

そんな英吾の心を見透かしたように、悦は不敵な笑みを浮かべて英吾に言った。

「若宮会長、父がいつもお世話になっております」
だがこんなところで負ける英吾ではない。

「いえ、こちらこそ。今回の件、お父上によろしくお伝え下さい」
葵や椿には何のことを言っているのかわからなかったが、『今回の件』と聞いて、悦はわずかに反応を示した。

だがそんな様子もすぐにもとに戻った。
探が、今度は葵を紹介する。

「悦、こちらは若宮会長のお嬢さんで、葵さんだ。彼女は僕の……ええっと……」

その先が言いくいのか、探は困ったように笑いながら葵を見た。葵は内心少し期待していた。昨日の椿の言葉が甦る。自分を、ちゃんと周りの人に紹介してくれるのだろうか……？一方椿はもっぱら、探が『恋人』と紹介するのを期待していた。

だが、探が続ける前に、悦が言った。

「知っていますわ。フィアンセ、なのでしょ？」

悦は未だに不敵な笑みを崩そうとしない。だが、真っ直ぐに葵だけを見据えるその瞳には、何か、あまり良くない感情が炎となって燃えているのを、葵は無意識に感じ取っていた。

第15話 未来の花嫁

「探、お父様に「ごあいさつしたいのだけれど」

「父さんなら奥にいるよ。案内しよう」

探と悦は若宮親子に失礼します、と軽く頭を下げると、二人で歩き去った。

- 五条財閥の令嬢が、探さんの幼なじみだったなんて……。 -
葵は驚いてもいたが、面白くない気持ちのほうは圧倒的に勝っていた。
た。

探と話そうと思っていたのに、彼女はその会話に乱入してきた。
そして、せっかく自分を紹介してもらえるチャンスだったのに、挑
戦的な言葉を投げかけ、

挙げ句の果てには探をさらっていった。それに……。 -
葵は探が、ワトソン以外の生き物に、敬語なしでしかも呼び捨てで
話すのを初めて聞いた。

いろいろな意味で衝撃的だった。
それにあの不敵な、自信に満ちた笑み……。心をざわつかせる、
目の奥の光……。

葵が物思いに沈んでいると、唐突に椿が言った。

「姉さま、あのお方、探さんのこと好きですよ」

葵ははつとして椿を見る。

何となく心の奥でうずいていたものがわかった気がした。

あの目を見たとき感じたことはそれだったのだ。

「……私のことをあまり良く思っていないわよね」

「あの目は、姉さまを完全にライバル視してらっしゃいますわ。姉
さま、どうなさるんですか？」

椿が切羽詰まった表情で問いかける。そんなことを言われても、葵

には想像もつかない。

「どうするって・・・？」

「姉さまは探さんのことが好きなのでしょう！？とられてしまうかもしれないじゃないですか！！」

好き・・・？私が、探さんを？好き？男性として・・・？

「わからないのよ、椿・・・。『好き』ってどういう気持ちなのかそれは葵の本心だった。探のことが、嫌いなのではない。人として、すごく好きだ。だが、恋愛だの恋人だのと言われても、それがどんなものなのか、葵には未知なのだ。

椿はしばらく黙っていたが、やがて姉に優しく問いかけた。

「では姉さまは、探さんとお話をなさるとき、楽しいとお思いですか？」

葵はしばらく考え、黙って頷く。

「では、探さんが笑顔になると、姉さまも嬉しくなりますか？」
頷く。

「では、探さんのお顔を見ると、ほっとしますか？」
頷く。

「無意識に、探さんのお姿を探してしまいますか？」

先ほど椿に騙されたときを思い出しながら、頷く。

「今のように、他の女の方と探さんが親しいのを見て、何とも思いになりませんか？」

葵は素直に首を横に振る。

「では、探さんと一緒にいるとき、幸せですか？」

葵は、彼に出会ってから今までのことを思い返した。

初めて会ったときのこと。手を引かれて走ったこと。葵を逃がしたくない、と言われたこと。ワトソンを追いかけたこと。

いくつもの、永遠に続くかと思われた会話。一緒に見た花。

彼の弱さ。彼の笑顔。あの日見つめた瞳・・・。

どれを思い出しても、いやなことなど一つも見あたらなかった。

どれを思い出しても、もう一度経験したいと思えることばかりだっ

た。

彼がこの場にいないことが、無性に寂しくなった。

彼の側に行きたいと思った。

そう思えるのは、きつと、彼の側が、幸せだから……。

最後に葵がゆっくりと頷いたとき、椿は嬉しそうに言った。

「さあ、幸せになって下さい」

その言葉の意味することが、すぐに目に入った。

目の前に、探が立っていた。

「若宮さん、娘さんをお借りします」

探は英吾に一声かけてから、葵の手を引いて歩き出した。

友人と話しながら、先ほどの娘二人の会話を聞いていないふりをしていた英吾は、去っていく二人の後ろ姿を見送った。

「椿、あの二人の婚約……間違っていないかったと安心していいと思うか？」

「さあ、私にはわかりませんが……でもお二人が出会ったことは、よかったと思いますよ」

「あの、探さん……どこへ？」

葵の手を引いて出口に向かう探に、戸惑いながら尋ねる。

探はいたずらっぽく笑って答えた。

「二人で抜けましょう。肩が凝るだけのパーティーです」

主役の息子がそんなふうでいいのか、と思ったが、白馬氏の人柄を思い出して、まあいいかと大人しく従う。

というか、葵は二人きりで抜け出すことが、なんだか冒険のようで嬉しかった。

それに彼は、悦のところから自分のところに戻ってきてくれたのだ。

二人はパーティ会場を出て、しばらく歩いた。玄関ホールを通り過ぎ、部屋のドアがいくつも並ぶ廊下を歩いていく。きつと家の人たちが普段生活するスペースなのだろう。

このような私生活の空間には今まで一度も来たことがない。

「もしかや自分の部屋に連れて行ってくれるのでは……？」

そんな葵の思いつきを、探の次の言葉が見事に砕いた。

「ここはメイドや使用人たちの部屋がある棟なんです」

「そう……なんですか」

葵は安心ともがっかりともつかぬ表情になった。

いきなり部屋なんかに連れていってもらえるはずはないか。まだきちんとみんなに紹介もされていないのに……。

そんなことを思ったとき、その流れでさっきまでのことを思い出した。

「そういえば、悦さんを案内されてから、すぐに戻っていらっしやいましたね」

「父のところに案内してから、悦を置いてそのまますぐに戻ってきたんですよ」

探はまた、悪ガキのような笑みを浮かべる。

悪ガキのような笑み、とは、自分で悪いことをしたのはわかっていても、反省の色が全く見られない笑い方である。

本来は好ましくないことなのだが、悦にあまり良い感情を持っていなかった葵は、その笑みを許してしまった。

そのとき、ある部屋のドアから一人の老女が出てきた。

彼女は二人の姿をとらえると、驚いて言った。

「探ぼつちやま!？」

「バアヤ! 帰っていたのですか」

探も驚いている。

「はい。もうすっかり大丈夫です。昼過ぎに帰って参りました」
探と特別親しそうなこの老女は、どうやらメイドのようだった。
60代後半くらいだろうか？髪はほとんど白髪だ。

小柄だが、背中は真っ直ぐで、まだまだ元気そうに見える。
落ち着きのある柔らかい声をしていて、目尻が下がっているあたり
が、やさしそうなおばあちゃんを連想させる。

「それはそうと探ぼっちゃま、旦那様の誕生パーティに出席してら
っしゃるとお聞きしましたが、こんなところでなにを？」

「ああ、抜け出してきたんですよ。警察関係者も多くて、堅苦しい
のがいやだったので」

バアヤは葵を見ながら、からかうように言った。

「それで、そこのお美しいお方を独り占めなさろうと思ってこんな
ところにいらっしゃるわけですね」

葵は恥ずかしさに頬を染めたが、探は平気な顔で答える。

「バレましたか。紹介します。彼女は若宮葵さん。僕の未来の花嫁
です」

葵はその言葉が一瞬飲み込めなかったが、すぐに気付いて、ぼつと
耳まで赤くなった。

待ちに待ったと言っていていいほど聞きたかった言葉。やっと紹介して
もらった嬉しさはもちろんあったが、いざ直接聞くと、何と恥ずか
しいことなのだ。

『未来の花嫁』・・・。そんな言葉は全く予想していなかった。

「ああ！この方が旦那様のおっしゃっていた婚約者の方ですか！」

「初めまして。若宮葵と申します」

バアヤはにこやかに答えた。

「初めまして。探ぼっちゃまの世話係をおおせつっております。

今日の午前までしばらくこの屋敷を空けておりましたので、婚約者
の方だとは存じ上げなくて失礼致しました」

「いえ、そんな」

人が良いだけでなく、礼儀作法もしっかりしている。葵は圧倒され

てしまった。

「では、私はこのへんで。年寄りが未来のご夫婦のお邪魔にならないうちに退散させて頂きます。台所に用がありますので」
バアヤは会釈をすると去っていった。

葵はまだ気恥ずかしさが抜けない。探は依然として平気な顔でいるのだが。

「行きましょう」

探はまた葵の手を引いて歩き出した。さっきの言葉が、胸の鼓動を高鳴らせる。

- 未来の花嫁・・・ -

葵は試しに聞いてみた。

「さっきのお言葉・・・どこまでが本気ですか？」

探がこちらを向いて微笑む。

「全部本気ですよ。あなたを独り占めしたいのも本気です。もちろん『未来の花嫁』という言葉も」

葵の真っ赤な顔を見て、探はくすくす笑う。

とにかく恥ずかしい。椿のあんな言葉を聞いたあとだけに、余計にそう思う。

変に意識してしまって、顔が熱くなりっぱなしだ。

「さっきは悦に先に言われてしまいました。本当はちゃんとそう言っただけで、紹介したかったんですよ。いざ言うときに、ためらったのがいけなかった・・・。悦相手には少し恥ずかしい言葉だったので」

「悦さん相手じゃなくても、十分恥ずかしい言葉だと思いますけど、葵は少しあきれて言った。

探は、わかっているのかどうなのか、意味ありげに答える。

「そうですね？まあ確かに、自分の本心を言葉にするのはなかなか恥ずかしいことだとは思いますが」

探の明らかかなとぼけに、葵はやりきれなかった。

わかっているくせに。

葵が言いたいのはそのうということではなく、『未来の花嫁』という、聞くだけで赤面するようなくさい言葉自体が恥ずかしいと言っているのだ。普通に『婚約者』と言えばいいものを……。

「……まあとにかく本気だったということですね」
葵は面倒くさくなって言った。

「そういうことです。あ、でもちゃんと将来、僕の花嫁になってくれればの話ですけどね」

一見プロポーズともとれるその言葉に、何と返していいのかかわからず、葵は複雑な顔をした。

その顔を見て、探は楽しんでる。

・本当に、この人にはかなわない……
振り回されっぱなしの葵だったが、なぜかそれを楽しんでいるのだ
った。

第16話 私の弱さ

部屋が並ぶ廊下が終わり、行き止まりかと思いきや、突然目の前に階段が現れた。

広い階段で、そんなに長くない。十段ほど昇ったら、全面が窓の壁に行き当たる。

「ここは・・・？」

「昇ればわかりますよ。さあ」

探と葵は揃って階段を昇った。

一段一段昇るごとに、大きな窓の外に広がる夜空が見えてきた。

秋の透き通った大気の中に、星が散らばっている。探の目的がわかってきた。

だが、一番上まで昇りきったとき、その星空だけが彼の見せたいものではないことがわかった。

眼下に広がる光景に、葵は息を呑んだ。

明るい星空の下に、白馬邸の広大な庭が広がっている。

その庭は、今夜は美しくライトアップされている。

来たときもそうなっていることには気付いたが、こうして少し高いところから見下ろすと全く違う風景に見える。

輝く夜空と、その下の幻想的な楽園は、異世界を見ているようだった。

あちこちの花壇はすべて淡い光で照らされ、花の色を一層引き立たせている。

低い生け垣もところどころライトを当てられ、その存在感を表している。

そして何より、庭の中央の噴水・・・。

それは地面の四方八方からの色とりどりのライトを浴びて、何色ともつかぬ複雑で神秘的な色に染まっている。

噴水のいろいろな面でライトが交差し、重なり、湧き上がる水も休むことなく色を変えていた。

その噴水を見て、葵は思い出した。

あの噴水を、ただの玩具だと感じたときのことを。

あの庭を、自分を閉じこめる檻だと感じたときのことを。

探と、初めて出会ったときのことを。

あの頃は、今のようはこの庭を美しいと感じられることなどなかった。

だが今は、檻どころか、葵には楽園に見えた。

葵は、探の言葉で我に返った。

「葵さん、見て下さい。あの生け垣のところを」

彼の指さす先には、周りより少し高い生け垣と、その前の花壇があった。

「・・・あ」

そこは、葵と探がばったりと出くわした場所だった。

「あそこからすべてが始まったんですね・・・」

葵はしみじみと言った。

「そうですね・・・。ただあの状況は、そんなふうには表現できるようなものじゃありませんでしたね。なにせあなたは逃亡中だったのですから」

探はこらえきれなくなつて、語尾に笑いが交じった。

「・・・お恥ずかしいです。そして本当に失礼しました・・・」

葵は、過去の自分の行動が恥ずかしくて仕方がなかった。

そんな葵に、探はさらに追い打ちをかける。

「あのときは驚きましたよ。いきなり見知らぬ人が、必死の形相で飛び出してきたんですから」

もう少しマシな対面ができなかったものだろうか。よりもよってあんな衝撃的な出会い方・・・

葵は顔が上げられなくなった。何て愚かだったのだろうか・・・

しかし探の次の言葉に、葵は顔を上げた。

「でもまあ、一生思い出に残るでしょうから、あれはあれで良かったと思いますよ」

探の安心できる笑顔に、葵もつられて微笑む。

不思議だ。探が肯定すると、嫌な思い出も、そんなに気にならなくなる。

- そうだ。そういう思い出の残り方も、悪くない・・・ -

「でもここ、変わった場所ですね。あまり人が来ないようなところなのに、こんな展望台みたいな場所があるなんて」

葵は後ろを振り返って、使用人たちの部屋が並ぶプライベートな空間を見下ろした。普通、使用人たちの部屋のあるスペースには、こんなものはない。

「そうでしょう。僕も不思議ですよ。何のためのものなのか。でもまあ、ひよっとしたら庭師が庭を一望できるように作ったものかもしれないですね」

そうか、それは思いつかなかった。葵は探のその考えに感心した。さすが、探偵。

「小さいころは、よくバアヤの部屋に来ていましたからね。昔からこの場所には馴染みがありました。夜眠れないと、バアヤは決まってここに連れてきてくれて、星を見ていました」

「探さんのお母様みたいですね」

何気なく言った葵のその言葉に、探は少し表情を曇らせた。

「あのバアヤが、母親代わりと言っててもいいくらいですよ。生まれてから、唯一母親らしいことをしてくれた人なんです」

「失礼ですが・・・お母様は？」

葵はずっと気になっていたことを尋ねた。

探は少々投げやりな口調で答えた。

「母はフランスで暮らしています。弁護士なんですよ。忙しすぎて、

もう何年も日本には戻っていません」

「そうなんですか・・・」

葵は探の言葉の中に、母親をあまり良く思っていない気持ちを感じ取った。

きつと、ほつたらかしにされていると感じているのだろう。

「だから、一人息子の婚約のときにも姿を見せないというわけです」

探は苦笑して言った。

「だったら会いに行けばよろしいのに」

葵のその言葉は、探の痛いところを突いていた。

葵にはわかっていた。母親に会いたい気持ちはあるが、相手はそうでもないだろうと考えてしまい、どうしても素直になれずにすねてしまう。

探はきまりが悪くなり、無造作に話題を変えた。

「あなたのお母様は？」

「母は8年前にがんで・・・亡くなりました」

探は、自分のことに必死で無責任な質問をしてしまったことを後悔した。

「・・・すいません、つらいことを・・・」

探はいつもの調子に戻って、葵に詫びた。

「いいんです。もう悲しくありませんから」

母は死んだと答え、謝られ、こう返す会話は、もう慣れっこだ。昔から幾度となく繰り返し返された会話だ。今さら何とも思わない。

しかし、探に話したいと思った。ずっと自分の心の中にある、傷を。葵は先ほどのことを思い出した。

探が肯定してくれたら、嫌なことも過去の失敗も全て、いいものに見える。

全部、吐き出してしまうおうか？彼が聞いてくれると言っのなら・・・

誰にも言えなかった、でも誰かに聞いてほしかった、助けてほしかった、自分の心の影を、全部・・・。

「この間、探さんの弱さを話して頂きましたから、今日は私の話を聞いて頂いてよろしいですか？」

勇気を持って言ったその言葉を迎えてくれたのは、探の優しい微笑みだった。

「聞かせて下さい。僕でいいのなら」

その微笑みに後押しされ、葵は静かに語り始めた。

「前に、『正しいと信じたことをして生きてきた』って言いましたよね」

「はい」

「でもそう思えるようになる前は、『どうしていいかわからず、必死で正しいことを探していた時期があった』って言いましたよね」

「覚えています」

「実はそれ、母が亡くなったときのことなんです」

「.....」

「母が亡くなったとき、私は10歳でした。でも妹は…椿はもっと小さくて、6歳だったんです。」

だから私は、あの子の母親代わりになって、守っていかなければいけないって思ったんです。

でも椿はまだ学校にも行っていないくて…母が死んだことが、わかっていかなかったんです。『死』というものが、ちゃんと理解出来ていなかったんです。

だからあの子の心からは、なかなか母の存在が消えてくれませんでした。

私はあの子の、話し相手や遊び相手にならなれました。でも、それだけだったんです。『姉』としてしか、受け入れてもらえなかったんです。

だから私は、あの子が私ではなく母を求めて泣くのを、どうすることも出来ませんでした。

夜中に母を呼んで泣く椿を、毎晩毎晩なだめに行きました。

母が使っていた部屋から離れようとせず、ただ泣き叫ぶあの子を、

何度も何度も無理やり連れ戻しました。

椿が泣いているとき、私も涙が止まりませんでした。母が恋しかった……」

葵は辛い過去を語りながら、目に涙を溜めていた。それがこぼれるのを必死で防ごうとして、深く息を吸う。

再び語り出した彼女の声は、震えていた。

「椿が悪いことをしたとき、どんなふうに叱ればいいのかわかりませんでした。

どうしたらわかってくれるのだろうか。どうすれば同じことを繰り返さないのか。どうすれば正しいのか。

目の前が真っ暗な中で、毎日その選択に追われました。

でも後になってその選択がいけなかったと後悔したり、椿を傷つけてしまったと自分を責めたり……。

そんな生活が続いて、私が自暴自棄になりかけていたとき、気付いたんです。

いつも通り夜中に泣いていた椿をなだめて、寝かしつけていたときのことでした。

あの子は眠る寸前の目で、母にそっくりな私の顔を見間違えて言ったんです。

『お母さん……』って。

でもそのとき気付きました。

母も、私たちを育てていくときに、こんな経験をしたんだらうって。どうしたらいいかわからなくて、たくさんたくさん悩んだらうって。

だから決意したんです。

椿の、お母さんになるうって。

代わりじゃなくて、本当のお母さんに。

母が育ててくれたように、悩みながら、迷いながら、椿を守ってあげばいいんだって。

正しいことじゃなくて、自分なりに正しいと信じたことをしようっ

て。

もう後悔しないと決意したんです。

以来、その信念を曲げずに、生きてきました」

話し終えた葵は、ゆっくり息を吐いた。

体から力が抜けていくようだ。

話し終えた安堵感が、どっと押し寄せる。

別に、こんなまとまりのないことを話して、結局何が言いたいのかわわったとは思わなかった。自分でも何が言いたかったのかわからないほどだ。

だが、それが葵の心に、ずっと暗い影を落としていた辛い過去だった。

誰にも頼れなくて、寂しかった中で、ずっと誰かのぬくもりを探していた。

そのぬくもりを得るためには、辛い過去を話さなければならぬ。傍目には、葵がそんなものを求めているとはわからないからだ。誰かに話して、全てをわかって欲しかった。

「私も、探さんにお説教できる立場ではないんですよ。さんざん迷って、失敗ばかりしてきたんですから」

葵は苦笑しながら言った。

長々と語ってしまった自分が少し恥ずかしかった。

表情がなくなつて、何も言わない探の様子を見て、葵がこの気まずい状況を何とかしなければと考え始めたとき、何の前ぶれもなく探が口を開いた。

「お強いんですね」

…え？

彼が何を言っているのか、訳がわからなかった。強い？強いだなんて、考えたこともなかった。

「そんな…。強くなんかありませんよ」

葵は本心から否定した。自分には無縁な言葉を言われた。それを否

定するのは当然のことだ。

だがそんな葵に構わず、探が続ける。

「あなたは強いですよ。心が。僕なんかにはない強さがあります」
探はやつとわかつたのだった。

自分が彼女の中に感じていた『何か』が、彼女の話聞いてはつきりした。

初めて会ったとき、言葉を交わしているとき、自分の心の傷を癒してくれたとき、自分は彼女の何に引き込まれていたのかを、理解した。

それは『強さ』だった。

まだ呆然としている葵に、探は言った。

「でも、あなたは強すぎます。」

…寂しかったでしょう」

最後の探の言葉を聞いた瞬間、おさまりかけていた葵の涙が、一気に盛り上がった。それはまばたきしたとき、一筋、また一筋と目からこぼれた。

葵は自分でも驚いた。一瞬、なぜ涙が出たのかわからなかったからだ。

慌てて手で拭うが、一度こぼれた涙は、あとからあとから流れてくる。

「やだ…止まらない…。すいません」

葵はだんだんわかつてきた。この涙の原因が、探の言葉だと。

寂しかったでしょう

それは、葵が知らず知らずのうちに求めていた言葉だった。

自分の辛さをわかつてくれる人を、8年間強く求めていたのだと、初めて意識した。それを認識した葵は、表情を保っていられなかった。

ぎゅっと目をつむり、両手で顔を覆ってうつむいた。かすかな嗚咽がもれる。

次の瞬間、探は葵の肩を引き寄せ、そつと自分の胸に抱いた。

葵は驚いて目を見開く。

「目の前で泣いている女性を放つてはおけません」

そう言つて彼は、軽く葵の背中に手を回し、彼女の細い体を包み込んだ。

「あなたは強すぎるんです。何でも一人で抱え込んで、孤独を感じてしまう」

葵の頭上から、声がする。その一言一言が、心に浸透していく。

「僕が側にいますから。あなたを孤独から…守りますから」

葵は探の胸に顔を押しつけて泣いた。その涙が、探の上等な上着にしみを作っていく。ゆっくりとためらいがちに腕を回し、探の背中にしがみついた。

自分の腕の中で震える葵を見て、探は思った。

今までの自分に足りなかったものは、『守る心』だったのだと。

第17話 過去

「姉さま・・・ひどい」

「・・・へ？」

白馬邸でのパーティの翌日、若宮邸のリビングでは食後の談話が催されていた。

姉妹の他に安藤、多江さん、綾が、昨日のパーティの話の聞こうと一緒にいた。

5人で談笑していたとき、椿がぶちぶち言い出した。

「だって姉さま、昨日探さんと二人で抜けられたあと、本当に最後まで戻ってらっしゃらなかったんですから。私あのと、一人でお偉方の堅苦しい中に取り残されていたんですよ!？」

「お嬢様、その方と二人きりになられたんですか？」

綾が目を輝かせて尋ねる。返事を渋っている葵の代わりに、尚も不満顔の椿が答える。

「そうよ。パーティの最初から最後までずっと!あんなに長い間、一体何されてたんですか？」

その問いに、葵はぼぼぼと赤くなった。

「言えない・・・。あのとずっと探に抱きしめてもらっていたなんて、絶対に言えない!!」

「そうなのだ。なかなか涙が止まらない葵を、探はずっと腕の中に包んでいてくれたのだ。」

「やっと落ち着いて離れたあとは、耐えられないくらいに恥ずかしくて、何を話したのかよく覚えていない。ただ、安心感で胸がいつぱいだっただが・・・。」

「お嬢様、真っ赤ですよ!！」

葵の顔を見て、綾がはしゃぐ。

「まあまあ綾、お二人だけの秘密にしておいてあげなさい」

多江さんがにこにこと言った。

「そうですね。姉さまと探さんは相思相愛なんですから」
椿がそう言った瞬間、葵はさらに赤くなって言った。

「なっ……何を言うの椿！」

葵のその反応は、他の一同には意外だったようだ。

みんながみんな目を丸くしている。

「へ……？姉さまは探さんと両思いなのではないのですか？」

それが、葵にも自信、というか確信の持てないところだった。

確かに探は、それらしい行動をとってはいる。

葵を独り占めしたいとか、側にいてくれると言ったり、幼なじみの悦を放つて自分のところに来てくれたり。

それに、抱きしめてくれた。いくら恋愛初心者の葵でも、その意味することはわかる。

しかし、だ。

探は見た目は日本人でも、中身は完全にイギリス紳士なのだ。

彼が昨日葵を抱きしめたときに言ったことは、『目の前で泣いている女性を放つてはおけない』だった。

イギリスという国が、レディに対してそうやって親切にする国ならば、昨日の探の行動の背景にある心情は、単なる『善意』だ。

それに探は、それらしいことなどしょっちゅう言うのだ。

葵と初めてまともな会話をしたときでさえ、『白馬探として逃がしたくない』と言った。

そう考えると、昨日探が言った、聞くだけで恥ずかしいような言葉はすべてアテにならない。

日常茶飯事なのだから。

葵がそんなようなことを説明したあと、真っ先に口を開いたのは言うまでもなく、椿。

「本当に姉さまは……お堅いというか、クソがつくほどマジメと
いうか」

続いて曖昧に微笑みながら、綾が言う。

「難しく考えすぎですよ。人の心ほど、理屈が通らないものはないのですから」

そうなのだろうか？

葵がまだいまいち納得しきれていないとき、それまでずっと黙っていた安藤が口を開いた。

「葵お嬢様のお気持ちは、どうなのですか？」

安藤は優しく葵を見つめている。

「私の、気持ち……？」

葵はしばし考えた。

だが、深く考える必要などなかった。すでに答えは出ていたからだ。「好き、なんでしょうね。あの人のことが」

疑いようのない事実。

彼といると、時間など存在しないように思えてくる。

彼と話していると、人を知るということが、この世の何より温かいと思える。

彼を思い出すと、この場に来てくれないことがすごく寂しくなる。

彼につらいことを話すと、救われる。

彼を思うと、明日が楽しみになる。

彼の側は、とても居心地がいいと感じる。

生まれて初めて、そんなことを思った。

自分の心が不思議だった。

全く未経験の気持ち。

それが恋だと、昨日彼の腕の中で泣いたとき、本当はもうわかっていた。

一同は、温かい沈黙に包まれた。

そして再び、安藤が口を開く。

「葵お嬢様がそのようにお思いだとわかって、私は嬉しい限りでございます。のお、多江さん？」

「ええ、本当に。安心致しました。きっと亡くなられた奥様もお喜びですよ」

そう言った多江さんは、かすかに目を潤ませていた。

そこで葵は、ずっと気になっていたことを聞こうと思った。

「ずっと不思議だったのですが、私の婚約がお母様のためとはどういうことなのですか？」

安藤と多江さんは、葵に気付かれないように、葵が風呂以外いつもつけている華代の形見のネックレスをちらりと見てから顔を見合わせた。

それから決心したように安藤が言う。

「やはりお気づきでしたか。お嬢様が責任を感じてしまわれるかとも思い、黙っていたのですが」

「みんながしきりに口を滑らすから……。お父様でさえ『華代のためでもあるから』とおっしゃって、私に頭を下げたのよ」

その言葉を聞いて、綾は仰天し、安藤と多江さんは苦笑した。

「旦那様にとっては、何が何でも守らなければならない『約束』だったのですよ」

多江さんはしみじみと言った。その後を安藤が引き継ぐ。

「あれは奥様がお亡くなりになられるとき、旦那様と白馬警視總監殿が奥様に誓われたことなのです」

それから安藤は、静かに語り始めた。

「やっとお話する機会がめぐってまいりました。

8年前、奥様が倒れられて、もう手遅れのがんだとわかったとき、旦那様と白馬殿は奥様に、亡くなられてからもご安心できるように、最期の約束をされました」

葵はそこでやっとわかった。初めて白馬邸へ行く準備のとき、なぜ年配の使用人たちは安堵の表情を隠しきれず、他の若い者たちは不満一色だったのか。

それは、8年も前からこの家に仕えている年配の使用人たちしか、その『約束』を知らなかったからなのだ。

「旦那様と白馬殿が高校・大学と同級生なのはご存じでしょう。実は奥様も大学時代、お二人と深い交流をなさっておられました。

奥様のご実家は美術館なので、その系列で旦那様と出会われ、偶然大学も一緒になり、白馬殿も加わった三人はいつも一緒に、大変仲がよろしかったのです。

卒業と同時に旦那様と奥様はご結婚されました。一方白馬殿は国家公務員1種試験に合格、警察キャリアの道を歩まれ、警察大学校へ進まれました。

三人は離ればなれになってしまわれたのです。

三人はいくつになってもずっと一緒にだと、友情を誓っておられました。

何とかまた三人で楽しく過ごしたいと強く願われましたが、警察官の白馬殿は、いくらキャリアだといってもお若かった。故郷を離れてあちこちの県警へ仕事に行かざるを得ませんでした。

そして数年経ち、あちらもご結婚され、警視庁への着任が決まって、この地に戻ってこられました。

しかしそれでもお忙しかった。連絡を取り合うだけの生活のすえ、やっと落ち着いたときには、奥様は病魔に侵されていたのです。」

多江さんは当時を思い出すように暗い顔を伏せ、綾は瞬きもせず聞き入っていた。

姉妹は亡き母の面影を思い出して、物思いにふける。

「長年待ち望んだ三人の夢は、叶わなくなってしまわれました。

皆絶望で、毎日泣き明かしました。

そんなある日、旦那様がおっしゃいました。

『家族になろう』と。

お互いの家の子供を結婚させ、三人で家族になろうと言われたのです。

白馬殿も名案だとおっしゃって同意なされました。

あのとときの奥様の喜びに満ちた表情を、私は今でも覚えています」
安藤は目を閉じ、当時を思い出した。

8年前・春

自室のベッドに横になり、一人窓の外の青葉を悲しげに見つめる女性、華代。

ノックのあと、安藤が部屋に入ってきた。

「奥様、失礼致します。お加減はいかがでございますか？」

華代は窓に目をやったままで言った。

「安藤……」

その表情は見えない。

「はい」

また華代が言う。

「青葉が新しいのちをはぐくんでいくこのときに、私は死んでいくのね……」

「奥様……」

華代がこちらを向いて微笑む。

「安藤、あの人を……英吾をこれからも助けてあげて。それから、子供たちをよろしくね」

華代の遺言のような言葉に、安藤は我を忘れて必死で言った。

「何をおっしゃるのですか！奥様には、まだ白馬殿と三人で過ごすという夢がおりではありませんか！なのにそのようなこと」

華代の微笑みが、より一層悲しみを帯びた。

「その夢も、叶いそうにないから……もう諦めたのよ。だから私の心残りは家族だけ。とくに子供たち……葵と椿には、一生恨まれるお母さんになるわね。子育てを途中で放り出して逝くのだから」
安藤がまた言い返そうとすると、唐突にドアが開いて、英吾と白馬氏が入ってきた。

英吾が怒ったような口調で言う。

「そんなことを言うな、華代。もっと希望を持っていてくれ」

「そうだよ華代。まだ生きていてくれなければ。お前と、そして私の息子のために」

白馬氏その言葉に、華代は目を丸くした。

「え？あなたの息子って・・・探くんのこと？どうしてそんな・・・？」

白馬氏のかわりに、英吾が答える。

「私と白馬で、約束したんだ。私たちの娘・葵と、白馬の息子の探くんが18歳になったら婚約させる」

華代は言葉が出ない。

白馬氏が言う。

「華代、私たちで、『家族』になろう。また三人で過ごそう」

「だから華代、生きることを諦めないでくれ。私たちの娘と、探くんが18になるまで、生きてくれ」

華代は一度、満面の笑みを浮かべたあと、感激で大粒の涙をこぼした。

次から次に涙は流れ、部屋の中の他の者の目も、しずくで光っていた。

回想から現実に戻った安藤は再び語り出した。

「その約束から数ヶ月後の冬、奥様は35歳の若さでこの世を去られました。

最初から、みんなわかっていたことでした。奥様があと8年なんてとても生きられないことを。

しかし旦那様と白馬殿は、奥様の最期の夢を叶えると誓いました。

奥様が安心して旅立っていけるために・・・」

その後、葵の部屋では姉妹二人が床に寄り添って座り込んでいた。椿は姉の胸で嗚咽をもらして泣いていた。小刻みに震えるその背中、昨日探に話した、母を亡くした頃の椿に戻ったようだった。

葵は母が死んだ日のことを思い出していた。

どんな治療も何の意味もなく、手の施しようがなくなって、最期を過ごすために自宅へ戻って来た母。

病院で最後までがんばり、あきらめずにつらい治療に耐えてきた彼女の体は、すっかり衰弱していた。

呼吸器を取り付けられ、朦朧とする意識の中で、母はその細い腕を葵にのばし、あるものを手渡した。

それは母が大切にしていた、碧い宝石のネックレスだった。

それを受け取った葵の手を握り、隣の椿の頭を撫で、優しく微笑んだ母の目から、一筋涙がこぼれた。

葵はそこで、母が泣くのを初めて見た。

『葵が18になるまで生きたかった・・・』

その言葉を途切れ途切れに言ったあと、母は目を閉じた。そのときの顔が、葵の臉に焼き付いている。

それきり母は目を開けなかった。

ほとんど意識はなくなり、眠ったような状態になった。

かすかな呼吸の音だけが、誰一人口を開かない静かな部屋に響いていた。

その日の夜遅く、とうとうその呼吸音も止まり、代わりに部屋には、家中の者が泣き叫ぶ声が響いた。

あのときの母の最後の言葉の意味を、今やっと理解した葵は、母の形見のネックレスを握りしめ、8年前と同じように、ただただ椿

を抱きしめた。

第18話 大切な人

数日後 白馬邸

白馬氏の携帯電話が鳴った。仕事用とは別の、プライベート用の携帯だった。

『着信中 若宮英吾』

彼はそれを確認すると電話に出た。

「もしもし」

『英吾だ』

「ああ。この間は私の誕生パーティに来てくれてありがとう」

『こちらでも楽しかったよ。でも葵はずっと抜け出してて、失礼したな』

白馬氏は、はははっと笑って言った。

「構わんよ。どうせ抜けようとそそのかしたのはウチの探だろ？」

英吾も思わずふっと笑う。

『まあな』

「ところでどうした？」

英吾は真剣な口調になった。

『実はだな。そのパーティのときに悦嬢と知り合ったんだ』

その言葉に、白馬氏は驚きを隠せない。

「悦・・・って、五条財閥の長女の、あの悦嬢のことか？」

『そうだ』

「五条って言えば、お前の会社にとっては宿敵だろ？何でまた」

『わからん。だが友好的ではなかった。明らかに挑発的な態度だったよ』

白馬氏が答えに詰まっていると、英吾が尋ねた。

『なあ白馬。たしか五条財閥には、悦嬢の他に息子もいたよな？』

「ああいるよ。今年大学を卒業する、悦さんの兄が」

英吾が溜め息混じりに言う。

『やはりな』

長年の警察の勤で、白馬氏は英吾の考えていることが直感的にわかった。

「お、おい英吾、まさかとは思うが・・・」

『そのまさかだよ、白馬』

「そんなはずはない！五条財閥は昔からウチと仲が良いんだ」
だが英吾も退かない。

『しかし思い当たることがあるんだ。宝石商業界で一大プロジェクトの取り引きがあつて、今はウチの会社と五条の一騎打ち状態なんだよ。そのことを悦嬢は知っていた。『例の件』と言っただけで反応したんだ』

英吾はパーティのときを思い出しながら話した。

戸惑いながらも、白馬氏は言う。

「では・・・その取り引きに負けると、探と葵さんとの婚約が危うくなるかもしれないんだな？」

『かもしれない、じゃなくて確実にそうだ』

それを聞いた白馬氏は、恐る恐る尋ねた。

「なあ英吾、まさかその取り引き・・・勝ち目がないのか？」

英吾は何も言わない。受話器の向こうの静寂と緊張感が、こちらにも伝わって来る。

白馬氏はごくりと唾を飲み込んだ。

やがて沈黙を破って、何の感情も読み取れない英吾の声がした。

『まだわからん。だが白馬、くれぐれも注意していてくれ・・・
五条が動き出した』

そのころ、五条邸の一室に探と悦がいた。

窓辺に、自分に背を向けて立っている探に向かって、悦は必死で呼びかけた。

「探、本気なの？本気で葵さんと婚約するつもりなの！？」

「本気だよ」

探は落ち着き払って答えた。

「どうして！？どうしてそんな非常識なこと・・・」

「常識非常識は関係ないんだ」

探は尚も悦に背を向けたままだ。

「でも勝手に相手を決められて、嫌じゃないの！？」

探の口調が、先ほどまでより少し力強くなった。

「僕は葵さんで何の不満もない。彼女を守っていくと決めたんだ」

その言葉に、悦は確信した。探の、葵に対する気持ち。

しかし、それでも退く気はなかった。自分だって探を誰より思っ

ている。昔から、長い間・・・。

なのに、いきなり現れた女に奪われるなど悔しすぎる。

必ず振り向かせてみせると決意し直し、悦は尋ねた。

「そう思うのは、葵さんが探にとっては愛しい『恋人』だから？」

その言葉に、初めて探は悦を振り返った。

探は戸惑った表情をしていた。

彼は考えていたのだ。さつき悦が言った『恋人』という言葉。

恋人・・・？

何て簡単すぎる代名詞なのだろう。

彼女が自分にとって恋人？

そんなものじゃない。そんなふうに考えたことなど一度もない。

彼女の存在は自分にとって、そんな曖昧な言葉で表現できるような

ものではない。

自分の、彼女に対する思いは、そんな一言に入りきるものではない。

あの人は誰よりもきれいな人で、誰よりも優しい人で、そして誰よりも強い人だ。

無邪気な笑顔がかわいい人だ。

温かい涙を流す人だ。

僕を見る瞳が、澄み切った人だ。

声を聞くだけで、安心できる人だ。

僕の弱さを、温かく包み込んでくれる人だ。

今もこれからも、誰よりも守ってあげたい、守らなければならない人だ。

僕の、好きな人だ。

そんな彼女は、自分にとって何なんだ？

探は、再び窓の外に目をやって考えた。

かすかに冬の気配を漂わせる青空に、雲が浮かんでいる。

その青空に、翼を広げて舞う鳥が見えた。

庭に放しておいた、ワトソンだった。

なめらかに空をすべる鷹を見て、思い出とともに頭に浮かんだのは、葵の笑顔だった。

守りたい。あの笑顔を。

彼女のように強くなって、ずっとずっと、守ってあげたい……

探は唐突に答えに行き着いた。

自分にとっての彼女。彼女への気持ちを表せるたった一つの言葉が、今やっと見つかった。

今までの人生で、自分の周りにはいなかった、その存在……。

探はきちんと悦のほうを向き、かすかに微笑みながら静かに言っ

た。

「彼女は僕の、『大切な人』だ」

その言葉が、悦の全身を貫いた。

優しく、そして自分には痛すぎる言葉。

『大切な人』……。悦は直感で思った。

かなわない……

無理だ。そんな相手に、勝てるはずがない。

小さい頃からいつも一緒だった悦をさしおいて、短い時間でそこま
で探の心を引きつけて離さない女性・葵。探の彼女への思いは、大
きすぎる。

悦はただ黙って、今にもこぼれそうな涙を必死にこらえていた。

第19話 恋人たち

数日後、若宮邸で会食パーティが開かれることになった。と言つても、昔から定期的に開かれる恒例行事なのだ。

親戚や友人一同が大勢集まり、食事をしながら交流する。

終盤には音楽に合わせてのダンスもある、明るい雰囲気のパartyである。

しかし今回は、いつもとは少し違っていた。

葵と探の婚約披露宴も兼ねているのだ。

五条の動向を気にした英吾が、早く公にしたいと密かに思い、白馬家と相談して取り決めたことであった。

そのため両家の親戚や財界の大御所、警察上層部なども数多く招待されることになっており、いつもよりだいぶにぎわいそうだ。

綾が、椿の部屋のドアをノックした。

「椿お嬢様、パーティのお召し物をお持ちしました」

部屋の床に、綾が持ってきた箱を広げ、椿は嬉しそうに声をあげた。

「わあ！素敵！！」

箱に入っていたのは、英吾が椿のために作らせたドレスだった。

今回は特注で、メイドたちともかなり熱心に相談して、時間をかけて完成させたものだった。

いつもより少し大人っぽく、上品な薄イエローのふわりとしたワンピースドレスだった。

数分後、そのドレスに着替えた椿は鏡の前に立っていた。

その後ろでは、綾が背中のリボンを調節している。

「姉さまも今ドレスの試着をしているの？」

その問いに、綾はリボンをほどいて結び直しながら答えた。

「いえ、葵お嬢様はサロンで髪を整えられていますよ。ほんの少しお切りになるらしいです」

椿は別の箱に入っている真珠のネックレスを拾い上げ、しげしげと眺めた。

真珠の一粒一粒が日の光にきらめき、なめらかな表面には艶がある。明らかに高価だ。今までこれほどのものを身につけたことはなかった。

いくら令嬢でも、椿はまだ中学生だからだ。そのへんの常識は、父はしっかりしているはずなのだが……。

「綾、今回は随分と気合いが入ってるのね」

綾はリボンの端をつかんだまま答えた。

「そりゃあそうですね！ウチの大事な披露宴なんですから。お偉方もたくさんいらっしやいますし、きちんとなさらなければ」

「ふーん……」

椿は無造作にネックレスを戻した。

別にこんなに高価なものを身につけられて、嬉しいわけではない。特に興味もないからだ。

高価なものを身につけることが、一体何になると言うのだろうか。どうして人は高価なものを欲しがるのだろうか。

そんなことを考えていたら、ふとある人物が思い浮かんだ。

神出鬼没の泥棒、警察相手には無敵を誇る天才的な犯行……。

今最も人々の関心を集めている大悪党・怪盗キツドの姿だった。

彼もまた、なぜ高価な宝石を求めたのだろうか……？

なぜ椿が唐突に怪盗キツドを頭に浮かべたかは、本人でさえ謎のことだった。

ただ、何の意味もなくただ思い浮かんだわけではなさそうだ。

椿は、彼に何かを感じる。今まではそんなことなど一度もなかった

のに……。

そんな椿の疑念は、まるでこれから起こることを見越した、一種の予言のようだった。

そんな椿の物思いに気付くことなく、綾はリボンを前に回して完璧に結び、ドレスは完全に椿の体にフィットした。

「お嬢様、よくお似合いですよ!!」

それぞれがそれぞれの準備で大忙しで、慌ただしい日々が続いたが、無事パーティーの日を迎えられた。

昼間の明るいうちから大勢の客がひっきりなしにやって来るので、英吾を中心とした大人たちは対応に追われていた。

そんな中、姉妹二人は静かな場所に逃げてきていた。大人の相手なんてまっぴらだ。

普段あまり人が来ない廊下の出窓に肘をついて、外の庭の様子を眺めていた。

今頃、接客をサボっている二人を、メイドや使用人たちが怒り狂って探し回っていることだろう。

その一方で、安藤は二人の居場所をだいたいわかっているが知らん顔をしている姿が想像できる。

庭を堂々と歩いて玄関に向かってきた大柄な男を見て、椿が言った。

「あの人知っていますよ!! 確か松本警視。前にテレビで見ました。顔に派手な傷が……」

「その後ろにいらっしやるのは目暮警部という方じゃなかったかしら? よく殺人事件のときにインタビューを受けてらっしやるのを見

るけれど」

その言葉を聞いて、椿は驚きの声をあげた。

「警部！？警視の方ならわかりますが、警部の方まで招待なさるなんて……。一体どれだけの人が集まるんでしょう？」

葵も溜め息混じりに言う。

「財界の方も大勢いらっしやるみたいだし……。何だか恥ずかしいわ」

案の定椿が大声で反応した。

「何も恥ずかしいことなんか無いじゃないですか！姉さまは幸せになれるのですから」

葵は苦笑しながら答える。

「それはそうだけれど……。やっぱり恥ずかしいものは恥ずかしいのよ。照れる、というか気恥ずかしいといったところかしら」

椿は何も言わず、ほんのり頬を染めている姉の横顔を、微笑みながら眺めた。

恋とは実に不思議なものだ。

まさか姉が、こんな幸せそうな表情をするようになるとは想像もしていなかった。

いつも健気に努力して、弱さを見せない、自分の母親代わりの葵が、初めて心から安らいでいるのを見た。

椿は知っていた。この間のパーティで、最後になってようやく戻ってきた葵の目が赤かったのを。

すぐに、ずっと泣いていたのだとわかった。きっと、母と自分のことが原因だろうということも何となく想像できた。

しかし、そんな姉の表情に悲しみの色はなく、落ち着いて安心しきった顔をしていた。

彼の前で泣くことで、少しは心が楽になったのかな、と椿は思った。

椿は随分前から薄々感じていた。姉が自分のせいでどんなに辛い思いをしてきたかを。

母を亡くして、自分だって辛いのに、それでも必死で椿を支えてくれた。

葵は何も言わないが、その心はボロボロだっただろう。でも今さら、姉に謝ることなんてできない。

もちろん、ここまで育ててくれたお礼だって言えない。

言っただって何の意味もないし、姉はそんな言葉を喜ぶような人ではない。

二人ともわかっているのだ。あのときはしょうがなかったんだと。もう過ぎてしまったことだ。過去の辛いことを蒸し返されるのは、誰だって嫌だろう。

だから椿はずっと、気付かないフリを続けてきた。

そんな姉妹の絆のカタチだってあるのだ。

だからせめて、姉には探と幸せになっただけほしい。

姉が初めて見つけた、泣ける場所を、ずっと大切にしておいてほしい。安らげる相手の側にいてほしい。

そう願うことしかできないのだから、椿なりに精一杯願っている。誰よりも、二人を祝いたい。

赤くなつて慌てる姉が面白くて、いつもついからかってしまうが、心から、そう思っている。

「そろそろ着替えましょうか」

「はい」

姉妹は並んで廊下を歩き去った。

・・・夕方・・・

もうすっかり日が短くなり、闇が辺りを支配し始めた頃、白馬家の一同が若宮邸に到着した。

玄関に入る直前、一人の男が声をかけてきた。

がっしりとした頼もしい体つきの、長身の男だった。

顔には多くの皺が刻まれ、頭も白髪交じりだったが、その目は鋭く、隙のない身のこなしが、向き合う者に威圧感を与える。

人が良さそうな白馬警視總監とは正反対の人相だ。

探はその男に見覚えがあった。

父の仕事の関係上、何度か会ったことがある。

白馬氏がにこにここと挨拶を返す。

「おお、伊勢谷君！来てくれたのか」

そう。彼は父に次いで、警視庁でNO.2の地位にいる、伊勢谷副總監。

その実力はずば抜けていて、刑事時代は数々の犯人逮捕や組織壊滅で活躍していたらしい。

確か父とほぼ同世代で、一つか二つほど年下だったはずだ。

伊勢谷副總監が、その深く響く声で答える。

「当たり前ではないですか總監！ご子息の婚約披露宴に欠席する部下なんていませんよ」

白馬氏と副總監が親しげに挨拶を交わした後、一同は屋敷内に入った。

すぐに、探を呼ぶ澄んだ声がした。

振り返ると、見事なドレスに身を包んだ葵が、少しはにかんだ笑みを浮かべて立っていた。

探は微笑み返し、彼女に歩み寄った。

今日の葵は、ベージュのしなやかなドレスを身につけ、髪は下ろしていた。

その胸にはいつも通り、碧い宝石が輝いている。

パーティは空前の盛り上がりを見せ、果てしなくにぎわっていた。婚約発表や主催者の挨拶も済み、食事と交流も一段落したとき、オーケストラの演奏が始まった。

参加者が次々とホールの前に出て、ペアで踊り始めた。

穏やかな時間が流れる。

探は跪ひざまづいて葵の手にキスを落とすと、そのまま手を引いてダンスに加わった。

他の者は今回の主役のために場所を明け、二人は中心で踊り始めた。手を組み合わせ、葵はもう片方の手を探の肩に置き、探は葵の腰に手を回した。

周りが、祝福の眼差しで見守る中、彼らは静かに踊った。

音楽に合わせて体を揺らしながら、目を伏せたまま葵が言った。

「私たちの婚約の理由、ご存じですか？」

「・・・いいえ」

尚も目を伏せたまま、葵は先日父から聞いたことを話した。

お互いの父と葵の母の関係、母への誓い、家族になるといふ夢・・・

その間、探は黙って聞いていた。

お互いがお互いのステップに合わせて、床を滑るように踊る。

しばらく探には、葵の声と、彼女のドレスの裾がこすれる音しか聞こえなかった。

話を聞き終えた探は納得した。

最初から不自然な縁談だと思っていたのだ。

葵の家は有力な資産家、一方の探は警視総監の家柄。

そんな家同士の子供が婚約したところで、両家にとって何の利益もないのだ。

むしろ、出来れば避けたいと思うだろう。

資産家にとって警察というものは、最も関わりたくない存在であるから。

「きつとお母様も安心してらっしゃいますよ」

探のその言葉に、葵は初めて目を上げた。

しばらく見つめ合ったあと、再び視線を落として言った。

「このネックレス・・・母の形見なんです」

その視線の先には、葵の胸で輝く碧い宝石があった。

「だからいつも身につけてらっしゃるんですね」

探はずっと気になっていたことを言った。

初めて会ったときも、図書館で毎日会っていたときも、この間のパーティーのときも、彼女の胸にそのネックレスが無かったことは一度もない。

「私がいつもつけているって・・・気付いてらしたんですか？」

葵が驚いて言う。

探はにっこり笑って答えた。

「人間観察です」

久々に出たその返答に、思わず葵も吹き出して笑った。

パーティーがお開きとなり、客人たちがぞろぞろと帰っていく中、

二人は尚も一緒にいた。

広間から玄関ホールにかけてのざわめきをかすかに聞きながら、葵と探は少し離れた吹き抜けの窓辺にたたずんでいる。

床から天井まで全て窓で、その外側には若宮邸の広大な中庭が広がっている。

紅葉した葉も散り始め、秋の終わりを予感させていた。

吹き抜けのシャンデリアは点いておらず、壁一面の窓から差し込む月明かりだけが、薄暗い空間に淡い光の世界を作り出していた。

葵が、外を見て言った。

「時が経つのは早いですね。もうすぐ冬になるなんて」

探も外を見つめながら言う。裸になりかけの木々の間から、ちらちらと星が見える。

「そうですね。僕たちが出会った頃は、まだ紅葉もしていなかったのに」

葵はしみじみと呟いた。

「あの頃は・・・最初に婚約を聞かされた頃は、さすがに父を恨みました。でも今は、感謝しています」

「僕ですよ。まさかこんな気持ちになるなんて考えもしませんでした。あなたが、こんなにも大切な存在になるなんて・・・」

葵は探と向き合った。探も真っ直ぐに葵を見据える。

月明かりを浴びた彼女の顔は、幻想的な美しさをたたえていた。

長いまつ毛が、顔に影を落とす。

顔に出来ている影よりもなお深い漆黒の、その瞳が、探の心をとらえて放さない。

やがて葵が口を開いた。

「人の心は不思議ですね。自分で自分の気持ちをコントロールできない・・・」

しばらくの沈黙の後、再び葵の唇が動いた。

「ずっと、あなたの側に居たいです・・・」

探は葵の細い体をしっかりと抱き締めた。

静かに時間が流れる。

体を離れた二人は少しの間、最後の一步を踏み出せなかった。だが先に葵が目を閉じた。

探は葵の唇に、ゆっくりと自分の唇を寄せた。

ようやく結ばれた二人。だがその様子を、遠くから見ている人物

がいた。

悦だった。

彼女は隠れていた柱に背を向け、唇を噛んだ。
固く握られたその拳は、かすかに震えていた。

第19話 恋人たち（後書き）

あわわわわわわわわわっ

と、とぅとぅとぅやってしまいました……。白馬ファンの皆様ごめん

なさいいいいっ（逃っ）

第20話 夢

秋の空の下で出会った二人は
時と言葉と思いを重ね
落ち葉が舞う頃
結ばれた。

しかし

どんどん昼が短くなるように
二人に迫る闇は次第に大きさを増し
光を覆おうとしていた。

影さえも映らないような光の中の二人は
その闇に気付くことなく
愛を育んでいる。

彼らには

自分たちをとりまく光しか見えていない。

彼らはまだ感じていない。

少しずつ、その黒い手を伸ばしてくる暗雲を。

葉が残らず落ち

大気が冷たさを増し

霜が大地をなめ

空が鉛色に澱み始めるとき

凍えるような、冬が来る……。

暗い部屋。

コンピュータの機械的な明かりだけがその部屋を照らしている。

そこには、以前から葵を追っているあの二人組の他に、大勢の男たちがいちがいた。

何やら話し込んでいるようだ。

その中の、大柄な男が声を荒げて言った。

「だから、さつさとその葵って娘をかつさらって連れてくりゃあいだけの話じゃねえか！！なにをチンタラやってんだよ！？」

すると、そうだそうだという同意の声があちこちから上がった。

すると、最初に葵を見つけた、あの長髪にサングラスの男が困ったように反論した。

「それが出来たらとづくにやってるよ！あっちの父親には顔が割れてるし、この組織のことも知られてんだ！それに、あの娘は警視総監の息子と婚約してる。そんなやつが側にいるのに、迂闊うかつに手を出せねえんだよ」

だがその反論は、逆にまたあの太柄な男に反論し返された。

「そんなことあわかってるよ！でもボスの地位があれば何とでもなるだろ！？」

すると、今まで黙って座っていた短髪の男が口を開いた。

そう、眼光が鋭く、右の頬に傷のある、あの男だ。

「そう焦るな、トレス」

彼のよく通る、底なしの沼のような声が響いた途端に、それまでのざわめきが一瞬にして沈黙へと変わった。

「念には念を、というのがボスのやり方だ。8年も探し続けてやっと見つかったんだ。逃げられちまったら元も子もねえだろ」

そう言って男は立ち上がり、向かいの机の煙草を取った。

トレスと呼ばれた大柄な男がためらいがちに言う。

「し、しかしおやつさん、準備は完璧じゃないですか。これ以上どんな念を入れるっていうんですかい？」

再び椅子に戻って煙草を加えた短髪の男は、その鋭い目でトレスを見た。

「完璧？お前は今の俺たちの準備が、完璧に見えるのか？」

トレスはたじろいだ。周りの者も、その眼差しに息を呑む。

「いえ、その・・・少し思っただけで・・・」

短髪の男はトレスから目を離し、ふうつと溜め息をついた。

煙草の白い煙が一緒に吐き出される。

「今回の責任者を、お前にしなくてよかったよトレス。なあ、クワトロ？」

そう言っただけで彼は、先ほどのサングラスの男のほうを振り向いた。

クワトロと呼ばれたその男は、急に話をふられてビクリとしながらも答えた。

「え、ええ、おやつさん。責任者に俺を選んでくれてありがとうございます」

トレスはメラメラと燃えるような目でクワトロを睨み、拳を握りしめた。

クワトロはトレスと目を合わさないようにしている。

そんな二人の様子を気にも留めず、短髪の男が言った。

「とにかくだ。もうすぐ最終の準備が整う。あの宝石が俺たちの手に墜ちるまで、そう長くはかからん。すべてはボスが上手くやって下さるさ」

彼は不気味に笑うと、煙草の火を灰皿に押しつけて部屋を出ていった。

本格的な冬が近づき、朝夕は霜がおりるようになった。すっかり色を変えた若宮邸の庭を、葵と探は眺めていた。そこは、葵の部屋。

今日は白馬父子が泊まりに来ているのだ。

あの日以来、恋人と言える仲になった二人は、この平和な時間を静かに語り合って過ごしていた。

葵がしみじみと言う。

「今日の寒さはまさに冬ですね」

探も葵に調子を合わせる。

「そうですね。日本で冬を過ごすのは久しぶりです」

葵は探を見て尋ねた。

「イギリスは、もうとつくに冬なんでしょうね。向こうの冬は、日本よりもつと寒いのでしょうか？」

「ええ。だいぶ早くから暖房が入りますよ」

葵は探の過ごしている異郷の地を思い、言った。

「イギリスつて、どんなところなんですか？」

少し考えた後、探の口から出た言葉は意外だった。

「良い国ですよ。それに誇り高い。ですが、残念ながら犯罪は日本と変わらず存在しています」

しばらくの沈黙ののち、葵が言った。

「そのイギリスで、とうして犯罪学を？」

今度の答えは、すぐに返ってきた。

「将来のためです。僕は今後も、探偵として事件を解決していきたいんです」

葵は黙って耳を傾ける。探は過去の苦い経験の中の、ある女性探偵が言った言葉を思い出していた。

「僕は推理を間違ったあのと看、探偵としての心構えを改めました。死を確信するまで生を信じ抜く探偵でありたいんです」

言い終わり、そつと自分のほうを向いた探に、葵はにっこり笑いかけて言った。

「素敵です」

「今度は私の将来の夢を聞いて下さい」

「はい」

「私は、国際政治学者になりたいんです。世界で起こっている紛争や災害を救いたい。苦しんでいる人を助けたい」

葵はちよつと恥ずかしそうに笑って続ける。

「こんな裕福な生活してますけど、そんな自分がいやなんです。世界で苦しんでいる人がいるのに、綺麗なものを身にまとうて贅沢するのが、何だか申し訳なくて……。でも父は、そんな私を咎めることもせず、後を継げとも言わず、留学させてくれます」

また、しばしの沈黙。

やがて探が囁いた。

「僕も、あなたの留学と同じ時期にイギリスに戻ることになると思っています。そのときは……。一緒に、行きますか？」

葵は微笑んで答えた。

「はい」

二人は静かに唇を重ねた。

安藤が夕食に呼びに来て、葵と探は階下に降りて行った。

夕食は若宮一家と白馬父子の5人で、にぎやかに過ぎていく。だが一人、心ここにあらずといった人物がいた。

英吾だった。

彼は、楽しそうに話す葵と探を見つめては考え事にふけり、二人が笑い合えば悲しそうな表情になるのであった。

そんな英吾の様子にいち早く気付いたのは、白馬氏だった。

さすがに高校時代からの親友だけあって、すぐに英吾の心配事を感じ取った。

白馬氏は葵の胸の宝石を眺めながら思った。

おそらくは、あの宝石か、この間電話で言っていた五条家の動きが原因なのだろう。

夕食が終わり、大人たちの心の内など知るよしもない葵、探、椿の三人はリビングで雑談を始めた。

白馬氏は、持ってきたブランデーを英吾に見せた。

「どうだ、英吾？久しぶりに一杯飲まないか？」

「ああ、いいな」

そう答えると英吾は、リビングの葵たちの傍らのソファに座ろうとした。

しかしそれを白馬氏が止める。

「いや、英吾。子供たちの前で酒はよそう。教育上あまりよくない。それに、酔った勢いで、子供たちに聞かれたくない昔の恥ずかしいことをしゃべられちゃかなわんからな」

英吾はすんなりと納得し、二人は英吾の部屋へ行った。

英吾は白馬氏を部屋に入れると、ゆつくりとドアを閉めた。

リビングから聞こえる笑い声がだんだんと遠のき、ドアが完全に閉まると同時に聞こえなくなった。

白馬氏は2つのグラスにブランデーを注ぎ、1つを英吾に手渡した。

英吾が一口飲むのを確認すると自分も少し飲み、一息ついて尋ねた。

「どっちだ？」

英吾はその問いに、表情を変えずに逆に質問を返した。

「どついつことだ？」

白馬氏が溜め息と共に言う。

「とぼけるな。本当は私がお前をリビングから連れ出した訳も、ちやんとわかっているくせに」

尚も英吾は表情を動かさない。

「・・・子供たちに聞かれてはいけない話をするために、私と二人きりになる必要があったから、だろう？」

白馬氏は苦笑して言う。

「その『子供たちに聞かれてはいけない話』というのが、恥ずかしい昔の話なんかではないことも、わかっているんだろうな？」

英吾もつられて苦笑する。

「ああ。私とお前の仲だからな」

少しの間のと、白馬氏が真剣な表情になって尋ねた。

「それで、どっちなんだ？お前の心配事は、組織のことなのか、五条のことなのか」

「両方だ」

白馬氏が驚愕の表情になる。

「・・・両方だと？」

「ああ」

「おい、五条のことはわかるが、組織が心配だというのはどういうことなんだ？まさか姿を見せたとか・・・」

白馬氏の切羽詰まった問いかけを聞きながら、英吾はまたブランデーを一口飲んだ。

「組織が動いている気配はない。だが、感じるんだ。胸騒ぎがする。華代の実家が襲われたときのような、いやな予感が離れない」

白馬氏は昔の苦い記憶を思い出し、言葉を失って青ざめた。

部屋の外から、かすかに三人の笑い声が響いてきた。

楽しい時間は過ぎ、夜は更けていった。

若宮邸の面々は自室に戻り、静かに就寝前の時間を過ごしている。

葵の部屋をノックし、入ってきたのは探だ。彼らには、二人きりの時間がまだまだ足りなかった。

葵は探と並んでソファに座った。

お互いの手が、自然に引き寄せられていく。

探の手に触れた葵は、驚いて声を上げた。

「すごく冷たい手！ここに来るまでの廊下、そんなに寒かったですか？」

探は平然と答える。

「いつものことですよ。それに、手が冷たい人は心が温かいと言いますし」

「・・・聞いたことありませんけど」

「僕と違って、あなたの手は温かいですね」

「どういう意味です？」

二人はふざけて笑い合う。

「そう言えば、あの安藤さんという方、何だかうちのバアヤに似ています」

またもや謎の発言。相変わらずだ。

「ええ！？性別違うじゃありませんか！」

葵の、もう何度目かの驚き呆れる反応。

探が訳のわからないことを言う度、葵はいつもこの調子だ。

だが、そんな探を知りたいと思う。探が言うこと、思うことを全部、知りたいと思うのだ。

二人の気持ちは、以前から少しも変わらずに新鮮なままだ。

「いや、雰囲気というか、人柄が似てるんですよ。面倒見の良さそうなおとななんか特に」

そう言われて葵も納得した。

「確かにそうかもしれませんね。安藤も私の親代わりでしたから」

「僕は小さい頃からちよろちよろして、バアヤには苦勞をかけましたよ。もうだいぶ歳ですし、この間まで自宅で静養してたんです」

葵は、この間の白馬邸でのパーティの時、彼女がしばらく家を空けていたと言っていたのを思い出した。

そう言えば、あのときはぐらかされてしまった質問を思い出した。葵は聞いてみた。

「前にもお聞きしましたけど、あなたの言葉ってどれが本心だったんですか？今までの中で」

「全部ですよ」

「嘘！だってあなた、初めてまともに話したときも『白馬探としてあなたを逃がしたくありません』って言ったじゃありませんか。初対面の人間にあんなこと言うなんて、冗談でしかないでしょう？」

葵が追いつめた！とばかりに言い終わると、探は困った顔で言葉に詰まった。

「えーと・・・それはですね、つまり・・・」

葵は探が、自分の言ったことに反論できなくなったのだと確信した。

『ほらやっぱり！』と葵が言おうとしたそのとき、探の口から出たのは意外な言葉だった。

「つまり、一目惚れだった・・・ってことですよ」

探は少し照れて、顔を背けた。

赤面している。あの探が・・・。

葵はその探の反応と言葉が嬉しくて、思わず言った。

「きつと私も一目惚れでしたよ」

第20話 夢（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

今回の重要ポイント。

『今は亡き華代お母さんの過去には、組織に関する事件があった』

『組織のボスは「地位が高い」（何の地位なのかはまだ謎）
これは今後、明らかになります。』

組織の方々のお名前はコードネームです。外人さんではございません。

第21話 動き出す闇

葵と探は、ソファに座ったままいつの間にか眠りに落ちていた。

翌朝、先に目を覚ましたのは探だった。

昨晚、葵と果てしなく語り合いながら寝入ってしまったのだとすぐにわかった。

ソファの前のテーブルのランプがつけっぱなしになっているからだ。そして、自分の肩では葵が幸せそうな寝息を立てている。

今何時なのかはわからなかったが、まだ辺りは薄暗かった。

昨日葵と外を眺めた部屋の出窓のカーテンから覗く空の色で、だいたい明け方だとわかる。

冬が近いと、夜明けも遅い。

夜通しつけっぱなしだったランプだけが光を放っている。

座ったまま寝たせいで、少し首と背中が痛んだが、探は構わずそのままの姿勢でいた。

もうしばらく、このままでいたい。

探は葵の髪に指を絡ませた。

ゆるやかなパーマのかかった髪が、指の間をすべっていく。

良い香りがした。

そつと髪を離すと、その一束がぱさりと葵の白い肌にかかった。

ランプの光が、葵の寝顔を照らす。

閉じられた瞼が、小刻みに震えている。

そのかすかな動きに合わせて、長いまつ毛が落とす影もちらちらと揺れる。

昔、テレビか何かで知ったことを思い出した。

人間の瞼が睡眠中に無意識に動くのは、夢を見ているときだと。

彼女は今どんな夢を見ているのだろう。
自分は出てきているだろうか？

彼女の夢の中にまで入り込みたいと思うなんて、自分は厚かましいと実感する。

でも彼女だって、探の夢に入り込みたいと思っただけかもしれない。彼が目覚める前に見ていた夢は、葵の夢だったからだ。

しばらくすると葵も目を覚ました。

最初は半端じゃなく驚いていたが、状況を理解したら恥ずかしそうに笑っていた。

探が尋ねる。

「どんな夢を見ていたんですか？」

「・・・恥ずかしくて言えません」

葵は顔を赤らめた。

「いいじゃないですか。僕しか聞いていないんですから」

「だめですよ。きつと隣の部屋で椿が聞き耳を立ててるでしょうから」

その通りだった。

隣の自室で、椿は壁に耳を押しつけていた。

だが、そう簡単に壁の向こうの声が聞こえるわけではない。

聞こえるのは、くぐもった話し声だけだった。

当然、何を言っているのかなど聞き取れない。

椿は諦めて壁から離れると、残念そうに溜め息をつきながら着替えを始めた。

朝食までまだかなりの時間があつたので、探は一旦部屋へ戻るこ

とにした。

ようやく鳥が鳴き始めていたが、相変わらずまだ薄暗い。

探が使っている来客用の部屋は、葵の部屋とは階が違った。

上の階へ続く階段を目指して廊下を歩いていると、向こうから歩いてくる人影があつた。

英吾が、いつになく厳しい表情で近づいてくる。

探は、自分が一晩中葵の部屋にいたことで何か言われるのではないかと思ひ、少し緊張した。

今自分が歩いている場所を考えると、誰がどう見ても葵の部屋から帰る途中だとわかる。

しかも、朝帰り。

婚約者なのだから別に許されるとは思うが、やはり父親としては、娘というものは特に大事であろうから。

まあ、昨夜は話しているうちにいつの間にか熟睡してしまって何もなかったのだから何も後ろめたいことはないのだが。

そうこう考えているうちに、とうとう二人は出会ってしまった。立ち止まり、互いに挨拶を交わす。

「おはよう、探くん」

「おはようございます」

探は内心びくびくしながら英吾の次の言葉を待った。

だが英吾が言ったことは、探の全く予期しなかったことだった。

「・・・探くん、是非君に知っていてほしいことがある。聞いてくれるか？」

「・・・はい・・・？」

英吾は尚も厳しい表情で、真っ直ぐに探を見据えてくる。

「葵の周りのこと、十分注意していてほしい。万一危険があったら、そのときは守ってやってくれ」

探は言葉が返せない。

あまりに突然で、何のことかさっぱりわからない。

だが、英吾の表情は真剣だ。

彼の口ぶりはまるで、これから葵の身に何かが起こることを予想しているようだった。

「あの・・・何か具体的な心配がおりなんですか？」

英吾の眉間の皺が深くなる。

彼は決心したように息を吐くと、口を開いた。

「・・・あまり詳しくは、まだ聞かないでくれ。余計な心配はさせたくない。だが、最低限のことは話しておく。・・・葵のネットワークを知っているか？」

探は葵の言葉を思い出した。

母の形見なんです・・・

「はい。亡くなられたお母様の形見だと聞きました」

英吾はかすかに頷くと言った。

「実は、昔の話なのだが、あのネットワークを狙っている組織がいたんだ。もう十数年前から何の動きも見せないが、まだ危険はある。もしもということがあるかもしれないから、気を付けていてくれ」

それを聞いた探は、事件の推理をするときのような鋭い勘が働き始めた。

英吾は、きっとその組織についてはさほど心配はいらないが、万が一のために一応注意してくれ、という話しぶりだが、彼の表情や声の響きで、今の事態がそんなに軽いものではないとわかった。

きつと不安がらせないように英吾なりに精一杯努めているのである。うから、探は今感じたことを顔に出さず、それ以上質問もしなかった。

「わかりました。大丈夫です。お嬢さんは、永遠に僕が守ります」

そこで初めて、英吾の表情が和らいだ。

「葵を頼むよ」

かすかに微笑んでそう言い残すと、英吾は去っていった。

英吾と別れて歩きながら、探は考えをめぐらせていた。

英吾や葵は『ネックレス』と言っていたが、あれはただのアクセサリーなんかではない。

葵は何も知らないにしても、英吾は明らかに意図的に『ネックレス』と言っている。

ここ最近、間近で見えてみて思ったのだが、あれはかなり高価な『宝石』だ。

普段から怪盗キッドと対決して宝石を数々見てきている探には、一目でわかる。

おそらく、ブルーダイヤだ。

そう思った瞬間、探の頭に何かが引つかかった。

・・・ブルーダイヤ？

何だか前にも、身近で聞いたことがあるような・・・。

今までのキッドのターゲットには、ブルーダイヤはなかった。

だったらどこでそれを聞いたのか？

だがどうしても思い出せず、探は諦めた。

それにしても、葵にとって危険な組織が動いているとは、衝撃だった。

一体何が狙いなのだろう？

たかが宝石一つのためにどうして組織単位で動くんだ？

英吾は、ここ十数年は何の動きもないと言ったが、逆にそれが心配だ。

長年、気配なく段々と接近し、相手が油断している頃に奇襲をかけるられる可能性だってある。

あるいは、時間をかけて何か大きな準備をしているか・・・。

探の心は重く沈んだ。

一体どんなことが待ち受けているんだ？

彼は巨大な不安に襲われた。

何はともあれ、今後は周囲に目を光らせなければならない。

何が何でも、葵を守ると決めたのだから。

決意に希望を持たせるかのように、朝日が昇った。

朝食の席には、英吾以外の4人が揃った。

英吾は大事な用ができたということで、早い時間にも関わらず出かけていた。

葵と椿が、朝食の準備をする安藤たちを手伝っている。

食器を用意する、葵の家庭的な後ろ姿に、探は思わず見とれていた。その様子を見て、白馬氏が息子の脇腹を肘で小突いた。

「探、昨夜は部屋に戻って来なかったようだが、葵さんのところにいたんだろ？何かあったのか？」

面白そうに聞いてくる父親に、探は素っ気なく答える。

「いえ、特に何も。まだ婚約中の身ですから」

若宮邸の平和な朝とは対照的に、五条邸では悦が、辛く苦しい気持ちで一日を始めようとしていた。

彼女はシャワーを浴びていた。

自慢の黒い髪が水を吸い、艶やかに光っている。

水が止まることなくその上を伝っていく姿は、真っ黒な滝を思わせる。

もうもうと立ち昇る湯気の中で、悦はただひたすらに体を洗い流していた。

心を洗うように。

彼女の頭の中には、探の言った言葉があった。

あの日、葵が探の『大切な人』だと聞かされたあと、納得できずに更に追求したときの言葉だ。

「探、どうして葵さんを好きになつたの？みんながよく言うあれ？
『自分がないものを持つてる』から？」

悦は半分投げやりになりながら尋ねた。

だが探は、平然と言葉を返してきた。

「違うよ。それじゃあただの憧れだ。確かに彼女は、僕にない『強さ』を持っているけれど、それが好きになつた根拠じゃない」

「じゃあ何なの！？」

悦は段々惨めになつてきて、強い口調で叫ぶように言った。

「彼女は、僕にないものを『持たせてくれる』。だから好きなんだ。今まで足りなかった、『守る心』を、彼女が目覚めさせてくれたんだ」

ああ、やはり聞かなければよかつた。

もうだめだ。完全に自分の入り込む隙間は閉ざされた。

その夜、悦は目が腫れるまで泣いた。

そこまで思い出し、悦はぎゅっと目をつぶって、声にならない泣き声を出した。

息を吸い、シャワーの温度を一気に上げた。

熱い湯が体中を流れていく。

このやりきれない思いを全て、洗い流してくれたらいいのに。

そうすれば、潔く探を諦められる。

素直に彼を祝える。

だが、どっちにしる今となつてはもう遅い。

事態は動き出した。

少しずつ、だが着実に。

そして自分は、恋のために悪となる。

第22話 運命の齒車

不安と心配事は、段々と膨らんでいった。

英吾と白馬氏の間だけに密かにあったその黒い影は、探にまで広がった。

だが彼らは、なるべく気にしないように、不安を顔に出さないように、日々を過ごしていった。

すべては、何も知らない葵の笑顔を守るため……。

しばらくは、一見平穏な日々が続いた。

だがその平穏は、静かな緊迫感と危機感を伴う、気が抜けないものだった。

とうとう完全に冬になった。

毎日の寒さは容赦なく襲ってきて、いつ初雪が降ってもおかしくない状態だった。

そして、探たちの努力も虚しく、葵にも不安の種が、日を追うごとに大きくなっていった。

最近、英吾の仕事が、かなり忙しそうなのである。

休みの日も関係なく、朝早くから出勤している。

帰ってくるのも夜遅くなることが多い。

そして、精神的にも肉体的にも疲れ切っているのがありありと見て取れた。

葵と椿が心配して声をかけても、『大丈夫だ』『気にするな』としか返ってこない。

メイドや使用人に聞いても、訳は知らないと言う。

英吾の状態は心配だったが、本人が『大丈夫』の一点張りなので、

それ以上は聞くに聞けない。
若宮家の面々は静観するしかなかった。

そんなある日。

その日は朝から大粒の雨が降り、絶え間なく雷が鳴っていた。
ダークグレイの雨雲が、ただでさえ暗い、冬の鉛色の空を一層暗く
淀ませていた。

葵は部屋で一人、英字新聞を読んでいた。
とうとう留学が目と鼻の先に迫っていた。
もうすぐ、異郷の地で、探と共に、夢に向かって羽ばたける生活が
やってくる。

だが、そんな彼女の希望を打ち砕く大事件が、その日起こった。

英吾は相変わらずの休日出勤だったが、中途半端な時間にふらりと帰ってきた。

さまようような足取りで家に入り、リビングに向かった。

彼の目は虚ろで、何も見えていないようだった。

雷が、凄まじい音で鳴り響く。

それまで噛み合っていた歯車……

葵はそのとき、唐突にペンを落とした。

それは絨毯の上を転がり、ソファの前のテーブルの近くまで行った。
慌てて椅子から立ち上がり、かがんで拾う。

そのとき、テーブルの下に、別のペンが落ちているのを見つけた。

だがその歯車の動きは次第に鈍くなり・・・

英吾は薄暗いリビングの床に、持っていた鞆をどさりと落とした。激しい雨が打ち付ける窓から、稲雷が閃く光が入り込む。

英吾は絶望していた。

がくりと膝をつき、両腕で頭を抱えた。

やがて回転を止めた・・・

テーブルの下に落ちていたペンは、葵のものではなかった。

一瞬考えたのち、それが以前、探の上着の胸ポケットにささっていたものだと思い出した。

彼が泊まりに来たときも持っていた。

きつとそのときに落としていったのだろう。

大事なものだろうから、届けるべきだと思った。

葵は部屋の出口に向かう。

もはや動かなくなった歯車は、音を立てて壊れ・・・

英吾はリビングのテーブルに突っ伏した。

悲痛な声が漏れる。

「葵、華代・・・すまない」

その歯車の後ろから・・・

葵は安藤に車を出してもらおうと思い、部屋を出てドアを閉めた。階段に向かって真っ直ぐに歩く。

新たな歯車が、姿を現す・・・

英吾の全身は震えていた。

ゆっくりと拳を持ち上げると、それをテーブルに叩きつける。

葵は階段を降りていった。

一段降りる度、髪が肩の上で踊る。

これから探に会えると思うと、自然に足取りが速くなる。

安藤たちがいる部屋へ向かおうとしてリビングの前を通ったとき、人影が目に入った。

父だった。

暗くてよく見えないが、床に座っているようだった。

驚いて声を掛ける。

「お父様？帰ってらしたんですか」

新たな歯車は軋みはじめ・・・

そのとき、稲妻の一瞬の閃光に、絶望でくずおれている英吾の姿が

浮かび上がった。

着実に回り始めた・・・

「お父様!？」

運命の歯車が、動き出す・・・

第23話 絶望の雨

最初は、英吾の体調が悪いのかと思った。

ここ最近の疲労で、倒れてしまったのではないかと。

しかしそうではなかった。

葵が駆け寄って抱き起こすと、彼の表情は絶望に歪んでいた。

「お父様、大丈夫ですか！？どうなされたんですか！？」

英吾はしばらく何も言わなかった。

今にも大声で泣き叫びそうに、全身を震わせている。

葵は、人を呼んで来ようかと思った。

しかし、今側を離れてはいけなような気がして、そのままじっと

父の言葉を待った。

英吾は絞り出すように声を出した。

「葵、すまない・・・婚約を、取り消さなければならなくなった・・・」

「

葵は家を飛び出した。

傘も持たず、降りしきる雨の中を駆け抜ける。

すぐに全身がずぶ濡れになった。

だが彼女は、そんな雨の冷たさにも気付かないほど、必死に走っていた。

先ほど英吾の口から直に聞いたことが、頭の中を廻る。

それは恐ろしい事実だった。

英吾の言葉が甦る。

「一大プロジェクトの取り引きで、五条に負けた。あちらの会社は、うちの会社より圧倒的に優位な立場になった。もう、逆らえなくなってしまう・・・」

葵は家の門を押し開け、大きな通りを疾走する。
ひたすらに目指すのは、白馬邸・・・。

探は一人、自室で窓の外を眺めていた。
今日は朝からいやな天気だ。

始終雷が轟き、雨も勢いを増す一方。

昼間でも関係なく、暗雲が太陽の光を遮断している。

一日中薄暗い日は、気分が沈む。

そうなると思つて、不安が強くなる。

探が抱えている最も大きな不安は、もちろん葵に迫る影であつた。

『影』は、『光』無くしては存在できない。

だから今日のような日の照らない日には、影など存在しないと錯覚してしまふのだ。

探はそうであつてほしいと願つた。

しかし、彼のその考えは間違つていた。

日の照らない日は、『影』が存在しないのではない。

『光』が存在しないのである。

そのことに全く気付かないまま、彼は窓を離れ、椅子に腰を下ろして本を開いた。

すぐに彼は気付かされることになる。

運命の歯車が、動き出したことに・・・。

どれだけ時間が経ったかわからないほど葵は走り、とつとつ白馬邸の門の前まで来た。
夢中でインターホンを押す。

白馬邸にチャイムの音が響いた。

バアヤが急いでインターホンにかけ寄り、受話器を取る。

「はい。どちら様でしょうか？」

同時に、門のインターホンに付いているカメラからの映像が画面に映し出された。

そこには、全身ずぶ濡れで、髪からポタポタと雫を滴らせる葵が映っていた。

『葵です！！探さんに会わせて下さい！！』

バアヤは心底驚いた。

なぜ彼女がこんなにずぶ濡れで、しかも取り乱している訳がわからなかった。

「わ、わかりました。すぐに門を開けさせます」

バアヤは側にいた若いメイドに声を掛け、門を開けるよう頼んだ。

そして急いで階段を駆け上がり、探の部屋に行った。

先ほど頼まれたメイドが傘をさして出てきた。

小走りに庭を横切って門まで行く。

鍵を差し込んで門を開けると、すぐさま葵が中に滑り込んだ。

傘を差し出そうとしたメイドの横をすり抜け、そのまま玄関に向かって走って行く。

背後から、戸惑ったメイドの呼び声が聞こえた。

しかし、そんなことに構っていられる状態ではない。

傘など、体が濡れることなどどうだっていい。
早く、早く、彼に会わなければ・・・！

「坊ちやま！！」

ノックもなしにドアが開いたことに、探は驚いた。
息を切らせて、バアヤが中に入ってくる。

「ど、どうしたんで」

探は言い終わらないうちに、彼女に腕を引っ張られた。

「葵さんがいらしてます！今、門を開けさせてますから早く玄関へ
！！」

どうしてそんなに急ぐ必要があるのかがさっぱりわからないまま、
探はぐいぐい引っ張られていった。

階段を降りながら尋ねる。

「一体どうしたんですか？」

バアヤは早口で答える。尚も手の力は緩まない。

「葵さんが、傘もささずにいらしたんです。何だか相当取り乱して
らっしゃって、ただ事ではないようなんです！」

それを聞いた探は、嫌な予感がした。

何か、とてつもなく大きな不安がのしかかってきたような気がした。

階段を降りきると、バアヤはタオルを取りに走り去った。

探はそのまま玄関に向かい、扉を勢いよく開け放った。

前方に、こちらに向かって走ってくる葵の姿が見えた。

葵は目の前に探を見つけた。

玄関にたどり着くと、走っていた勢いを落とさずに探に抱きついた。
何かが切れたように、涙が溢れる。

今まで我慢していた、叫びにも似た泣き声が、止まらなくなった。

探は唾然とした。

声を掛ける間もなく、葵が胸に飛び込んできて、思わず後ろに転びそうになった。

そして彼女はいきなり大声で泣き出した。

探はどうすればいいのかわからず、自分にしがみつくような彼女の背中に手を回すしかなかった。

葵はとても何かしゃべれる状態ではなかった。

しばらくして少し落ち着き、泣き声が嗚咽に変わったとき、探は話しかけた。

「葵さん、一体どうしたんですか？」

葵は涙声で言った。

「私……五条家のご子息と結婚しなければいけなくなりました……」

「……え……？」

探は耳を疑った。

彼女が結婚？自分とは別の人と？

しかも相手は、悦の兄だと？

何も言えずに呆然とする探に、葵は先ほど英吾に聞いたことを必死で伝えようとした。

「お父様の会社を取り引きで五条に負けて……それで……それで、五条が跡取り息子を私と結婚させたいと言ってきて……社員を人質にとられて脅されて……逆らえなくなつて……しまつて……」

葵はそれから言葉が続けられず、探の胸に顔を押しつけた。

次から次に涙がたつたていく。

探は信じられなかった。

いや、信じたくなかった。

そんなことあり得ない。きっと何かの間違いだ。
葵にそう言おうと思ったが、声が出ない。

彼はわかっていたのだ。

今葵が言ったことが本当のことだと。

嫌な予感がしていたが、まさかこんなことになるとは……。

探は目の前が真っ暗になった。

彼は、ただ葵を抱きしめることしかできなかった。

二人の後ろではバアヤが、タオルを片手に立ち尽くしていた。

聞こえるのは、雨の音と、それをかき消すような葵の泣き声だけ……。

第24話 カミサマ

次の日、探は正式に事態を聞いた。

葵との婚約を解消しなければならなくなった理由は、五条家の巧みな策略が原因であった。

詳しい話はこうだ。

かなり前から、宝石業界で一大プロジェクトが始動していた。

それは、ヨーロッパから新しく輸入された最高級のルビーの獲得競争だった。

美術館を持っている若宮グループと五条財閥は、当然その宝石を狙っていた。

今までその二つの家は、業界内では二大勢力として抗争を続ける、ライバル同士だった。

しかし、五条財閥は裏から巧みに手を回し、見事、取り引きに勝利して宝石を獲得したのであった。

完全に勝負がつくまで、英吾を筆頭にした若宮グループは必死で対抗したが、結局事態を覆すことはできなかった。

宝石一つ手に入れられなかったからといって、若宮グループがダメになるということはない。

だが問題は、若宮グループの立場だった。

それまではほぼ同じくらいの力で争っていたが、今回のこの一大プロジェクトに負けたという事実が、若宮グループにとっては大きな痛手となったのだった。

今回のことで、両者の立場がはっきりした。

会社としての力が、完全に五条財閥の下になってしまったのである。

そして、英吾が最も恐れていたことを、五条は要求してきた。

それは、葵と、五条財閥の跡取り息子との結婚。前々から、五条はその『政略結婚』を企んでいた。しかし、葵の白馬家との婚約を知り、それを阻止すべく強硬手段に出たというわけだ。

要求を拒否しようにも、もはや完全に五条に逆らえない立場に立たされた若宮グループには、どうすることもできない。もし逆らえば、何をされるかわからない。

会社に圧力をかけられて仕事を断たれるか、社員を大幅に引き抜かれるか、買収されるか……。

そんなことをされたら、若宮グループは終わりだ。大勢の人間が、路頭に迷うこととなる。

英吾の家族への影響だけでは済まないのである。

選択肢は、たった一つ。

要求を呑むことだけだ。

それが、被害を最小限に抑える唯一の方法……。

後日、絶望の淵に立たされた葵と英吾は、白馬邸に、最後の挨拶をしに来た。

英吾と白馬氏が、暗い面持ちでたたずんでいる。

英吾は頭を下げた。

「本当にすまない。私の力が及ばなかったばかりに……」

白馬氏は、慌てて英吾を止めた。

「何を言っているんだ、英吾。仕方がなかったことではないか。それに、気付かなかった私も悪い」

白馬氏が気付かなかったのも当然である。

電話で英吾に言われた後でさえ、信じられなかったのだから。

五条家と白馬家は、昔から友好的だった。

そんな相手が、もう成立した婚約を無理矢理やめさせるなどという強行をするわけがないと思うのは、当たり前だ。

しかし五条家は一枚上手だった。

自分たちが直接婚約をやめさせるのではなく、『若宮家が自ら婚約を解消しなければならぬ状況』を作り上げたのだ。

若宮家が自らの意志で婚約をやめるわけであるから、五条は手を汚さなくて済む。

白馬家との関係も壊れないというわけだ。

白馬氏は、そんな五条家の知性に圧倒された。

もう、どうしようもない。

華代との最後の約束を、果たせなくなってしまった。

そして何より、深く愛し合っている本人同士の仲を引き裂かなければならない。

英吾と共に絶望に沈みながら、白馬氏はうなだれた。

その頃、やはり葵と探も、事実上『最後の挨拶』を交わしていた。

だがもちろん、本人たちは最後にする気などない。

葵は最初から最後まで、ただひたすらに泣いていた。

顔を手で覆い、震える声で言った。

「私たち・・・これからどうすれば・・・」

探は何も答えられない。彼も、一体どうすればいいかわからなかったからだ。

考えようにも、葵の泣き顔を見たら冷静になれない。前に彼女が泣いたとき、自分は、彼女を包んでやれると思った。そして、彼女はそんな自分に頼って泣いてくれた。だが今は違う。

探には、彼女の涙をどうすることもできない。この事態は、彼がどうあがいても、決して変えられないとわかってきた。

しかし一方で、そんな自分の非力さが許せない。目の前で大切な人が泣いているというのに、自分はうるたえるだけなんて、何て情けないのだろう。

探は、そつと葵の頬に手をやった。

葵が、涙に濡れる顔を上げて、探を見つめる。

彼女への思いが溢れてきて、抑えられなくなった。

探は葵を抱きしめた。

離れたくない。離したくない。離してはいけない。

彼女のやわらかい髪は、ほんのり雨の匂いがするような気がした。すべてが壊れた、あの日……。

雷雨の中を駆け抜けて、自分に逢いにきてくれたあの日の、冷たい雨の香りが、探の心を底なしの絶望に突き落とす。

落ちていく中で聞こえるのは、愛しい人の、泣き声だけ……。

探は葵を抱きしめたまま、上を見上げた。

天井を透かして、どこまでも高い天空を仰ぐ。

探はその天空に向かって、心の中で呼びかけた。

神様……！

彼は今まで、神の存在など信じたことがなかった。

しかし今、頼れるのは神しかない。
このどうしようもない状況の中では、神に祈るしか、彼にはできな
かった。
何かしなければ、耐えられなかった。
探は心の中で叫んだ。

どうか僕に、彼女を離さないだけの、力をください・・・

第25話 初雪

葵は毎日、生きている心地がしなかった。

今後のことを考えると、一切の希望がないように思えてくる。

五条家の息子とは、すぐにも結婚式を挙げることに決まってしまった。

当然、留学の予定も白紙だ。

そのことで、英吾はさんざん交渉した。せめて葵が大学を卒業するまで待つて欲しいと。

しかし、聞き入れてはもらえなかった。

五条としては、若宮グループが力を盛り返してくる前に、この政略結婚を完成させてしまいたいのだ。

だが葵の思うことは、探のことだけだった。

探以外の人と結婚だなんて絶対にいやだ。

一生のうちで愛する人など、彼以外に考えられない。

そんな彼と別れなければならぬなんて……。

葵は信じたかった。

きつと探が、自分を離しはしないだろうと。

今の葵には、彼を信じるしかなかった。

探は考えていた。

今、自分に何が出来るかを。

いや、何か出来るのだろうか。

しかし考えれば考えるほど、彼女の泣き顔が頭から離れない。彼女には、泣いて欲しくない。

しかしこの状況では、自分は彼女の涙を止めることはできない。

彼は考え抜いた。

彼の一番の望みは、葵が泣かないこと……。

若宮家では、葵を慰める日常が続いていた。

英吾は毎日葵に謝り、椿は葵と一緒に泣き、使用人たちは葵の体調と精神面を絶えず心配していた。

葵はひどく沈んでしまつて、一日中笑わなくなった。

食事もろくに摂らずに部屋にこもり、夜は眠れずに泣き明かした。

ノックがして、葵の部屋に椿が入ってきた。

葵はソファに座り、身動きもせずじたたずんでいた。

椿が声をかける。

「姉さま……」

葵は反応しない。

今日はとくに落ち込んでいる。

それもそうであるう。

明日は、五条家の結婚相手と会うことになっているのだ。

彼がどんな男性であれ、葵が救われることはないだろう。

後にも先にも、葵が受け入れられるのは探ただ一人だと、椿にはわかっていて。

ふいに、葵の目から涙がこぼれた。

それは後から後から溢れてきて、頬に筋を残す。

感情のこもっていない声でした。

「椿……。私は明日が怖い……」

椿は言葉が見つからない。

尚も葵はしゃべり続ける。

「明日、私の運命は決まってしまう。それがとてつもなく怖い……」

涙が、雫となって手の甲に落ちた。

「あの人以外の相手なんて絶対に嫌。考えられない」

椿は静かに言った。

「探さんを信じましょう」

葵は表情を崩し、膝に顔をうずめて泣き声を上げた。

次の日……。

予定通りの時間に、五条親子が都内のホテルのレストランにやって来た。

五条氏が満面の作り笑いで挨拶をする。

「どうも、若宮さん。いつもお世話になっております」

彼が、全ての出来事の主犯、諸悪の根元、五条財閥頭首で悦とその

兄の父親、五条勇である。

「こっちが妻の裕子、そしてこっちが息子の周治です」

裕子夫人と周治が会釈する。

裕子夫人は鋭い目が悦とよく似ていて、厳しそうな人だった。

そして、周治はというと……。

妹の悦とは似ても似つかない外見だった。

すらりと背が高く細身で、きちんと髪を整えている。

優秀・有能という言葉をそのまま形にしたような青年だった。

ただ、葵がイメージしていたのとはかなり違う。

跡取り息子というくらいだから、もつと真面目そうな、優等生タイプかと思っていたが、彼は意外と明るい雰囲気、笑顔が爽やかで、なかなか女性にモテそうな顔だった。

しばらく食事をしながら、結婚式のことについて話し合った。だが、全く乗り気ではない英吾や葵は積極的には意見を言わなかった。

そのため、五条家の希望通りにことが決まっていく。

そんな中、葵は周治だけを気にしていた。

彼は本当に愛想が良く、たまに冗談を言ってみんなを笑わせた。

しかし、葵を見るとき表情だけは雰囲気違った。

その目は何か、有無を言わせぬ威圧感がある。

そんな目で見られると、葵は凍りついてしまうほどの恐怖を感じた。

彼の本性は、きっと奥に隠れていると、葵は思った。

その頃、悦は一人、罪悪感と闘っていた。

昔から探が好きだった彼女にとって、ライバルである葵が兄と結婚することは嬉しいに違いなかったが、その反面、葵と探への申し訳なさもあつたのだ。

わかっている。仕方がないことだと。

この企みは、宝石業界での地位を確実なものにしたい一心の父・勇が、随分前から計画していたことで、悦が企んだことでも、悦が父に頼んだことでも何でもないのだ。

悦の恋に起こった偶然だったのだ。

探と葵が出会ったときから、こうなる運命だった。それだけだ。

しかし悦は、そんな二人の悲しい運命を喜んでいる自分を許せるほど、悪になりきれていなかった。

この事態が動き出したことを知ったときから、恋のために悪になると決めた。

しかし実際、そんなことなどできなかつた。
探と、探の大切な人が悲しむと思うと、良心が痛む。
彼女は苦悩し続けた。

いつもより、一段と寒い朝。

探は考え抜いた挙げ句、ある決意を胸に、その朝を迎えた。
すべては、葵の・・・自分の大切な人の、幸せのため・・・。

葵もまた、その朝を迎えた。

鉛色の空を見上げ、昨夜の天気予報を思い出す。

明日は、関東地方全域に、初雪が降るでしょう・・・

葵の携帯が鳴った。

冷たい空気が流れる静かな部屋に、メールの受信を伝える機械的な
メロディが響き渡る。

受信ボックスを開いて、少し驚いた。

探からだった。

彼が改めてメールをしてくるなんて珍しいことだった。

今まで、ちよつとした用事を伝えるために数回やりとりをしただけで、それ以外は直接声が聞ける電話ばかりだった。

また何か用事だろうかと思いつながら文面を開く。

そこには、シンプルな文章が書かれているだけだった。

FROM：白馬探

「無題」

今すぐ会いたい。

図書館のいつもの場所まで来て下さい。

数分後、葵は思い出の詰まった、あの木立にいた。

最近、以前より頻繁に来なくなっていた。

しばらく、婚約解消のショックであり外出も出来なかったため、ここに来るのは久しぶりだ。

小道を足早に抜けて、ベンチのある広場に向かう。

葵は、あの頃を思い出していた。

毎日のようにここで会っていた、まだ、今のようになるなんて夢にも思っていなかった、あの頃。

他愛もないことや、深刻なこと、何でも語り合っていた、幸せだった頃……。

やがて木立が途切れ、ベンチが見えた。

そこには、探がいた。

いつものように、ベンチに座って待ってはいなかった。

真っ直ぐに、葵のほうを向いて立っている。

彼の心の中には、凍てついた決意が、その影を落としていた。

葵と向き合うなり、探は言った。

「別れましょう」

「……え……？」

葵は、目を見開いて探を見つめた。

彼の青い瞳からは、なんの感情も読み取れない。

いくら見つめてもその中には、戸惑いで硬直している自分の顔が映っているだけだった。

精一杯、かすれた声を出す。

「……今……何て……？」

すると探は、葵から目をそらした。

「あなたは、周治さんと結婚される。だから僕とは、別れなければいけません」

考えておいた答えを、淡々と言う。

葵の顔が、見れない……。

葵は、状況が理解できなかった。

彼が言った言葉は、決して聞くことはないであろうと思っていた言葉ばかりだったからだ。

彼の言っていることが、理解できない。

「・・・何言ってるんですか・・・？」

葵のその質問を無視し、探は言った。

「もうこれで最後です。僕らが会うのは、あなたの幸せを、願っています」

それきり黙り込む。

お互いに全く違う心情のまま、沈黙が流れる。

その間、葵は呆然と探を見つめ、探は地面を見つめていた。するとその地面に、何か白い小さなものが舞い降りた。

雪だった。

葵は沈黙の中で、探の言ったことを、一つ一つ理解し、認識していった。

全ての言葉が認識され、彼の言いたいことを完全に理解したとき、葵は叫んでいた。

「どうしてです！？どうしてそんなこと・・・。あなたを信じていたのに！！」

葵は、下を向いたまま何も言わない彼の肩を揺さぶった。

「ねえ・・・どうして・・・」

だんだんと涙声になっていく葵の声を聞いたら、決心が揺らいだ。あらかじめ決めておいた答えを言うことが、できなくなった。

やはり、冷たく突き放すことなどできない。

雪が落ちては溶けていく地面から目を上げ、探が、葵を見据えた。せめて、僕の本当の気持ちを、言っておこう・・・。

「あなたの幸せのためです」

しかし葵は、尚も叫ぶ。

「あなたと離れて幸せになんかなれません！！」

その瞳から、涙がこぼれた。

涙が伝う頬に、雪の結晶が落ちる。

わかっていた。納得してもらえないことくらい。

しかし、納得してもらわなければならぬ。

探はさとするように言った。

「今はそうかもしれません。しかし将来、あなたが平穩に、幸せに過ごすためには、こうするしかないんです」

葵は叫ぶのをやめ、震える、しかし強い声で言い切った。

「愛する人の側にいることこそが、真の幸せです」

その言葉は、探の全身を打ちのめした。

心にまで入り込んできて、彼の凍てついた決意を壊そうとする。痛い。

心が、痛い。

探は何とか言葉を次いだ。

「では周治さんを愛して、幸せになって下さい」

それを聞いた瞬間、葵はまだ大声で探に詰め寄った。

「わかってらっしゃるくせに……！私が愛せる人なんか、一人しかいないってわかってるくせに……ひどい！！」

いつしか雪が、はらはらと絶え間なく舞っていた。

その結晶のいくつもが、二人の体のあちこちを白くしていく。

しかし探には、むき出しの肌に落ちる雪よりも、葵の涙のほろが冷たかった。

「わかっていても、仕方がないんです。あなたの、一生の幸せのためです」

先ほどから同じ言葉を、かたくなに繰り返す。

わかってほしい。

全部、あなたのためなんです。

葵が言った。

「あなたの幸せはどうなるんですか？」

彼女の瞳からは、あの『強さ』が顔を覗かせていた。

「あなたは、愛する人の側にいる幸せをわかっていて、私を遠ざけるんですか？」
そうです。

僕の幸せなんかどうだっていい。

あなたが笑ってくれれば、それでいい。

それだけで、幸せです。

そう言いたかった。

しかし、言えない。

言ったら、優しいあなたは、僕を止めるでしょう。

僕についてくる、と言ってくれるでしょう。

でも僕は、あなたを犠牲にしてまで、あなたを巻き込んでまで、幸せになるなんてできません。

だが葵は、探のそんな思いをくみ取ることができなかった。

また下を向いてしまった探の沈黙を、全く逆にとらえてしまった。
恐る恐る尋ねる。

「あなたはもう、私のことを、好きではないんですか？側にいてほしくないんですか？」

探はその言葉に、はっと顔を上げる。

そんなわけない！

出来ることなら、ずっと側にいてほしい。

生まれて初めて、心から大切に思った人だ。

そんなあなたを、嫌いになるなんてできるはずがない。

しかし、今回もまた、そんなことは言えなかった。

本心とは逆の言葉が、口をついて出てきた。

ほとんど、無意識に。

「はい」

言った瞬間、世界が色を失った。

目の前で絶句する葵の顔さえ、はっきり見えない。その中で、雪の白さだけが、ひときわ鮮やかで……。

一瞬、視界がぼやけたかと思うと、自分を見上げる葵の頬に、ぽたつと水滴が落ちた。

最初は雪が溶けた水かと思った。

しかし探は、それが自分の涙だということに気付いた。

何だか目元が冷たいと感じていたが、雪のせいだと思っていた。しかし、涙だった。彼は泣いていたのだ。

葵は、先ほどの探の言葉に、今までにないほどショックを受けた。五条家との婚約を聞かされたときも、どうにもならないと絶望したときも、彼の存在があったから、今まで耐えられた。しかし、その彼が、もう自分を好きではないと言う。言葉が出ない。

終わった、と思った。

葵の世界が、崩れたのを感じた。

足場を失った自分が、どこまでも墮ちていくのを感じた。

自分の中の何もかもが、動くのをやめたのを感じた。

ただ、涙だけは、止めどなく流れていく。

目の前の彼も、泣いていた。

なぜかはわからない。

何も言っってはくれないからだ。

探さん。

私が嫌いなら

あなたの涙は、何なのですか……？

探は気持ちを奮い立たせた。
本当に、終わりにしなれば。
そう思った彼は、自然と葵の髪に触れていた。

僕の手にはまだ残っている。

一緒に朝を迎えた日、手に絡んだあなたの髪の感触が。
探は、葵の髪を一束すくい上げ、そっと口付けを落とした。
それから顔を上げて、最後に彼女の、漆黒の瞳を見た。
目に焼き付けておこう。
この世で一番美しいものを。

やがて彼はゆっくりと息を吸い、足を一步後ろに出した。
それだけで、葵との距離が一気に開く。
手の上の髪も、するりと滑る。
彼女の泣き顔から、目が離せない。

さようなら・・・

また一步下がる。

手に持った髪が、もうほとんど滑り落ちそうだった。

さようなら・・・

そして、最後の一步・・・

髪が手を離れ、重力に従って、落ちていった。
スローモーションのようだった。

「幸せに、なってください」

さようなら・・・

探はくるりと背を向けると、歩き出した。

葵は、去っていく探を引き止めたかった。

思い切り叫んで、引き止めたかった。

彼に駆け寄って、引き止めたかった。

だが、足が地面に張り付いたように、動けなかった。

彼の背中が、葵をはねのけているようだった。

引き止めたら、乱暴にはじき返されそうだった。

葵は雪の中、振り向きもせず去っていく彼の後ろ姿を、ただ目で

追うことしかできなかった。

彼女はその場に泣き崩れた。

「いやあああああああああ

」

彼女の泣き声が、探に突き刺さる。

さようなら……

世界で一番、大切な人……

第26話 涙

ごめんなさい……

ごめんなさい……

ごめんなさい……

許してくれなくてもいい

そんなこと望んでいない

ただ、どうしようもなく

あなたが好きで……

昨日の別れ際、背中に突き刺さった葵の泣き声が頭の中にこだま
する。

何度も何度も……。

探ははっと目を覚ました。

まだ、葵の悲痛な泣き声が耳に残っているような気がする。
ゆっくりとベッドから体を起こす。

昨日の別れから一夜明けても尚、気分は沈んだままだ。

初雪は昨日のうちに止み、今は地面が少し湿っている程度である。
しかし空は、昨日と同じ鉛色だった。

ノックがして、バアヤが部屋に入ってきた。

「坊ちやま、お客様がおみえです」

「・・・すぐ行きます」

誰かに会って話せる気分ではなかったが、仕方がない。

わざわざ来てくれたのだから。

そんなことを考えながら客間に向かう探を、バアヤは意味ありげに見つめている。

探は気にも留めていないが、彼女はあえて、客が誰なのかを言わなかった。

言ったら会ってくれないだろう。

だが今の探には、その客と話すことが必要だと、バアヤは思っていたのだ。

探は客間のドアを開けた。

心ここにあらず、といった心理状態だったため、客が誰なのかなど考えてもいなかった。

そのため、部屋のソファに座っている女性を見たときの衝撃は、相当なもだった。

その場で、硬直してしまった。

「・・・椿さん・・・」

椿が立ち上がる。

その表情は険しく、怒りさえ感じられた。

椿は、挨拶もなしに言った。

「どうして姉さまに、あんなひどいことを言っただんですか？」

椿にそう聞かれて探は、本当の気持ちを話したかった。

だが、ここで言っただけでは、自分の決心の意味が無くなってしまふ。

「・・・ひどいこととは？」

探はとぼけた。

椿が強い口調で言う。

「姉さまが好きではないってことですよ。そんなこと思ってらっしゃらないんでしょう?」

その通りだ。だが、認められない。

「どうしてそう言い切れるんです?」

探は尚もしらを切る。

椿が、きつい目で自分を見ているのを感じる。

彼女の目は、姉に似ている。

あんな目で見られたら、心を見透かされるような不安に襲われる。

目が合わせられなかった。

「見てればわかります」

椿はあっさりと言いつつ切った。なかなか油断できない相手だ。

探はまずいことを言わないよう、黙り込んだ。

一方の椿は更に詰め寄ってくる。

「今、姉さまがどんな状態かわかりますか!? 昨日帰ってくるなり、立てなくなるくらいに泣いて、食事も摂れない、ろくに眠れない。すべてあなたのせいなんですよ!？」

探は沈黙を守る。

「姉さまの幸せのためだつて言ったそうですけど、あれのどこが幸せと言えるんですか!? あなたと別れて姉さまが幸せになれると、本気で思ってるんですか!？」

椿はそこまで一気に言い切ると、無言のままの探を睨みつけた。

しばらく沈黙が続く。

すると探はいきなり顔を上げ、真っ直ぐ椿を見返した。

自分なりの必死の決意をそんなふうに言われて、黙っていられなくなた。

静かに口を開く。

「ではあなたは、僕がこのまま葵さんを縛り付け続けければ、彼女を幸せにできると言うんですか?」

予想もしていなかった返事に、椿は啞然とした。
そんな椿に、探は繰り返す。

「どうなんですか？彼女を縛り付ければ、彼女は幸せなんですか！？」

彼は段々と感情的になってきた。

先ほどの椿に負けないほど、声を荒げる。

椿はひるんでいた。

「・・・どういうことです？」

深呼吸をし、なんとか落ち着いて探は答えた。

「このまま僕との関係が続けても、彼女は無理矢理結婚させられる。それはもうどうにもならないんです。そんな状況に彼女を縛り付けたまま苦しめたくはない。解放してあげたいんです。泣いてほしくないんです」

それを聞いた椿は、すかさず反論した。

「でも結局姉さまは、あなたと別れて泣いているじゃないですか！？」

探はまた、感情がこみ上げてきた。

「わかっていきます！それを思うと僕もつらい。でも、今だけのことなんです。今つらくとも、新しく歩み出せば、時が癒してくれます。時が経てば段々と、泣かなくてもいい日が来る。だから今別れたんです。彼女が、僕との関係を断ち切って、新たな気持ちで結婚式を迎えられるように」

これが、彼の決意だった。

この状況は、変えられない。神でもない限り。
だが、神などいない。

そのどうしようもない状況で、自分にできること。

それは、彼女の背中を押すこと。

愛しい人が、泣かなくてもいいように立ち直るのを、応援すること
。。。

椿は、涙がにじんできた。

間違っている。彼は間違っている。葵のことを一番に考えているつもりだろうが、結局自分のことしか考えていない。

それを気付かせるべく、涙の混じった、しかしはっきりとした声で言った。

「あなたと姉さまの関係は、時間が経てば消えてなくなるような、そんな薄っぺらなものじゃありません」

探は黙っている。

「そんなのただのワガママです。姉さまのためでも何でもありません」

探は反論しようと口を開きかけたが、それを許さずに椿が続ける。

「あなたは逃げてるだけです！どうしようもないから手を離すなんて、勝手過ぎる！！」

椿は涙が伝っていることにも気付かず、探を責め続けた。

「あなたは勇気がないから、運命に逆らおうとしない。仕方ないから、と自分を正当化して、責任から逃げてるだけじゃないですか！姉さまなんかじゃなくて、あなたが責任から解放されたいだけじゃないですか！！」

探は何も言い返せない。

自分の弱い面を、気付かされた気がした。だが、どこかではわかっていたことだった。

それをごまかすために、もっともらしい理由をつけて逃げただけだと、本当はわかっていた。

また、椿の目が見れなくなった。

椿は涙を拭くと、こう言い放った。

「姉さまを愛した責任を、取って下さい。どうにもならない状況なら、どうにかして下さい」

その言葉を残し、椿は探の脇をすり抜けて出て行った。

走り去るその足音を聞きながら、探は拳を握りしめた。

相変わらず暗い部屋。

そして相変わらず鋭い目の男が、その部屋でパソコンと向き合っている。

すると、クワトロが血相を変えて部屋に飛び込んできた。

切羽詰まった声で言う。

「おやっさん！娘と総監の息子の婚約がナシになったって、ホントですか！？」

男は画面から目を離さずに答えた。

「だれがそんなウソつくかよ」

クワトロが歩み寄る。

「でも、なんで・・・」

男は鼻で笑って答えた。

「宝石業界の陰謀だったらしいぜ。全く笑わせやがる」

クワトロは、彼とは違って完全にうるたえていた。

「でも、どうするんです！？もうほとんど準備はできてるってのに・・・」

すると男は立ち上がり、隣りのパソコンの画面に向き合った。

「安心しろ。別にどんな状況でも今までの準備に支障はねえ。逆に、

絶好の機会が回ってきたぜ」

そう言うと男は、パソコンの画面をクワトロに見せた。

そこには、嚴重に管理されているはずの、ある情報の資料が完全な形で映し出されていた。

それを目で追っていくうちに、クワトロの顔は意地の悪い笑みにな

ってきた。

「へーえなるほど。近々結婚式ですか。まさに、作戦決行に持つてこいだ」

それをきいた男も、口元に冷酷な笑みを浮かべる。

「だろっ？どうやら神様つてのはいるみたいだぜ」

クワトロと男は、並んで煙草をふかし始めた。

クワトロが先に口を開く。

「しかし運命つてのは残酷ですねえ。葵と総監の息子、両思いだったんでしょ？まさに叶わぬ恋つてヤツですかね」

『恋』。

その単語を聞いて、男の脳裏には、ある女性の顔が浮かんだ。煙草を口にくわえようとして、ふと手を止める。

白い煙が立ち昇るそれを見つめていると、つい最近の記憶が甦ってきた。

そういえばあのときあいつに、煙草止められたな・・・

彼の頭では、日光がさんと差し込む部屋での、ある些細な会話が再生されていた。

彼が煙草に火を点けると、その女性が隣りで文句を言った。

『煙草はやめて』

『フン・・・こんな仕事してたら、吸わなきゃやってらんねーんだよ』

『でもパパは吸ってない』

『ボスと一緒にするな。あの人は例外だ』

『・・・屁理屈』

『悪かったな』

『とにかく、これからは私の部屋で吸うのはやめて。なかなか臭いが消えないんだから』

『わかったよ』

「おやっさん！」

クワトロのその声で、男は我に返った。

「どうしたんです？煙草見てばーっとして」

「・・・何でもない」

男はそっけなく言うと、持ったままだった煙草をくわえた。

クワトロが、面白そうに聞いてくる。

「おやっさんがそんな顔するなんて珍しいですね。俺が恋なんて言ったから、昔泣かした女のことでも思い出してたんじゃないですか？」

本人は冗談のつもりで言っているが、なかなか鋭かった。

男は「さあな」と言って軽く笑い、白い煙を吐き出した。

彼は内心、クワトロの鋭さに焦った。

仕事中に女のことを考えた自分に、心の中で苦笑する。

クワトロ、残念ながら、少々違うところがある。思い出してたのは泣かした『昔の』女じゃない。それにあいつは、涙なんか見せない、クソ生意気で意地の強い女だよ・・・

椿は白馬邸からの帰り道を、とぼとぼと歩いていった。

探には悪いことをしてしまった。

自分の思いを一方的に怒鳴って出てきてしまったのだから。

でも、あんな理由で姉を悲しませる彼が許せなかった。

悔しくて悔しくて、不覚にも泣いてしまった。

ふうつと溜め息をつく。

これから家に帰って姉を見るのが辛かった。

誰よりも大好きで、誰よりも大切な姉。

今までさんざん苦勞をかけた姉。

さんざん世話になった姉。

だからこそ、誰よりも幸せになってほしい。

しかし、探と自分とは、姉の幸せを願う気持ちは同じでも、その

『幸せ』の考え方が違った。

今日のことを、姉に話すべきか迷った。

少なくとも探がまだ姉を好きだとわかったのはよかったが、探が姉と周治の結婚を心から望んでいるということは、今の姉には辛すぎる事実だ。

かといって探が姉を好きだということだけを言うのも難しい。

前後のつながりがないと、余計に混乱させるだけだ。

結局、椿は何も言わないことにした。

お互いを思う気持ちがあるのに、葵だけそれを知らないまま過ごすことになるなんて……。

椿はまた悔しくて、そして虚しくて、涙が出た。

顔を上げ、ほんのり紅く染まった夕空を見上げる。

涙が、顔の横を流れていく。

しばらく椿は、その空の紅を見上げながら歩いていった。

その頃、若宮邸では。

五条家の面々が、間近に迫った結婚式の打ち合わせのために来訪していた。

もちろん勇や、そして周治もだ。

だが葵は会いたくないと言って、一人で部屋にこもっていた。ベッドに腰掛け、ぼーっとする。

誰かと話していないときは、必ず思い出してしまつ。

昨日の探の言葉を。

自分を見る、感情のない冷たい目を。

自分の存在を遮断するような、物言わぬ背中を。

もう自分は、彼の世界に踏み込むことはできない。

彼の心に触れることもできない。

彼はもう、自分を好きではないと断言したのだから。

ノックがして、扉が開いた。

無造作に顔を上げてそちらを見やると、周治が立っていた。

その瞬間、葵は全身が凍りついた。

自分をとらえる彼の目が、恐怖心をかき立てる。

彼はドアを閉めると、葵のほうへ歩み寄ってきた。

とびきりの作り笑いを浮かべて言う。

「葵さん、婚約者の僕に会いたくないなんてどういうことですか？」

葵は何とか立ち上がって、声を絞り出した。

「あなたと結婚したくなんかないからです。出て行って下さい」

だが尚も周治は近づいてくる。

葵は、半分叫ぶように言った。

「お願い！出て行って！！」

しかし、周治はとうとう葵のところまで来てしまった。

葵の精一杯の強がりには、何歳も年上の周治の余裕には勝てなかったのだ。

周治は葵の腕を掴んだ。

葵は震えながら言った。

「あなたは嫌じゃないんですか？好きでもない私と結婚だなんて……」

周治は、冷ややかに笑いながら答えた。

「嫌なわけではないじゃないですか」

次の瞬間、彼は葵をベッドに押し倒した。

小さく悲鳴を上げた彼女の口を、周治は手でふさいだ。

葵は恐怖に目を見開いた。

その状態で、周治は言った。

「どうして嫌じゃないか教えてあげましょうか。僕にとって、結婚に『好き』という条件は必要ないからですよ」

葵は、彼の笑みにぞっとした。

全身が、ガクガクと震える。

ふりほどこうにも、周治にしっかりと体を押さえられて、身動きすらできない。

「あなたと結婚すれば僕は、将来的に宝石業界で不動の地位と、巨万の富を手に入れられる。だから、あなたとの結婚は嫌どころか、飛び上がるほど嬉しくてしょうがないんですよ」

声を出したくても、自分の口をふさいでいる手はびくともしない。葵を押さえつける力が強くなる。

「あなたには悪いですが、僕のものになってもらいます」

葵はぎゅっと目をつぶった。
いや……

絶対にいや・・・

探さん・・・

探さん・・・

探さん・・・！！

だが数秒後、周治の力が緩み、葵は解放された。

突然のことに思わず葵が目を開けたときには、周治はもうベッドから立ち上がっていた。

啞然とする葵をちらりと見下ろすと、周治は葵の腕を掴んで引っ張り起こした。

周治は、呆然と立ちすくむ葵に背を向けた。

「冗談ですよ」

その一言を最後に、彼はツカツカと部屋を出て行った。

彼が出て行った後も、葵はしばらく立ちつくしていたが、やがてガクンとその場にくずおれた。

全身の震えが止まらない。

自分でも驚くほどに、歯がガチガチと鳴っている。

恐ろしかった。

どれだけ抵抗しても、簡単に組み伏せられてしまう。

女の力など、男に比べたらほとんどないに等しいということ、思い知らされた。

葵は自分の体を強く抱いた。

涙がぼろぼろと落ちる。

彼女はひたすら、探を思った。

彼以外の男に触れられたという嫌悪感が、まだ全身に残っている。こんなときに、抱きしめてほしかった。

彼のぬくもりが、たまらなく恋しかった。

葵は声を出さずに泣いた。

やがて五条家の一団は帰って行き、若宮邸では夕食時になっていた。

その頃に、やっと椿は帰り着いた。

泣きながらとぼとぼ歩いてきたせいで、かなり遅くなってしまった。何とか涙を止め、部屋に入る。

食卓にはもう料理が並び、英吾と葵が席に着いている。

メイドたちが心配そうに見守る中、安藤と英吾が葵に話しかけている。

「お嬢様、今日は少しでも食べられそうですか？」

「葵、食べないと本当に体がもたないぞ」

だが、うつむいた葵は放心状態で、食器を持ったための手も膝に乗ったままだ。

椿はコートを脱ぎながら、葵の隣りの席に腰掛けた。

姉の顔を覗き込んで、声をかける。

「姉さま・・・」

するとそのとき、葵がふっと目を閉じた。

そして次の瞬間、葵の体はバランスを崩し、彼女の茶色い髪が宙を舞った。

椅子が、ガターンというすさまじい音をたてて倒れた。

そしてその椅子の脇には、葵が力無く横たわっている。

「姉さまっ」

「！！」

第26話 涙（後書き）

読んで下さりありがとうございました。

周治さんの行動に気分を害された方、申し訳ありません。

今回の重要ポイント。

『何故かおやつさんが恋愛モード（うそーん。）』

『その相手の女性は、ボスの娘』

この女性の登場は、もうちょっと先になります。重要人物です。覚えておいて頂けると、今後わかりやすいかと思えます。

第27話 幕開け

神様・・・

私はこれから

どうやって生きていけばいいんですか・・・？

もう何も見えない

何も聞こえない

何も感じない

助けて下さい・・・

カミサマ・・・

葵は意識が遠のき、椅子から落ちた。

椅子が倒れる派手な音と、椿の呼び声が聞こえたのを最後に、視界は真っ暗になった。

「姉さまっ！！」
椿が叫ぶ。

床には、ぐったりと横たわる姉と、その茶色い髪が散らばっている。すぐに英吾が、机の反対側から駆け寄って来て、葵を抱き上げた。彼女の頭が、力無く後ろに倒れる。

「葵！葵！！」

だが返事はなく、顔には血の気がなかった。

メイドたちもひどく混乱していた。

安藤も、葵に大声で呼びかけている。

「綾！早く救急車を！！」

英吾が、うろたえる一同に的確に指示を出していく。

やがて、部屋にいた人々はあちこちに散らばっていった。

騒ぎの中で、椿は一人立ちすくんでいた。

葵は近くの病院に運ばれた。

倒れた一番の原因は、極度のストレスによる不眠と栄養不足だった。彼女の最近の生活と心理状態を見ていれば、誰でも納得できる。

ろくに食事もしないで、気分がどん底まで落ちていたのだから、体がついていけなかったのだ。

葵はしばらく入院することになった。

ベッドで安静にし、規則正しい食事をし、点滴をうちながら、日々を静かに過ごしていった。

ある日の昼、久しぶりに温かい日差しが入る日だった。

お見舞いで大量に頂いた花が、病室中に良い香りを放っている。

そんな中、部屋には昼食を摂る葵と、それに付き添う椿の姿があった。

葵が、スープをゆつくりと味わう。

続いて、椿が丁寧に皮を剥いた林檎を一口かじる。

「おいしい」

そう言って、葵は妹に微笑んだ。

最近は、久しぶりに食べ物がおいしいと感じられるようになった。ついこの間までは、物の味なんかわかる状態ではなかったが、数日間の治療と安定した睡眠により、段々と回復してきた。気分も落ち着いてきて、前ほど泣くこともなくなった。五条家の面々が心配していたが、何とか結婚式は予定通り行えそうである。

近づいてくる式を前に、葵の心は整理がきつ々しかった。しかし、椿の次の言葉で、葵の心にまた嵐が来ることになる。切った林檎を半分ほど食べた姉の様子を見て、椿は深刻な顔で言った。

「姉さま、探さんにお見舞いに来て頂いたらどうでしょう？」
すると、それまで穏やかだった葵の顔が、一瞬にして凍りついた。

「……だめよ……。彼は私なんかには会いたくもないでしょうから」

葵は必死で笑顔を作って答えたが、その笑顔は引きつっていて、声も震えていた。

そんな姉の顔を見て、椿は話す決心をした。

「姉さま。探さんは、まだ姉さまのことが好きなんですよ。誰よりも、姉さまのことを思っただけなんです」

「やめて!!」

葵はいきなり叫ぶと、頭を抱えて突っ伏した。

椿は、そんな姉の反応に啞然とした。

このことを聞いて、喜ぶとまではいかなかった。多少は救われるだろうと思っていたが、葵はそんな椿の予想をはるかに裏切る反応を示したのだ。

「……姉さま……?」

葵は震えていた。

何が何だかわからなくて、椿は言葉が出なかった。

葵が、震える声で話し出す。

「そんなこと言わないで。じゃあどうしてあの人は私を離れたの？」

どうして側にいてくれないの!？」

「それは、探さんなりに姉さまの幸せを願って……」

「聞きたくない!!！」

葵は涙声になっていた。

ぎゅっと目をつぶり、全身を震わせている。

「もう聞きたくないの……。もう『幸せ』って言葉が信じられない。私はあの人がいてくれれば幸せなのに、あの人は私から去っていった。そんな人が、どうして私の幸せを願っているって言えるの!？」

葵の目に、涙が光る。

久しぶりに、姉が泣いているところを見た。

久しぶりに、こんなに取り乱しているところを見た。

「もうわからない。信じられない。誰も信じられない。信じたくないの……。!！」

しばらく葵は、静かに泣いていた。

椿はふいに立ち上がると、空になった皿を手に取った。

「……。片付けてきます」

泣いている姉を残し、ふらふらと病室を出る。

そのまま廊下をさまよい、とりあえず皿を片付けるために流しに向かった。

椿はしばらく、水が皿を満たし、溢れて流れていくのを、安心して見つめていた。

だがやがて表情を引き締め、水を止めた。

彼女はまた廊下を歩いていった。

しかし今回は、さっきよりしつかりとした足取りで、目的地もはっきりしていた。

やがて目的の場所に辿り着いた。

そこにあつたもの。

それは電話だった。

椿は受話器の向こうの相手に向かって言った。
「探さん。姉さまが倒れて、入院しています」

椿から連絡を受けた探は、あまりの衝撃で呆然としていた。

椿の話によると、葵は探とのことが原因で衰弱し、数日前から入院しているとのことだった。

まさか、彼女がそこまで心を病むとは予想していなかった。

自分のせいだ。

すべてわかっている。

自分が彼女を離れたから、彼女は独りぼっちになってしまった。

時が経てば傷も癒える。

そう思っていたが、『自分たちの関係は、時がなんとかできるような薄っぺらなものではない』と言った椿の言葉が、まだ探の心に深く刻み込まれていた。

やはり、一度会うべきなのだろうか。

一度会って、自分の気持ちを全て話して、わかってもらうべきなのだろうか。

椿が電話で、葵は探のせいで人を信じられなくなってしまったと言っていた。

彼女の幸せを思っていた行動が、逆に彼女に、一生の傷を残してしまった。

ならば自分自身で、その傷を治してやらなければならない。

『探さんがつけた傷は、探さんにしか治せません』

受話器越しに言った椿の言葉が、今も胸に突き刺さったままうずいている。

だが、探は怖かった。

今彼女に会ったら、気持ちが溢れて止まらなくなってしまうそうだった。

彼女を奪って、連れ去りたくなってしまうそうだった。

まだ、それぐらい好きなのだ。葵が。

様々な思い出が甦る。

初めて会ったときに吸い込まれた瞳。

素直に笑った顔。

ほのかに頬を染めた顔。

木立で、時間を忘れて語り合ったこと。

一緒にワトソンを追いかけたこと。

パーティーから連れ出したこと。

一緒に踊ったこと。

初めて唇を重ねた日。

夢を語り合った日。

どれを思い出しても必ずそこにあるもの。

笑顔、笑顔、笑顔……。

あの笑顔を壊したくない。

ずっと側で見守っていたい。

どうにもできない状況でも、どうにかする。

そう椿に教えられた。

何度も何度も、その通りにしようと思った。

しかし、できなかった。

自分が、どうにかできる自信がなかったからだ。

彼は、ただ怖かったのだ。

恐怖心に負け、最後の一步が踏み出せなかった。

結局決心できないまま日は過ぎ、葵が退院したと連絡が入った。

とうとう間近に迫った、葵と周治との結婚式。

あの一件以来、周治とは一度も本心で話していない。

入院しているときも見舞いに来てくれたり、退院して家に帰ってからも、結婚式の用事で会う機会も多かった。

彼は、人前では相変わらずいい人を演じてはいる。

葵は前のようにあからさまに警戒はしなかった。

どうせもつすぐ夫婦だ。

そうすれば何もかも終わる。

はっきり言って、葵はもうどうでもよくなっていた。

どうしようもない運命なら、それに従うまでだ。

その日、葵は一日中ベッドの上にいた。

別にその日だけではなく、退院してからはしばらくは安静に、ということだったので、いつものことだった。

あの初雪の日から、もう半月ほど経った。

探とは一度も会っていない。

その間、何度も雪が降った。

軽くちらつくだけの日もあれば、薄く積もる日もある。

そんな雪を、葵は部屋の窓から眺めて過ごした。

ベッドから半身を起こしてカーディガンを羽織り、葵は本を読んでいた。

ノックがして、安藤が声をかけてきた。

「葵お嬢様、お客様がおみえです。お会いになられますか？」

葵は体調が悪いわけではなかったので、会えると返事をした。

「わかりました。客間で待っていていらっしゃるので、お連れします」
安藤は去っていった。

直接部屋に入れても良いと安藤が判断したのだから、きっと親しい人だろう。

高校の友達か、親戚か……。

そう葵が考えていると、再びノックがしてドアが開いた。

最初は、スーツらしき服の袖の部分だけが見えた。

ドアの隙間が大きくなり、そこに立つ人物の全体像が見えてくるにつれて、葵の顔は蒼白になっていった。

まさか……？

やがてドアが、最後のひと軋みをして完全に開いた。

そこにたたずむ男性が、真っ直ぐ葵を見据える。

葵は目を見開いた。

そんな……。

白馬探が、立っていた。

葵が、自分を見て驚きの表情を浮かべている。

動きが完全に停止し、手に持った本が、今にもずり落ちそうだ。それも当然だ。

今さら会いに来るなんて、ありえないことなのだから。

「お久しぶりです」

探はそう挨拶すると、部屋に入った。

ベッド脇の椅子に腰を下ろす。

葵は、まだ呆然と自分を見つめている。

「・・・な・・・んで・・・？」

戸惑いと驚きで乾ききった声が、彼女の口から漏れる。

探は、できるだけ心を落ち着かせて言った。

「椿さんから、あなたが倒れたと聞いたので・・・お見舞いに来ました」

まだ葵は、呆然としている。

相変わらず透き通った漆黒の瞳を見開き、もともと白かった顔の肌をさらに真っ白にしている彼女を見て、探は心が痛んだ。

彼女はやつれていた。

ただでさえ細かった体は、また更に華奢になってしまっていた。顔も血色が悪く、目の下には隈ができています。

それを縁取る波のような髪が、よりいっそう彼女をはかなげに見せている。

しばらく、お互い何も言わなかった。

その間に安藤は退室し、部屋には静寂が満ちていた。

そんな中、最初に口を開いたのは探のほうだった。

「体調は・・・大丈夫なんですか？」

葵はようやく冷静になったが、まだ困惑の残る顔で答えた。

「はい。もうしばらく安静にしていればいいそうです」

「そうですか・・・良かった」

葵はそれきり、探から目を合わせようとしない。

また、沈黙が訪れる。

その間、探は葵の横顔を見つめ続けた。

雪のように白い肌、鮮やかな唇・・・。

やはり、きれいだ。

何も変わっていない。

そう思ったとき、まだ自分が彼女を好きだという事実を直に突きつ

けられたようで、探は切なくなつた。

彼女に恋をして、初めて『切ない』なんて感情を持った。なぜだかわからないが、目頭が熱くなつた。

彼女への思いが溢れるまで、もう自分の心には余裕がなくなつていた。

そんなとき、葵が顔をこちらに向けた。

その唇が、ゆつくりと動く。

「まだ私のことが好きだつて、本当ですか？」

その言葉を聞いたとき、探は涙が溢れそうになつた。

自分はなんてことをしてしまったのだろう。

なぜ彼女を離してしまったのだろう。

探は震える手で、葵の頬に触れた。

彼は、ただ謝る言葉しか出てこなかつた。

「すみません・・・ごめんなさい・・・」

葵の細い腕が持ち上がり、探の手に重なつた。

「ごめんなさい・・・」

それ以上何も話せなくなり、探は涙をこらえて帰り支度を始めた。すると、葵が見送りをしてくれると言つた。

探は葵の体を気遣つて遠慮したが、葵は大丈夫だと言つてついてきた。

部屋にあつたシヨールをしつかり体に巻き付け、葵は探の前を歩いていく。

彼女の凜とした後ろ姿を見つめながら、探は考えた。

一体どうすればいいんだ。

もう、彼女のためだなんて言っていられない。

自分が狂いそうだ。

もう、止められない。

でも、この状況ではどうしようもない。

神なんて、いないのだ。

葵さん、ごめんなさい。

僕は、弱い人間です……。

決心がつかないうちに、玄関に着いてしまった。

寒空の下、二人は向き合う。

最後にこうして向き合ったあの日のように、小雪がちらついていた。自分に失望しきった探は、まだ、間違いだとわかりきった言い訳にしがみつく。

「悦のお兄さんは、すっかりした方です。ちゃんと葵さんを幸せにしてくれるはずですよ。お元気で。あなたの幸せを願っています」すると、葵は悲しげに笑って答えた。

「そんな言葉、なんの慰みにもなりません。あなたがそんなこと、これっぽっちも思ってたっしやらないってわかりますから」

葵は探に軽く会釈をし、背を向けて家の中に戻ろうと歩いていった。

探の全身を、何か熱いものが貫いた。

探は、今の葵の言葉でわかった。

神は、いないのではない。

自分が、神に嫌われているだけだと。

そう悟った瞬間、彼は駆けた。

そして葵の腕をつかみ、振り返った彼女を強引に抱きしめた。

彼はやっと気付いた。

愛とは与えるだけでなく、時として奪うもの。
神様。

あなたに嫌われているのなら、僕は反逆者になります。

大切な人のために、喜んで罪人となります……。

葵はいきなりすることに、何が起きたかわからなかった。

全身に探のぬくもりを感じ、やっと状況を理解した。
すぐに我に返って言う。

「な・・・探さん・・・！だめです！！誰かに見られたら・・・」
どこに五条家の人間がいるかわからない。

葵は探を引き離そうと、彼の腕に手をかけた。

しかし探の次の言葉で、彼女のその動きは完全に停止した。

「葵さん。僕と一緒に逃げましょう」

葵は目を見開いた。

探の一言が、信じられない。

一緒に逃げる？

まさか。

きつと自分の聞き間違いだ。

探がそんなことを言うはずがない。

かたくなに自分を突き放し続けた彼が、そんなこと・・・

だが、探の腕の力が強くなったとき、葵は聞き間違いなんかではな

いとわかった。

苦しいくらいに強く抱く、彼。

葵は涙が溢れた。

探の背中に手を回し、ぎゅっと握り返す。

葵は、強く言った。

「はい」

待っていた。

自暴自棄になりながらも、心のどこかでは待っていた。

探がそう言ってくれるのを。

探が自分をさらってくれるのを。

ずっと、待っていた。

葵の返事を聞き、誓った。

もう二度と、彼女を離さない。

時が癒してくれるなんて言い訳はしない。

将来、彼女が泣かなくなればいいだなんて思わない。

彼女は、『今』、泣いているのだ。

葵さん。一度でもあなたを離れた僕を、許して下さい……。

二人はいつまでもいつまでも抱き合っていた。

小雪が舞う。

一度失った愛をとりもどした二人を、祝福しているのか、もしくはあざ笑っているのか……。

それは誰にもわからない。

だが、ひとつだけわかっていること

それは

これが、全ての幕開けでしかないということ。

小雪は、それを彩る妖しげなBGM。

宿命的な愛の物語を、そして、これから起こる波乱の始まりを予感させるファンファーレが鳴り響く。

すでに幕は上がっている。

これが、悲劇となるか、はたまた喜劇となるかは、演じる役者次第。

だが、舞台脇で出番を待つ役者たちの多くは

悲劇の結末を

望んでいる……

第28話 明日

二人は逃げることを決意した。

決行は、葵と周治の結婚式の日だ。

探が葵を会場から連れ出し、そのまま逃げる。

会場にいる全員に、自分たちの仲を知らしめてやるのだ。

騒ぎが起きてスキャンダルになれば、葵と周治の結婚はなしになるかもしれない。

葵と探は、綿密に計画を立てた。

大勢の大人たちを出し抜けるような、そして、大勢の、自分たちの親しい人たちに迷惑をかける計画を。

とうとうやってきた、結婚式前日。

明日に迫った運命の日を、葵と探は不安の中で過ごした。

二人は、あの木立にいた。

今にも不安で押しつぶされそうになる心を、相手に気付かれないよう必死になって隠していた。

それでも、今日は朝からお互いに口数が少ない。

葵が、無理に明るく言った。

「逃げてから、どうします?」

探も笑って答える。

「そうですね。どこか遠いところで、探偵事務所でも開きますか?」

「じゃあ私は助手ですね」

そう言って笑った葵の顔を、探は見つめた。

二人とも、十分にわかっているのだ。

高校生が二人だけで、逃げられるわけなんかないということ。

連れ出せても、きつとすぐに捕まるに決まっている。

それを覚悟で逃げるのだ。

自分の助手だなんて明るく言っているが、内心ボロボロなのがわかる。

前に聞かせてくれた、立派な夢を捨ててまで、葵は自分についてきてくれるのだ。

英吾や椿、安藤や綾や多江さんをはじめとする家の者全員に迷惑をかけ、裏切つてまで、自分というたった一人についてきてくれるのだ。

みんなに見せてやるのだ。『他のすべてを裏切れる愛』を。

葵は、探に心を見透かされているとわかって、彼に背を向けた。上を見上げると、一羽の鷹が空中を旋回している。

ワトソンだった。

久しぶりに見た彼は、葵たちの、不安と罪悪感でがんじがらめになった心とは正反対に、自由に空を舞っていた。

そのときふいに、首筋に誰かのぬくもりが伝わってきた。

探が、後ろから葵の肩を抱いている。

彼の茶色い髪が、視界の隅に入った。

その髪が、葵の頬をくすぐる。

葵は、自分の体を包む探の腕に、手を重ねた。

明日が、たまらなく怖い。

明日が来たら、自分たちの周りが全て変わってしまうようで怖い。

だが、その中でも変わらないものがあるから、明日を迎える勇気が持てる。

明日が来ても変わらないもの。

それは、探と自分の思い……。

それを象徴するかのように、全ての鍵を握る碧い宝石が、葵の胸で鋭く光った。

いつもと違って珍しく、日の入る部屋にいる、例の男とクワトロ、それにトレスや他数人の男たち。

彼らは明日を思い、にわかに興奮していた。

「いよいよ明日ですね、おやっさん」

クワトロが、興奮と少々不安が入り交じった声で話しかける。

その声の響きを敏感に感じ取って、男が答える。

「不安そうにするんじゃないやねえよ、クワトロ。お前、責任者だろうが。しっかりしろ」

彼の鋭さに圧倒され、クワトロは完全に不安顔になってしまった。

「でも、おやっさん……。やっぱり心配ですよ。いくらボスがある地位の人間だからって、本当にサツに見つかからない保証はないじゃないですか。準備が完璧でも、誰だって前日には気分が落ちますって。何が起こるか分からないんですから……。」「

すると男は、小さく笑って煙草をくわえた。
「まあ、誰でもそうなるのは仕方ねえ。俺だつて若い頃はそうだったよ。だが安心しろ。ボスは、ヘマだけはしねえ。俺はあの人を信じて今までやってきたんだ」

そのとき、唐突にドアが開いた。

そこに立つ人物に向かって、部屋の中の全員が表情を引き締める。

「おはようございます、ボスー!!」

そして、みんなを代表して男が声をかける。

「おはようございます、ボス。とうとうここまで来ましたね」

ボスと呼ばれた男は部屋に入った。

同時に、男たちはそれぞれ座る。

ボスは、男の隣りの専用のソファに腰を下ろした。

「私のことをえらく信頼してくれているようだな、ウノ」

そう、隣りの男に言うと、自分も煙草を取り出す。

「ええ。もちろんですよ。あんたを尊敬してます」

そう言うと、ウノと呼ばれた例の男は、ボスの煙草にライターをかざして火を点けた。

ボスは煙を吐き出すと、ニヤリと笑ってウノに言った。

「お前、落ち着いてるな。さすがは年長者だ。みんなに『おやつさん』と呼ばれて頼られてるのは、うそじゃないようだな」

するとウノも、妖しげに笑い返す。

「そういうボスこそ、余裕じゃないですか」

それからしばらく、一同は黙って時を過ごした。

再び、周りを緊張させる深い声で言葉を発したのはボスだった。

「ウノ。明日のこと、ぬかりはないか？」

ウノが答える。

「ええ。あんたに言われた準備は、全て完璧ですよ。必ずあの宝石を手に入れてみせます」

するとボスは、高らかな笑い声を上げ、ふところから二枚の写真を取り出した。

そのうちの一枚に写っているのは、両親に挟まれて幸せそうな笑みを浮かべる、華代だった。

そしてもう一枚には、胸に碧い宝石を下げた、葵。

「なあ、華代。お前が命を懸けて守った宝石と娘、明日やっつと、拝めそうだよ……」

みんながそれぞれの思いを抱いて、明日を待つ。

そこにあるのは、全てを動かす、あのブルーダイヤ。

もう物語は進んでいる。

明日、第一幕が終わり、第二幕を迎える。
物語の結末が悲劇か喜劇かは、まだまだわからない。

そしてまた一人、喜劇を望む役者が、舞台脇に現れた。
都会の明かりを見下ろして飛ぶ、幻影。

闇の中に神出鬼没に浮かび上がる、白い影。
マントが風にはためく。

シルクハットの縁を軽く押さえ、闇夜に目を光らせる。
彼もまた、喜劇の鍵を握る、大御所役者。

その名は、怪盗キッド……

第28話 明日（後書き）

読んで下さりありがとうございました。

今回の重要ポイント。

『おやっさんのコードネームは「ウノ」』

『ボスは煙草吸わないはずが、今回吸い始めている』

煙草の件は最後の最後（ほんとに完結直前の第60話よりちょっと前くらい？）に結構重要になります。

第29話 悲劇の結婚式

朝。典型的な冬の天気だった。

空気は冷たく、空は相変わらず鉛色。

その空が、今日これから起こることを象徴していると感じるのは、組織の者たちだけだった。

一晩中眠れず、泣きたいのを我慢して一晩中体を震わせていた葵は、ベッドから体を起こして朝日が昇るのをじっと見つめていた。

同じように眠れなかった探も、朝日を見た。

しかし彼はすぐに目をそらし、カーテンを閉ざした。

今日のこの日など、来ないほうがいい。

しかし、どんな日にも朝は来る。

どんな日でも、朝が来ると始まってしまふのだ。

組織も、同じ朝を迎えていた。

数人の男、それに少々の女たちが、倉庫のような場所で黙々と準備をしている。

黒い手袋をはめ、ブーツの紐を固く結ぶ。

ニット帽や、思い思いに用意した帽子をかぶり、上着の前をしつかりと閉める。

そんな緊迫した空気に耐えられず、クワトロはウノに話しかけた。

何か話していないと、胃が縮んでしまいそうだったのだ。

彼は、必死で思いついたくだらない話題を出した。

「おやつさん、そういえば昨日見て驚いたんすけど、ボスも煙草吸い始めたんすか？娘さんが嫌がるのか言ってたと思ったんすけど・

・
」

ウノはクワトロのほうを向かずには答えた。

「あの人は昔から吸ってたぜ？ここ何年かは、本業のほうで出世するために禁煙してたとか言ってたな。だがまあ最近はよく吸ってるが」

「へ、へえ……。何ででしょうね？」

「景気づけのためじゃねえか？8年耐えて、やっと宝石が見つかったんだ。吸いたくもなるだろ」

そこでクワトロは返す返事が思いつかなかったので、気を紛らわすための雑談は終了した。

彼はまた、極度の緊張に襲われ始めた。

若宮邸が、騒がしくなってきた。

そろそろ出掛ける時間なのだ。

葵は一人、自室にたたずんでいた。

何か決心したように深呼吸し、碧い宝石のネックレスをつける。

それを手に取り、しばらく母を思った。

亡くなる前に、母が願ったことを貫く。

そう決心し、葵はしっかりと前を向いた。

部屋を出ようとしたとき、机の上のあるものに目が留まった。

それは、探のペンだった。

それが部屋に忘れてあるのに気付いて届けようとした日に、葵は父から五条との結婚を聞かされて、雨の中、家を飛び出した。あの日から、返しそびれていたのだ。

葵はそれをしばらく見つめてから、ポケットに入れた。

お守り代わりに、今日一日持つていようと思ったのだ。

葵は部屋を出て、父や椿たちと車に乗り込み、結婚式場に向かった。

一方の探も、父と共に支度をしていた。

昔から親しい五条側の招待客として出席するためだ。

最近無口になった息子に、白馬氏が声をかける。

「探、本当に出席するのか？葵さんたちを見るのは辛いんじゃないか」

だが探は、強く言い切った。

「大丈夫です。ちゃんと見届けてあげたいんです」

「・・・そうか」

二人もまた、式場に向かって出発した。

式場の控え室では、葵が純白のウェディングドレスに身を包んでいた。

しとやかに結び上げられた髪には上品なティアラが乗り、そこからは優雅なベールが垂れている。

普段はほとんど縁がないメイクがしっかりと施され、葵本人はいささか窮屈そうである。

そしてもちろん、あの碧い宝石のネックレスがいつも通り胸に下が

っていた。

そこへ、ノックとともに英吾と安藤が入ってきた。

葵を一目見るなり、二人とも言葉を失った。

安藤はあまりの美しさに、そして英吾は、亡き妻・華代にそっくりなのに驚いたためだ。

しばらくして、安藤が言った。

その声は涙声だった。

「葵お嬢様……。今日のそのお姿が、探さまのためのものだったらどんなによかったことか……。それを見るために、ここまでお育てしたというのに」

そこまで言って安藤は言葉に詰まり、目元を袖で拭った。

葵は、気が重くなった。

今日の計画のことは、安藤や英吾、椿にさえも秘密にしてある。

これから、自分を大切に思ってくれているこの人たちを裏切るのだと思うと、葵は目に涙が盛り上がった。

英吾は、葵に華代の姿を重ね合わせていた。

遙か昔、パーティで初めて出会った華代。

彼女は、パーティ会場のカウンターに座っていた。

英吾がその姿をとらえたとき、ちょうど彼女も振り返って英吾を見た。

目が離せなくなつた英吾に、華代はふつと微笑んだ。

その微笑みは、まさに『運命的』の一言だった。

彼女の笑みは、すべてを悟っているかのようだった。

これから自分たちが惹かれ合うことも、夫婦になることも、家庭を持つことも、すべて。

そして、結婚した。

華代がウェディングドレスを着た姿を初めて見たときと、今の葵の姿はそっくりだった。

英吾もまた、寂しさが胸にこみ上げる。

そして、最愛の娘に言った。

「葵、もつともつと仕事を頑張つて、必ず五条に勝つ。五条にも誰にも文句を言わせないほど強い会社になって、お前と周治くんを離婚させてやる。これが、新婦の父としての誓いだ」

葵は父を見つめる。

英吾も見つめ返す。

そこには父子の、目に見えない絆があった。

目には見えないが、一番近く感じられること。

それは、父が誰より自分のことを思ってくれているということ。

でも、ごめんなさいお父様……。

私は今日、そんなあなたに、娘として最大の迷惑をかけます。

許して下さい……。

葵は悲しげに微笑んだ。

英吾と安藤が部屋を出たとき、こちらに向かって廊下を歩いてくる人影が見えた。

探だった。

彼は靴音を響かせ、堂々と歩いてくる。

英吾はすれ違う瞬間、声をかけようと思ったが、探は二人に会釈を
して取り過ぎてしまった。

すれ違うとき一瞬見えた彼の瞳は、何だかいつもと違っていた。

英吾は振り返って、葵のいる控え室に向かって歩いて行く探の後ろ
姿を見つめた。

何か、ただならぬものを感じた。

英吾と安藤が去り、控え室には葵一人となった。

すると、すぐにまたノックがあった。

同時に、声がする。

「葵さん」

葵は、探の声にはっとした。

思わず、窓のカーテンの中に身を隠す。

返事がないので不審に思った探が、ドアを開ける。

すると、カーテンの下から真っ白なドレスの裾が出ている。

探はそつと声をかけた。

「葵さん、僕です。どうしたんですか？出てきて下さい」

だが、カーテンの中から聞こえてきたのは、震える涙声だった。

「いやですっ……あなた以外の他人のためのドレス姿なんて、見られたくない……」

探は困り果てて言った。

「でも、どうせ後で見るんですから……」

「でも、今はいやなんです！」

探は何も言わずに歩み寄った。

そつとカーテンの端に手をかける。

「では、僕が勝手に、僕のためのウェディングドレスだと思い込んだら、出てきて下さいますか？」

そのとき、わずかな窓の隙間から、一陣の風が舞い込んだ。

カーテンがふわりとふくらむ。

そして、目を潤ませてこちらを見上げる葵の姿が現れた。

探は思わず見とれてしまった。

いつもより大人っぽく、美しかった。

純白な衣装が、葵の周りの空気をやわらかくしているようだ。風に揺れるベールと髪が重なって、顔にかかる。

二人はカーテンの影で、ひっそりと誓いの口付けを交わした。

三台に分かれて、男たちが黒塗りの車に乗っている。

その先頭を走るのは、今回の任務の主力組が乗車している車だった。運転はクワトロ、助手席にはウノ、そして後部座席にはトレスの三人だ。

クワトロは相変わらず緊張していた。

少しでも気が散ると事故を起こしそうなので、彼は一言もしゃべらずにひたすら運転に集中していた。

一方のウノとトレスはさほど、というか全く緊張していなかった。むしろトレスは相当興奮していて、口元からニヤニヤ笑いが消えない。

その調子で、彼は助手席に座るウノに話しかけた。

「いよいよですねえ、おやっさん。この8年、諦めずにボスについできて良かったですぜ」

ウノはいつも通りの冷静さを見せ、何も答えない。

それどころか、隣りで顔を強ばらせて冷や汗を流しているクワトロを、意味ありげに見やっていた。

それに構わず、とういか気付かず、トレスは話し続ける。

「でも、一気にボスも忙しくなりますね。宝石が手に入ったら、山のようにやることがある」

相変わらずウノは流して聞いていた。

だが、トレスの次の言葉に、彼はわずかな反応を示した。

「ボスの娘さん・・・確か馨かおるさんでしたっけ？年が明けたらすぐ成人式なんでしょう？ボス、忙しすぎて祝ってやれねえんじゃないですかね？」

トレスは愉快そうに笑った。

トレスが何も考えずに冗談半分に行ったことだとわかってはいるが、ウノは彼女のこととなるとついつい反応してしまう。

「フン・・・そんなときゃあ俺が代わりに祝ってやるよ」

車は速度を変えずに走り続け、やがて葵たちのいる結婚式場が見えてきた。

その頃、もうすでに式は始まっていた。

今回は披露パーティも兼ねているため、まだ教会の中での儀式は行われていない。

葵は周治と並んで、招待客に挨拶に回っていた。側を通ったとき、探と目が合う。

二人はこっそりとうなずき合った。

すべてはタイミングが命だ。

教会で、葵が神様の前で誓いの言葉を言わされる前に連れ出さなければいけない。

しばらくしてから、探がとうとう行動に出た。

葵が見ているのを確認してから、そっと会場の出口に向かって歩を進める。

それを見た葵も、隣りにいる周治に、トイレで化粧を直すためだとか適当な言い訳をして側を離れた。

そして、さりげなく探が出て行った出口に向かう。

葵がドアを開けた瞬間、すぐ外で待っていた探が葵の手を取った。そのまま一気に駆け出す。

二人の背後で、静かにドアが閉まった。

葵と探は、振り返らずにどんどん走った。

あらかじめ見つけておいた、ひと気のない廊下を駆け抜ける。広い式場ではそのルートは少々遠回りになるが、仕方がない。二人は出口を目指して走り続けた。

探に手を引かれて走りながら、葵はふと錯覚を起こした。

まるで、初めて会ったときに探が彼の屋敷から逃がしてくれたときのようなのだ。

あの頃は、こんなふうに『悪い娘』になるなんて全く予想していなかった。

そして、こんなにも彼を愛すなんてことも、思っていなかった。前を走る彼は、あのときと全く変わっていない。

彼の明るい茶色の髪が風に流される。

自分の手を引く後ろ姿は頼りがいがあり、たくましかった。

外見は変わらないのに、内面だけがこれほど変わるなんてこと、あるんだな……。

葵は実感した。

今初めて、『恋』というものすべてを理解したような気がした。

これからは、恋するのではなく愛を育むという決意が、葵の中で目覚めた。

そのとき、二人は裏口に辿り着いた。

ドアを開けると、式場の庭の一角だった。

豊かなバラの生け垣が点在する中、芝生の上に一本の細い道がある。その先には、従業員用の、小さな門があった。

しかし、運命とは残酷なものである。
恋人たちが抜け出して走っている途中、式場では、前々から嫌な予感を募らせていた新婦の父・英吾がいち早く異変に気付き、椿や白馬氏、メイドたちや周治ら数人を伴って会場から葵たちを探しに出てきていた。

そしてまたひとつ、運命が動く・・・

道の中ほどまで進んだとき、葵と探の目の前の門の外側に、黒塗りの不気味な車が現れ、停車した。
何だろうと考える暇もないうちに、中から三人の男たちが出てきた。二人は思わず足を止める。

男たちは門を開け、中に入ってきた。

別の車から降りた男たちも加わり、かなりの人数になっている。
そのうちの一人、先頭をきって歩み寄ってくる長身で短髪の男が、その鋭い目で葵をとらえた。

その瞬間、男の顔が恐ろしい笑みを浮かべた。

探は反射的に、葵を後ろにかばった。

明らかに敵意を感じる。

彼の頭に、英吾から聞いた話が甦る。

葵のブルーダイヤを執拗に狙う、暗黒の組織・・・。
間違いない。

探は直感で思った。

引き返そうと思ったとき、先頭の男が声を張り上げた。

「捕らえるお！！」

それを合図に、控えていた男たちが一斉に二人に突進してきた。
葵が、恐怖に甲高い悲鳴を上げた。

「きゃあああああああああ
」

探すあてもなくとりあえず外に出てうろたえていた英吾たちは、突然の悲鳴に驚いた。

それが娘の発したものだ、英吾は真つ先に悟った。

「・・・葵っ」

彼は悲鳴が聞こえた方へ駆け出した。

男たちは、まず探を攻撃してきた。

ひとときわ大柄な男に殴られ、探は地面に飛ばされた。

立ち上がる前に、大勢に寄ってたかつて殴られる。

目も開けられないような衝撃と痛みの中で、彼は必死に葵を探した。

守らなければ・・・

こいつらの狙いは葵だ。

彼女を、守らなければ・・・！！

男たちの足の隙間から、かすかに葵の姿が見えた。

彼女は泣き叫びながら、探のほうに来ようともがいている。

しかし後ろで、長髪でサングラスの男ががちりと葵を捕まえている。

そのとき、葵を捕まえていたその男が、ふいに白い布を取りだした。それで葵の口をふさぐ。

すると、葵のまぶたはゆっくりと落ち、全身の力が抜けて倒れ込んだ。

それを男がしつかりとかかえる。

探は目を見開いた。

同時に、彼女の耳のイヤリングがスローモーションのように落下し、固い地面に当たって砕け散る甲高い音が、頭の中に響いた。

そして葵の手が、力無くだらりと垂れ下がる……。

そのとき、一人の男が放った蹴りが、探のみぞおちに渾身の一撃をくらわせた。

探はあまりの衝撃に、息が詰まった。

ほとんど動かなくなった探を残し、葵を抱えた男をはじめ全員が車に引き返す。

探は、全身の感覚がほとんどなくなっていた。

口の中は血の味がする。

朦朧とする意識の中、彼は遠ざかっていく葵の純白のドレスを見つめていた。

車のすべてのドアが閉まり、発進しかけたとき、後方から大勢の駆けて来る足音が聞こえた。

そして聞き慣れた父や英吾や椿の叫び声も……。

彼らの声がかすかに聞こえる中、探は、葵に乗せた車が走り去るのを見た。

それと同時に、探は気を失った。

第29話 悲劇の結婚式（後書き）

読んで下さりありがとうございました。

探さん、ぼっこぼっこです。しゅめん。（なぜか謝罪）

今回の重要ポイント。

『おやっさんの相手の女性は今年成人式＝20歳！！！！』
としのちびゅっさいいいいい！！

第30話 事件のあと

神様

どうして彼女を辛い目に遭わせるのですか

どうして僕じゃなく、彼女なんですか

あなたが嫌いなのは、僕でしょう

彼女ではない

僕が嫌いなら、僕だけに辛い思いをさせればいい

僕だけを苦しめればいい

なのに、どうして僕ではなく彼女を・・・

僕の大切な人をあんな目に遭わせるんですか

どうして彼女にあんな運命、背負わせたのですか・・・

彼女が何をしたというんですか

彼女はただ、僕を愛しただけだ

あなたに嫌われているこんな僕を、愛してくれただけだ

なのにどうして彼女にだけ、あんな運命を背負わせたのですか

どうして彼女にだけ・・・

カミ サマ・・・!!

彼女の恐怖に満ちた叫び声が、長く尾を引いて頭の中に響き渡る。口を布でふさがれた瞬間、閉じていく彼女のまぶた。

そして力無くくずおれる姿。

耳から外れたイヤリングがゆっくりと落下し、地面に当たって砕け散る鋭い音と共に、彼女の白い腕がだらりと垂れ下がる・・・

そこで探ははつと目を覚ました。

全身から汗が噴き出している。

目の前には、見たことのないくすんだ灰色の天井が見える。

みぞおちがかすかに痛み、頭はズキズキする。

その痛みで、次第に記憶が甦る。

額の汗の雫がすうっと流れ、耳のほうへ落ちていった。

だがもう一つ、その汗に混じって流れたものがあつた。

目から一筋の涙がこぼれ、顔の横を伝ってどこかへいった。

そのとき、横から声がした。

「お気付きですか？」

その声は、意識が途切れる直前まで一緒にいた愛しい人の声に似ていた。

探がゆっくりとそちらに顔を向けると、椿が悲しそうな表情でこちらを見下ろしていた。

どうやら自分は、病院のベッドの上にいるらしい。

探が無理に起き上がろうとすると、反対側から切羽詰まった声が飛んできて、彼をベッドに押し戻そうとした。

「だめよ探！まだ横になっっていないと」
見ると、彼女の兄の結婚式の服装そのままの悦が、心配そうな顔をしていた。

そんな悦の止める言葉を聞かず、探は体を起こした。

頭には包帯が巻かれている。

探は椿に尋ねた。

「……葵さんは……？」

椿は落ち着いた声で答えた。

「黒い車で連れ去られたあと、行方がわからなくなっています。その現場を目撃した私たちは全員、事情聴取を終えました。探さんも、意識が戻られたのでもうすぐ警察の方がいらつしゃいます」

探の頭に、また葵の叫び声がこだまする。

彼女の手が力無く垂れ下がった光景が、まぶたに焼き付いて離れない……。

「……僕のせいだ……」

椿は何も言わない。

悲しそうに目を伏せているだけだ。

代わりに悦が言った。

「探のせいじゃないわ！どうしようもなかったんだから。悪いのは……」

『無理に結婚式をした私たちのほう』と、その先に続ける勇気がなく、悦までもが黙り込んだ。

その沈黙の中で、探はひたすら後悔していた。

自分が『逃げよう』と言ったせいで、彼女はみんなから離れて、捕まってしまった。

自分が連れ出したせいで、彼女は無防備になってしまった。

自分が弱かったせいで、守ることもできず、何もできずに連れて行かれてしまった……。

探は両手で頭をかかえ、涙を流した。

そのとき、病室のドアが開いた。

入って来たのは、英吾だった。

「気が付いたか、探くん」

彼もまた、椿と同じように悲しみに沈んだ表情だった。

探は英吾の姿を見るなり言った。

「若宮さん、すいません！僕なんです、葵さんを連れ出したのは。

僕があんなところに連れて行ったから、葵さんは」

「わかってている。わかっているよ。だが、今は何も言うな」

英吾が探の言葉を遮った。

探は困惑した表情で英吾を見つめる。

「・・・え？どういうことですか・・・？」

「そのことは、警察に何を言われてもしゃべってはだめだ」

探は、信じられないといった表情になって叫んだ。

「何故です！？手がかりになるかもしれないのに、証言しないなんてできません！！」

一方の英吾は、たしなめるように答えた。

「そんなことをしたら、君のお父さんの立場が悪くなる」

探は、怒りがこみ上げた。

「こんなときに何を言ってるんですか！？今は葵さんを助けることのほうが」

「彼が警視総監としての力を失ったら、一体誰が葵を助けるんだ！？」

とつとつ英吾は、大声で探を一喝した。

その言葉に、探は何も言えなくなってしまうた。

英吾の言う通りだ。

もし探が連れ出したなんて証言して、それが他の人やマスコミにばれたらどうなるか。

結果は目に見えている。

探が組織に協力して、わざと葵を連れ出したのではないか、という噂が出回るだろう。

息子がそんな状態になったら、当然父の、警視総監としての立場は

無くなる。

彼も加担したのではないかと思われるかもしれない。

警視庁のトップである父が失脚すれば、警視庁だけでなく警察庁も大きく揺れ動くだろう。

そんな騒ぎに付き合っている暇はないのだ。

一刻も早く捜査本部を設置して、葵の救出に専念せねばならない。

探は、いかに自分が無力であるかを痛感した。

大切な人を守るどころか、自らの浅はかな行動のせいで、危険の中に飛び入らせてしまった。

自分が招いたことなのに、その失敗を自分ではどうすることもできない。

これでは、1年前と全く変わっていないではないか。

彼女に出会って、彼女のために強くなるうと思っていたのに……。

それからすぐに警察が来て、探は病室で事情聴取を受けた。

英吾に言われた通り、自分が葵を連れ出したとは言わず、たまたま現場に居合わせたただだと証言した。

探偵として何度も警察に協力してきて、なおかつ警視總監を父に持つ探のその証言を疑うものは、一人もいなかった。

だが探は、むしろ疑ってほしかった。

そうすれば、本当のことを話せる。

襲われたとき、被害者と何か目的を持って現場へ行き、言葉を交わしていたとなれば、何か手がかりになるかもしれない。

ただ偶然犯行現場に居合わせたために巻き込まれたという状況よりは、断然役に立つのだ。

それに、犯人グループの車が走り去るところを見た人は大勢いても、実際に犯行に及んだ人間を見たのは探だけなのだ。

犯人グループの特徴を記憶の限り警察に話し、解放された探は一人、病院のロビーの片隅の長椅子に座って放心していた。もうほとんど夜で、ロビーにはひと気がなかった。

頭の中では、ただ後悔と自責の念が渦巻いていた。今にも心が潰れてしまいそうだ。

自分の周りが、全て暗いことのようにしか見えなくなっていた。

どんなことも、マイナスに考えてしまう。

ほとんど何の手がかりもないこの状況で、葵を見つけ出して助けられる希望が見えないのだ。

彼女を、永遠に奪われてしまったような気がした。

だから彼は、この事件についてよりも、こうなることを防げなかったことに対する後悔しか考えることができなかった。

そのとき、隣りに誰かが腰掛けた。

無造作にそちらを向くと、そこには椿が、うつむいて座っていた。

彼女は先ほど病室で、探が自分を責めたとき、悦のように否定しなかった。

ただ黙って、探の自責を聞いていた。

その態度を思い出し、探は悟った。

椿は、自分と同じことを思っている。

母親代わりの愛する姉を連れ去られたのは、探に責任がある、と。別に構わなかった。

事実なのだから。

椿に責められると、探は思った。

どうせ責められるなら、と思い、彼は謝った。

「すみません。僕のせいで、あなたのお姉さんは・・・」

すると、椿は声を震わせて言った。

「あなたのせいだと言いたいわけではありません」

「・・・え？」

「式場の大勢の中にも、姉さまはきつと連れ去られていたでし

ようから。でもあのとき、姉さまはあなたと一緒にいた。なのに、どうして姉さまを守って下さらなかったんですか!? あなたが側にいたのに!!!」

椿の目からは、涙が溢れていた。

「正直、あなたを恨んでます。姉さまと一緒に逃げる気だったなら、私たちから姉さまを奪うつもりだったなら、責任持って姉さまを守ってほしかった・・・」

探は、うつむいて小さく言った。

「ごめんなさい。僕がもっと・・・強かったなら・・・」

椿は優しい口調になって言った。

「自分を責めることは、後でいくらでもできます。でも今は、姉さまを救うことだけを考えて下さい。姉さまを助けられるのは、あなたしかないんですから」

ア ナ タ シ カ イ ナ イ

その言葉に、探は使命感が湧いてきた。

そうだ。

後悔している暇はない。

こういうときにこそ、行動しなければ・・・!!

「椿さん、ありがとうございます」

探が立ち上がってそう言うと、椿は黙ってうなずいた。

探は警察に詳しく話を聞こうと、ロビーを歩き出した。

そのとき、背後から誰かに呼び止められた。

振り返るとそこには、英吾の姿があった。

「さっきは怒鳴ったりしてすまなかった」

彼は頭を下げた。

「いえ、僕がいけなかったんです。自分のことしか見えていませんでした。すみませんでした」

そう言って逆に頭を下げた探の、さっきとは比べものにならないほど強くなった顔を見た英吾は、少し安心した。

「実は探くん。聞いてほしいことがある。付き合ってくれるか？」
その英吾の口ぶりから探は、犯人たちのことだと瞬時に悟った。
前に葵の家に泊まった朝、英吾は組織について多くを語らなかつた。
だが実際に事件が起こった今、真実を教えてくれるのであるうと、
はつきりとわかった。

探の、探偵としてのいつもの鋭さが姿を見せる。

探は英吾について廊下を歩き、誰もいない小さな部屋に入った。

第31話 真実

「まず、葵をさらったやつらだが、この前話した例の組織の仕業だ
ということはわかってるかね？」

探とテーブルを挟んで向き合うなり、英吾は切り出した。

やはりその話か、と思いながら、探は落ち着いて答えた。

「はい」

英吾はうなづく。

「私も、君の証言した犯人像を考えると、まず間違いないと思っ
ている」

その言葉に、探は驚いた。

今聞いたことに、思わず自分の耳を疑う。

とっさに聞き返した。

「やつらを見たことがあるんですか!？」

探のその問いに、英吾は視線をそらして深い溜め息をついた。

少しの間あと、彼は答えた。

「ああ。あの顔を忘れるはずがない。しょっちゅう会っていたんだ
よ、大学時代に」

探は、言葉が出なかった。

頭の中では疑問が次々に浮かんでくる。

どうしてそんなにしょっちゅう会っていたんだ？

それに、そんなに会っていたならどうして今まで警察に言わなかつ
たんだ？

そもそも、どうして英吾がやつらと顔見知りなんだ？

探は疑問が多すぎて、どれから口にして良いかわからなくなってい
た。

そんな探の思考を表情から悟った英吾は、ゆっくり話し始めた。

「前は、心配させたくなくて詳しく話さなかったが、こうして事件
が起こった以上、君に最初からすべて話すよ」

英吾は表情を険しくして、その重い口を開いた。

「私の亡き妻・華代は、ある美術館の娘だった。

パーティで初めて会ったときから、華代の胸にはあのネックレスがあった」

そこで探は、口を挟んだ。

「あれは、ただの装飾品としてのネックレスなんかじゃなく、ブルーダイヤというれっきとした『宝石』なんでしょう?」

その言葉に、英吾は驚いて目を見開く。

「あれがブルーダイヤだと、気付いていたのか・・・?」

「はい。宝石は見慣れてますから」

その返事を聞いた英吾は、探のほうに身を乗り出した。

先ほどより少し声を低くして、慎重に言う。

「なら、話は早い。あれは、イギリス王室に伝わる伝説のブルーダイヤだ」

『イギリス王室に伝わる伝説のブルーダイヤ』

その響きが頭に入った瞬間、また探の記憶がうずいた。

だがやはり今回も、どうしても思い出せない・・・。

英吾が続ける。

「今となつては詳しいことはわからないのだが、どうにかしてあの宝石が、華代の実家の美術館にやってきたらしいんだ。

だが同時に、それを狙う組織が存在するという情報もあった。

そこで華代の両親は、あれがただの安物のガラス細工に見えるように、華代にネックレスとして身につけさせた。

組織のやつらも、あんなに貴重なブルーダイヤが、保管もされずに若い娘の首から下がっているなんて夢にも思いはしないだろうと考えたんだ。

その作戦は功を奏した。

だから今まで、組織の連中は気付いていなかったんだろうな」

英吾は一旦言葉を切った。

探は黙って次の言葉を待つ。

「だが組織の連中は、しつこく華代に付きまどってきた。

目当ての宝石が、目の前の華代の首に下がっているとも知らずに、あのブルーダイヤのありかを教えるだの、秘密をしゃべれだのと、毎日のように脅していたんだ。

そのことを、華代が私と君のお父さんに相談してきたことが、すべての始まりだった。

そこから、私たちの必死の攻防戦が始まったんだ。

警察に相談しようにも、あの組織は完璧主義者の集まりだ。

犯罪者として警察に突き出せるような証拠は、全く得られなかった。それに、組織がそれ以前に何らかの事件を起こしていたかどうかさえ、はつきりしない。

たちの悪いストーリーカー程度にしか扱われなかった。

だから君のお父さんは、警察の道に進むことを決意したんだよ。自分で華代を守るためにね。

そのとき私たちの前に姿を見せていたのは、君が目撃したリーダー格の男と、今回葵を気絶させたと思われる、サングラスで長髪の、割と若い男、それとたまに、大柄で口の悪い男の、主に三人だった。探は、ついさつき見た犯人グループの中の男たちの顔を思い出していた。

英吾が言う、サングラスで長髪の男は、葵を気絶させた男と見てまず間違いない。

大柄で口の悪い男とは、最初に自分を殴った男ではないかと推測した。

そして、リーダー格の男……。

探の脳裏に、あの男の邪悪な笑みが浮かんだ。

葵を見つけたとき、鋭く光った目。

そしてそのあとに発せられた、腹の底に響くような『捕らえる』という大声。

あの、見るものを体の芯から震え上がらせるような威圧感と邪悪な雰囲気を持った男。

どう考えても、ただ者ではない。

探は言った。

「・・・やつらは一体、何者なんですか？」

英吾は、ぎゅっと唇を引き結んだ。

とうとう言うときが来た、という彼の思いが、探に伝わってくるようだった。

唇を緩めると、彼は慎重に話し始めた。

「我々も、独自にやつらのことを調べてきた。

だが、わかったことはごくわずかだ。

大学時代にやつらが漏らした話によると、あの組織の名前は、

『Brilliant Darkness』

探の思考は、最近ではほとんど耳にしていなかった、慣れ親しんだ英国の言葉の響きに満たされた。

彼の持ち前の語学力が、その言葉を瞬時に理解し、日本語に直した。だがそこで彼の思考は、その訳した日本語に困惑した。

思わず口に出す。

「ブリリアント・・・ダークネス・・・？」

英吾が答える。

「そうだ。日本語にすると、『光り輝く闇』」

光り輝く闇・・・。

その矛盾した言葉に、探は何か深く暗い雰囲気をおぼえた。

英吾が話を再開する。

「やつらが狙うのは、あの宝石だけだ。

だがその目的は、全くわからない。

単に金目当てではないことは確かだ。

あのブルーダイヤには、直接的な価値以上に、何か秘められた力があるのかもしれない。

そして、あの組織は、二十数年前に結成されたと思われる。

どれくらい規模なのか、そして何人の構成員から成っているのかも、はっきりわからない。

だが、そのだいたいの仕組みはわかる。

やつらの中で、実際に動く実力者で主力となっているのは、11人。その11人は、あるコードネームで呼び合っている。

おそらくその11人の、実力者、という称号の意味もあるのではないかと思われる」

そこまで聞いたとき、探は聞いた。

「一体どんなコードネームなんですか？」

「数字だ」

英吾は言い切った。

探は、またもや困惑する。

「数字？」

「そうだ。やつらはスペイン語で0から10までの数字、つまり、ゼロ・ウノ・ドス・トレス・クワトロ・シンコ・セイス・シエテ・オチヨ・ヌエベ・デイエスというコードネームが順番についている。その中で、組織の創始者で全体のトップの地位にいるボスのコードネームは、0を意味するゼロだ。

今のところ、そのボスが誰なのかはわかっていない。

そして、1を意味するウノのコードネームは、あのリーダー格の男だ。

組織のボス以外のやつらは、おやっさんと呼んでいた。

どこの誰だかは全くわからないのだが、ただ者ではない。

華代に付きまといていたときから、そう感じていた。

やつはボスの最も信頼する部下で、組織の他の部下たちを統率するほどの実力者だ。

次の、2を意味するドスの地位には、誰が就いてるのかはわからない。

3を意味するトレスは、先ほど言った大柄な男、4のクワトロはサングラスの男だ。

それ以外はドス同様、どんな人物がいるのかはわからない。

だが、7のシエテは女だということだけはわかっている」

英吾は一旦、口を閉じた。

次に、最も思い出したいくない、話したくないことを話さなければならぬ。

彼は探を見た。

探は、真剣な強い眼差しで、自分の次の言葉を待っている。

英吾は、今は行方知れずの最愛の娘を思いながら、深く息を吸った。口から出た言葉は、少し震えていた。

「だが、業を煮やした組織はとうとう最悪の事件を起こした。

そのときには、私たちは大学を卒業し、ばらばらになっていた。

華代と結婚した私は、華代の両親と相談して、私たちの実家と大学があるその地を離れ、この地にやって来た。

そのとき、私たちがここに来たとわかる痕跡は、何一つ残してこなかった。

だから、さすがの組織も追っては来なかった。

だがそのことが、組織のやつらを逆上させてしまったんだ。

華代に逃げられたとわかり、やつらは夜中、直接華代の実家を襲った。

警察沙汰を避けたかったらしく、それまでは華代を脅す程度だったのだが、とうとう華代の両親のところを攻撃をしたんだ。

きつと、ブルーダイヤのことをしつこく聞き出そうとしたんだろうな。

二人とも命は助かったが、記憶を無くした。

組織がひきあげてから夜が明け、近所の人の通報で駆けつけた警察に助けられたときには、全身傷だらけの血まみれで、虫の息だった。

そうだ……。

何があつたのか聞くにも、二人とも完全に記憶喪失だった。

現場にも手がかりは皆無。

そして全身の傷は、明らかに拷問の跡だったらしい。

組織は宝石のことを聞き出すために、二人をひたすら拷問したんだ。そのせいで、記憶を無くしたのではないかと医師は言っていた」

英吾はつらそうに固く目を閉じ、探は怒りに拳を握りしめた。
何て残酷なんだ……。

探は、あまりの怒りで口がきけない。
しばらく、沈黙が流れる。

ようやく二人が、それぞれの気持ちを鎮め、落ち着いたときには、
かなりの時間が経っていた。

探は、控えめに尋ねた。

「それで……お二人はそのあとは……？」

英吾はゆっくりと答えた。

「記憶が戻らないままだが、それ以外は健康で、今はある施設で平
和に暮らしているよ。」

あれだけ拷問されても、組織に華代の居場所や宝石のことはしゃべ
らなかつたらしく、その事件のあと、私たちの身に危険が及ぶこ
とはなかった。

8年前のあの日までは……」

英吾は最後の一言を、目を伏せて付け加えた。

探が先を促す。

「8年前に、何かあったんですか？」

英吾は目を上げ、探を見た。

その表情は、また悲しそうになっていた。

「……8年前、華代が死んだあとすぐのことだった……。」

華代の入院していた病院から、華代が死んだという情報が漏れてい
たらしいんだ。

犯人は恐らく組織の人間だろうと思う。

だがさすがに、それだけでは居場所の特定まではできなかつたら
しく、そのあとも組織は姿を見せなかつた」

探は驚いた。

病院から、患者の個人情報が出るなんてあり得ないはずだ。

そう考えると、組織の仲間が病院関係者の中にいたかもしれない。

もしくは、病院の情報を自由に見ることが出来る者がいたか……。

どちらにしろ、組織が様々な立場の人間を味方につけていることは確かだ。

探は、果てしなく深く広い組織の存在に、再び無力さを感じ始めていた。

華代の実家を襲ったときの行動から考えると、組織のやつらは残忍で、手段を選ばない。

自分なんかが大刀打ちできるのであるうか、という不安が襲ってきた。

いつも引き受ける事件なんかより、はるかに難しい。

英吾の知っている組織の情報もわずかだ。

それに相手は犯罪のプロで、手口は完璧。

今回も、ほとんど何の証拠も残していかなかった。

一体、どこからどうやって推理すればいいんだ・・・！？

探と英吾が話し終わって部屋を出たときには、もう外は真っ暗だった。

迎えに来ていたバアヤの車に乗り、探は家路についた。

彼の頭からは、事件のことが離れない。

バアヤが心配して声をかけても、曖昧な返事しかしない。

だが彼の表情は、絶望に沈んではおらず、葵を助けるために必死に思案している顔だった。

探がその表情をしている限り、希望は残されていると、バアヤは信じるのだった。

すべての鍵を握るのは、あのブルーダイヤ。

その言葉が、さっきから探の記憶をつついているのだが、記憶の扉は一向に開かれる気配がない。

とにかく思い出さなければ。

彼の記憶が、何か大きく関係している気がしてならない。

イギリス王室に伝わる伝説のブルーダイヤ・・・。

かたくなに開かない自分の記憶の扉に、探は齒ぎしりをした。

第32話 覚醒

「・・・」

葵は唐突に目覚めた。

しばらく、無言で横たわる。

見えるのは、木の地肌が剥き出しの天井だけ。

その天井の木目が、ぐにやぐにやと歪んで見える。

不思議な天井だな、と思っていたが、やがて、自分の視界が歪んで
いるせいだと気付いた。

じっと横たわっているのに、頭はふらふらする。

何かを見ていると、余計にめまいがしてきたので、葵は目を閉じた。

どうやら、自分が寝ているのは石の床のようだった。

背中に、ひんやりとした感覚が伝わってくる。

葵の頭は、全くと言っていいほどはたらいていなかった。

全身に、力が入らない。

しばらく、じっと目をつぶっていた。

ふいに、体にわずかな力が戻ったような気がして、葵は目を開けた。

そっと、指を動かしてみる。

指先がピクツと動いた。

そのままゆっくりと手の平を丸めたり広げたりを繰り返す。

体全体に力が入り、葵は上半身を起こした。

辺りをぼうつと見回すと、天井と同じく木の壁だけが四方を囲んで
いる。

ふと下を見ると、真っ白なドレスがかぶさった自分の脚が見えた。

だんだんと、記憶が甦っていく。

探の顔が頭に浮かんだ瞬間、葵ははっとした。

全て思い出した。

探と逃げるとき、大勢の男たちが襲ってきて、探が攻撃されて、それから……。

そこから記憶が途切れる。

そして、周りに誰もいない、この状況……。

自分は、拉致されたのではないか、という恐怖が全身を襲ってきた。もし助けられているのなら、こんな何も無い地べたに、ドレスを着たまま転がされているわけがない。

そのとき、背後から物音がした。

体をねじって振り返ると、そこには階段があった。

上から、誰かが降りてくる。

すらりとした脚が一段一段、靴音を響かせて進んできた。

その脚の主が階段を降りきって立ち止まったとき、葵に声をかけた。

「お目覚めかしら？お嬢さん」

そこには、すらりと背の高い女性が立っていた。

見たところ40代前半だが、それでも若々しくきりつとした美人だ。

ゆるやかに波打つ黒髪を垂らし、形の良い唇には鮮やかな紅の口紅を塗っている。

その口元は余裕を感じさせるように笑みを浮かべていた。

その笑みを見た瞬間、葵の全身に鳥肌が立った。

得体の知れない恐怖が、全身を支配する。

その女性が自分に歩み寄ってきたとき、葵は立ち上がって後ずさりした。

「……来ないで！！」

だが、急に立ち上がったせいで葵は再びめまいを起こし、尻餅をついてしまった。

それでも後ずさりをやめない。
女性が足を止めて言った。

「そんなに怖がらないでよ。殺したりしないから」

その言葉で一応後ずさりは止まったが、まだ葵の恐怖と警戒の眼差しは続いている。

そんなことには構わず、女性は朗らかに話し始めた。

「私はシエテ。あ、勘違いしないでね。コードネームだから。私はちゃんとした日本人よ」

あまりにも親しげに話すシエテに、葵は呆然とした。
シエテは尚も、一方的に話し続ける。

「さつきも言ったけど、私たちはあなたを殺すつもりはないわ。というか、殺すわけにはいかないのよ。あなたが知ってる宝石の秘密をしゃべってもらわなくちゃいけないからね」

『宝石』という言葉聞いた瞬間、葵ははっとして自分の胸を見た。そこに、ネックレスはなかった。
それに気付いたシエテは、何でもないようにさらりと言った。

「ああ、あの宝石なら、ウノがもうボスのところに持って行っちゃったわよ」

葵は、さつきから全く状況が呑み込めていなかった。

わけのわからない単語が、次々にシエテの口から飛び出す。

だがどうやら、自分が囚われの身となっていることは、宝石が奪われたという事実で何となく確信し始めていた。

そこで葵は、極めて根本的な疑問を口にした。

「……?」

シエテは一瞬きよとんとしたが、やがて、あ、という表情をして慌てて言った。

「そつだ！あなたは華代じゃないんだつげ。ごめんね、じゃあ何にもわからないわよね」

シエテは一人で、うんうんと頷いている。

葵はまたもや、呆然。

「ホントに華代にそっくりだから、思わず華代と話してるような気分になっちゃってたわ。ごめんね、私そそっかしくて」

そして最初と同じ笑みを浮かべ、先ほどまでよりも張りのある深い声で言った。

「ここは、我ら『Brilliant Darkness』の仮のアジト。あなたには私たちに、あのブルーダイヤの秘密を洗いざらいしゃべってもらおうわ」

「『Brilliant Darkness』……?」

「そう。あの宝石を手に入れるための犯罪組織。ようこそ、葵お嬢さん。今日からあなたは、永遠に組織の一員よ」

しばらくして、シエテと入れ替わりで別の女性が降りてきた。それなりに若いのが、無愛想で、淡々と葵に話しかけてくる。

さっきのシエテとの会話とは違ってかわって、無駄な言葉は一言も言わない人だった。

葵はその女性に言われるがまま、支給された服に着替えた。

黒のジーンズに長袖のＴシャツ、その上に羽織る白いカーディガンだった。

女性は葵に、必要な説明だけを端的に説明した。

葵がいるのは地下で、階段の上にはほとんど何も無い個室と、トイレと浴室と洗面所があるだけらしい。

個室には交代で女性が待機していて、声をかければ監視付きだが風呂もトイレも自由に使えるそうだ。

食事もちゃんと出されるし、毎日着替えも支給するし、決まった時間には布団も用意する、と言われた。

葵はただ呆然と、その説明を聞いていた。

説明を終えると、あらかじめ葵に言うように言われたことをすべて言い終えたらしく、女性はあっさりと去っていった。

取り残された葵は、まだこの事態に実感が湧いていなかった。

なんだか、旅行に来た宿泊客のような気分だった。

いちおうこの状況は『監禁』と言えるのだろうが、葵が持っていたイメージとはかけ離れていたのだ。

日常生活はほぼ不自由なく送れるし、必要なものはきちんと渡されるし、何よりそれらについてちゃんと説明されたことに、葵はとてつもない違和感を覚えている。

葵がここで生活できるように、何から何まで完璧に揃っているのだ。普通、『監禁』というと、縛られて閉じ込められたり、鍵の掛かった部屋にほぼ放置されたりという想像しか湧かない。

それに、さっきシエテが言ったことも気になる。

今日からあなたは、永遠に組織の一員よ・・・
この待遇の良さから考えると、この組織は本当に、葵が一生暮らせるように前々から準備していたとしか思えない。

葵はしばらく、石の床に座り込んでその不思議さについてひたすら考えを巡らせていたが、時間が経つと、段々と実感が湧いてきた。自分は拉致され、監禁されている。

そして恐らく原因は、あのネックレス。
シエテはあれを『ブルーダイヤ』と言っていた。

葵はあのネックレスが母の形見だとして考えておらず、そんな高価な宝石だとは全く知らなかった。

それに、その宝石の秘密をしゃべってもらおう、とか言っていたが、そんなもの葵には身に覚えがなかった。

ただ母から譲り受け、それからずっと持っている。ただそれだけだ。秘密など聞いたこともない。

葵はだんだんと混乱してきた。
訳がわからない。

どうして自分がこんな目に遭っているのか？
どうして犯罪組織なんかには捕らわれているのか？
自分はこれから、一体どうなるのか？

もしかしたら、本当に一生出られないかもしれない。

葵は、恐怖で全身が震え始めた。
歯がガチガチ鳴る。

ここは暖房がちゃんと効いているのに、震えが止まらない。
葵は自分の腕を体に巻き付けた。

怖い。怖い。怖い・・・！

そのときふいに、探の顔が頭に浮かんだ。

自分に、穏やかに微笑む彼。

深く、心地の良い声で自分を呼ぶ声が、聞こえるような気がする。次は、父の姿が浮かんできた。

続いて椿、綾、多江さん。

それに、誰よりも自分を思ってくれている、安藤の顔。

そして最後には、今は亡き母・華代の優しい笑顔が浮かんだ。

葵はぎゅっと目をつぶり、心の中でみんなの名前を呼んだ。

助けて……。

お母様、どうして私に何も教えてくれなかったのですか？

いつの間にか葵は、気を失うのに近い状態で眠ってしまったらしい。

目覚めたとき、さっきのようなパニック状態からは落ち着いていたが、今度は心が無くなったように放心状態になった。

そのとき、誰かが階段を降りてくる足音がした。

おもむろに振り返ると、今度はシエテがいた。

皿の乗ったトレイを持っている。

シエテは葵に微笑みかけると、そのトレイを葵の前に置いた。

丸いパンが2つとサラダ、それに湯気の立ち上るスープが乗っていた。

「夕食よ」

しかし葵は、手をつけようとしなかった。

じっと、床に置かれたトレイを見つめている。

シエテは困ったように笑って言った。

「毒なんて入ってないわよ？」

葵はうつむいたまま答える。

「そうじゃなくて・・・食べたくないんです」

とても、食事なんて気分ではなかった。

葵の頭の中は、底なしの真っ暗闇に支配されているのだ。

シエテはしばらく何も言わなかった。

葵も黙ったまま、微動だにしない。

スープからもうもうと立ち上る湯気が、二人の顔をくすぐっている。やがてその湯気が少し勢いを落としたとき、再びシエテが口を開いた。

「ほら、お嬢さん。あなた、ただでさえ細いんだからちゃんと食べなさい？」

その口調は今までより柔らかく、優しくなっていた。

葵はそれを感じて顔を上げ、シエテを見た。

彼女の顔は、温かい微笑をたたえていた。

最初に見たとき鳥肌がたったような、恐怖を感じさせる笑みではなく、どこか母を思い出させるものがある。

「私にもね、若い娘がいるのよ。だから、どうしてもあなたと重ねちゃうわ。本当の娘みたいに感じるの」

そう言ってシエテは、スープの器とスプーンを持ち上げた。

「だからね、尚更あなたが心配なの」

シエテはスープとスプーンを、葵に持たせた。

その手に、自分の手を重ねる。

スープの温かさ、シエテの手の温もりが同時に伝わってくる。その温もりに、何故か葵は懐かしさを感じた。

「さあ、これだけでも飲んで？」

葵の頭の中の闇が、ほんの少し明るくなったような気がした。

小さな小さな光が、葵の心に灯った。

それを灯したのは、今目の前にいる、この女性。

顔は全く似ていないのに、どことなく母を感じさせる、この女性……。

葵の目に涙が盛り上がる。

それを隠すために、葵は再びうつむいた。

そっとスープに口を付けると、その風味が口いっぱいに広がり、穏やかな安心感が体中を包んだ。

葵はうつむいたまま、ぼろぼろと涙をこぼした。

目覚めてから、ずっと心を締め付けていた極度の恐怖と孤独感が、涙となって一気に溢れ出る。

そんな葵の頭に、シエテはそっと手を乗せた。

「大丈夫よ。今は寂しいかもしれないけど、すぐに慣れるわ。そして、ボスの計画がどんなに素晴らしいかが、きつとわかる」

シエテはずっと、葵の頭を撫で続けていた。

第32話 覚醒（後書き）

読んで下さりありがとうございます。

今回登場したシエテさんですが、ボスに洗脳されているというか、ボスを崇拜している感じです。

今回の重要ポイント。

『犯罪組織にしては準備が完璧で、至れり尽くせり』
つまり、かなり綿密な誘拐計画というわけです。

第33話 捜査

警察では捜査本部が設置され、絶えず葵の捜索が行われていた。探もほとんど眠らず、必死になつて協力している。

警視總監である彼の父も、頻繁に捜査本部に出入りし、周囲を驚かせていた。

葵が連れ去られてから、もう5日が経っていた。

テレビのニュースやワイドショーでも大きく取り上げられ、世間を騒がせている。

だが、そのようにマスメディアを通して必死に情報提供を呼びかけているにも関わらず、今の時点では手がかりがほとんど得られていない。

走り去つた黒い車の一団の目撃情報も皆無、現場に残っていた痕跡も大して役に立たなかった。

そんな状況で、捜査は難航していた。

捜査本部の置かれている大会議室に、部下を引き連れて一人の警察官が入ってきた。

ちよつと、探や白馬氏、それに英吾や椿もそこにいて、都内の大きな地図を囲んで思案していたときだった。

周囲がにわかになぞわついたのに気付き、彼らは地図から顔を上げて、入ってきた人物を見た。

「・・・伊勢谷くん!!!」

白馬氏が、驚きと歓喜の入り交じつた声を上げる。

伊勢谷副總監は一同に歩み寄ると、軽い挨拶のあとに力強く言った。

「私も協力させて下さい」

それを聞いて、白馬氏は顔をほころばせた。

「是非そうしてくれ！君のような有能な男がいてくれると助かる」

周囲は、実際の捜査に警視總監と副總監がそろって協力しているという前代未聞の光景に、ただ呆然としていた。

だがそのことが、余計にこの事件の深刻さを物語っている。そのとき、また一人部屋に入ってきた。

彼は神原かんはらという、白馬氏が副總監とともに全幅の信頼を寄せている官僚である。

今回は、この捜査本部の捜査本部長を任されている人物だ。

「總監、ただ今戻りました」

「神原、どうだった？」

その問いに、神原本部長は溜め息混じりに答えた。

「だめです。信憑性のある情報は得られませんでした」

だいたい予想できていたことだったが、思わず一同も溜め息をついた。

探は、目の前に広げられている巨大な地図を見つめ、必死に考えていた。

今、葵は一体どこにいるのだろうか。

この広大な都内か、もしくは他の地域のどこかに監禁されているはずだ。

でも、一体どこに……。

そのとき伊勢谷副總監が、恐る恐る口を開いた。

「あの、出来れば考えたくないんですが……もしかしてもう、最悪の結果になっているかもしれないのでは……？」

だがその言葉を、探は即座に否定した。

「いえ、それはないでしょう。あのとき犯人グループは、宝石が葵さんの胸にあつたにも関わらず、それを奪わずに葵さんごとさらいました。宝石だけでなく葵さんにも用がある証拠です。なのに、もう殺されているとは考えにくいでしょう」

それを聞いて、周りの人々はいくらか安堵の顔になった。

白馬氏が、みんなを励ますように明るく言った。

「探の言うとおりで。さあ、我々も気を取り直して、葵さんの救出に全力を尽くそう」

書類をばらばらとめくりながら、神原本部長が言った。

「やはり、どこかに監禁されている可能性が高いですね」
それに英吾も同調する。

「でしょうね。しかし、どうやってその場所を特定すれば・・・」
すると、伊勢谷副総監が口を挟んだ。

「誘拐犯が被害者を監禁する場合、犯罪心理と実例の観点から見るとほとんどの場合が、外から見られないように部屋のカーテンや戸を閉め切っています。それに今回のように組織的な犯罪グループの場合、連中にとって最も都合がいいのは廃ビルです。ですから葵さんも、そのような状態の建物に監禁されている可能性はないでしょうか？」

長年の経験と実績、そして優れた観察力から来るこの発言は、周囲の者たちを心底感心させた。

白馬氏と神原本部長が揃ってうなずく。

「よし。まず都内から、怪しい廃ビルで、窓が締め切られているところを徹底的に調べ上げろ」

白馬氏の指示に、神原本部長はすぐさま大会議室の前方に向かって走っていった。

「全捜査員に告ぐ！これより、建物の割り出しに入る。そこで、次のような特徴の建物を手分けして聞き込み、報告しろ！」

そして本部長は、先ほど副総監から聞いた特徴を述べ、捜査員をいくつかの班に分けて各エリアに向かわせた。

探は捜査本部の警察署から出て、外の広場を歩いていた。

署の玄関からは、神原本部長に指示を受けた捜査員たちが続々と出

て来ている。

彼らの表情からは何の感情も読み取れないが、おそらく今の探と同じ気持ちで捜査に向かっているであろうことは、だいたい想像できる。

今の状況では、らちが明かない。

副總監の提案にはうなずけるが、カーテンや雨戸を閉め切っている廃ビルなんて、この不景気の時代なら膨大な数になるだろう。

しかも、葵がどの都道府県にいるのかも全くわからないし、さつさと海外へ逃亡している可能性だってある。

今の捜査は、はっきり言って無謀なのだ。

それに、さつきはみんなに葵はまだ無事だと断言したが、それは英吾や椿が側にいたからそう言っただけのことだ。

やつらが葵までさらったのは、何か目的があつてのことだろうが、その目的が達成されたら葵はきつと用済みだ。

組織の連中は、残虐非道。

用が済んだら、人質なんてさつさと殺してしまうだろう。

現に、もう5日経っている。

だから葵が、5日目の今日、まだ無事だという確信はないのである。

探は、本日何度目かの溜め息をついた。

こんな無謀なことしかできない自分に、腹が立つ。

無情にも過ぎていく時間の中で、焦りはつのるばかりだ。

そしてその後には必ず、まばゆい葵の笑顔が浮かんでくる。

その度に、探は何度も心の中で葵に謝った。

そのときふいに、頭上からばさばさっという羽音がした。

探が見上げると同時に、ワトソンが降りてきた。

そういえば、ワトソンのことをすっかり忘れていた。

さすがに、捜査本部に鷹は入れてはいけなйдらうと思ひ、ここに放していたのだ。

「ごめんな、ワトソン。長い間待たせてしまって」

彼は探の腕で、静かにたたずんでいる。

探は、暗い顔で空を見上げた。

この鉛色の空を、葵もどこかで見ているのだろうか……。

拉致されてから、5日目の夜が明けた。

いや、明けたらしい。

シエテがいつも通り起こしに来てくれたからから、朝だとわかる。と言っても、ほとんど眠れなかったが。

ここは窓のない地下室。

空も見えなければ、もちろん昇ってくる太陽の光も感じられない。

そんな状況の中で、葵は日々を過ごしていた。

この5日、ほとんど何もしていなかった。

朝起きて、支給された服に着替えて、洗面所に行つて、一日3回の食事をして、夜は風呂に入る。

それ以外は、ひたすら部屋でじっとしているだけだ。

日常生活に必要な行動はほとんど監視付き、一日じっとしているだけで疲れもしないため、夜はほとんど眠れない。

まあ、眠れないのは心の問題でもあるが。

だが、5日もそんな虚無な生活を続けていると、さすがに感情が麻痺してくる。

最初の頃のように急にパニックになったり、泣いたりすることはなくなった。

それどころか、何の感情も生じない。

悲しいとか、ひまだとか、ここから逃げたいとか、それさえも、も

う感じなくなっていた。
体中から、脱力感とたるさが抜けない。
もうどうだっていい。そんな状態だった。

だが、この日は違った。

今日は葵にとつて、衝撃と波乱の一日になる……。

葵は朝食を出されたあと、部屋から出るよう言われた。

初めて、地下室とそのすぐ上の部屋以外の場所に出ることとなった。シエテは優しく声をかけてから、葵の目に布を巻いて目隠しをした。そのままシエテに付き添われて、言われるままに歩いていく。

ドアが開く音や、廊下らしきところを歩く足音もすべて、葵は真っ暗闇の中で聞いていた。

周りの状況は全くわからなかったため、自分がいる建物がどんなところなのか見当も付かない。

ただたどしい足取りでようやく辿り着いた先は、ある部屋のようにだった。

シエテが「ここよ」と言ったあと、すぐにドアが開く音がしたため、そう見当をつけたのだ。

敷居と思わしきものにつまづきそうになりながら数歩進んだとき、突然体の向きを変えられた。

シエテの両手が自分の肩に置かれる。

「そのまま、座って」

葵は言われるままに、恐る恐る腰を落とした。

固い感触を確かめてから、椅子らしきものに座る。

そのときようやく、目隠しが外された。

シユルっという布の音がして、しばらく拝んでいなかった太陽の光

が目の前に溢れた。

しばらく目が慣れず、必死でまばたきを繰り返していたが、だんだんと視界がまともになっていった。

その視界に最初に映ったのは、少し離れたところに、自分と向かい合って座っている一人の男の姿だった。

背後から日光を受けたその顔は、逆光で見づらかったが、誰かははっきりとわかった。

いや、感じた、と言うほうが近い。

その者が放つ、何とも言えない強いオーラを、葵ははつきりと覚えている。

結婚式の日、自分の目の前に突如現れた男……。

彼を見て、この5日ほぼ放心状態だった葵の心がにわかになぜわづいた。

「俺は、ウノという。お前は、華代の娘の葵だな」

ウノと名乗ったその男は言った。

葵は、黙ってうなづく。

ウノは、苦笑して言った。

「そんな警戒した目で見るな。聞きたいことがあるだけだ」

だがもちろん、そんな言葉で葵の警戒心が解けるはずもない。

張りつめた声で、葵は言い放った。

「あの宝石のことだったら、何もお話することはありません!!」

その勢いに少し驚いたウノは、興味深そうに笑って、葵の傍らのシエテに尋ねた。

「ずっとこんな調子なのか？」

シエテも苦笑して返す。

「そうなのよ。この5日間、『何も知らない』の一点張り」

ウノはほう、と言うと、煙草を取り出して火を点けた。

白い煙を吐き出すと、再び口を開く。

「なあ、お嬢さん。あんたがここに慣れるまで5日も待つてやったんだ。そろそろ口割ってくれてもいいんじゃないかねえか？」

葵はウノの態度に、だんだん苛ついてきた。

「だから、私は本当に、宝石の秘密なんて身に覚えがないって言うてるじゃないですか!!」

目に見えて取り乱している葵の肩に、シエテは手を置いた。

「落ち着いて」

ウノは煙草の煙をくゆらせながら、しばらくじっと品定めするように葵の顔を見ていた。

葵も、彼をにらみ返す。

どちらも一歩も退く気配はなく、緊迫した時間が流れていく。

だがそのとき、ウノの方が先に動きを見せた。

彼は懐から何かを取り出し、葵の前に掲げた。

「・・・!!」

葵は目を見開く。

それは、あの碧い宝石だった。

ウノはそのまま体をぐつと前に乗り出し、肘を自分の膝に乗せるような姿勢になつて葵の瞳を覗き込んできた。

「知らないなんてことはないだろう？何かしら聞いているはずだぜ？

どんなことでもいいから話せ」

彼の言葉が全身を凍りつかせる。

葵は目だけを見据えられ、恐怖に思わず身を退いた。

その様子を見たウノは溜め息をつき、あっさりと葵から視線を外した。

突然のことに戸惑う葵に構わず、ウノは宝石をしまつてから体を起こして椅子の背にもたれた。

そのときちょうど窓の外の太陽がウノの頭に重なり、逆光でウノの表情は完全に見えなくなつた。

先ほどの得体の知れない恐怖がまだ全身に残つていて、葵の体を震

わせている。

ついさつきまで抱いていた警戒心や苛立ちはとっくにどこかに吹き飛んでいた。

葵は、言葉が出なかった。

肩に置かれたシエテの手に、いささか力が入る。

相変わらずの逆光の中、ウノが無造作に言った。

「まあ、気長に待つよ。ただしお嬢さん、一つだけ言っておく。どうせあんたは一生俺たちところで暮らすんだ。悪あがきしないで、早いとこしゃべっちまったほうが楽だぜ?」

ウノは立ち上がり、真っ直ぐにドアに向かった。

彼が出て行ったあとも、葵はなかなか震えを止められなかった。

第33話 捜査（後書き）

読んで下さりありがとうございました。

伊勢谷副総監は、第19話のパーティー客としてチラッと出てきた方です。

第34話 波乱

バタバタと廊下を走る足音がして、大会議室のドアが派手に開いた。「本部長!！」

そう言つて、ドアも閉めずに神原本部長に走り寄つていったのは、捜査本部のとある男性捜査員だった。

彼のただならぬ様子に、周囲の空気はにわかに緊張する。

「どうした?」

神原本部長も、きゅつと表情を引き締めてその捜査員に向き合った。捜査員は息を切らせていて、なかなか上手く言葉が出せない。

そんな中彼は、さつきから固く握りしめている一枚の紙を神原本部長に差し出した。

本部長は無言でそれを受け取り、そこに書かれている文章に目を走らせる。

すると彼は、みるみる表情を変えていった。

そんな本部長に、ようやく落ち着いてきた捜査員は説明を始めた。

「事件が発生してから、ネット上のあらゆるサイトや掲示板に目を光らせていたんですが、今日になっていきなりその文章が、警視庁のサイトに書き込まれたんです!！」

他の捜査員たちも、どやどやと本部長の周りに集まってくる。

彼の手の中の紙を覗き込んだ人々は、その第一行目を読んだだけで大きくどよめいた。

若宮グループ令嬢誘拐事件 監禁場所発見!!

先日、謎の犯罪組織によつて誘拐された若宮グループの令嬢・若宮葵さんの監禁場所らしき建物を発見した!

警察の発表によると、彼女は恐らくどこかに監禁されているとのことだ。

私は、その監禁場所らしき建物を特定した。

警察側が公開した犯人グループの似顔絵とそっくりな人物が、その建物周辺をしょっちゅううろついている。

しかも、その似顔絵とそっくりな人物は一人や二人ではない。

公開されている似顔絵の人物の、ほとんど全員を見かけた。

彼らは目撃証言通りの黒い車に乗っている。

そして時折、食料らしきものや、女性物の服の入った袋を下げて現れる。

彼らは決まって、ある建物に入っていく。

どうやらそこに、葵さんがいる模様！

そこは、都内の狭い道に面した小さなバーである。

かなり古く、営業しているのかどうかもわからないような店だ。

そんな店に、明らかに客とは思えないやつらが入り出しているわけであるから、監禁場所はそこではほぼ確定だろう。

警視庁の警察官の方々、下に地図も載せますので捜査をしてみてください。
さい。

そのように書かれていた下に、ご丁寧に地図が載せてあった。

そこは都内の、今では寂れた一角にある住宅街の外れだった。

周囲のざわめきが、最高潮に達する。

神原本部長はしばし無言でその紙を見つめていたが、やがて声を張り上げた。

「白馬警視總監と、副總監に連絡しろ！これより、この場所の捜査にかかる！！」

急な知らせで集められたいつものメンバーが、捜査本部の大会議室

に集結した。

神原本部長が、拡大印刷された問題の紙を見ながら言った。

「いたずらにしては、筋の通った目撃証言だと思います。100%信じるわけにはいきませんが、現場を確かめる必要はあります」
その言葉に、その場の全員が頷いた。

探もその中の一人だ。

彼は、かなり信憑性の高い情報に、希望を見いだしていた。
しかし、どこか引つかかる。

この文章、どこかおかしいのだ。

何か根拠があるわけではなく、完全に探の勘だが、この文章に違和感を覚えていた。

自分の頭の中で、警告が発せられているのははっきりと感じる。

だが周りの人々は、そんなこと微塵も感じていないようだ。

白馬氏が言った。

「神原、この文章が書かれたアドレスは解析できたのか？」
それを聞いて、みんなの視線が一斉に本部長に集まる。

彼は渋い顔をした。

「一応できたのですが・・・これが書かれたパソコンは、ネットカフェのものだったんです。なので、どこの誰がそれを使ったかは、店に問い合わせても結局わかりませんでした」

「そうか・・・」

探の思考が動き始めた。

ますます怪しい。

まるで、誰が書いたか知られては困るような行動だ。

だが結局最後には、全員の意見が一致した。

「例えいたずらだとしても、この地図の場所に行ってみる価値はあります。捜査員を向かわせましょう」

神原本部長の言葉で、一同が早速立ち上がったとき、本部長が付け足した。

「あと、英吾さんと探くん。あなたも一緒に願えますか？犯人の顔

をご確認頂きたい」

「わかりました」

まあ探は、頼まれなくても行くつもりだったが。

数名の捜査員が揃った。

そこには、ニユースなどでたまに見かける、捜査一課の目暮警部の姿もあつた。

警部が言った。

「新しく捜査チームに加わりました、私の部下たちです」

そう言われて、彼の側にいた若い男女が頭を下げた。

「警部補の佐藤美和子です」

「巡査部長の高木渉です」

一同は緊張した面持ちで車に乗り込んだ。

地図の場所に向かう道中、探の心には余裕が無くなっていった。

確かにあの文章は少し引つかかるが、何より葵の居場所に近づいているかもしれないと思うと、期待で胸が膨らむ。

やがて車は都心から段々と離れ、高層ビルもまばらになっていく。

そのとき、運転席の佐藤刑事が言った。

「地図によると、あの路地を入ったすぐのはずです」

いよいよ、探の緊張は最高潮に達した。

失敗は許されない。

犯人グループに気付かれないよう、慎重に行動しなければならない。

神原本部長の出した方針は、まず今日のところは現場を静観して様子を窺い、あの文章の情報が本当かどうかを確かめることだ。

一同は、路地の手前にさりげなく車を止め、慎重に辺りを見回した。そこは情報通りのさびれた場所で、遠くに見える住宅街の家々とは全く雰囲気が違う。

昔は栄えた商店街だったのだろう、古い商店が建ち並んでいる。

しかしそのほとんどは人気ひとけが無く、完全に営業を停止しているようだ。

点在する空き地にも雑草が生え、全体的に活気のない場所だった。白馬氏が指示を出す。

「ではまず、佐藤君と高木君が先に様子を見てきてくれ。他の捜査員は、周囲に聞き込みを頼む」

指示を受けた捜査員たちは神妙な面持ちで頷くと、神経を集中させてそれぞれの目的地に向かった。

中でも佐藤刑事と高木刑事の緊張は計り知れないものだった。

この二人は現場において、数々の活躍を披露している大ベテランだ。それでも今回は、何かすさまじい力を持っている組織が関わっているのだ。

今までにないほどの重圧を感じているに違いない。

しかしその気持ちなら、探たんだつて同じことだった。

本当なら探たん自らその建物に赴おもむいてやりたいところだが、ここはプロに任せる。

やつらに気付かれて、人質の葵の身に危険が及んでは元も子もないからだ。

探は拳を握りしめて、二人の刑事の後ろ姿を見送った。

同じ頃、葵のいる状況にも変化が生じていた。

にわかには地下室の上が騒がしくなり、何を言っているかは聞き取れないが、天井を通して大勢の声が聞こえてきた。

葵はまた、得体の知れない不安にさいなまれる。

そのとき、階段を降りてくる足音が響き渡った。

「・・・シエテさん！何かあったんですか！？」
だが、その葵の問いに返事は返って来なかった。
いつもの優しげな表情からは想像もつかないほどの険しい顔で、シエテは葵に向かって来る。
葵の体に、シエテと初めて会ったときに感じたのと同じ恐怖が駆け抜ける。
瞬時に逃げようと思ったが、シエテの方が早かった。
布で口を塞がれた瞬間、葵は深い闇へと墜ちて行った。

二人の刑事はぶらぶらと歩くふりをしながら、それとなく問題の建物に近づいていく。
何しろ人通りがほぼ皆無の場所なので、はたから見るとかなり目立つ。

そのため佐藤刑事と高木刑事は、途中に自動販売機に立ち寄りたりしてカモフラージュしながら歩いて行った。
表情に出さずに、小声で言葉を交わす。

「佐藤さん、とりあえずその角にしばらく隠れましょう」

「そうね」

二人は自販機で買った缶コーヒーを片手に、廃ビルの角に身を隠した。

そこから問題の建物までの距離は、50メートル弱だ。
佐藤刑事が無線に口を近づける。

「こちら佐藤。問題の建物、確認しました。シャッターは閉まっています。やはりバーのようです」

少々の雑音と共に、白馬氏の声が聞こえてきた。

『了解。そのまま観察を続けてくれ』

刑事二人は、より一層警戒心を強めた。

「建物は一階建てで、周りの建物よりは比較的新しいわね」

高木刑事も同調する。

「そうですね。こうして見ると何の変哲へんてつもないですが」

そのまましばらく観察を続けたが、辺りで何かが動く気配はなかった。

緊張がほんの少し緩ゆるんだ高木刑事はふと、些ちひ細な疑問が浮かんだ。

「そういえばあの情報を書き込んだ人、『犯人グループにそっくりな人たちがしょっちゅう出入りしている』って書いてましたけど、しょっちゅうってことは、その人もかなり頻繁にここへ来て、犯人グループを目撃してるってことですよ？なんでこんなところに来るんでしょう？」

その言葉に、佐藤刑事も不思議そうな顔になった。

「確かにそうね。考えられるのは、その情報提供者がこの周辺の住民か、もしくはたまたま一度やつらを見かけてから気になって、ここまで様子を見に来たり尾行したりしてたってことだけど・・・」

だがそこで、佐藤刑事は言い終わらないうちに口をつぐんだ。

それを感じ取って、高木刑事も息を潜める。

バーに近づいていく人影を発見したからだった。

その人影は、真っ直ぐにバーに向かって歩いて行く。

側には黒いワゴンが停めてあった。

「こちら佐藤！ たった今、一人の人物がバーに近付いています！！」

側には目撃証言と一致する黒いワゴン！」

その声が無線から聞こえてきたとき、探は飛び上がらんばかりだった。

確実に、犯人たちに近付いている。そう確信した。

探は、父から無線を半ば強引なかに受け取ると、息せき切って話しかけ

た。

「どんな人物かわかりますか!？」

すると、すぐに返事が返ってきた。

『はい!髪を後ろで束ねた女・・・いえ、男です!長髪の男です!』
すると、今度は英吾が無線に言った。

「サングラスをかけていますか!？」

しばらくの間のこと、はっきりとした返事が聞こえた。

『サングラス、確認しました!たった今、バーのシャッターの横の
ドアから中に入って行きました!!』

それを聞いて、一同の空気が張りつめる。

「・・・クワトロだ・・・」

英吾が、憎々しげにその名を言った。

探が言葉を継ぐ。

「間違いありません。やつは実行グループの中にいた、クワトロで
す」

それからしばらく言葉が出なかった白馬氏に代わり、伊勢谷副総監
が指示を出した。

「佐藤君、高木君、そのまましばらく観察を続けてくれ。何かあつ
たら報告するように」

『了解しました』

一同は、捜査本部の神原本部長と連絡を取り合いながら今後につい
て話し合っていた。

周囲に聞き込みに行っていた残りの捜査員も呼び戻された。

「これからどうします?」

伊勢谷副総監が言った。

白馬氏が携帯電話の通話を切り、それに答える。

「一応、神原に報告した。そのまま、決定的な証拠を見つけるまで

観察してほしいそうだ」

そのとき、再び無線から声がした。

今度は高木刑事だ。

『こちら高木！今、さっきの男が出て来ました！今度はワゴンから、荷物を出しています！どうやら、食料と思われます！！』

「高木君！他には誰か側にいるか！？」

伊勢谷副総監が尋ねると、すぐに返事があつた。

『いいえ、一人です！あつ！またバーに入つて行きました！！』

それを聞いて、周りの捜査官たちがどよめく。

白馬氏はまた携帯を出して、神原本部長に電話をし始めた。

探が言う。

「葵さんがあそこにいると見て、ほぼ間違いないと思います」

伊勢谷副総監も頷く。

「そつだろつな。よし！佐藤君、高木君、一旦戻つて来てくれ！」

『了解！』

しばらくして刑事二人が戻つて来たとき、白馬氏が言った。

「神原と相談した。これから私と伊勢谷君、それから探と英吾の4人でバーに接近する。他の仲間が出て来たときの、顔の確認のためだ」

少し上ずつたその父の声を聞いたとき、探は英吾が自分の横で身を固くするのを感じた。

探も、今までにないほどの緊迫感に襲われる。

とうとうここまで追い詰めた・・・！！

数分後、4人は先ほど佐藤刑事と高木刑事が潜んでいた建物の角にいた。

状況は先ほどと変わっていない。

クワトロはバーに入ったきり、出て来ていない。

他の仲間が現れる気配もなかった。

そのまま数十分が経ち、全員がしびれを切らしかけていたときに、白馬氏が意を決して言った。

「よし……。ばらばらに散って、もう少し近付いてみよう」

他の3人は無言で頷き合つと、慎重に歩を進めた。

探は道を渡つて反対側の建物の影に入った。

すぐ後ろには、英吾もいる。

しばらくその状態で待機していたが、唐突に英吾が口を開いた。

「探君……。葵は、あそこにいると思うか？」

それを聞いて、探は思わず振り返った。

英吾が、複雑な表情で探を見ている。

『葵』という名前を聞いて、探は彼女へ思いを馳^はせた。

春の日だまりのような笑顔、南風のような笑い声……

そんな彼女の温かさを、すぐ近くに感じるような気がする。

葵があそこにいるというのは、今の時点でははっきり言って、断言できない。

だが探は心の中で、葵の気配を確かに感じ取っていた。

勘のようなものだが。

それは探偵の勘ではなく、大切な人を思うがゆえに芽生えたものだった。

勘と言うよりは、『つながり』だ。

自分と葵は、二人で一つ。

だから、相手が側にいれば何となく感じるのだ。

探はそれに気付き、はっきりと英吾に言った。

「はい。必ず」

だが、英吾がその探の返事に言葉を返そうとしたときだった……

ドオオオオンッ

一瞬周囲が紅く照らされたと思ったら、次の瞬間すさまじい爆音が辺りに轟いた。

耳をつんざくようなその音のあとには、衝撃波が襲いかかる。探は何が起きたかわからず、とっさに頭をかばった。

強烈な爆風に、何とか踏ん張って体勢を保つ・・・

ようやく辺りが落ち着きをとりもどしたとき、探は顔を上げた。そこには、衝撃的で信じがたい光景が広がっていた。

辺り一帯に、焦げくさい臭いが漂っている。

そんな中探の目は、前方にもうもうと立ち昇る黒煙をとらえた。

その煙は、50メートルほど先、そう、ちょうど例のバーがあるあたりから上がっている。

探は唾然と、その光景を見つめた。

次々に吐き出される黒煙は、おさまる気配がない。

背中にゾクリと嫌なものが走り、探は我に返った。

・・・まさかっ・・・！！

探はその場所に向かって、一目散に駆け出した。

空気の中に混じったちりやほこりが、容赦なく目や喉を襲う。

だが探はそんなことに構わず、ただ目的地に向かって突進した。後ろから英吾や父、伊勢谷副總監の怒鳴り声と足音が聞こえる。探は心の中で、祈るように葵の名を呼んだ。

探の嫌な予感は的中した。

先ほどまで寂れたバーがあつた場所は、視界も開けないほどの黒煙に覆われていた。

辺りにはガラスの破片や、黒こげになつた何かの欠片のようなものが散らばっている。

煙の合間からちらちらと覗く建物の壁は、ぞつとするような漆黒だった。

探はその場に、呆然と立ち尽くした。

全ての感情が、一切消えた。

英吾たちや、騒ぎを聞きつけて飛んで来た他の刑事たちも同じだった。

探が、葵がいると信じていたバーは、一瞬で爆破されたのだ。

そのとき、虚ろな探の瞳に人影が映つた。

たちまち探の頭は、思考を再開する。

バーの隣の建物の屋根に、ウノがいたのだ。

彼は身じろぎもせず、そこにたたずんでいる。

笑いもせず、探を挑発するような態度も見せず、ただ探だけを見据えていた。

その鋭い眼光が、探を突き刺す。

だが探も、負けないくらいの憎しみの眼差しをウノに向かって放つた。

それに気付いた英吾が、探の視線を追ってからつぶやいた。

「……ウノ……!!」

そのときだった。

また、ものすごい音がし始めた。

だが今度は先ほどとは違って長く続き、そして段々と大きくなってくる。

一同の頭上に、立ち昇る黒煙にも劣らないほど真っ黒なへりが現れた。

異常な光景に、その場の全員が言葉を失った。

そのへりがウノの頭上で停滞したかと思うと、機体から縄ばしごが垂れ下がった。

ウノがたくましい腕でその縄ばしごにつかまると、へりは再び動きを再開した。

爆破現場の周りに集まる人々を嘲るあざけように、そのへりは周りの屋根ギリギリまで高度を落とした。

一同の頭上を大きく旋回する。

激しい強風が吹き荒れ、その風圧で誰一人としてまともに顔を上げていられなかった。

狂ったように髪が暴れ、服の裾がばさばさと音を立てている。

飛ばされないよう必死に足を踏ん張り、頭をかばう。

そんな中で一瞬だけ目を開けて顔を上げた探は、へりの中に葵の茶色い髪を見たような気がした。

だがすぐに視界は阻まれ、二度と顔を上げられなかった。

ようやく風が止み、へりの音が遠くに去ったとき、探たちは上空を仰いだ。

音を頼りに首を回すと、遙か遠くの空に先ほどの黒い機体が浮かんでいるのが見えた。

沈黙の中、真つ先に現実的に戻ったのは伊勢谷副総監だった。

「私の部下に、すぐさまへりを追わせませす！」

それを合図に、他の警察官たちもそれぞれの役割を果たすために動き始めた。

「捜査本部に連絡してきます！」

「私は目暮警部に、この爆発の捜査を頼んできます！」

「念のため、周りの住人を避難させましょう！」

そんな声が飛び交う中、探はただ立ち尽くしていた。

隣にいる英吾も、うなだれているのが見える。

忙しく響く周りの声が、探には遠く聞こえた。

探は、がっくりと膝をついた。

あと少しだったのに・・・

やつらのほうが一枚上手だった。

一体どこから、自分たちがここに来るといふ情報が漏れたんだ！？
せっかくここまで来たのに・・・！！

やっと・・・やっと大切な人を助けられると思ったのに・・・！！

固い地面に、何度も何度も拳を叩きつける。

落ちていたガラスの破片が刺さり、血がにじむ。

だがそんな痛みなど、今の探の心が引き裂かれる痛みにかき消されてしまった。

探は天を仰いで、声の限りに叫んだ。

「くそおっ・・・くそおおおおお

っ

空は、彼をあざ笑っていた。

第35話 慟哭（前書き）

慟哭とらうく…大声で泣き叫ぶこと。

第35話 慟哭

「どういうことですか!？」

捜査本部に、探の罵声はなこゑが響く。

彼は、今にも伊勢谷副総監につかみかからんばかりに怒り狂っていた。

その様子を、冷たい目で見つめる神原本部長……。

「どうしてあんな目立つへりを見失うんですか!？すぐに部下に追わせたのでしよう!？」

そろそろ危なくなってきたため、白馬氏が探を抑える。

「探……!仕方ないことだ。また捜査し直そう」

だが、誰に何と言いつけられても納得できない。

今の状況は、普通では考えられないことだったからだ。

問題のバーが爆破されてへりが飛び去ったあと、そのへりの行方がわからなくなっているのだ。

伊勢谷副総監が現場ですぐに部下に指示して追跡させたのだが、警察側はそのへりの姿をろくに確認できないうちに見失ってしまった。あのへりは明らかに手が加えられ、機体全体が真っ黒に塗られている。

その表面に日の光が反射して黒光りした姿は、まさに『光り輝く闇』である。

一体どこから飛んできたかはわからないが、あんなに特殊で目立つへりをそう簡単に見失うなんてありえない。

探はそんな思いで頭の中を埋め尽くされ、冷静になれなかった。

何とかその場はおさめ、一行は捜査に戻った。

そんな中、探は捜査本部を出た。

探はやり場のない怒りで壊れそうになりながら、あてもなく歩く。

そのとき椿が現れ、声をかけられた。

「探さん。・・・手当てしますから来て下さい」

そこで初めて、探は自分の左手の傷をまともに見た。

そんなに深い傷ではないが、意外と多く出血したようだ。

左手の指や甲に、乾いた血がたくさんついている。

探は無言で、椿について行った。

探が出て行ったあとの大会議室では、白馬氏と神原本部長、それに伊勢谷副総監が話し込んでいた。

「総監……。息子さんを悪く言いたくはありませんが、探君は我を忘れているようです。あのような取り乱した行動は、はっきり言うて捜査に差し支えます」

神原本部長が強く言い切ったあと、伊勢谷副総監が溜め息をついた。「すまない神原君。私の部下がもっとしっかりしていれば良かっただけの話だ。総監も、本当に申し訳ありません」

だが、尚も神原本部長の攻撃は続く。

「副総監、それは仕方の無かったことです。私が言いたいのはそんなことではなく、探君の捜査にあたる姿勢が問題なのです」

すると白馬氏が、困り果てた表情で言った。

「うちの息子が、申し訳ない。今まであいつが手がけた事件ではこんなことは無かったんだが、やはり葵さんが被害者だと感情的になつてしまうようで・・・」

それを聞いて、神原本部長はあからさまに迷惑そうな顔をした。

「彼の推理力だとかはよくわかりませんが、どうも私は『探偵』というものを信用しきれないんですよ。捜査のことなんかろくに知らないくせに、警察の顔を潰すようなことを勝手にやらかしますから。今までの息子の数々の失敗を思い出し、白馬氏は頭が下がる思いだった。」

神原本部長の言う通りだ。
探は少し、頭を冷やす必要がある。

医務室で、探は手当てを受けた。

傷口を洗い、消毒をしてから清潔な包帯を巻く。

椿はその作業を、表情を変えずに淡々とこなしていく。

そんな静かな時間の中、探は怒りが段々と鎮まっていくのを感じていた。

「できました」

「ありがとうございます」

探と椿は形だけの言葉を交わした。

だが、尚もお互いにその場を立ち去ろうとしない。

息がつまるような沈黙の末、先に探が口を開いた。

「椿さん、あなたは宝石のことを何か聞いていませんか？」

探は、そんな質問しか思い浮かばなかった。

案の定、椿は溜め息をついた。

「それは、何度も警察の方にお話ししたじゃないですか。私は何も

知りません。この事件が起きるまで、あれが宝石だなんて思ってさ

えいなかったんですから」

「そうですね・・・」

探は、それ以上何も言えなかった。

再び、気まずい沈黙が流れる。

探はその空気に耐えられなくなり、そそくさとその場を立ち去ろう

としたときだった。

彼が立ち上がったと同時に、急に椿が話を再開させた。

「でもまあ、宝石のことは知らなくても、組織のことなら多少知ってますけどね」

その言葉に、探は突っ立ったまま硬直した。

椿の言葉が意外だったからそうなったわけだが、その他にももう一つ理由があった。

それは、椿の口調がさっきとはまるで別人だったからだ。

探は、呆然と椿を見つめた。

長身の探が立った状態では、椅子に座る椿の表情はほとんど見えな
い。

ただ、彼女の長いまつ毛だけが、微動だにしないでそこにあった。

探は注意深く椅子に腰を下ろすと、警戒しきった目で椿を睨んだ。

「・・・どういことですか？」

椿は、そんな探の視線を受けても平然と視線を返してきた。

「多少、組織のことは知ってます。あなたと同じくらいですけどね。

お父様が、あなたに話したのと同じことを話して下さっただけのこと

とです。警察関係者なら誰だって知ってることでしょうか？」

椿は、探を見下すように言い切った。

探は、一層警戒心を強めた。

なんでわざわざそんなことを言ったんだ？

彼女は一体、何を考えているんだ？

探の頭の中で、思ってもみなかった考えが駆けめぐる。

今回、問題のバーを捜査に行くことは極秘だった。

なのに組織のやつらは、まるで初めからそれを知っていたかのように

にまんまと逃げおおせたのだ。

考えたくはないが、誰かが情報を流したとしか思えない。

そう、内部の誰かが・・・。

もはや、身内を疑わなければいけない状況なのだ。

この椿だって、裏切り者の可能性がある。

探がめまぐるしく思考をめぐるさせている間も、椿はひょうひょうと彼を見つめていた。

その顔は、姉を拉致されて悲しみのどん底にいる少女の顔ではなかった。

探は大きく音を立てて、荒々しく椅子から立ち上がった。

「・・・失礼します。手当て、ありがとうございます」

そう言い捨てると、早足で医務室を出る。

その扉を閉めたあとでさえ、彼は背中に椿の鋭い視線を感じていた。もう誰も信用できない。

人はその姿の中に、どんなに黒い悪魔の心も隠すことができるのだ。そんな不安が、じわじわと心をさいなんだ。

探は早足で歩きながら乱暴に左手の包帯をほどき、近くにあったゴミ箱に放り込んだ。

探が出て行ったあとの医務室では、さっきとは正反対の表情をした椿が取り残されていた。

探に向けていた挑戦的な顔は、今は悲しみに埋め尽くされている。

彼女は力無く椅子からずり落ちると、床に突っ伏して大声で泣いた。

探は仮眠室で、ほとんど気を失うようにして眠った。

夢も見ないほどの暗闇の中をさまよう。

どれほど時間が経っただろうか、彼は自分を呼ぶ声で目を覚ました。

「探さんっ」

目を開けると、そこには今にも泣きそうな顔をした椿がいた。

「早く来て下さい!!」

まだ頭は目覚めきっていないが、先ほどとは全く違う様子の椿を見て、探は驚くと同時に瞬時に警戒した。

あんなやりとりがあつたあとなのだから、当然である。

しかし椿の次の言葉で、探のそんな警戒心はどこかへ吹き飛んでしまった。

「さつき捜査本部に連絡が入って、ヘリがっ……黒いヘリが、墜落していたそうなんです!!」

探は大会議室に飛び込んだ。

その場の視線が、一斉に探に集まる。

だがそんなことは気にも留めず、探は真っ直ぐ会議室の前方に向かった。

その視線の先には、神原本部長がいる。

彼と目が合うとすぐ、探は言った。

「ヘリが見つかったというのは本当ですか!？」

本部長は探から目を逸^そらして答えた。

「ああ。そう遠くない山中で墜落していた。1時間ほど前に地元の人から通報があつて今、県警が捜査しているが、報告を聞く限りまずあのヘリに間違いはない」

探は、震える声で再び聞いた。

「それで……それで、その周辺に遺体は……?」

尚も本部長は目を逸らしたままで言った。

「そのような報告は、今のところない」

それを聞いて、探はひとまず安心した。

葵を含め、少なくとも乗っていた人は生きている。

組織のやつらは、きっと警察に見つからないうちに自力でどこかに逃げたのだろう。

だが、そんな探の考えは甘かった。

よく見ると、側で英吾が床に座り込んでうなだれている。

不思議に思った探が、彼に声をかけようとしたときだった・・・

「ということで、これより捜査方針を切り替える！みんな、『残り』の犯人たちの逮捕に全力を尽くそう！！」

・・・え？

探は本部長に言った。

「ちょ、ちょっと待って下さい！！葵さんの救出はどうなるんです！？」

だが、本部長は探をはねのけるように言い放った。

「その必要はない。もう、彼女を助けることはできないんだ」

探は、訳がわからなかった。

尚も問い詰める。

「どうしてですか！？彼女はまだやつらのところに居るんですよ！？」

探は、父に助けを求めようと振り返った。

だが白馬氏は、悲しげに目を伏せているだけだ。

そのとき本部長の眼差しが、探を哀れむようなものになった。

「君は、まだ彼女が生きっていると本気で思っているのか？」

探は、頭の中が真っ白になった。

思わず、自分の耳を疑う。

だが何度考えても、本部長の言いたいことは明らかだった。

声が出ない探に、本部長は続けた。

「バーの爆破の状況はひどく、中にはほとんど何も残っていないかったそう。人がいたかどうかもわからない。それで生きているわけがないだろう」

探は、何とか声を出した。その声は上ずっていた。

「でも、僕はへりに葵さんが乗っているのを見ました！だから、あの爆発には巻き込まれていないはずですよ！」

だがそれを聞いても、神原本部長の表情は変わらなかった。

「ああ、それなら副総監も見ただろう」

本部長の横で、伊勢谷副総監がためらいがちに頷く。

それを確認してから、神原本部長は続けた。

「それにしたって、彼女は生きていない。へりは墜落したのだから」

探は、全く理解ができない。

本部長の口から出る言葉が全て、探の頭の中では筋が通らないのだ。

「でもその墜落現場に、遺体は無かったんでしょ！？だったら生き延びているはずじゃありませんか！！」

しばらくの間のあと、神原本部長は突き放すように言った。

「君は探偵だからな」

また、訳のわからない言葉が発せられた。

探は、おさまっていた怒りが再びこみ上げてくるのを感じた。

「どういうことですか？」

本部長の口調が、いきなりきつくなった。

「君は探偵だから、殺人現場しか知らないと言っているんだ！！現場に死体が無かったら事件ではない。それが探偵だからな！！」

「何が言いたいんですか！？はっきり言って下さい！！」

負けじと声を張り上げた探を、神原本部長は憎々しげに睨む。

しばらくそのまま睨み合いが続いたが、本部長は唐突に深呼吸した。

「では、はっきり言おう。墜落していたへりの機体の損傷は激しく、あとかた跡形もない。焼けてしまっているんだ。そんな現場には、例え死人

「がいたとしても、死体は残っていない」

その言葉が、探の全身を貫いた。頭をとてつもなく固く重いもので殴られたかのような衝撃が走る。

探は、墜落したへりに誰の遺体もなかったと聞いて、単純にみんなが助かったのだと認識していた。そんなに派手な事故ではなく、何かのトラブルで不時着した程度だろうと。

だが、そうではなかった。

事故現場は、大惨事だったのだ。

遺体がない

それが意味すること。

つまり、遺体も残らないほど悲惨な事故で、生存者などいるはずがないということである。

機体が原形をとどめていないほど損傷が激しいという事実が、何よりの証拠である。

隣りで、椿の慟哭うういきくの音が聞こえた。

彼女は金切り声で何か叫びながら、泣き崩れている。

その声以外、探の耳には何の音も入って来なくなった。

目の前が真っ暗だ。

探は、ただ立ち尽くしていた。

そんな・・・

彼女が死んだなんて

そんなこと・・・

そんなこと・・・

探の脳裏に、葵の笑った顔が甦る。

もう彼女がいないなんて

彼女が、死んだなんて・・・

そんな・・・

カミサマ・・・！！

第36話 椿

なぜ・・・

なぜですか・・・？

どうして逝ってしまったんですか？

こんな別れ方、惨^{むじ}すぎる

こんな別れをする運命だったなら

最初からあなたに

出会わなければよかった・・・

椿の慟^{なげ}哭^{なき}が、耳の奥で聞こえる。

もう、それ以外の音は全く聞こえていなかった。

冷たい氷が心を凍らせ、麻痺させていく。

感情も消えていった。

目の前の景色も、色を失っている。

探は意識が遠のき、よろけた。

探は夢を見た。

突然、そこにいた。

真っ黒な海。

辺りを見回しても、船も無ければ陸も無い。空さえ無かった。

海に浮かんでいるはずなのに、そんな感覚も無い。

水の冷たさも、波の揺れも、全て無機質だ。

探は広大な海の真ん中で、途方に暮れた。

彼は、たった一人だった。

目が覚めると、そこは海ではなかった。

どこかで見たような天井が、ぼんやりと見える。

何かに横たわっている感覚もある。

その温かみもちゃんと感じる。

「探、大丈夫？」

そう声がしたほうへ目を向けると、悦が心配そうな顔でこちらを見ていた。

意識がはっきりしてきた探に、悦が話してくれた。

「探は捜査本部で倒れちゃって、この病院に運ばれてきたの。私は、看病を頼まれて来た」

それを探は、ぼんやりと聞いていた。

全く覚えていない。

葵のことを聞いてから何も考えられなくなって、そこから記憶がない。

悦が続ける。

「椿さんもひどく錯乱してしまって、運ばれてきたわ。探と一緒に精神安定剤を注射された」

探は何も答えなかった。

一応話は聞いているものの、その言葉は耳から入るだけで、頭まで届かなかった。

彼はただ、葵のことだけを考えていた。

この世で一番大切な人。

いや、大切だった人……。

そんな探の様子を見て、悦は言った。

「探、私は、葵さんは絶対生きてると思う。だから、もう一度捜査しましょう?」

そう言つて探の瞳を覗き込んで来た悦を見て、探の心は再び深い悲しみにさいなまれた。

悦の同情の顔が、たまらなく辛い。

自分を気遣うためだけの、気休めの言葉なんていらぬ。

探は吐き捨てた。

「同情でものを言わないでくれ」

それを聞いて、悦の表情は引きつった。

「ち、違つわ! 同情なんかじゃ」

「だったら、彼女が生きている証拠を見せてくれ!」

そう叫んだ探の勢いに押されて、悦は俯いて黙りこくった。

その沈黙が、探にはありがたかった。

何も言わないでいてくれた方が、よっぽどマシだ。

だがその沈黙が、より一層探の悲しみを増大させる。

探は、声を出さずに泣いた。

それからしばらく、生きた心地がしなかった。

葵が死んだということが信じられない。

信じたくない。

だが、心の奥ではわかっていて、彼女の死を悲しんでいる自分もいるのだ。

混沌とした世界に、探は身を置いていた。

周りの景色が勝手に動く中、探だけはじっとそこにたたずんで、ひたすらに涙を流す。

そんな状態が続き、探はそのまま病院に入院していた。

葵の死の知らせから数日後、父が病室にやって来た。

ここ最近で、一気に年をとったように見える。

顔中に深い皺が刻まれ、白髪も増えていた。

いつものような陽気な笑顔など、もちろんどこにも見当たらない。

彼は探が横たわるベッド脇の椅子に腰を下ろすと、一つ溜め息を付いて言った。

「・・・どうだ？体調は」

だが探は、父を見ようともしない。

ただ、色のない天井を見つめているだけだ。

それでも、白馬氏は話し続ける。

「椿さんは、お前よりひどい状態だ。しょっちゅうパニックを起こして、誰も手が付けられん。英吾も、毎日泣いているよ」

探の耳に入るその声は、彼の乾燥しきつた心に何の感情も起こさせない。

「ヘリの墜落現場の捜査が終わった。機体は、破片しか残っていないほど損傷していて、黒く塗られる前がどんな模様のヘリだったか、

特定は不可能だそうだ」

白馬氏は、あえて葵や生存者の話は出さない。

ひたすら無表情な探に、彼は言葉を詰まらせながら言った。

「探・・・神原からの指示だ。・・・お前は、捜査本部から除名になった」

ああ、やっぱりな。

神原本部長とは意見が合わなかったから。

当然のことだ。

別に今さら、何とも思わない・・・。

探は、ただそう思ったただけだった。

相変わらず、何の反応も見せない。

それを見た白馬氏は、再び溜め息をついた。

沈みゆく夕日が、病室を血のように紅く染めている。

日の短い冬の日が、また今日も、終わりを告げる。

探は目を閉じた。

その夜。

消灯時間をとつくに過ぎた暗い病院の廊下を、誰かが歩いて行く。

ひたひたと足音を忍ばせ、音もなく目的地に向かう。

その人物が廊下の角を曲がったとき、前方にある一角が見えてきた。妙に明るい、不気味な緑色のライトに照らされた公衆電話が、整然と並んでいる。

その人物は一番奥の電話に進み、受話器を取った。

小銭を入れて番号を押し終えると、すぐに聞こえる呼び出し音。3回のコールのあと、相手が電話に出た。

『もしもし?』

『もしもし。今、病院から掛けてます』

その声に、受話器の向こうの人物が答えた。

『ああ、君か。何でまた病院から?』

『発信履歴が残ったらまずいでしょう?』

その答えに、電話の相手が苦笑する声が聞こえた。

『さすが、君は慎重だな。ところで、用件は?白馬探のことか?』

そう言った最後の一言は、口調が真剣だった。

『はい。彼は、完全に打撃を受けてます。毎日放心状態ですよ。捜

査本部からも除名されましたね』

相手が、いかにも嬉しそうに言った。

『そうか。作戦は、どうやら上手くいっているな。そのまま監視を

続けてくれ。また、何かあったら報告を頼む』

『わかりました。おやすみなさい』

そう言って、二人はお互いに電話を切った。

受話器を置いたその人物は一息吐いてから、再び暗い廊下を戻って行った。

次の朝。

探は突然、ある感情に襲われた。

彼はふと、自分の腕にうつすらと残っているアザに目を留めた。

それは葵が拉致されたあの日、組織の連中に攻撃されたときの傷だった。

それを思い出した瞬間、探の胸に、熱く突き上げるような怒りが込み上げてきた。

自分の大切な人を奪った、憎き連中。

彼らの悪意に満ちた笑い顔が、自分の心を真っ黒に侵してくるよう感じた。

許せない。

探の怒りは頂点に達した。

大切な人を奪われ、どこまでも深い悲しみの果てに来たのは、涙が出るほどの怨みだった。

探はじつとしていらなくなつて、病室を飛び出した。

どこへ行くわけでもないが、とにかく足を動かす。

怒りに身を任せ、彼はすさまじい形相であってもなく歩き続けた。

葵が死んだからといって、捜査は終わりではない。

誰よりも憎い犯人たちを逮捕しなければ、気が済まない。

そんなことを考えていると、探はたまたま椿の病室の前に来た。

中から、悦らしき女性の声が聞こえる。

結婚式で事件が起きた日から、五条家は責任を感じてしばらく姿を

見せていなかったが、最近では悦が探や椿の見舞いや、簡単な世話を

をしてくれているのだ。

何やら、悦は叫んでいるようだ。

ドアに近付くと、言葉が聞き取れた。

『椿さん！！大丈夫、大丈夫だから落ち着いて！！』

その声を掻き消さんばかりに、椿の絶叫のような泣き声も聞こえる。

探は父の言葉を思い出した。

椿もひどくショックを受けて、精神的なパニック症状を起こしているのだ。

最愛の姉を亡くしたんだから、当然である。

探は、黙ってその場を離れた。

しばらく、病院内を歩き続けた。

その間、探はこの間の椿の様子を思い出し出していた。

探に包帯を巻いたあと、不審なことを言った椿。

その表情は、冷酷ささえ感じたほどだ。

しかし今の彼女の様子では、きつと探の思い過ごしだと思おうしかなかった。

彼女が裏切り者なわけがない。

そんな結論に達したときだった。

前方の脇道から椿が現れ、探と同じ方向に向かって歩き出した。

探は思わず、跡を付ける。

彼女はしばらくして角を曲がった。

探は記憶を辿る。

この角を曲がった先は、確か・・・公衆電話？

その通りだった。

椿は探に背を向けたまま、その一番奥の電話に歩み寄る。

探は、角から静かに見つめていた。

彼女は、何度も掛け慣れているように素早くボタンを押し、受話器を耳に当てた。

公衆電話と言っても、路上のように電話ボックスの中にあるわけではない。

電話がいくつかむき出しで並んでいるだけだ。

周りに誰も人がいなかったことも手伝って、椿が「もしもし。椿です」と言った声は十分聞き取れた。

椿が言う。

「また、病院から掛けてるんですけど・・・はい。・・・はい。大丈夫です。バレてません」

探はぎょっとした。

バレていない？一体何のことだ？そもそも、電話の相手は一体・・・？

更に椿は、怪しげな会話を続けていく。

「で、そっちはどうですか？・・・そうですね。・・・はい。じゃあ、作戦は順調だと思っただけいいんですね？」

探の胸に、最も嫌な疑念が湧いてきた。

ついさっき、その疑念は否定したばかりだと言うのに・・・。

だが樫の次の言葉で、探の疑念は確信へと変わった。

「・・・はい。・・・ええ。まあそうですね。周りは、私が本当にシヨックを受けて錯乱していると思っただけですよ。なかなか疲れる演技ですけど。・・・しょうがないですね。へりが墜ちることは予想外だったんですから」

探は、身を潜めていた角から出た。

真っ直ぐに、樫の方に向かって歩いて行く。

その足音に気付いた樫が、探を見た。

立ち止まった探が静かに言う。

「あなたが、裏切っていたんですね？ずっと、組織の人間の人として僕たちを利用していたんですね？」

それを聞いて驚いた様子も見せず、樫は受話器に向かって淡々と言葉を送った。

「今の私たちの会話、白馬探に聞かれました」

樫のその言葉に、受話器の向こうの相手が何か指示を出しているようだ。

樫はしきりに返事をしている。

その間、探と樫は激しく睨み合っていた。

「わかりました」

そう言つて、椿は受話器を戻した。それと同時に、探が言葉を発する。

「今まで、全て演技だったんですか？僕たちのことを応援してくれて、いつも力になってくれていたのに・・・それも全部、演技だったんですか！？」

椿はその場にじっと立ち、表情を変えずに探を見ている。探が続けた。

「あなたは、お姉さんが誰よりも大切だったんじゃないんですか！？葵さんが死んだのに、どうして組織なんか居られるんですか！？」

椿は無表情のまま、何も答えない。

その中でただ、彼女の目だけは、探を射抜くように鋭かった。再び睨み合つたまま、沈黙が流れる。

探は、怒りに我を忘れていた。

目の前にいる椿が、この世で一番許せなかった。

仲間のふりをしていながら、実は組織のスパイとして自分たちを心の中であざ笑っていたのだ。

そして何より、大切な家族の死を、平気で受け流せるなんて・・・！

ようやく、椿が口を開いた。

「私は何があつても、組織を抜けるつもりはありません」

その言葉は一見、感情が込もっていないように聞こえたが、一言一言に燃えるような信念の固さが宿っているのを、探ははっきりと感じ取った。

憎々しげに椿を睨みつける。

もう本当に、誰も信じられない。

いや、信じたくない。

探が今までの人生で、心の中に積み上げてきた様々なものが、音を

立てて崩壊した。
信頼、結束、安心、そして、仲間……

「白馬探に、バレたか……」

椿に指示を出した人物が、携帯電話を切りながら呟いた。

「まあ、いい。どうせ彼は、捜査本部から除名されているんだ」
彼は口元にあざけり笑いを浮かべた。

大した問題ではない。

作戦は、全て順調だ。

やはり椿を味方に付けたのは正解だった。

自分で自分に満足し、彼は一通り高らかに笑った。

さあ、ここからが勝負だ。

神原本部長は表情を引き締め、捜査本部に戻って行った。

第37話 黒幕

探と椿は、お互いを油断無く観察し続けていた。

椿の矢のような眼差しに負けられないように鋭く視線を返しながら、探は必死で頭を回転させる。

これからどうする？

椿を捕まえて組織のことを洗いざらい吐かせるか？

だがさっきの言葉を聞く限り、そう簡単に話してはくれないだろう。それに、バレたというのにこの余裕。

組織には、何かとてつもなく強い切り札があるのかもしれない。

下手に手を出したら、組織が何をしてくるかわからない。

結局解決策が見つからないまま、探は椿から目を離さないことしか出来なかった。

そんなときだった。

いきなり椿がうずくまり、大声を上げた。

その声はやがて悲痛な泣き声に変わり、二人が今いる廊下よりはるか遠くまで響き渡った。

いきなりのことに、探は戸惑いで呆然と立ち尽くす。

すると背後から、女性看護師の声が聞こえてきた。

「椿さん、どうしたの！？大丈夫！？」

その看護師は探の横をすり抜け、泣き叫ぶ椿に駆け寄った。

何だ何だ、と他の患者や看護師も集まってくる。

「椿さん、病室に帰りましょう」

そう言って看護師は何とか椿を立たせ、肩を支えて歩かせ始めた。尚も、狂ったように泣き続けている。

二人が探の横を通り過ぎたとき、その看護師は探に冷たい視線を投げかけてきた。

だが、そんな視線を受けても、探は椿しか目に入っていなかった。何となくわかった。これは椿の演技だと。

椿がこの状況で探から逃げるための作戦だと。

探は急いで言った。

「待って下さい！椿さんを連れて行かないで下さい！！」

だが、椿と女性看護師は振り向きもしない。

仕方なく、探が二人に駆け寄ろうとしたときだった。

「待ちなさい！」

そう言つて、目の前に男性医師が立ちはだかった。

探は構わず椿を連れ戻そうとしたが、その医師に腕を掴まれてしまった。

「離して下さい！今、彼女を逃がすわけにはいきません！」

探は必死にもがいたが、医師は腕の力を緩める気配がない。

「彼女は精神的に不安定な状態なんだ！君が何か言ったから、またパニックを起こしたんだろう！？」

だが、探はそんな声など全く耳に入っていなかった。

看護師に付き添われた椿はどんどん遠ざかり、やがて角を曲がって見えなくなってしまった。

探も強制的に病室に連れ戻され、さっきの医師に説教をされてしまった。

彼は椿の主治医で、ここ最近椿の診察をしていたらしい。

彼女は今、とにかく心を安静に保たなければいけない。

さっきは、探が何か彼女の心を乱すようなことを言ったと、彼は思い込んでいたようだった。

延々とも思える説教の間も、当然ながら探は全く反省の色を見せなかったし、しきりに椿の病室に行こうと試みていたため、医師が去ったあと探の病室の前には見張りが付けられてしまった。

探は仕方なく、これからのことに必死で思案をめぐらせるしかなかった。

どれくらい時間が経っただろうか。

日が傾き始め、探の思考にも限界が来ていたときだった。廊下をバタバタと走る足音が聞こえたかと思うと、ものすごい勢いで扉が開いた。

外の見張りの病院スタッフが止める声になど気にも留めないで、血相を変えた悦が病室に入ってきた。

数歩も歩かないうちに、彼女は唾然としている探に向かって言った。

「探、大変なの！椿さんが、いなくなつた……！！」

探と悦は、あちこち走り回って椿を探した。

もちろん病院の人たちも総動員されたが、結局見つからなかった。看護師や悦の話だと、椿は探との一件のあと病室に戻り、しばらくさっきの女性看護師に付き添われていたらしい。

しばらくすると椿が寝入つたので、看護師は病室を後にした。

数時間後、悦が病室に来てみると、椿の姿は忽然と消えていた、というわけだ。

彼女の個人的な荷物も全て無くなっていたため、病院から逃げただと断定された。

探は一応、英吾に連絡を取つたが、家には帰っていないとのことだった。

彼女は間違いなく、組織のところに行つたんだ。

最悪の事態になってしまった……

探は溜め息を付いた。

傍らでは、悦が言葉を失っている。

探から、椿の裏切りの話を聞き終えたばかりなのだ。長い沈黙のあと、椿が独り言のように呟いた。

「信じられない・・・」

それは探も一緒だった。

だが、彼は決定的な証拠を見てしまったのだ。嫌でも信じるしかない。

事実、椿は探のところから姿を消したのだから。

そのとき、荒々しくドアが開いた。

顔面蒼白の英吾が、そこに立っていた。

「探君、本当なのか？椿が・・・」

英吾は、そこまで言うだけで精一杯だった。

その信じがたい事実を、それ以上口に出すことが出来ないのだ。

それを十分に感じ取って、探が後を引き継いだ。

「はい。椿さんは、組織の人間です。本人もはっきりと認めました」
英吾は絶望の瞳で探を見たあと、がっくりと膝をついた。

その肩が、わなわなと震えている。

彼がそんな状態になるのも当然だ。

最愛の娘たちが、一人は死に、もう一人はその姉の死に加担していたのだから。

この状況で、一番辛いのは英吾かもしれない。

「これからどうするんですか？」

車の助手席から、椿が尋ねた。

運転席の神原本部長は、彼女のほうを見ないで答える。

「しばらくは私のところに居ればいい。そのための部屋は用意した。生活は保証するよ」

椿は返事の変わりに、ふうつと息を吐いた。

それから両手で顔を覆い、そのまま髪をかき上げる。その様子をちらつと見てから、神原本部長は言った。

「ご苦労様。精神的に疲れただろう？」

「ええ、まあ。でも本当に大変なのはこれからですし」

信号が赤になり、車が停車した。

神原本部長が苦笑しながら言う。

「白馬探は、予想外なことばかりしてくれるからな」

椿は答えない。

フロントガラスをじつと見つめたままだ。

本部長は、そんな椿に同情的な視線を向ける。

「君には申し訳ないよ。・・・お父さんまで騙すことになってしまったから」

相変わらず前を見つめたままだったが、椿が口を開いた。

やっと返事をしてくれる、と思った本部長だったが・・・

「信号、青ですよ」

と同時に、後ろの車から苛立^{いら}たしげなクラクションが鳴り響く。

神原本部長は急いでアクセルを踏み、車を急発車させた。

日が落ち、探、英吾、悦たちは病院を後にした。

探は無理を言って退院してきた。

でもまあ『退院』と言っているのは本人だけで、医師たちは一時帰宅扱いしているのだが。

とにかく彼は、これ以上病院に閉じこもって悲しんでばかりは
れなかったのだ。

騒ぎを聞いて、白馬氏も病院に探を迎えに来ていた。

彼は始終、肩を落とす英吾を慰めていた。

一同は車に乗るため、駐車場に向かつて黙々と歩いていく。

と、そのとき、前方から若い女性が近付いてきた。

彼女は探が入院中に、世話になった看護師だ。

その見慣れた姿に、思わず探は声をかける。

「あ、どうも」

女性が気付いて、笑顔を向ける。

「あら、探くん。・・・ひよっとして、退院？」

荷物を持って、大勢で駐車場に向かう様子を見て、彼女はそう判断したのだろう。

「はい。お世話になりました」

看護師は笑顔でおめでとう、と言ったが、ふいに探の背後を見や
った。

「そちらの方は？」

探は彼女の視線を追って振り返った。

どうやら彼女は、英吾のことを言っているらしい。

探が言いにくそうに答える。

「えっと・・・お父さんです。椿さんの」

それを聞いて、看護師は目を見開いた。

「え！？・・・じゃあ今日、椿さんを迎えに来てた男の人は・・・
？」

その言葉に、今度は探たちが目を見開く番だった。

英吾が身を乗り出して、看護師に詰め寄る。

「椿を見たんですか！？いつ、どこで！？」

看護師は彼に圧倒されながらも、何とか記憶を思い起こした。

「ええと、確か・・・夕方ですよ。私が一旦ここに帰って来た頃で

すから。この駐車場に居ました。でも、どうして？彼女に何かあったんですか？」

呆然として言葉が出ない英吾の変わりに、傍らの白馬氏が説明した。「彼女が、ちょうどその頃いなくなっただんですよ。誰にも何も言わず。知らなかつたんですか？」

看護師は、まだ半分信じていないような戸惑いの表情を浮かべながら答えた。

「ええ！？居なくなつた！？そんな・・・知りませんでした。私は今日違う病棟に用事があつて、一日こつちに居なかつたんです。夕方一旦戻つて来たんですけど、そのとき椿さんが男の方と車に乗つて出て行かれるところをたまたま見て・・・てつきり退院して、お父様と帰られるんだと思つていました」

そこですかさず、探が聞く。

「どんな男でした！？」

看護師は眉間に皺を寄せ、しばらく考えた。英吾たちは、無言で視線を交わす。

「そうですね・・・これと言って特徴的な方ではなかつたので、説明のしようがないんですけど・・・40代前半くらいでしょうか？背は高く、髪は短髪で黒・・・あ、紺のスーツでしたよ」

すると、白馬氏の表情が変わつた。

彼はしばらく考えたあと、恐る恐る尋ねた。

「車は・・・車は、どんな車種でした？」

今度は、看護師はすぐに答えた。

「あ、それはよく覚えてます。黒で、あまり見かけない型のベンツでしたよ！高級そうだったんで、私しばらく見とれてましたから、間違いないです」

探は父を見た。

彼は今の彼女の言葉に、青くなっている。

「・・・父さん？心当たりがあるんですか？」

だが白馬氏は、自分に言い聞かせるようにつぶやくだけだった。

「いや、まさか……でも……」

そのとき、看護師が思いついたように声を上げた。

「そう言えばその男の人、胸ポケットに何か付けてましたよ！青い名札みたいなもの」

その言葉を聞いたあと少しの間をおいて、白馬氏の口から信じられない言葉が飛び出した。

「神原だ……」

探は呆然とした。

内部の裏切りは、椿だけではなかったのだ。

捜査本部を指揮していた神原本部長本人が一枚噛んでいたとあれば、全てつじつまが合う。

爆破のときだって、指示を出していたのは彼だ。

警察の疑いの目を全く違う方向に向けることも可能になる。

白馬氏が捜査本部に連絡を取ったところ、本部長は昼過ぎから戻っていない、とのことだった。

また、看護師の目撃証言と、神原本部長の外見的特徴が、今日の彼の服装に至るまでぴつたりと一致した。

白馬氏の情報では、彼の乗っているベンツはそんじょそこらで手に入る代物ではなく、本部長の愛車として有名だった。

念のため看護師に写真を見せたところ、椿を乗せて去っていった車に、ほぼ間違いないと断言した。

そして何よりの証拠は、その人物が胸に付けていたという『青い名札』だ。

それは恐らく『MPD (Metropolitan Police Department) バッジ』で、警視庁の人間が付けるバッジだ。

神原本部長は警視庁の官僚のため、そのバッジを日常的に付けている。

目撃証言しかないものの、ほぼ確信に近い証拠が出そろった。白馬氏は、信賴していた部下の裏切りを最後まで信じたくはなかったが、これだけ一致すると、もはや個人的な感情になど振り回されてはいられない。2人の行方がわからないため、一同はとりあえず一度、捜査本部に戻ることにした。

全員が暗い面持ちでそれぞれの車に乗り込もうとしたときだった。ふいに、駐車場の上空からバサバサという羽音が聞こえてきた。思い当たる節があり、探は暗闇に目を凝らす。やがて闇夜の中に、一羽の茶色い鳥が姿を現した。

「ワトソン！！」
ワトソンは探の腕に留まると、その逞しい両翼をたたんだ。彼に会うのは久しぶりだった。

へりの事故の日から絶望のどん底にいた探は、ほとんどワトソンに構ってやれていなかったのだ。

その間は、自宅でバアヤが餌などの世話をしてくれていたようだった。

それ以外、彼はひたすら大空を飛び回って探を待っていたのだ。なぜわざわざここまで探を追って来たのかはわからないが、とにかく探はワトソンを抱えて車に乗り込んだ。

「ごめんな、ずっとほったらかしにして」
探はそつとワトソンに語りかけた。

外はもうすっかり夜で、街灯がつき始めている。その光が車の窓から規則的に入り込み、ワトソンを照らしていた。と、そのときだった。

ひとときわ明るいビルのネオンが、車内を照らした。その一瞬の光の中で、探はワトソンの足に何かを見つけた。

アンクレットに巻き付いている、白いもの・・・
はっとして、夢中でそれを外しにかかる。

運転席の白馬氏も、興味深そうにそれを見た。
探の中には、ある希望が芽生えていた。

しっかりと取り付けられたその白いものを、やっこの思いで外して、
手に取った。

それは、布きれだった。

恐る恐る広げて見た探は顔を輝かせ、ワトソンに言った。

「ワトソン・・・よくやったぞ！！」

ワトソンは誇らしげに胸を反らせ、一声鳴いた。

第38話 パンドラ

突然甦った感覚。

周りの空気を感じ、温度を感じ、そして自分の鼓動も感じる。目を開けると、視界に溢れんばかりの光が押し寄せてきた。反射的に目を細める。

しばらくすると慣れてきたため、まだしっかりと力が入らない手で目をかばいながら再び目を開けた。

ただぼんやりと、自分の前にあるものを見つめる。

次第に目の焦点が合っていき、その目の前のものがはっきりと認識できるようになった。

どうやらそれは、天井だった。

自分は仰向けに寝ていることに、今さらながらに気付かされる。

真っ白な天井のなめらかな表面に光が反射し、自分に降り注いでいた。

前にも、こんなふうにいきなり目覚めて天井を見つめたことがあった。ただあのときは、こんなふうに光が入ってこないような薄暗い地下室だったし、こんなにきれいに塗装された天井でもなかった。

意識がはつきりしてきたものの、まだ状況が把握できなかった。

それでも、とにかく身を起こしてみる。

そうして視界に入ってきたのは、今度は天井と同じ白い壁と、さんと日光の差し込む窓だった。

辺りを見回しても、ただひたすらに白い壁が、自分を圧迫するかのようにはいつているだけだ。

訳がわからない。

一体ここは何処なんだ？ いや、何なんだ？

葵は、呆然とその場にたたずんでいた。

唐突に、ドアが開く音がした。

先ほど目に入った、窓の反対側にあるドアを思い出し、葵は振り返った。

そこには、シエテの姿があった。

「おはよう。まあ、もう『おはよう』の時間じゃないけどね」

葵は、まだ呆然としていた。

そんな彼女に、シエテはつかつかと歩み寄る。

「ごめんね、昨日は。また薬品で眠ってもらっちゃって。何回やっても気持ちいいもんじゃないからね、クロロホルムって」

シエテは葵の目線に合わせてしゃがんだ。

葵はやつとの思いで声を出した。

「あの・・・一体何があったんですか？」

するとシエテは、きまりが悪そうに苦笑いしながら答えた。

「昨日、場所を移ったのよ。昨日まで居たのはバーだったんだけど、ここに来るまでの中継地点だったってわけ。ここが、私たちの本命のアジト」

葵は記憶の糸をたぐり寄せる。

いきなりシエテに口をふさがれる付近で、葵の意識はとんでいた。まだ混乱が抜けきらない頭で必死に考えながら、葵は再び尋ねた。

「昨日、何があったんですか？」

シエテはまたも、決まり悪そうに笑った。

「あなたを眠らせたあと、迎えに来たへりで逃げたのよ。痕跡を残さないために、バーは木っ端微塵に爆破してね。私たち組織って知らせるために、ウノが姿を見せたわ。警察とか、あなたのお父さんもいたから」

シエテはそこで一旦話を切ると、葵から目を逸らして言葉を継いだ。

「それからしばらく飛行して、山の中にこっそり着陸してここまで来た。その間に、わざとへりを墜としたわ。操縦士はちゃんと脱出したけど」

『へりを墜とした』と聞いて、ある考えが頭をかすめた。できればそう思いたくはないが、念のために恐る恐る聞いてみる。

「へりを墜としたのは・・・証拠を消すためですか？」

シエテは相変わらず目を合わせない。

きまりが悪そうな表情から、もはや笑いは消えていた。

「それもあるけど、一番の理由は・・・あなたが死んだと思わせるためよ」

やっぱり・・・

「なぜですか？」

葵は冷静に問うた。

シエテは再び苦笑した。

「そうしたほうが、これから都合がいいのよ。あなたは一生組織で暮らすんだから、死んだと思わせれば捜査もされなくて、厄介払いができる」

葵は、少し不安そうな顔で、また質問をする。

「一生・・・って・・・私は、ずっとここに閉じ込められているんですか？」

「そんなはずはないじゃない。世間のほとぼりがさめたら、組織の提供する住まいで、普通の生活をさせてあげるから、大丈夫よ」

それを聞いて、葵は悟った。

組織は自分をこのまましばらく閉じ込め、逃げたいという抵抗心を喪失させ、洗脳するつもりなのだ。

ずっとこの閉ざされた状況なら、自分はそんな気持ちになるかもしれない。

葵は背筋が寒くなった。

シエテから一通り、この新しい監禁場所についての説明を受けた。

昨日まで居た場所での説明とだいたい一緒だったが、唯一違つのは、窓が開閉できるということだった。

暖房器具で空気が悪くなるから、換気をするためだという。

シエテが去ったあと、葵は改めて部屋全体を見回した。

ほぼ正方形の部屋で、天井も壁も真っ白。

床はというと、木目のフローリングだった。

窓の反対側には先ほどシエテが入ってきた、同じく木目のドアがある。

外側から鍵が掛けられていて、中からは開けられない。

その上の壁には、冷暖房の出口の細い通気口が、こちらにぽっかりと口を開けていた。

それ以外には、ほとんど何も無い。

家具と呼べるものは、何一つ置かれていなかった。

布団は、前と同じく、決まった時間に渡されるらしい。

葵は、窓へと歩み寄った。

その窓は細長いアーチ型で、両開きになるものだった。

鍵を外し、窓を開け放ってみた。

真冬の、刺すような冷気が入ってきた。

だが葵は、そんなことなど感じていなかった。

彼女は、自分の目の前に広がる窓の外の景色に、啞然としていたのだ。

自分が居るのは、かなりの高さのビルだった。

周りのあらゆる建物が、すべて眼下に見える。

そして何より驚くべきことは、地平線の彼方にそそり立つ建物の存在だった。

何度かテレビや写真で目にしたことがある、どっしりと構えるようなその姿。

規則的に並んだ窓、少し風変わりな外形・・・

日本の警察の中心、警視庁が、そこにあった。

「だからよお、さっさと白状しろってんだよ!!」

「そんなこと言われても、知らないものは本当に知らないんです!」

さつきから、このやりとりが続いている。

新しい場所に移った次の日から、さっそく葵への尋問が始まったのだ。

どこか見覚えのある強面の大柄な男が、葵にきつく詰め寄っている。他には、面識のない4人の男たちが部屋にいた。

「おいトレス、そのへんにしとけ」

激しく睨み合っていた二人の間に、長身の若い男が割って入った。

「でもよ、このままじゃ埒が明かねえじゃねえか!この女、今のままじゃ絶対口割らねえぞ!」

トレスと呼ばれた男は、声を荒げて怒鳴った。

また別の男が言った。

「まあまあ、そう焦らずに。ボスの話では、警察側は彼女が死んだと思ってるんでしょう?だったらゆっくりやればいいじゃないですか」

それに、白髪交じりの初老の男も賛同する。

「そうだぞ。このお嬢さんはなかなか頑固のようだから、どうせ長期戦になる。ここからは忍耐力の勝負だ」

最後の一人が、とどめの一撃を放った。

「ボスが、何か策を考えてくれるさ。だから今日のところはこらえる。まあ、お前に我慢というものが備わっていればの話だが」

それを聞いたトレスは4人を睨み回したあと、舌打ちを言った。「わかったよ。とりあえず今日はこれで終わりにしとく」

葵がひとまず安心したのもつかの間、トレスは葵を見下ろして、すごんで言った。

「だがな、お嬢さん。これだけは覚えとけ。いざとなったら拷問っ

て手もあるんだぜ？」
青くなつた葵を置いて、5人は部屋から出て行つた。

それから数日間、例の『宝石の秘密』についての尋問が毎日繰り返された。

葵は、ただ『知らない』とだけ繰り返していたが、一向に信じてもらえなかった。

そんな孤独と恐怖の日々の中で葵は、自分の愛する人たちのことを思つた。

自分が死んだと知つて、父や椿、家の者たち、そして探は、どれだけ悲しんでいることだろう。

と同時に、もう誰も自分を助けに来てくれないかもしれないという不安に襲われた。

『人質死亡』のまま、救出は打ち切られてしまつてはいないか。全身が震えるほどの不安で、葵は毎晩布団の中で泣いた。

そんなある日、いつものようにいかつい男たちが部屋に入ってきたと思つたら、その中にウノの姿もあった。

「お久しぶりだな、葵お嬢さん。どうだ、新しい家の住み心地は？」
葵は、さつと身構えた。

前に一度会つたとき、この男の恐ろしさは十分実感した。
油断すると、恐怖の海に突き落とされる。

そんな葵の様子をあざ笑うかのように笑いながら、ウノは言った。
「聞くところによると、相変わらず黙秘してるそうじゃねえか。前に、俺が忠告しなかったか？ さつさとしゃべつたほうが楽だつて」
葵はウノを睨みつけたまま、答えなかった。

一方ウノは余裕の笑みで、葵を見下ろしている。

ウノが言った。

「単刀直入に言う。俺たちが話して欲しい『宝石の秘密』ってーの

は、パンドラのことだ。聞き覚えがあるだろうか？」

パンドラ

葵はその言葉に、記憶の一部がうずいたような気がした。だが、何かを思い出せる気配でもない。

葵は素直に問うた。

「パンドラ……て、何ですか？」

ウノの後ろに控えていたトレスがしゃしゃり出て来た。

「とぼけんな！知ってるくせにつ……！！」

だがトレスは、ウノに制されて元の位置に押し戻された。

ウノが冷静に言う。

「この世界に散らばるビッグジュエルのどれか一つの中にある、不老不死の力を持つ宝石のことだ。ひょっとしてそこまでは聞いていないか？」

聞いていないもなにも、葵はまず信じられなかった。

話が一気に飛躍したようだった。

『不老不死』だなんて夢のような話、いきなり言われても信じられないはずがない。

「そ……そんな宝石、存在するんですか？」

またもトレスが何か言いたげだったが、ウノは無視して続けた。

「ああ。ちゃんと伝説も存在する。だが、どの宝石にそのパンドラが入っているかわからないんだ。それをお前に話して欲しい」

しばらく、沈黙が続く。

お互いに、相手の出方を窺っているのだ。

やがて葵が口を開いた。

「……私は何も知りません」

ウノは刺すように葵を見つめたが、すぐに溜め息をついて体の向きを変えた。

「戻るぞ」

そのままつかつかとドアまで歩いていくウノに、残りの男たちも慌てて従う。

トレスがわめき散らしていた。

「待って下さい、おやつさん！！いいんですか！？もっと追求しなくても！」

今回は他の男たちも、トレスに賛成した。

「そうですよ！あれだけ手がかりを言ったんですから、話すかもしれないじゃないですか！！」

「問い詰める方法を変えましょう、おやつさん！！」

だがウノは、そんな言葉など無視してドアを開けた。

彼は外に出ようとしたとき、ふと立ち止まって葵を振り返った。

「お前の握っている秘密の変わりに、俺たちの秘密も一つ教えよう。俺たちのボスは、警察の上層部の人間だ」

葵は目を見開いた。

とっさに、窓から見える警視庁のビルを振り返る。

ウノはそれを見てふつと笑った。

「さあ、これでおあいこだ。明日には、ちゃんと秘密をしゃべれよ。いくらあがいても無駄だ。ボスが警察に居る限り、お前みたいな一般人が敵う相手じゃないんだよ、俺たちは」

一人身を固くする葵を残して、一同は出て行った。

ガチャリ、という鍵の掛けられる重々しい音が、耳の奥に轟いた。

第39話 怪盗キッド

「待て!!キッド!!」

背後から中森警部の罵声が聞こえる。

『待て』と言われて待つ犯罪者なんて滅多にいないというのに、彼は毎回そう叫ぶ。

そして、『待て』と言われて待つはずのない犯罪者の一人、怪盗キッドは、全力疾走で追いかけてくる警部の前方を悠々と逃げていた。階段の薄暗い証明の中、彼の真っ白なマントがはためく。

ここはある大手宝石会社の営業ビル。

先日この天才的大泥棒はここに予告状を出した。

北米最大のオパール『レインボー・オーシャン』を頂きに参上する、という。

いつものことながら、結果はその通りになった。

完璧な変装術で警備の目を欺き、何者にも疑わせない声色で警察を言いくるめ、堂々と宝石を手に入れた。

今回彼は宝石会社のオーナーになりすまし、予告時間にこの目で宝石を見張っていたいと適当に理由を作って宝石に近付いたのだ。

いたって簡単かつ、よく使う手だ。

そのパターンが固定化されつつあるにも関わらず、中森警部は毎回気付かない。

そして姿を現して、宝石を片手に屋上まで駆け上がれば万事OK。

後はハングラライダーでおさらばするだけだ。

今日も、無事に屋上まで到達した。

ドアにちよつとした細工をして、開かないようにする。

そのドアをどんと叩いて怒鳴る大勢の警察官の声が聞こえてくる。

その声を背後に聞きながら、キッドは美しい月夜に足を踏み入れた。普段ほとんど使われることのない屋上だけに殺風景だったが、その

何も無い場所に煌々（こうこう）と影を落とす月明かりは妙に神秘的だった。

冷たい夜風が、容赦なく吹き付ける。

シルクハットが飛ばないよう、軽く手で押さえた。

そして、いつもの行動に入る。

キッドは期待と、僅かな諦めを持って、オパールを月明かりにかざした。

・・・反応なし。

どうやら今回もハズレだったようだ。

キッドは溜め息をついた。

一体いつになったらパンドラが拝めるのかな・・・

やりきれない思いが胸を満たす。

北米最大のオパールにも、パンドラは入っていなかった。

これでいくつ目だろうか。

キッドはこれまで、世界中に散らばる数々のビッグジュエルを見つ

け出し、盗み、その中にパンドラを探し求めてきた。

だが一向に見つからない。

怪盗キッドの正体は、ごく一般人の男子高校生・黒羽快斗。

彼の父親で初代怪盗キッドの黒羽盗一は、有名なマジシャンだった。

その彼が8年前に謎の組織によって殺されてから、快斗はその遺志を継いで2代目怪盗キッドとなっている。

その組織の狙いは、パンドラという命の石だった。

世界中に散らばる、伝説のビッグジュエルの中のどれか一つに、そのパンドラが入っているのだ。

それを見つける方法は、ビッグジュエルを月の光にかざすこと。

もしその中にパンドラが入っていれば、パンドラは月明かりを浴びて赤く輝く。

だが今回、オパールを月明かりにかざしても何の反応もなかった。つまり、パンドラは中に入っていないということだ。

キッドは虹色に輝くオパールを片手でもてあそびながら、ぼんやりと月を眺めた。

自然と言葉が出て来た。

「ボレー彗星近づく時、命の石を満月に捧げよ・・・
さすれば涙を流さん」

父を殺した組織が言っていた伝説だった。

ボレー彗星が来る一年以内に、命の石パンドラを満月に捧げる。

するとパンドラは涙を流し、その涙を飲んだ者は『永遠の時』、つまり不老不死が手に入るのだ。

組織の狙いは、その不老不死だった。

不老不死なんて、くだらない。

キッドはオパールを握りしめた。

そんなもののために、父は命を奪われたのか。

限りある命を全うする運命まっかを持って生まれてきた人間に、永遠の時など必要ない。

限りある命であるからこそ精一杯に生きた者に、人間の価値が生まれるのだ。

その価値の輝きが、人間を美しくする。

永遠の命に頼って生きるなど、美しくも何ともない。

だから神は、人間に限りある命を与えたのだ。

キッドはそう信じてきた。

だからこそ、組織が許せない。

この手でパンドラをたたき壊すために、彼は今日も白き衣をまとう・

あまり長く屋上に居ると、ヘリに見つかってしまいかもしれない。キッドは物思いを中断し、ハングライダーを準備した。オパールをしつかりと懐ふところにしまうと、大都会と星の世界の狭間の虚空に飛び立った。

今日は、あっさり仕事が片づいた。

こう簡単にいきすぎると、逆に物足りないくらいだ。

自慢のマジックを披露する機会も少ない。

いつもは白馬のヤローがしつこく邪魔しやがるけど、あいつがないと楽勝すぎてつまんねえな

キッドは心の中で苦笑した。

こんなときでも、『キッド』の姿から解放されるまではポーカーフェイスを守り抜く。

そついやぁ最近、白馬見ねえな。イギリスの高校は卒業して日本に戻ってるって聞いたのに……

以前は、キッドが現れると必ずと言っていいほど白馬探が登場したものだ。

彼が相手だと、建物に侵入することさえ難解になる。

そんな、警察の切り札探偵が最近はずっかり影を潜めている。

何か事件にでも巻き込まれているのだろうか。

ま、盗みがしやすくっていいけどな

浮かんだ疑問に手っ取り早く結論を付け、キッドは着地に集中した。

このときの彼は知るよしもなかった。
このあと、とんでもない騒動が彼を待ち受けていることなど……。
パンドラを中心に回る運命の輪に、新たな局面が訪れようとしている。

この物語の結末が悲劇となるか喜劇となるかを決める役者は、もうほとんど舞台の上だ。

だが、残る大御所役者たちは相変わらずまだ舞台袖^{そで}。

すべての役者たちが舞台に出尽くしたとき、結末が決まる。

幕の内側に控える役者は、あと2人。

彼らは自分の出番を、今か今かと待っている。

シナリオのないこの物語の結末を決めるのは、どうやらこの2人のようだ。

さあ、物語もそろそろ終焉^{しゅうえん}。

今宵また、月下のもとで……。

第39話 怪盗キッド（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

今回キッドがしゃべっていたパンドラの話は、『まじっく快斗』での設定です。

詳しくは『まじっく快斗』3巻で説明されています。

第40話 思いを託して

何としてでも、ここから逃げなければいけない。

不老不死だなんて訳がわからないものに巻き込まれ、身に覚えのないことを尋問され、おまけに自分は死んだことにされている。

葵の中で、恐怖心を通り越した怒りに近いものが生まれつつあった。とにかく、絶望してばかりはいられない。脱出しなければ・・・！

と言っても、この状況では手も足も出なかった。

それに、この間ウノが言った、『この組織のボスは警察上層部』という言葉もある。

捜査をする側がこの犯行に一枚噛んでいるとなると、厄介だ。

葵は部屋を見回した。

ただあるのは、白い壁に囲まれた何も無い空間。

本当に、部屋には何もなかった。

必要な日用品は全て部屋の外だ。

いつも決まった時間に鍵が開けられ、洗面所や風呂に行く。

トイレも、申し出れば普通に行かせてもらえるが、ドアの外には常に監視がついている。

食事用の食器類も、布団も着替えも、その場で支給のため、常に部屋には何も残らない。

だいたいその理由は察知できた。

この部屋は、窓が開くのだ。

葵が窓から何か落として、道ばたの人に助けを求めたり、窓から何らかの方法で目立つものを見せて外の人に気付かせたりするなど、考えればいろいろなおこなことができる。

そうさせないために、そんなことができるようなものは一切部屋に残さないのだ。

葵はこまめに窓の下を確かめたが、いつも誰かが見張りに立っている。

窓から何か落としたとしても、すぐに気付かれるだろう。

葵は一日中、何とかして脱出できる方法を考えていたが、どれも不可能だった。

すでに、この新しい監禁場所に移ってから2週間前後経過している。そろそろ、何も思い浮かばなくなってきた。

そんなある日。

鍵の開く音がして、すぐにシエテが姿を現した。

片手に、何か白い服を抱えている。

「それ、何ですか？」

葵が怪訝そうに問うと、シエテは微笑しながら答えた。

「覚えてない？」

そう言われて、葵はシエテが差し出したその服をじっと観察した。

「・・・あ！」

葵は気付いた。

何とそれは、組織に拉致されたその日の結婚式で、葵が来ていたウエディングドレスだったのだ。

光沢のある、純白の生地でできたそれは、皺しわ一つ無かった。

シエテがドレスを、そっと床に広げた。

「もったいなくてね、今までと違ってあつたの」

「そうだったんですか・・・」

葵は、あの日を思い出していた。

心ない人と無理矢理結婚させられそうになった葵を、しっかりと手を取って連れ出してくれた探。

あの瞬間、自分は幸せだった。

しかしそのすぐあと、二人を悲劇が襲った。

探は大勢の男たちに一方的に殴られ、蹴られていた。

そのことを思い出し、葵ははっと我に返った。

「そういえばシエテさん！探さんは、大丈夫だったんですか？」
シエテは一瞬きよんとしたが、すぐに葵の言いたいことを理解した。

「ええ。ボスの話だと、ちゃんと病院で手当てを受けたそうよ。大怪我ではなかったみたい。そのあと、すぐにあなたのために捜査に協力し始めたって」

それを聞いて、葵はひとまず安心した。

だが同時に、たまらなく彼が恋しくなった。

怪我をしたのにすぐに自分のために捜査をしてくれていたなんて……。

彼は今、自分が死んだと知らされてどんな思いで日々を過ごしているのだろうか……？

暗い顔で黙り込んだ葵を見て、シエテがわざと話題を変えた。

「ところで、このドレス立派ね。こんな綺麗な着られて、嬉しかった？」

だが、葵は何も答えなかった。

そのまま少しの間お互い黙り込んだが、再びシエテが口を開いた。

「ねえ、葵……。つらいのはわかるわ。でも、パンドラの見つけ方、教えてくれない？」

シエテは、俯く葵の顔を下から覗き込むように見た。

葵は、いつもの言葉を繰り返す。

「本当に、私は何も知らないんです」

だが、シエテはあきらめなかった。

「そんなはずないわ。華代が、『自分の子供にだけ教えるから』って断言したのよ。宝石を持ってたのもあなただし、華代があなたに何も教えないはずないもの」

それを聞いて、葵はぱつと顔を上げた。

「母が……そんなことを言っただんですか!？」

「ええ。私たちには絶対に教えない。自分の子供に宝石の秘密を教えて、代々守ってもらったって言うってたわ。だからあなたをさら

ったのよ」

張りつめた沈黙が流れる。

二人とも、お互いから目を逸らさなかった。

葵をじっと見据えながら、シエテが沈黙を破った。

「パンドラの入っている宝石は、おそらくあのブルーダイヤだっ
て見当が付いてる。でも、それを確かめる方法がわからないの。．．
お願いだから、話して」

彼女に負けず睨み返しながら、葵が答えた。

「母はあの宝石が、不老不死なんかに使われるのを望んでいなか
たと思います」

お互いの視線がぶつかり合い、激しく火花を散らした。

シエテがまた何か言おうと、口を開きかけたときだった。

唐突にノックが聞こえ、ウノが顔を覗かせた。

葵は思わず身構える。

だがウノは、そんな葵に見向きもせずシエテだけを見て言った。

「シエテ、ちよつと来い。すぐ終わる用事だ」

「わかったわ」

シエテは葵と目を合わさずに立ち上がり、ドアの外に消えた。
鍵の閉まる音がした。

一人になった葵は、悲しげにウエディングドレスを見つめた。

探や父や、椿の顔が次々と浮かんでくる。

きつとシエテは自分を元気づけるためにこれを持ってきてくれたの
だろうが、今は一層悲しみをかき立てるだけだった。

そつと、そのなめらかな生地に手を触れた。

そのままゆつくりと撫でる。

と、そのときだった。

布のつなぎ目の縫い目に、違和感を感じた。

何か固いものが手に当たったのだ。

そこを探ってみると、縫い目の僅かな隙間に、細長い棒状のものが入り込んでいた。

ふと、ある予感が頭をよぎる。

葵は夢中でその縫い目を広げ、その棒状のものを何とか取り出した。思った通りだ。

それは、ペンだった。

今の今まですっかり忘れていた。

あの結婚式の日、探が忘れていったペンを、葵はお守り代わりにドレスの中に忍ばせていたのだ。

一筋の希望の光が、葵の暗い心を照らした。

夕方になり、太陽が沈んでいく。

部屋の白い壁を、真っ赤な夕日が紅に染めていた。

葵はその光の眩しさに目を細めながら、窓を開けた。

はるか下の地上を見る。

そこには数人の男たちが、等間隔に並んでいた。

葵の口から、溜め息が漏れる。

やはり、見張りがいなくなることはない。

遠くてしっかりとは見えないが、何人もの見張りが交代で立っているようだ。

葵の手には探のペンと白い布きれが握られていた。

ペンを見つけたそのすぐあと、シエテが戻ってきた。

当然のことながらドレスは没収されてしまったが、葵はその前に行動を起こしていた。

ドレスの裏地の部分をちぎって、隠し持っていたのだ。

どこが目立つところをちぎったり破ったりするとバレる可能性がある。

そのため葵は、比較的目に付きにくい裏側の布をちぎった。だが、いくら道具が揃ってもそれを役立たせる方法が、今の時点ではない。

布にメッセージを書いて窓から落とそうと思ったのだが、相変わらず下には見張りが立っている。

例え風に乗って布が遠くに飛ばされたとしても、こんな白い布では目立ちすぎる。

すぐに見つかってしまっただろう。

一通り思案したが、諦めて窓を閉めた。

夕日が沈んでいく。

眼下の建物には、ほとんど明かりが灯っていた。

この部屋の明かりは点かない。

暗くなると目立つからだろう。

着実に暗くなっていく部屋の中で、葵は再び溜め息をついた。

動く気にもなれず、そのまま座り込む。

膝に顔をうずめて目を閉じると、眠気が襲ってきた。

組織の犯行は完璧だ。もう、このまま諦めるしかないのかもしれない……。

そんなことを思いながら床に横になった葵は、いつの間にか眠りに堕ちた。

どれくらい寝ていたのだろうか？

目が覚めると、月明かりが部屋に差し込んでいた。

葵はその明かりを避けるかのように窓に背を向け、再び眠ろうとした。

そのときだった。

自分の目線のすぐ前の床にできている窓の影が、いつもと少し違うことに気付いた。

アーチ型の輪郭に四角く木が渡してある、いたって一般的な窓なのだが、その影の形に、何か別の影が重なっているのだ。

葵は身を起こし、窓を振り返った。

瞬間、信じられない光景を目にした。

目を見開いたまま、動けなかった。

窓の外に、一羽の鳥がとまっている。

大きく逞しい体、鋭いくちばし、そして深い瞳……。

それは、紛れもなく探の愛鷹・ワトソンだった。

「ワトソン……!!」

葵は駆け寄って窓を開けた。

すぐにワトソンが、バサバサツと中に入って来る。

まだ驚きで混乱する中、葵は彼に語りかけた。

「どうしてここに……？本当にワトソンなの？」

月明かりに、足のアンクレットがきらりと光った。

間違いない。これはワトソンだ。

彼のことは日頃から見慣れているし、このアンクレットは何度も目にしたことがある。

探がイギリスで飼い始めたのと同時に、このアンクレットも買い揃えたと言っていた。

そんなものが、この日本で売っているはずはない。

葵は、ワトソンを撫でた。

彼は大人しく首を傾けている。

きっと、ここに来たのは偶然だろう。

飛行していて、たまたま葵の姿を見つけたために窓辺にとまっていた、といったところだろうか。

彼はイギリスで探と行動を共にしていただけあって、なかなか賢い。しょっちゅう会っていた葵の顔くらい、覚えていて当然だろう。

探とワトソンと3人で過ごした日々が思い出された。

図書館の外の木立で、時間を忘れて遊んだものだ。

あときは、本当にいろいろな話を探から聞いた。

とくに『黄昏の館事件』の話は興味深かった。

ワトソンが、最後に大活躍した事件だ。

あらゆる脱出方法が断られた中で、ワトソンが探の手紙を届けて警察を・・・

葵は、はっとした。

思わず、ワトソンを撫でる手も止まる。

いきなり脳裏に浮かんだひらめきに、頭を回転させて考えた。

これは、使えるかもしれない・・・

「ワトソン。また、活躍してくれる？」

ワトソンは不思議そうな顔で葵を見上げた。

葵は床に座り込み、さっきの布きれにペンを走らせた。

探に、助けの手紙を書くのだ。

だがいざとなると何を書いて良いかわからず、少しの間迷っていた。

良い考えが浮かばなかったため、とにかく葵が聞いた組織の情報を、

片っ端から書き連ねていった。

その様子を、ワトソンは傍らで静かに見つめている。

探のペンはインク型のもだったため、布でもよくなじんで、簡単に字が書けた。

布の半分ほどまで書いたとき、ふいにドアの外で物音がした。

葵は、ビクツと顔を上げる。

鍵の開く気配はなかったが、葵は危険を感じた。

組織の人間に見つかる前に、ワトソンを放さなければならぬ。

そろそろ夕食が支給させる頃だった。

まだまだ書きたいことはあったが、葵はやむなくペンを置いた。

そして布を小さくたたんで、ワトソンのアンクレットに取り付ける。

以前探に教えられたことがあったため、案外すんなりと取り付けられた。

最後に外れないかを確認して、葵はワトソンを窓辺に運んだ。

窓を開け、下を確認する。

相変わらず見張りが立っていた。

ワトソンを窓の棧さんに乗せ、静かに語りかける。

「探さんに、届けられるわよね？」

その言葉を理解したのかはわからないが、ワトソンは頼もしく羽根を広げた。

月明かりを背にした彼の姿が、今の葵には大きな希望に思える。

「さあ、行って！」

葵が言うのと同時に、ワトソンは飛び立った。

大きく羽根を広げ、夜空を滑空する。

彼は滑るように旋回して、段々と小さくなっていった。

葵は恐る恐る下を見た。

数人の見張りが上空を見上げていたが、すぐに顔を下げた。

野生の鳥が羽ばたいた程度にしか思っていないのだろう。

葵は安堵の息を吐いた。

窓を閉め、ワトソンが完全に見えなくなるまで見守っていた。

と、そのとき、ドアがガチャリと開いた。

トレイを持ったシエテが、中に入ってくる。

「夕食よ」

「あ、はい！」

葵はなるべく平静を装い、窓辺を離れた。

幸いシエテは、葵の態度に何の不信感も抱いていないようだ。危ないところだった。

あと少しワトソンを放すのが遅れていたら、シエテに見つかっていただろう。

葵はワトソンに全てを託し、ただひたすらに祈った。

数時間後、ワトソンは病院の駐車場にいる探を見つけ出し、舞い降りた。

ここまで来たら、もう運を信じるのみ。

一つ一つの運命が、少しずつ動いていく。

葵と探、そして、樁までも……。

今、全員の運命が、探に託された

第40話 思いを託して（後書き）

読んで下さりありがとうございます。

今回出てきたペンは、第22話で登場したものです。第29話の結婚式直前にも出てきます。

そして『黄昏の館事件』についての会話も、第11話で為されています。

第41話 衝撃の真実

探はワトソンが運んできた葵からの手紙を、食い入るように見つめていた。

喜びで全身が震える。

事のなりゆきを聞いた白馬氏が、車を停車させて手紙を覗き込んだ。だが彼は、探とは逆に心配顔だった。

「探、これは本当に葵さんからのものだと言い切れるか？」

探が顔を上げる。

「どうしてです？」

白馬氏は言った。

「確かに葵さんの名前は書いてあるが、組織のやつらが何らかの目的で偽造したものかもしれないじゃないか。現にワトソンは、今まで外を飛び回っていたんだろう？もしかしたらそのときに……」

だがその言葉を、探は自信を持って遮った。

「それはありませんよ。ほら、ここを見て下さい」

探が指差したのは、手紙の文章の最後の文だった。

その文は、文章の途中で途切れていた。明らかに書きかけだ。

「……書きかけだな。だが、これがどうかしたのか？」

「僕らを惑わすために偽造したんなら、ちゃんと最後まで文章を書ききるでしょう？しかしこれは、まだ伝えたいことがあるのに書くのを止めざるを得なかった。つまり、いつ見つかるかわからないような状況でこれを書いていた、ということですよ。監禁されているであろう葵さん本人がね」

白馬氏が、ほう、と納得する。

さらに探は続けた。

「それに父さん、このアンクレットの外し方、わかりますか？」

探は膝の上のワトソンを、白馬氏に差し出した。

「アンクレットの外し方？そんなの、こうやって……」

白馬氏はアンクレットに手を掛けた。

しかし彼の予想に反して、それは全く外れなかった。

探はワトソンを自分の膝に戻しワトソンに足を出させる。

「そう簡単には外れないんですよ。ここの金具を緩めてからじゃないと」

探がアンクレットに付いている棒状の金具を緩めると、カチツと音がしてワトソンの足から外れた。

「やり方を知っていないと、手紙を取り付けることはできません。

知っているのは僕とバアヤ、それからこのアンクレットを売っていた店の人、そして葵さんだけです。彼女には以前教えたことがありますから」

「なるほどな。組織の人間がワトソンに手紙を取り付けるなんて不可能というわけか」

再びアンクレットを取り付ける探の横で、白馬氏が感心して言った。

「それにこのワトソンは、見ず知らずの怪しい人間に足を出すようなやつではありませんよ。気高いですからね」

探はワトソンを誇らしげに撫でた。

「とりあえず、英吾には知らせたぞ。葵さんが生きていると知って安心していた」

携帯電話を懐にしまいながら、白馬氏が言った。

「そうですか。良かった・・・」

探がとりあえず一安心したとき、車は白馬邸の門をくぐった。

「とにかく今日はもう遅い。明日、朝一番でその手紙を捜査本部に持って行くぞ」

父の言葉に従い、探はその日はベッドに入った。

久しぶりに、穏やかな眠りだった。

次の朝、探と白馬氏は車で捜査本部に向かっていた。今日は捜査本部に手紙を提出することになっている。自分は神原本部長に除名を言い渡された身だったが、その本部長が組織の人間で今は行方知れずになっているのだから、除名処分は無効だろうと認識していた。

探は、昨日何度も読み返した大切な手紙を、もう一度目で追った。

探さんへ

葵です。たまたまワトソンが来てくれたので、この手紙を託しました。

私は、無事に生きています。

今は、『Brilliant Darkness』という組織に監禁されています。

組織はわざとヘリを墮とし、私が死んだように思わせたそうです。彼らは毎日私に「パンドラの見つけ方を教える」と尋問してきます。パンドラは、不老不死の力を持った宝石だそうです。それが、私の持っていた宝石の中にあるらしいです。でも、私は何も知りません。

この組織のボスは、警察の上層部の人間だと言っていました。みんな、お互いをコードネームで呼び合っています。

私の世話をしてくれる女の人は『シエテ』さん、リーダー格の男の

人は『ウノ』さん。
他にも、『トレス』『シンコ』『クワトロ』『セイス』というのも
聞いたことがあります。

ここは、壁も天井も真っ白な部屋。

一つだけある窓は自由に開閉できません。

そこからは夕日が差し込んで眩しいです。

遠くには警視庁が見えます。

そしてこの部屋は、高いビルの上のほうにあります。

ビルの外壁は白いです。

周りには中高層ビルがたくさん集まっていますが、特徴的な建物は
なく、私には見覚えがありません。

探さん、怪我をしたのに私を捜して下さいたそうで、ありがとうございます。
ございます。

私は、食事もきちんと与えられていて、元気です。

父や椿、安藤や他の私の家の人たちにもそう伝えて下さい。

あなたの助けを待っています。

それと、組織の人間のほとんどが母のことを知っています。
気を付けて下さ

手紙はそこで終わっていた。

おそらくここまで書いたときに何か危険があり、急いでワトソンを
放したのだろう。

運転席から、白馬氏が言った。

「ボスが警察の上層部ということは、やはり神原が黒幕ということ
か」

探が答える。

「でしようね。きっと椿さんの電話の相手も神原本部長だったんでしよう」

と、そう言ったとき、何か違和感が残った。

椿が組織の人間だとわかったときの電話の会話を思い浮かべてみる。何かが、探の頭の中で引つかかっていた。

だがその探の思考を、白馬氏の携帯の着信を知らせる電子音が遮った。

白馬氏は画面の文字を確認すると、いきなりそれを探に手渡してきた。

「英吾からだ。代わりに出てくれ。警察官として、運転中は通話できない」

なるほど、と思い、探は通話ボタンを押した。

「もしもし」

すぐに、何やら慌てた英吾の声が聞こえてきた。

『もしもし！もしかして探くんか？』

「はい。父は運転中なので代わりに。何かあったんですか？」

今日は英吾も捜査本部に来ることになっている。

そこで何かあったのだろうか？

『それが・・・いるんだよ、神原さんが！！昨日の昼から本部には戻っていなかったそうなんだが、今朝普通に出勤してきて・・・』

「ええっ!？」

探の驚きの声に、白馬氏が尋ねる。

「何だ、どうかしたのか？」

探は黙って電話を差し出した。

白馬氏はもどかしそうにそれを受け取り、車を停車させて電話に出た。

「もしもし。私だ。何かあったのか？」

尋常ではない英吾の声が、受話器から洩れて探にも聞こえてくる。

『神原さんがいるんだよ、捜査本部に！！さっき普通に出勤してき

て、今は資料室に行ってるんだが……。椿のことを聞こうとしたんだが、あまりに驚いてしまって……。』

「わかった！もうすぐ着くから、落ち着いてそのまま待ってる！」
白馬氏は電話を切り、車を急発進させた。

「神原のヤツ……。何もかも吐かせてやるっ……。」「
車はぐんぐんとスピードを上げる。

その中で探は、事態の意外さに、ただ驚いていた。

昨日堂々と椿を連れ出して姿を消したくらいだから、もう二度と警察には来ないだろうと思っていた。

しかし彼は、今日も平然と仕事をしている。

組織の仲間だとバレたことは知らないからだろうか？

だが、まさか昨日の今日でノコノコやってくるとは思わなかった。

何とか衝撃から思考を現実を引き戻し、探は必死で考えた。

恐らく組織のボスであるう神原本部長を問いただせば、事件は解決する。

組織を丸裸にでき、葵の居場所もわかるのだ。

だが探には、どうもしっくりこなかった。

神原本部長が失踪する気だったならわかるが、そうではないのに何故昨日、あんなに堂々と椿を連れ出したりしたのだろうか？

まだ日常生活を続けるつもりだったなら、あんな、誰が見ているかもわからないような状況で椿を車に乗せるなんて危険すぎるではないか。

一体どういっつもりなのだろう？

もしかして神原氏は、本当は組織の人間ではないのでは……？

探の頭に、そんな疑念が湧いてきた。

はつきりした根拠はないが、そんな気がする。

それを確かめるかのように、探は再び葵からの手紙を見返した。

葵です。たまたまワトソンが来てくれたので、この手紙を託しました。

私は、無事に生きています。

今は、『Brilliant Darkness』という組織に監禁されています。

組織はわざとへりを墮とし、私が死んだように思わせたそうです。

そこまで読んだとき、探ははつとした。

ようやく違和感に気付いた。

病院で椿が電話をしていたとき、彼女は電話の向こうの相手にはつきりと言った。

『へりが墮ちることは予想外だったんですから』と。

だが葵は、『組織はわざとへりを墮とした』と言っている。

ということは椿さんも、そして彼女の仲間の神原本部長も、組織の人間なわけがない……!!

「と、いうことは、別の警察上層部の人間が黒幕だったことか!？」探の推理を聞いて、白馬氏が声を上げた。

「そういうことになります。とにかく、早く署へ!」

白馬氏はスピード違反ギリギリの速度で車を走らせた。

先ほど運転中の通話を避けるほど交通ルールに忠実だった人物とは思えない。

そのおかげで、いつもより早く到着した。

探は車から降りると、すぐさま駆け出した。

「おい探！捜査本部に行くんじゃないのか！？」

本部とは全く別の方向へと疾走する探の背後で、白馬氏の声が聞こえてきた。

だが今の探の目的地は、英吾が電話で言っていた『資料室』だった。神原本部長が今居る場所だ。

探は走りながら、事件発生から今までの流れを順に思い出していた。どうして今まで気付かなかったのだろうか？

探が絶望している間に、様々な不自然なことが起こっていたというのに、なぜそれを見逃してしまっていたのだろうか？

組織の黒幕に、心理を操られていた。

神原本部長は、『ボス』なんかではなかったというのに……！

捜査本部とは別館にある資料室を目指し、探は階段を駆け上がった。廊下を走り、いくつもの角を曲がる。

途中何度も人にぶつかりそうになりながら、彼はひたすら目的地に向かった。

ようやく、『資料室』のドアが見えてきた。

息を弾ませながら、ドアノブを握る。

探は勢い良くドアを開けた。

第42話 真相

「ほら、やっぱり」

ドアを開けた探を迎えたのは、信じられない光景と、その言葉だった。

たった今その言葉を発した張本人と神原本部長が、部屋の中から探を見つめている。

「・・・へ？」

探は素つ頓狂な声を出した。

部屋の中に居たのは神原本部長だけでなく、全く予想外の人物椿だった。

彼女は再び、神原氏に言った。

「やっぱり探さんだったでしょう？さっきの足音」

その言葉に、隣の神原氏が決まり悪そうな顔をした。

探はこの状況が全く呑み込めず、目が点になっている。

その表情を見て、椿が言った。

「廊下を走ってくる足音がしたので、私は探さんだつて言ったんです。でも神原さんは、そんなはずないって」

だが、探が求めている説明は、そんなものではなかった。

どうしてこんなところに椿がいるのか、訳がわからなかった。

組織の仲間ではないとわかったが、まさかこんな近くに居ると思っていなかったからだ。

まだ呆然と突っ立っている探に向かって、神原氏が声を掛けた。

「まあとにかく、中に入りなさい。外に話が洩れるという厄介だ」

とりあえず探は、言われた通りにする。

ドアを閉めると、椿が事務椅子を持ってきてくれた。

探が腰を下ろし、他の二人も座る。

神原氏が、ほこり臭い資料室に似合わぬ真剣な表情で、探に言った。

「まさか君が、こんなに早く気付くとは思わなかったよ」

だが、ようやく落ち着いてきた探は、椿を凝視しながら言った。

「あの・・・どうして椿さんがこんなところに？」

自分の言葉を見殺された神原氏だったが、親切にも返事を返す。

「状況の確認をしようと思って、ここで待ち合わせたんだ」

椿が、にっこりと探に笑いかける。

探がどう返そうか困っていると、神原氏が話を本題に戻した。

「ところで、ここに私を追って来たということは、もう全てわかっているんだろう？」

その問いに、探の表情が引き締まる。いよいよ、この時が来た。

探は深呼吸して答えた。

「はい。組織の真の黒幕は・・・」

「『伊勢谷副総監！』」

その場にいる3人全ての声が重なった。

場の空気が、一気に張りつめる。

やはり椿も神原氏も、黒幕がわかっていたのだ。

組織を統率し、極秘情報を警察権力をもって悠々と提供し、自らの部下にへりの追跡や墜落機の捜査・処理をさせて証拠を消した。

さらに賢いことに、探たちが怒りや悲しみに囚われている隙に、普通なら不自然なことを怪しまれずに堂々とやってのけ、捜査の方向を自在に操った。

そして、葵を監禁していながら仲間のフリをして、ずっと心中では

あざ笑っていたのだ。

彼こそが、憎き組織のボス・セロの正体だった。

だが探には、まだわからないことがあった。

「しかしお二人は、それがわかっていてどうして組織の仲間のフリを？」

それには椿が答えた。

「副総監の反応を見るためですよ。全く身に覚えのない人物が組織の一員だなんて発覚したら、彼だって焦るでしょうから。そうやって焦らせて、ボ口を出させれば、追いつめて白状してくれるかもしれませんし」

探はそれを聞いて、感心半分、呆れ半分だった。

「・・・随分危険で強引ですね」

椿と本部長は、顔を見合わせて苦笑した。

「あのエリート副総監のことだから、一筋縄ではいかないと思ったんだ。少々派手にやらかさないと、絶対にミスはしない男だろうか」

更に椿は説明を続けた。

「作戦では、昨日わざと目立つように私と神原さんが病院から逃げて、私たちが組織の人間だと思わせて、それを誰かが副総監に報告すれば成功だったんですよ。そのときの彼の反応を見るために、神原さんは今日出勤したんです」

「つまりは、私と椿さんの間での極秘の作戦だったというわけだ。君を捜査本部から除名したのも、何か勘づかれて作戦を潰されるのを防ぐため。本当は君の推理力を、私は高く買っているんだよ」

先ほど半分になった感心だったが、それでも探は存分に感心した。

見事、としか言いようがない。

誰にも気付かれずにここまで騙しきるなんて、さすがは父の認めた男だ、と思った。

それに椿も椿だ。

こんな一般人が、あそこまで演技ができるなんて反則だ。

探は今まで、この小悪魔のような少女に、すっかり騙されていたのだ。

だがこれで、探が病院の電話の会話を聞いて椿を追いつめたときに、彼女が組織の仲間のフリをしたのも、神原本部長がわざと目立つように椿を連れ出したのも、全てつじつまが合う。

探の思考回路がめまぐるしく回転し、論理を処理していると、神原本部長が溜め息混じりに言った。

「しかし、作戦は失敗か？探くんになんか早く見破られてしまったんだから、とてもあの副総監なんか騙しとおせないだろう」

それに、椿も全く同じ反応で返した。

「そうですね。副総監が出勤して来ないうちに、早いとこみんなに暴露したほうがいいんじゃないですか？」

「そうだな。君のお父さんも心底悲しんでいるだろうから、いつまでもこんな埃っぽい資料室に君を住まわせておくことも出来ないしな」

神原氏の言葉を聞いて初めて、探は今居る資料室を見回した。

一見なんてことない部屋だ。

いくつかの棚いっぱい詰まったファイルや書類が整然と置いてある。

だがその奥に置かれた、あまりにも場違いな簡易ベッドと、わずかな荷物……

「椿さん……もしかして作戦が成功するまで、ここに住んでいるつもりだったんですか？」

そんなはずないだろう、というニュアンスを含んだ口調で、探が問うた。

だが椿は、ケロリとして答える。

「そうですね」

「『灯台もと暗し』と言うだろう？まさかこんな近くにはいないだろう、という心理の裏をかいただ。この資料室は私が管理してい

たし」

ここまでくると、先ほどまで半分あった感心はゼロになり、呆れ100%になった。

「神原さん。椿さんは一応お嬢様なんですから・・・」
それを聞いて、神原氏は椿をしげしげと眺めた。

「そうなのか？」

椿はにつこりと笑って答えた。

「いえ、それほどでも」

・・・もういい。この二人は放っておこう・・・

そう思い直し、探は話を本題に戻した。

「ところで、そんなに派手な作戦をするくらいですから、葵さんが生きていたこともわかっていたんでしょう？それと、どうやって副総監がボスだと割り出したんですか？」

先ほどとはうってかわって真剣な顔で、神原氏は語り始めた。

「最初から全て説明しよう。まず、葵さんがバーに監禁されている、という目撃証言がネット上に書き込まれただろう？あの文章は、こうだった。

若宮グループ令嬢誘拐事件 監禁場所発見！！

先日、謎の犯罪組織によって誘拐された若宮グループの令嬢・若宮葵さんの監禁場所らしき建物を発見した！

そう始まっていたらどう？」

それなら探も覚えている。

「はい。でも、それがどこかおかしいですか？」

「おかしいんだよ。『謎の犯罪組織によって誘拐』と書いてあったが、我々はマスコミに、犯罪組織が犯行を行ったということは、一切流していないんだ。なのに、この文章では犯罪組織だと決めつけている。もしかしたら数人の犯行グループかもしれないというのに

組織だと断定しているなんて、明らかに一般市民の考えることではない。そこで私は、この目撃情報が警察内部の者によって偽装されたものだと勘づいたんだよ」

先ほど探の中でゼロになった感心が、また盛り上がってくる。

探もあれを読んだときに違和感を感じはしたが、答えまでたどり着けなかったのに、あの文章を見た時点でそこまで見抜いていたとは驚異だった。

神原氏は続ける。

「その時点ではまだ誰が裏切り者かはわからなかったんだが、飛び去ったへりの追跡を副総監の部隊が独断で行い、拳げ句の果てに見失ったと聞いたときにピンときた。そこで椿さんに、こっそり声をかけたんだ。まあその後へりを墜落させるとは思わなかったがね」

探は、ただ感心して頷いていた。
直感と判断力、それに適応力に長けている神原本部長を頼もしく感じる。

本部長は、それを特に自慢するふうもなく当たり前のように続ける。
「それで、へりが墜落したのに何の反応も見せない副総監の様子から、あの事故は偽装だったと思ったんだ。普通、殺さずに監禁していた人質が死んだらすべてが水の泡だからな。だから、葵さんが死んだはずはないと確信したわけだ」

「なるほど・・・」

探は、さっきから心の中で繰り返しつつやっていたその言葉をようやく口にした。

「僕はダメですね・・・。多少違和感を感じはしましたが、そこまで辿り着かなかった」

探は、今まで絶大な自信を持っていたはずの自分の推理力、観察力の乏しさが恥ずかしくなった。

だが、久しぶりに椿が口を開いた。

「しょうがないですよ。姉さまが死んだなんて聞かされたら、違和感なんか感じる前にショックが先にきますから。冷静になんてなれ

ませんよ。私だって神原さんに作戦の話提案されたばかりのとき
には、そんなこと出来る自信ありませんでしたから」

そう言う椿の傍らで、本日何度目かの決まり悪そうな表情を浮かべ
た神原本部長がギクリと身じろぎした。

それを知ってか知らずかはつきりしないまま、椿は続ける。

「そういう人間らしい感情も、探偵には必要だと思えますよ?」

前にも、葵と同じようなことを言われたことがあった。

どことなく姉と同じ雰囲気を持つ椿に、葵の面影が重なる。

探は切なげに微笑んだ。

「ありがとうございます」

「さて!今度は私から質問なんだが」

椿に、まるで自分が人間らしい感情を持ち合わせていないようなこ
とを遠回しに言われた神原本部長は、手っ取り早く話題を変えた。

「何です?」

そう答えた探に、本部長は不思議そうに尋ねた。

「君はどうしてこんなに早く、我々が組織の人間じゃないとわかっ
たんだね?」

その言葉に、探はやつと重要なことを思い出した。

この部屋に入つて、まず椿がいることに驚き、さらに本部長の華麗
なる推理に圧倒されっぱなしだった探は、一番大切な事項が頭から
吹き飛んでいたので。

「それはですね・・・」

そう言いながら彼は上着のポケットを探り、葵からの手紙を取り出
して二人の前に掲げた。

「これが届いたからなんです」

不思議そうにそれを凝視していた彼らの表情は、探が手紙を広げた
瞬間に凄まじいものとなった。

神原氏は言葉を失い、椿は目に涙が盛り上がった。

「・・・これは・・・?」

椿が、震える声で問うた。

「昨日の夜、ワトソンが持ってきてくれたんです。間違いなく葵さんからのメッセージです」

それを聞いて、椿は笑顔と涙が同時にこぼれた。

「よかった・・・姉さま」

神原本部長も、安堵の微笑みをたたえていた。

「でも、組織の狙いが『パンドラ』という宝石なのはわかったが・・・不老不死なんて、冗談だろう？」

神原氏は手紙から顔を上げ、探に問うような眼差しを送った。

つられて椿も、まだ少し潤んだ目を上げる。

「そうですね。姉さまのブルーダイヤの中にあるなんて・・・というか、そんな宝石が、本当にこの世に存在するんでしょうか？」

それは、探にもわからない。

彼はただ首をすくめることしかできなかった。

本部長は短く息を吐き、椅子の上で大きく伸びをした。

「・・・まあ、まず徹底的に調べることからだな。そんな奇抜な話なら、誰か知ってるかもしれない。宝石の窃盗犯の前科者でも洗ってみるか」

・・・え？

そのときだった。探の脳裏を、何かが駆け抜けた。

『前科者』という言葉聞いた瞬間、頭の中で何かの鍵が開いたような気がした。

探は、心の中でその言葉を繰り返す。

前科者・・・前科者・・・パンドラ・・・不老不死・・・前科者・

・
・

その言葉の繰り返しに、『ブルーダイヤ』という響きが加わったときだった。

先ほど頭をよぎったものが、今度はだいぶゆっくりになって再生された。

それは、誰かの声だった。

だが、まだその断片しか聞き取れない。

探は固く目を閉じ、意識を集中させた。

何でもこの世には、不老不死の・・・

真つ暗闇の中で、また頭をよぎる言葉。

それは、日本語ではなかった。

男の声が、探が慣れ親しんだ英語で何か言っている。

そして暗闇の中に、無精ひげを生やした外国人の男の汚い笑い顔が浮かんだとき、探の記憶の扉はようやく開かれた。

何でもこの世には、不老不死の効力を持った伝説の宝石があるらしいぜ。パンドラって言って、大英帝国最大のブルーダイヤの中に隠されてるって話だ。だから俺を雇った組織の連中は・・・

ガタンツと派手な音を立てて、探は椅子から立ち上がった。

彼のその唐突な行動に、椿と神原氏が飛び上がって驚く。

「ど・・・どうしたんだ？」

探は棒立ちになって、遠くを見つめるような目をしていた。

冷や汗が一筋頬を伝った。

探の脳内では今、気になることをやっと思い出せた爽快感と共に、

推理をしていて、たった一つの真実にぶつかったときの、あの独特の達成感がみなぎっていた。

「思い出しました・・・」

力が入っていない声で探はつぶやいた。

椿も立ち上がって、探の顔を覗き込む。

「何を思い出したんですか？」

その言葉に我に返った探は、輝く瞳で真っ直ぐに椿を見て言った。

「パンドラの謎が、解けるかもしれません!!」

次の日、探は空港の搭乗ゲートに立っていた。

手には荷物一式と、飛行機の手ケット。

フランスへ直行の便だった。

座席に座り、探は緊張気味に息を吐いた。

そのまま深呼吸をする。

彼は今、大きな手がかりに一步近付こうとしていた。

椿と神原氏の作戦は残念ながらご破算になったが、副総監にはまだ何も勘づかれていない。

捜査本部に提出するはずだった葵からの手紙も、探がしっかりと持っている。

手紙のことも、組織の狙いがわかったことも、葵が生きていることも、探と椿、神原本部長、そして白馬氏と、英吾を含む若宮家の者たちだけの間で厳重な秘密となった。

ここからは、副総監に気付かれずに救出作戦を進めなければいけない。

他の警察官の中の誰がスパイかもわからない状況で、探たちは奔走することとなる。

ここから、本当の戦いが始まるのだ。

飛行機の窓の外に見える景色が、ゆつくりと流れていく。

やがてそれは速度を上げ、機体は滑走路を疾走し始めた。

そして何度と無く経験している、あの独特の浮遊感を乗客にもたらしながら、飛行機は地上を離れた。

探を手がかりへと運ぶ巨大な鉄の鳥が、異国の地に向けて飛び立った

第43話 離れていても

セーヌ川にまたがる、フランスの首都・パリ。世界中から、夢を求めて人が集まる、世界的な芸術・流行の中心地だ。

第2次世界大戦で奇跡的に空襲をまぬがれたということで、多くの歴史的建造物が連なっている。

しかし、探はその伝統的な町並みを眺めることもせず、ただひたすらに道を急いでいた。

降り積もった雪を一步步く度に、くぐもった音と不安定な感覚が足の裏に伝わる。

現実味のない頼りなげな歩き心地とは裏腹に、気持ちだけは急^せいでいた。

はやる気持ちを抑え、若干あいまいな記憶を頼りに目的地に向かう。フランスには、しばらく来ていない。

おかげで景色は随分変わり、探は少不安になった。

だが、見覚えのあるレンガ調の建物を見つけたとき、彼の口元は思わずほころんだ。

この家の角を曲がると現れる大きな通りに、彼の目的地がある。

通りをしばらく歩くと、その建物が見えてきた。

厳^{おそ}かな雰囲気のカリーム色の壁、その横に付いている階段・・・すべてが、最後に見たときのままだった。

探は階段を昇り、重々しいドアの前に立った。

フランス語と英語で書かれている看板の文字を確認し、目的地を確かめる。

迷わず中に入り、秘書と顔を合わせると、すぐに奥の扉に案内してくれた。

この木目の扉には、あまり良い思い出がない。

これを前にするときには、いつも寂しい気持ちだった。だがここまでくると、もうその扉を開けるだけだ。先ほどまであんなに急いでいたのに、いざこの時を迎えると少々ためられる。

探は深呼吸し、扉をノックした。

「oui. (はい。)」

乾いたノック音のあと、中から女性の返事が聞こえた。意を決して、探は扉を開ける。

部屋の中央に、大きなデスクに座る女性が居た。パリっとしたスーツを着こなし、豊かな髪を軽く結い上げている。彼女は最初俯いて、何やら書類を眺めていたが、すぐに客人に向かって顔を上げた。

「・・・探!？」

彼女の瞳が、驚きに見開かれる。自分を見つめるそのくつきりした目も、優しげな口元も、何も変わっていない。

ただ、ほんの少しだけ皺しわが見えた。

この人も、歳を取ったのだ・・・。

探は心の中でそう呟きながら、毅然きぜんとした態度で言った。

「お久しぶりです。・・・母さん」

テーブルに、温かい紅茶が置かれた。

ティーカップに入った湯気の立つ紅茶の向こう側にはすぐ、母が座

っている。

彼女は穏やかに微笑みながら言った。

「どうしたの？連絡もなしに急に来るなんて、あなたらしくないわね」

探は、久しぶりに母親の目を見た。

「頭が少し混乱していて・・・連絡するのを忘れていました。すいません」

母は、いいのよ、と微笑んで言い、ティーカップを持ち上げた。

探もつられて、紅茶に手を伸ばす。

だが、口元まで持つて行ったものの、飲もうとはしなかった。

「今、大変なことになっているそうね。葵さんが、誘拐されたとか・・・」

探が顔の目の前にある紅茶を見つめているとき、母が言った。

探はカップを持ったまま、彼女に視線を移す。

「どうしてそれを？」

彼女は、少し可笑しおかそうに笑って答えた。

「そんなの、あの人に聞いたからに決まってるでしょう？電話をもらったのよ」

その言葉に、探は目を見開いた。

「父さんが、電話してきたんですか！？」

母は、まだ少し笑っている。

「そうよ。何かおかしい？夫婦なんだから電話くらい当たり前じゃない」

そう言つて、また紅茶を一口飲んだ。

探は、まだカップを持ったままだ。

「そうですね・・・父さんが連絡するなんて珍しいので母の笑みが深くなった。

「なあに？じゃあ私たちのこと、愛し合っていない夫婦だとも思ってたの？」

「いえ、そういうわけではなくて・・・」

だが実際、そうだった。

探は、父と母の仲が冷え切っているように思えてならなかったからだ。

母は、探が物心ついたときからもうフランスにいた。

お互いの仕事の都合とはいえ、父と母が何年も離れて暮らしているのを見て、仲むつまじい夫婦と思えるわけがない。

父も普段、母のことは口にしない。

ましてや電話をしているところなど、想像もできなかった。

そんな探の心を見透かしたかのように、母は言った。

「これでもね、定期的に電話で話してるのよ？あの人、マメだから」その言葉は、探を大いに驚かせた。

そんな一面など、自分の両親とは無縁だと思っていたからだ。

同時に、探の中で何かが生まれたような感覚が芽生えた。

何だか、『家族』というものが少し繋がったような気がした。

たった一本の電話線を通して、父と母はずっとお互いを見てきたのだ。

探は、目の前の紅茶に映る自分の顔を見つめた。

今まで、勝手に思い込んでいた。自分の家族には、母が欠けていると。自分は母に、放っておかれっぱなしだと。

だが、そうではなかった。自分は被害者ぶっていたが、実は理解を示さない愚か者だったのだ。

探はカップを置き、真っ直ぐに母を見て言った。

「離れていて、辛くはないんですか？」

母は相変わらず微笑んだまま、言葉を発した。

「付き合いの長い夫婦ともなるとね、側にいなくても不思議と平気になるものなのよ。相手は必ずどこかで、ちゃんと存在してるって思えるから」

母は、にっこり笑った。

その言葉は、固い土にゆっくりと水が染みこむように探の胸に吸い込まれていった。

温かいものが、胸に優しく広がった。

「あなたに対してだって同じよ」

母は、またも探の心を見透かしたようなことを言った。

「忙しくて全然帰れないけど、ちゃんと気に掛けている。でも、わかっているから。あなたがちゃんと立派にやっっている。だから、私は何も口を出さないわ」

彼女はまたカップを手を取った。

「近くにいらなくても、わかるから。親子なんだからね」

探の母親は、そう言い切ると紅茶を飲んだ。

探も何も言わず、カップを口に運ぶ。

温かい紅茶が、今まで探の中にあっただ暗いものをゆっくりと溶かしてくれるような気がした。

「ところで、今日はどうして私のところに？」

母に対するわだかまりが消えた探は、本題を話した。

「実は、教えて頂きたいことがあるんです。今、イギリスの刑務所に入っている男のことで」

母は、不思議そうな顔で尋ねた。

「イギリス？どうして私にそんな男のことを？」

探は説明を始めた。

「その男は1年ほど前に、窃盗罪で逮捕されました。大英博物館で盗みをはたらいたんです。そのとき僕も彼に会いました。彼には前科があるんです。フランスで盗みをしたことがあって、その訴訟に弁護士として母さんが関わった、と、当時警察の方から聞いたのを思い出しまして」

それを聞いて、母は、ああ！という顔をした。

「思い出したわ！いたわね、そんな男。フランスで派手に盗みをして捕まったのに、こりずにまたイギリスで窃盗をしたもんだから、呆れたわよ」

これが、探の今回の目的だった。

昨日、突然思い出したその男の言葉。

それは1年ほど前、探がイギリスにいたときにたまたま出くわした男が言った、突拍子もない言葉だった。

だがその内容は、今の探にとって重要な手がかりとなっている。

探の記憶と推理が正しければ、その男は組織に雇われた下っ端。

パンドラを探すために、盗みをさせられていたのだらう。

それを確かめるため、探は彼の前科を調べようと母を訪ねたのだ。

彼女は何も言わず、席を立った。

「あの事件の詳しい資料なら、ここにあるわ。それが見たいんでしよらう？」

それなら話は早い。さすが現役弁護士、頭がきれる。

資料があるとは言っても、母が関わった事件の資料の中のどこかに、
だ。

探は資料室の棚の膨大な資料の中から、目当てのものを探した。

探の記憶では、その男のファーストネームはベンだった。

『ベン』という名前を頼りにしばらく探すと、ある1冊に行き当たった。

表紙に書いてある罪状も『larceny (窃盗)』。

間違いなかった。

母はフランスにいるものの、英語のほうが使いやすいらしく、資料は全て英語で書かれていた。

探は、かじりつくように夢中で読み進める。
こういうときに、語学が堪能で良かった、と思うのだった。

探の母がデスクに戻って仕事を再開していると、しばらく経って探が戻ってきた。

「見つかった？」

母が尋ねる横で、探はいそいそと荷物をまとめながら答えた。

「はい。メモもとりました。おかげで助かりました。ありがとうございます」

そう言い終わったとき、探はコートを片手に持ち上げていた。

母が、驚いて言う。

「もう行くの!？」

探は荷物をまとめる手を休め、母親に申し訳なさそうな顔を向けた。
「すみません。事実がわかったからには、すぐに次の目的地へ行かなければいけないんです」

「・・・そう」

母は一瞬残念そうな顔をしたが、探の顔を見るとすぐに優しげな笑顔に戻った。

彼の表情は、ここに来たときより何倍も明るくなっていたからだ。

「じゃあ・・・頑張つてね、捜査」

出入り口の敷居の外側に立つ探に向かって、母が言った。

結局最後まで、探が何のために資料を見たがったのか、彼女は聞かなかった。

そして、探が成し遂げようとしている危険な捜査を止めることもしなかった。

彼女にはわかっているのだ。息子がどんなに頑張っているのかを。そして同時に、信じてもいる。だから、あれこれ口を出さない。

二人は親子なのだから。

「本当にありがとうございます」

探は頭を下げた。

顔を上げて、最後に母と目を合わせると、彼は背を向けて階段を降り始めた。

だが半分ほど降りたとき、急に母に呼び止められた。

「探！」

足を止めて振り返った探を迎えたのは、切なげに佇む母親の姿だった。

彼女は大きな声で呼びかけた。

「くれぐれも、気を付けるのよ！！」

息子の行動に口を出さないし、息子が成し遂げようとしていることがどんなに危険でも止めない。

そんな彼女だったが、やはり母として、心配だけは一般人並なのだ。

探はしばらく彼女を眺めていたが、やがてふっと笑って言った。

「父さんにもそう言ってあげて下さい。電話で」

いたずらっぽい顔を、探は母に投げかける。

そんな探の上手い言葉に、母は思わず笑ってしまった。

その笑顔を確認すると、探は再び進み始めた。

母親の優しい言葉を、胸にしまいながら。

花の都パリと言うが、9月から暖房の入る土地である。

この時期はそんな華やかさより、圧倒的な寒さのほうがより一層感じられる。

コートの襟を立て、探は次なる目的地に向かった。

心の中では、寒さなど微塵も感じさせないほどの知的興奮が呼び覚まされていた。

付き合いの長い夫婦ともなるとね、側にいなくても不思議と平気になるものなのよ。相手は必ずどこかで、ちゃんと存在してるって思えるから……

列車に揺られながら、探は先ほどの母の言葉を思い出していた。愛する人が側にいなくても平気になるなんて、探には考えられなかった。

葵には、ずっと側にいてほしい。ずっと側で笑っていてほしい。

今だって、会いたくて会いたくて仕方がない。でもいつか、父や母と同じように思えるようになるのだろうか。

相手がどこかに存在していると思うだけで、幸せな気持ちになれるのだろうか。

離れていてもお互いを思い続けられるくらい、強い絆が結べるのだろうか……？

窓の外の景色が、めまぐるしく変化していく。様々に形を変え、色を変えていく。

この変わり続ける世界の中で、ずっと変わらない強い絆を、自分の父と母は持っている。

目頭が熱くなった。悲しみとも、切なさともつかない気持ちになった。

だが、とにかく温かい何かを感じた。涙が温かい理由がわかったような気がした。

今まで目を背けたかった父と母の関係が、今日の母の一言で探の理想になった。

車内のアナウンスのあと、列車はユーロトンネルへ入った。

第43話 離れていても（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

今回はお母さん登場！。ちなみに第16話で、探はお母さんについてコンプレックス発言してます。

第44話 ベン

ユーロトンネルを抜け、列車は異国の地へと出た。

ドーバー海峡を越えて探がやって来たのは、ヨーロッパではフランスと並び称されるほどの大国・イギリスだった。

長い歴史と威厳を持つこの国の国民は誇り高い。

探は窓の外の景色を見つめながら、懐かしい気持ちになった。

ハイスクールは卒業したが、大学もこの国の大学に通う予定だった。彼の大切な人・葵も、こちらの大学に留学が決まっていたはずだった。

イギリスは、探と葵の夢と希望を秘めた土地だった。

そう、葵が過酷な運命に翻弄されるまでは。

半日後、探はロンドン市内を歩いていた。

長い間慣れ親しんだ、彼の第二の故郷。

テムズ川にまたがるその大都市は、世界経済の中心となるイングランド銀行・取引所などが集まっている。

雄大荘重な18世紀のバロック様式のセントポール大聖堂などからも、この大英帝国の長い歴史の軌跡を辿ることができる。

だがここでも、探はそんな旅愁に浸っていられるような心情ではなかった。

やはりその現場に来ると、心臓の鼓動は高鳴り、足は自然と速まる。

とりあえずホテルにチェックインし、荷物を適当に片付けたら再び出掛ける用意を始めた。

留学中に住んでいた部屋には、大学に行ってから住まう予定だったためいつでも出入りできるが、探の目的地からは少し遠い。

とにかく探は早く行動を起こしたかったため、目に付いたホテルを選んだのだ。

列車での移動中に、目的地へのアポは取った。

留学中の探偵時代に警察と深く関わっていたため、顔が利くのだ。その境遇に感謝しつつ、彼はホテルを出た。

今回は、母の事務所へと向かうときとは逆に、行く道が不安になるほど記憶はあいまいではなかった。

むしろはつきり覚えている。

その記憶に従って歩いていくと、当然のことながらその場所に着いた。

そしてやはり、母の事務所に入るときためらったのとは逆に、迷わず中に入る。

中をはじめじめと暗く、あまり、というか全然、良い気分になれるような場所ではなかった。

当たり前だ。ここは刑務所なのだから。

警官と挨拶を交わし、探は面会室に通された。

相変わらず薄暗い、寒々とした部屋だった。

中には一組の机と椅子が置いてあるだけで、他は何もない。

いや、部屋の四隅に警官が立っているが。

探が座って待っていると、奥のドアが開いた。

両脇を警官にしつかり抑えられた男が、気だるそうに入ってくる。

だがその男は探の姿をとらえると、顔中に汚い笑みを浮かべた。

落ちくぼんだ目に、ボサボサの茶色い短髪。手入れのされていない無精ひげが、ひどく見苦しい。

この男がベン。ベン・ジョーンズといって、1年前大英博物館に侵

入し、投獄されているイギリス人だ。

ベンにはやにや笑いながら、探に英語で話しかけた。

「よお。誰かと思えば日本人の坊ちゃんじゃねえか。元気だったか？」

そう言い終わると同時に、ベンは椅子に座らされた。

探は流ちょうな英語で返事を返す。

「それなりに元気にやっていましたよ。僕のことを覚えていてくれて光栄です」

無表情で皮肉を言う探の顔を見ながら、ベンは鼻で笑った。

「フン。忘れるわけねえよ。俺を捕まえて刑務所に入れやがった野郎だからな」

「失礼ですね。捕まえたのは僕ではなく博物館の警報装置と地元警察ですよ」

ベンは笑みを消して、机に両肘をついた。

「お前の推理で俺は追いつめられたんだから一緒じゃねえか。で？何でわざわざ俺に会いに来たんだ？」

探は表情を引き締め、本題に入った。

「お聞きしたいことがあるんです。あなたを雇った組織と、狙っていたブルーダイヤのことを」

その言葉に、ベンは若干驚いた顔をした。

「それなら捕まったときに全部話しただろう？」

探は苦笑する。

「あのときは、全部ウソだとしか思えなかったんですよ。だから、しっかり聞いていませんでした」

ベンは恨めしそうに探を横目で睨むと、溜め息をついた。

「ったく。これだから賢^{かし}ぶってる日本の探偵さんはよお。現実離れたことは信じねえんだから……。ちったあ夢のあることを考えるってんだ」

その言葉に、探は再び苦笑を返す。

「まあ、そう言わずに。教えて頂けませんか？あなたを雇った組織

に教えられた、ブルーダイヤの伝説のことを」

疑うような、試すような目でベンは探を見ていたが、やがて彼は机についていた肘を下ろして椅子の背にもたれた。

「……どうして今さら、そんなことが知りたいんだ？」

探は、何者にも動じない眼差しを返した。

「大切な女性むすめのためです」

それを聞いた瞬間、ベンが眉を上げ、顔中に驚きの色を浮かべた。

「……何かおかしいですか？」

ベンの反応に、逆に探も驚く。

しばらく黙っていたベンだったが、やがてゆっくりと眉を下ろし、思った通りのことを素直に話し始めた。

「いや……お前さんがそんなこと言うなんて信じられなくてな」
彼は体を起こし、再び机に肘をつく。

「初めて会ったとき、お前さんはかなり嫌な男だった。自信めい満々で、他人を見下して……。『大切な人』なんて純粋な言葉を言うような野郎じゃなかった」

探は、昔の自分を思い返した。

確かに、ベンの言う通りだった。

自分だけが正しいと信じていた。特に、推理に関しては。

だが、彼のその自信を打ち破る男が現れたのだ。探偵甲子園と銘打って行われた推理対決で。

探にとっては辛い思い出だったが、もうそのトラウマは葵が癒してくれた。

二人のおかげで、探は変わったのだ。

「それまでの僕は、『大切』と言える何かを持っていなかっただけです」

探は、意味ありげに言い切った。

ベンが、ボリボリと頭をかいて言い捨てる。

「まったく、女つてのはいろんな意味で厄介な生き物だぜ」

探は、声に出して笑った。

ベンも苦笑し、今度は背筋を伸ばして腕を組んだ。

「よし。じゃあ、教えてやろうじゃねーか。俺を見捨てやがった組織のことをな」

数回の呼び出し音のあと、白馬氏が電話に出た。

『もしもし？』

「もしもし、あなた？私よ」

すると受話器の向こうの白馬氏が、拍子抜けしたような声を出した。

『なんだ、夏香^{なつか}か。知らない番号だったから誰かと思ったよ』

探の母は、口元を緩ませて答えた。

「ごめんなさいね。携帯を忘れて来ちゃって、事務所の電話からかけてるの」

『そうか。ところで、探は来たか？』

「ええ、昨日。いきなりだったから驚いたわ」

妻の言葉に白馬氏は、ははは、と笑った。

『やっぱり連絡しないで押しかけたのか、あいつ。で、あいつの目的は達成されたのか？』

夏香は深く椅子にもたれ、左手の薬指の指輪を眺めながら答える。

「みたいね。でも、調べたかったことがわかったら、すぐにイギリスに行っちゃったわ。もっと話したかったんだけど」

彼女は、そつと窓のカーテンを開けた。

雪に反射した光に、指輪がきらりと光る。

『仕方がないさ。手掛かりを見つけたら突っ走る性格は、変わっていないから』

夏香が苦笑する。

「そうね。ところで、どうしてあの子はベンって男に会う必要があるの？」

本人には直接聞かなかったが、やはり気になる。

『誘拐事件』と『イギリスの窃盗犯』を結びつけるものが、夏香には思いつかなかった。

だが、そんな妻の疑問に、夫もまともな返事を返せない。

『それが、私もよく理解できないんだ。こっちが納得するまで説明してくれなかったんだよ、あいつ。飛行機まで時間がなかったからな』

そう、と、カーテンを戻しながら夏香は言った。

白馬氏が、頭の中を整理しているような口調で言う。

『あいつが言うには、組織が狙っている宝石の情報を、そのベンって男は知っている、ということだ。組織に雇われたが、盗みでしくじって警察に捕まり、組織を恨んでいる。だからその男は、組織も道連れにしようと、組織の重要な秘密を警察にペラペラしゃべっていたらしい。それを1年前、探が聞いたというわけだ』

夏香は椅子を立ち、テーブルの上のカップにコーヒーを注いだ。

一呼吸置いて、白馬氏が続ける。

『組織は証拠を残さないし、その男の言っていることが現実離れしすぎていて、探を含む周りの者は誰も信じていなかったらしい。だが、この間話した、葵さんからの手紙がきっかけで、どうやらあの男の言っていたことは本当だった、とわかったわけだ。その情報の詳しい内容は、聞いている時間がなかった』

「何だか、訳のわからない組織みたいね」

ああ、という夫の返事を、夏香はコーヒーを口に含みながら聞いた。部屋には暖房器具の乾いた音しかしていない。

その静寂の中では、受話器の向こうの夫の息遣いまで聞こえるような気がした。

遠いようで近い距離をじっくりと味わったあと、夏香は言った。

「でも、探なら大丈夫でしょう。・・・あなたの息子だからね」

『ああ。お前の息子だからな』

白馬氏の返事に、夏香はにやりと笑う。

恐らく彼も彼女と同じような笑いを浮かべているのだろう。

二人は、受話器を通して静かに笑い合った。

『じゃあ、また掛けるよ』

しばらくののち、白馬氏が沈黙を破った。

「ええ。それじゃ・・・あ、待って」

電話を切ろうとした白馬氏を、夏香が引き止める。

彼女は昨日、探が去り際に言ったことを思い出していた。

「あなた・・・気を付けてね」

少しの間のと、優しい声が返ってきた。

『・・・わかった。心配するな』

再び夏香は微笑み、挨拶を交わして電話を切った。

受話器を置き、仕事に戻る。

コーヒーマシンの湯気が立ち上る中、穏やかな沈黙が訪れた。

「この世にはな、不老不死の力を持つパンドラって宝石が存在するんだ」

ベンは探に向かって、いささか得意そうに言った。

探は、葵の手紙を思い出す。

つまり組織は、そのパンドラが葵のブルーダイヤの中に入っていると踏んで、葵を誘拐したということになる。

ベンは続けた。

「それは、世界中に散らばるビッグジュエルの中のどれかに隠されてるっていう伝説

がある」

探は、一旦ベンを制止した。

「待って下さい。ビッグジュエルって何ですか？」

ベンは面倒くさそうに言った。

「それぞれの国にある、その国最大の宝石のことだよ」

それを聞いて、探は大きく頷いた。

「なるほど！だからあなたがフランスで盗んだのが、フランス最大のトパーズだったんですね」

「何！？お前、何でそれを知ってるんだ！？」

ベンは目を見開き、心底驚いていた。

探が淡々と言う。

「ここに来る前に、あなたの前科を調べさせて頂きました。あなたのフランスでの罪の訴訟に関わった弁護士が、資料を持っていたので」

ベンは一瞬目を泳がせて考えていたが、やがてはつとずる。

「もしかして、あの日本人の女か？知り合いか何かなのか？」

探は、誇らしげに言った。

「僕の母です」

につこり笑った探に、ベンは一通り驚いてから呆れた表情を向けた。

「日本人ってのは、みんなお前みてえな策略家なのか？」

その言葉を見無視し、探は話を本題に戻した。

「続きをどうぞ」

ベンは溜め息をついて、話を再開する。

「で、組織は1年前、パンドラが隠されているビッグジュエルが、イギリス王室に伝わる大英帝国最大のブルーダイヤだるところまで突き止めた。どうやって突き止めたかは、下っ端の俺には教えられなかったがな。それで俺は、組織に命じられてそのブルーダイヤを盗むために大英博物館の保管庫に入った。だが、そこにブルーダイヤはなかった」

「その直後、逮捕されたということですか」

探は考え込んだ。

組織はそのブルーダイヤが大英博物館に保管されているというところまで突き止めたが、それはすでに何らかの手段で華代の家に流れ去った、といったところだろうか。

探は葵の胸にあった宝石を思い浮かべた。

透き通るような碧に、女神を象つた銀細工かたどがついていて・・・と、そのとき、探はある疑問にぶつかった。

「ベンさん。その前にあなたが盗んだ、フランス最大というトパーズの大きさは、どのくらいだったんですか？」

「ああ？何をいきなり・・・」

神妙な顔で聞いてくる探に、ベンは何の気なしに答える。

「んーと・・・はつきりとは覚えてねえが、このくらいだったかな」
ベンは、両手で幅を作って説明した。

その横幅は、軽く20センチはある。かなりの大きさだ。

だが、葵が持っていたあのブルーダイヤは縦長で、首から下げられる程度の大きさだった。

縦の幅は、せいぜい5〜6センチくらいだろう。

「どういうことだ？『大英帝国最大』というくらいだから、他のビッグジュエルと同じくらいの大きさがあってもおかしくないのに・・・」

しばらく考えたが、結論には辿り着きそうもない。

宝石の起源など、考えてもわからないものだ。

探は一旦思考を中断し、次の質問に入った。

「ところで、仮にその『パンドラ』が隠されている宝石を見つけたとしても、どうやって確かめるんです？」

探は伝説を聞いたとき、それが疑問だった。

葵が持っていたときに何度もあのブルーダイヤは見ていたが、中に宝石が入っている様子などなかった。

ずっと身につけていた葵ですら身に覚えがないくらいだから、一般人が見ただけではわからないような仕掛けになっているのだろうか？

予想するしかない。

ベンは少々投げやりな様子で答えた。

「それがわかんねえらしいんだよ。俺も気になって、盗みに入る前に聞いてみたんだが、どうやら秘密でも何でもなく単純にわからねえみたいだったよ」

「そうですか・・・」

探は再び、考えにふける。

組織に不利な情報もしゃべっているし、今はベンは組織に内通しているということはないだろう。

言っていることも、葵の手紙の内容を考えるとだいたい筋が通る。

話は信用して良さそうだ。

だが、もしそうだとするといくつもの不可解な疑問が残る。

その後、ベンにいくつか質問をしたあと、軽く挨拶をして刑務所を出た。

冷え切った大気が体を貫く。

ロンドンの代名詞と言っても過言ではないビッグ・ベンが、妙に明るい鐘の音色をその大気中に響かせた。

探は口を真一文字に結び、馴染みのある街中をホテルに向かって歩いて行く。

伝説や組織やブルーダイヤのことは収穫があったが、今ひとつすっきり解決しない。

逆に謎が増えたような気分である。

が、とにかく用が済んだら早速帰らなければならない探は、ホテルに着くなり荷物整理を始めた。

飛行機の都合で、このホテルに一晩泊まってから帰ることになっている。

だいたい整理を終えた探は、勢い良くベッドに倒れ込んだ。仰向けのまま、ぼうつと天井を見つめる。

彼は、これからのことを考えていた。

謎は少しだけだが解けたし、ボスの正体も特定した。

しかし、だ。肝心の葵救出についての希望は薄い。

ボスがわかったからといって、早速副総監に詰め寄ることなどできないのだ。

彼がボスだと確信した理由は、全て彼の行動や言動からだけで、彼がボスだという物的証拠がない。

彼のことだから、ヘリの墜落騒動のときの証拠となるようなものなどはとつくに抹消しているであろうし。

そんな状況で副総監に『あんたがボスだろ』などと言っても、逆に『証拠を見せる』と言われてしまう。

それに、ヘリ墜落の後処理のときのことを考えると、彼の部下も多く組織に関係していることは間違いない。

証拠不十分で副総監に疑いをかけ、結局逮捕できないでいるうちに、葵の監禁場所を移されてしまいかもしれない。

そうだったら、今回のワトソンの活躍のようなよほどの運が無い限り、葵を救出するどころか、居場所の特定さえ不可能になる。

探は溜め息をついた。

よりもよって副総監がボスだなんて、厄介な相手だ……無力感が心を苛む^{さいな}。

寶石の謎だつて満足に解けていないこの状況に、探の精神は火が消えそうだった。

彼は頭をずらし、天井から視線を移した。

何となく、まとめられた荷物を見やる。

スーツケースと、そこから分けられた一回り小さな鞆^{かばん}……

探はいきなり、がばりと体を起こした。

あのブルーダイヤが、他のビッグジュエルに比べて極端に小さいのは……もしかして……

探の頭の中で、確信に近い推測が組み立てられていく。
彼は長い間、そのままの姿勢でひたすら組み立て作業に没頭した。

第44話 ヘン（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

今回の重要ポイント。

『組織はパンドラのありか（葵のブルーダイヤの中）を知ってはいても、どうやってそれを確かめたらいいかわかっていない。それを葵に尋問するも、葵は全く知らない』

『逆にキッドは、パンドラを探し求めているが、宝石を月の光にかざせばパンドラを見つけられると知っている』

この食い違いが、ラストで重要になります。

第45話 監禁場所

昨日の一瞬のひらめきは、探の頭の中で確信に近いものに変わっていた。

さんざん推理を組み立てたおかげで、昨夜はほとんど眠れなかった。そのせいで、推理が落ち着いた今は凄まじい眠気に襲われている。重い頭を何とか抱え、探は地下鉄で空港に向かった。

ロンドンの地下鉄は日本とは全く違っていて、これに乗るたびに彼は異国の雰囲気を感じた。

地下鉄の列車は、まるで市販のかまぼこのように天井が円形なのだ。そのため、つり革につかまる体も傾く。

そんな不安定な姿勢でバランスを保つことを余儀なくされた探は、足下のスニーカーと鞆を支えるのに悪戦苦闘しながら地下鉄をやり過ごした。

まあ、この自分の荷物のおかげで昨日はひらめくことができたのだから、本来感謝すべきなのだが。

そんな状況の中で、探は時折上着のポケットに手を入れて、中のものに大事そうに触れた。

それは昨日、葵のために買ったものだ。

列車の動きで揺れる体に合わせて、それもポケットの中で転がったやがて地下鉄が探の降りるべき駅に停車したとき、彼はそれを握りしめ、力強く外へ踏み出した。

予定通りに空港に到着した探は、中で適当に時間を潰してから、飛行機に乗り込んだ。

それなりに財力のある彼だったが、席はエコノミー。

真ん中辺りの、窓際だった。

座り心地の良い椅子に腰掛けるとともに、安心感にも似た脱力感が容赦なく襲ってくる。

探は息をつき、離陸を待った。

しばらくののち、すでに聞き飽きている客室乗務員の救命用具の説明を聞き終わる頃には、探の瞼は限界だった。

離陸後、機体が水平に保たれるのとはほぼ同時に、彼は深い眠りに落ちた。

それからどれくらい経ったかわからないが、探の安眠は一旦途切れた。特に理由もなく偶然目覚めただけだったが、すぐ隣りの窓から入ってくる光が眩しくて、すぐには寝付けそうにない。

仕方なく探は、また事件のことに考えをめぐらせた。

やっぱり、何より重要なのは監禁場所の特定だ。物的証拠がない以上、直接そこを突き止めるしかない……

探は葵の手紙の一節を思い起こした。

ここは、壁も天井も真っ白な部屋。

一つだけある窓は自由に開閉できます。そこからは夕日が

差し込んで眩しいです。

遠くには警視庁が見えます。

そしてこの部屋は、高いビルの上のほうにあります。

ビルの外壁は白いです。

周りには中高層ビルがたくさん集まっていますが、特徴的な建物はなく、私には見覚えがありません

一番役に立ちそうな情報は、『遠くに警視庁が見える』ということ

だったが、『遠く』では意味がない。

警視庁の周りには、かなり広い範囲に高層ビルが建ち並んでいる。その中で外壁が白い高層ビルなんて、星の数ほどもあるのだ。

現に葵がいるビルの周りにも中高層ビルが集まっているということだから、位置を特定するのはほぼ不可能だ。

手当たり次第に白いビルに捜査を入れれば見つかるかもしれないが、そんな大規模で手間の掛かることをしたら目立ちすぎる。

副総監に勘づかれてしまいかもしれない。

第一、仲間内の誰がスパイかもわからないような状況で派手に動いて、副総監の耳に入りでもしたら、監禁場所を移される危険性も出てくる。

探は何としても、やっとの思いで掴んだこの手掛かりを無駄にしたくはないのだ。

結局行き詰まり、探は深く息を吐いて椅子に体を埋めた。

毛布を口の辺りまで引き上げ、煩わしい陽光を断ち切るように目を閉じる。

飛行機が風を切る音だけが耳に響いた。と、そのとき、その音に静かな男性の声のアナウンスが侵入してきた。

そのアナウンスは機長のもので、長時間移動する便にはごく当たり前のものだった。

皆様、日本までは日が沈まないため、これより睡眠時間と致します。恐れ入りますが窓側の方は、他のお客様のご迷惑になりますので、窓のブラインドをお閉め下さいますよう、お願い致します

このアナウンスも、しょっちゅう日本とイギリスを行き来している探にとっては聞き慣れたものだった。

時差の関係で、時間帯によってはイギリスから日本に行くとき、太陽が沈まないことがある。

だが飛行機での移動は長時間のため、途中で睡眠時間が必要だ。そのため、飛行機の窓全てに付いているプラスチックのブラインドを閉め切り、光をシャットアウトする方法が取られる。それによって機内は暗闇となり、乗客は気兼ねなく眠れるのだ。

言われた通りに、探はブラインドの取っ手に手を掛けた。これでようやく、うっとうしい光に邪魔されることなくゆっくり眠れる……
そう思ったときだった。

一つだけある窓は自由に開閉できません。
そこからは夕日が差し込んで眩しいです

先ほど思い起こしたばかりの手紙の一節が頭をかすめた。
探は思わず動きを止める。

夕日が差し込んで眩しい、ということは……部屋の窓にはカーテンが掛かっていないということか!?
ふいに湧いた疑問。

だがそれを深く考えようとしたとき、隣の乗客がもぞもぞと動いて、探に迷惑そうな表情を向けた。

探は急いでブラインドを閉め切り、軽く謝る。

暗闇の中、再び毛布にくるまりながら探は考えた。

監禁している部屋にカーテンを掛けないなんて、大胆だ。それほど自信があるのか?……いや、待てよ?確か同じようなことを前にも聞いたような気が……
その記憶は、すぐに甦った。

葵が拉致されてすぐの捜査本部で、捜査に行き詰まったときに副総監は言った。

『誘拐犯が被害者を監禁する場合、犯罪心理と実例の観点から見るとほとんどの場合が、外から見られないように部屋のカーテンや雨

戸を閉め切っています』と。

探は心の中で舌打ちをした。

またしても、副総監の心理作戦に操られていた。

これは、犯罪心理を逆手に取ったカモフラージュだ！

探は更に考える。

窓にカーテンを掛けていないというのは、かなり危険な行為だ。

隣のビルから中を覗かれたら見つかってしまう。

だから葵が監禁されているのは、周りのビルよりも遙かに高いビルで、周りのビルの頂点よりも上の部屋、ということになる。

その高さの部屋に居れば、隣のビルからは見えない。

事実、葵は『遠くに警視庁が見える』と言っているのだから、周りに視界を遮るような高いビルはないということだ。

これで、かなり絞られてきた。

探の記憶ではそのようなビルは思い出せないが、調べればすぐにわかる。

日本に着いたら早速捜査だ

嬉しさのあまり興奮して、結局眠れなくなってしまった。

希望に心を躍らせる探を乗せ、飛行機は着実に日本へと近付いていく

「なるほどな・・・」

フロントガラスに打つ雨がワイパーに一掃されるのを見つめながら、

白馬氏は息子の推理に納得した。

探が日本に着いたとき、外は雨だった。

水しぶきを上げて走る車の助手席で、彼は迎えに来てくれた父に説

明を終えたところだった。

赤信号になり、車が停車する。

白馬氏は複雑な表情だった。

信頼していた部下が黒ではなかったことに安心する暇もなく、今度は同じくらい信頼していた部下が黒幕だったとわかったのだから、気が滅入るのも当然である。

尚もワイパーを見つめながら、彼は言った。

「しかし、やはり伊勢谷君が黒幕だというのは間違いないんだな？」
探は目を伏せて返事をした。

「はい。神原本部長とも意見が一致していますし、葵さんの手紙とこれまでの彼の行動を考えると、そうとしか思えません」

白馬氏は、ただ前を見つめていた。

ハンドルを、指の関節が真っ白になるほど強く握りしめている。

彼の中で、何かを乗り越えようとしているのだろう。

やがて、信号が青になった。

白馬氏はアクセルを踏み、発進させる。

しばらく進むうちに、スピードに乗ってきた。

そこでもうやく、彼は口を開いた。

「わかった。事実は事実だ。私情は捨てて、全力で捜査にあたる」

その言葉に強い決意を感じた探は、ただ一言に感謝を込めて返事を返した。

「ありがとうございます」

「ところで、お前の推理に当てはまるビルには心当たりがある」

家に着いてコートを脱いでいるとき、いきなり父が言った。

「本当ですか!？」

驚きの表情を向ける探に、白馬氏は黙って頷いた。

「伊勢谷副総監が直属で管理する情報ビルだ。場所や外見も一致す

る」

聞き慣れない言葉に、少々困惑する探。

「情報ビル、とは？」

コートをハンガーに掛け、上着の乱れを直しながら、白馬氏が答えた。「警察関連の様々な情報を集め、処理するための機関だ。管理は、副總監の部下に任せてある。お前がロンドンに留学している間に建ったものだから、見覚えはないと思うが」

「そうですか」

再び、探の思考が回転を始める。

なるほど。副總監の管理するビルなら、捜査の目をかいくぐれるというわけか。まさか警察のトップレベルの人間の管理下に、人質がいるとは誰も思わないから。それに、警察の情報も手に取り放題だ・・・

白馬氏が、溜め息混じりに言った。

その表情には、普段大らかな彼からは考えられないような苦々しいものが浮かんでいる。

「どこまでも計算高い男だ。その賢さを高く買っていたというのに、ぼやく父を横目に苦笑しながら、探は話を続けた。

「明日、行ってみます。場所を教えてください」

「何!？」

いきなり発せられた衝撃の言葉に、白馬氏は目をむいた。

「ちよっ・・・ちよっと待て! そんなにすぐ乗り込んだって危険なだけだ!」

必死の形相の父に、探は笑って返事を返す。

「大丈夫ですよ。どんなところか、遠目に見るだけです。見つからないようにしますから」

だが、白馬氏はまだ納得しない。

「独断では危険だぞ? やはりこういうことはプロに任せるべきだ。

捜査本部に報告して」

「誰がスパイかわからないような状況で、もう警察は信用できません

んよ」

そう遮った探の言葉に、白馬氏は何も言えなくなってしまった。探は、父親を安心させるように笑って言う。

「大丈夫です。安易に近付いたりしませんから」

まだ心配そうな表情で、白馬氏は渋々了解した。

自分もついていこうかと提案したが、そろそろ行ってもかえって危険だと探に言われてしまった。

部屋に戻ろうとする息子に、彼は最後の心配をかける。

「探！・・・気を付けるんだぞ」

気を付けるのよ・・・

探の中で、別れ際の母の言葉が再生された。

彼は心中で、母は父にちゃんと電話したのだ、と思わず笑う。

「大丈夫です。必ず、大切な人を助けます」

そう言い残し、探は自室に戻った。

残された白馬氏は、そんな息子の背中に苦笑を投げかける。

全く・・・。あいつは本当に夏香の子だな

心中でそうつぶやき、彼もまた自室へ戻って行った。

第45話 監禁場所（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

今回探が思い出した伊勢谷副総監の『窓にカーテンが』って言葉は、第33話のものです。

第46話 意外な女性

次の日。まだ昨日の雨の名残で湿っている大気の中、探は道ばたで息を潜めていた。

父に位置を教わり、地図で周辺を何度も確認して、万全の準備を整えてこの場所にいる。

ここは、伊勢谷副総監の管理する情報ビルから50メートルほど離れた細い路地の中だ。

その塀の隙間から、探は前方にそびえ立つ白いビルを見上げていた。先ほどまでもう少し近くに居たのだが、ビルの周りに見張りが立っていることに気付き、急いでここまで引き上げてきたのだ。

事前に地図を凝視してきたおかげで、彼らからは死角となるこの路地に素早く逃げ込めた。

が、しかしそこまでは良かったが、それ以上先へは近づけない状況になってしまっている。

白馬氏の言った通り、そのビルは本当に葵の証言と一致していた。

外壁は白いコンクリート材で、30階建て前後。

均整のとれた正方形の設計で、規則正しく窓が並んでいる。

四方は高い塀で囲まれていて、門から垣間見えた見張りの男たちの様子から、張りつめた空気が伝わってきた。

そしてやはり探の推理通り、周囲にそれ以上高いビルはない。

恐らく高い位置にある部屋からは、警視庁が見えるだろうと考えられる。

やはりこのビルが、葵の監禁場所として有力だった。

しかし、ここからはうかつに近づけない。

探は薄暗い路地で考え込んだ。

今の時点で、副総監には何も勘づかれてはいない。

父や神原氏が慎重に監視しているし、椿にも姉を失ったショックで

ふさぎ込んでいるフリを続けてもらっている。

葵が生きているとわかったことは、絶対的な信頼のおける最小限の人々にしか知られていないため、敵に漏れる心配はない。

かろうじて、副總監と互角の立場を保っている状態だ。

この状態を維持しながら、葵を助ける作戦を練らなければならない。

「あの見張りの数からすると、やはり副總監の部下のかなり多くが組織の人間ということに・・・」

探は思わずいつもの癖で、考えを声に出してしまった。

急いで辺りを確認し、誰もいないことを確かめる。

ほっと安堵の息をつき、とりあえず今日は偵察ということにして帰ろう、と体の向きを変えたときだった。

「あなたが總監の息子？」

突然、背後から声がした。

弾かれたように振り返る探。

そこには、いつの間にも現れたのか、電柱にもたれて腕を組んだ若い女性の姿があった。

僅かにクセのある黒髪を肩に垂らし、射抜くように鋭い目でこちらを見ている。

形の整った唇が再び開かれた。

「副總監の部下のほとんど、じゃなくて、副總監の部下は一人残らず組織の人間よ」

しばらく探は、口を開けたまま呆然と突っ立っていた。

今日の前にいるこの女性の言葉、いや、存在すらも信じられない。

だがそんな探を、女性は平然と見返している。

「あの・・・あなたは？」

言葉に詰まりながら、やっとの思いで尋ねた探。

次の瞬間、女性はその平然さに似合わぬ衝撃的な答えを返してきた。

「私？私は伊勢谷馨かおる」

探が目を見開く。

女性は口先だけで笑った。

「お察しの通り、伊勢谷副總監の娘よ」

お互い何の動きも見せようとしないまま、時間だけが過ぎていった。ようやく冷静さを取り戻した探は、相手の様子を観察しながら尋ねる。

「・・・あなたも組織の一員なんですか？」

もしそうならば、ここで捕まえなくてはならない。

探が組織の正体を突き止めたと知られたら、何をされるかわからない。

殺されるか、もしくは葵を別のところに移されるか・・・。
どちらにせよ、かなり厄介な事態になることは確かだ。

だが、探のそんな心配をよそに、馨はけろりとしていた。

「私が組織の一員？バカ言わないで。パパと一緒にしてもらっちゃ困るわ」

ふっと短い息を吐くように、彼女は笑った。

探の愚かさを嘲笑するかのようなその不敵な笑みが、彼女の謎に満ちたオーラをより一層際立たせている。

探は尚も油断なく聞いた。

「では、なぜ組織の仕組みを知っているんですか？」

馨が組織の人間でないのなら、先ほど探に言ったことの説明がつかない。

本当に組織の回し者かもしれない、という緊張を代弁するかのよう
に、背中に冷たい汗が伝わる。

だが馨は次の瞬間、ためらうこともなくとんでもないことを言った。
「私も組織に入れて言われてるからよ。もう何年も前から。ずー

「とお断りしてるけどね」

表情ひとつ変えずに言い切った彼女に、絶句する探。

「一体どういうつもりなんだ？本当に罨かもしれない。」

彼女が言っていることは、常識では信じられないことだった。

その言葉の真偽を確かめるため、探はやっとの思いで口を開いた。
「もはや相手にどう思われようが関係ない。」

「どうして組織に入らないんですか？」

「一瞬、馨の目に鈍い光が宿ったが、すぐに影を潜めた。」

「じゃあ、あんたなら入りたいと思うわけ？」

「・・・いいえ」

「でしょう？それとおんなじよ。犯罪組織なんてまっぴらごめん」
「まるで他人事、とでも言うように吐き捨てた馨に、探は怒りが込み上げてきた。」

では彼女は、組織が悪事をはたらいているのを知りながら見て見ぬふりをしていたというのか？

何の罪もない葵が拉致監禁されているというのに、知らぬ顔でこのうと生きてきたというのか？

思わず強い口調になる。

「ではどうして今まで組織のことを警察に言わなかったんですか？」

すると、先ほど影を潜めた光が再び馨の目に宿った。

彼女は電柱から背中を離し、組んでいた腕を勢い良くほどくと声を荒げた。

「警察に言えですって！？その『警察』が、うちのパパよ！！パパの部下は一人残らず組織の人間なんだから、通報したって無駄に決まってるでしょ！？」

さつきまで冷静で、余裕の表情だった馨のいきなりの変貌に、探は思わず圧倒される。

そんな探を、馨は怒りを露わに睨みつけた。

しばらく、お互いを睨み合っ たままの沈黙が続く。

今の警の過剰な反応から判断すると、恐らく本当に組織に加わってはいないのだろう。

言っていることも、だいたい筋が通る。

警察の上層部が組織関係の人間ばかりなら、警一人が何か言ったところで、上手くもみ消されるであろうことは目に見えている。

だが、それは警の言っていることが本当だと仮定した場合の話である。

警視總監である探の父のすぐ側で、そんなふうには大規模に行動することが、果たして可能なのだろうか？

「・・・本当に、副總監の部下が全員組織に関係しているんですか？」

探が警に、疑いの目を向ける。

「そうだって言ってるでしょ？」

しかし、苛立たしげにそう答えた警の目は、探の眼差しに全く動じていないようだった。

信用してもよさそうだ。

だが、だとしたら彼女の目的は一体何なのだ？

どうして自分の父親の罪を口外するような真似をするんだ？

彼女に関しては、まだまだ疑問が残る。

敵ではなさそうだが、味方でもなさそうだ・・・。

最大の危機は回避したもののまだ気が抜けない探と、怒りが鎮まらきらない警の無言の問答が繰り返り広げられていたときだった。

「ニヤアツ」

二人の間に、背後の扉から一匹の黒猫が飛び降りた。

緊迫した呪縛から突然解放されたれ、二人は思わず飛び上がる。

緊張の糸が切れた彼らは、お互いに居心地悪そうに目を逸らした。

だが、すぐに警が口を開く。

「こんな無防備な所で話すようなことじゃないわね。場所を変えま

しよっ」

そう言つと、響は勝手につかつかと歩き出した。
戸惑う探。

「ちよっ……どこに行くんですか!？」

だがそんな彼を尻目に、響はブーツのかかたとを鳴らしながらどんどん
ん路地を奥へと進んでいく。

探は、黙ってついていくしかなかった。

第46話 意外な女性（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

馨は第26話と第29話で、存在だけ出てきてます。その部分を読んで頂けるとおわかりになると思いますが、彼女は恋愛面においても重要な人間関係を持っています。それは次回、明らかに。

今回の重要ポイント。

『何故馨は、実の父親の逮捕を目的としている探に情報を流すのか』
その複雑な心理は、馨さんの悲しい運命に繋がっていきます。

第47話 馨とウノ

「よう、馨ちゃん!」

ギョッと音のするドアを開けると、すぐにその声が二人を出迎えた。奥の薄暗いカウンターで、気の良さそうな中年の男がグラスを磨いている。

その彼が探を見て、不思議そうな顔をした。

「あれ?今日はいつもの渋い旦那と一緒にじゃないのか?」

その言葉に、馨は苦笑して答える。

「まあね。いつもあいつと飲んでばっかじゃつまんないし」

そう言い終わらないうちに、早速馨は店内に足を踏み入れた。

慌てて探も続く。

慣れない場所に、戸惑いを隠せなかった。

あのまま路地を進んで行って、ふいに行き当たったのはこのバーだった。

狭い路地にある隠れ家的な雰囲気この店は、かなり古そうに見える。

だが、そこにあえて飾り付けず小きれいにされた店内は、穏やかな時間を感じさせた。

どうやら常連らしい馨が通ると、座っている客が軽く手を挙げてあいさつする。

そんなやりとりを交わしながら、馨は一番奥のテーブルに迷わず腰掛けた。

ためらいがちに、探が向かいに座る。

「あの・・・僕は未成年なんです」

「だからって喫茶店みたいな目立つところで話すわけにはいかないでしょ?」

そういう問題ではない、と言いたいところだが、そんなことで言い

争つても時間の無駄と思ひ我慢。

代わりに探は、ありきたりな質問をした。

「普段、他の誰かと来るんですか？」

先ほどのマスターの反応を思い返す。

馨は相変わらず平然と答えた。

「ええ。ある人に、よく連れて来てもらうの」

しばらく探はカクテルを飲む馨に、至つてどうてもよい質問をした。彼女は春に20歳になった短大生で、年が明けたら成人式だと言っている。

初対面の人物とのありきたりな会話を一通り済ませると、彼はいよいよ本題に入った。

辺りに人がいないのを確認し、ぐつと声を低くする。

「それで・・・今日は、どうして僕に接触してきたんですか？」

しかし馨は、探のそんな真剣な様子を気にするふうもなくグラスを傾けた。

「別に。ここに来ようと思つてあの路地を歩いてたら、たまたまあなたを見つけたから声を掛けただけよ。新聞なんかで顔は知つてたし」

いつの間にか呼称が『あんた』から『あなた』に変わっている。

馨がグラスを置く前に、探は言った。

「そういうことではなくて！なぜあなたのお父さんに不利なことをわざわざ僕に教えて下さるのか聞いているんです」

だが、尚も表情を変えない馨。

彼女はグラスの表面についた水滴を指で弄もてあそびながら返事を返した。

「だってあの情報ビルを真剣な顔で観察してたから、きっとパパの企みも全部バレちゃってるんだろ？なつてわかつたのよ。そんな相手を必死でごまかすなんて無謀でしょう？だから、捜査に協力しようと思つて」

そう言つてのけた彼女の相変わらずな態度に、探は苛ついてきた。

なんでこう、上手く伝わらないのか。

「そうではなくてですね、なぜお父さんの罪を告発するような真似をするのかということなんです！あなたが組織の味方で、僕たちの捜査を惑わそうとしているのではないのなら、何が目的なんですか！？」

そう一気に言い切った探は、ようやく息をついた。

そのとき唐突に、水滴を弄ぶ馨の指が止まったかと思ったら、彼女は存在感のある目を上げた。

「悪に染まった父親の目を覚まさせることは、『目的』にならないの？」

再び先ほどの光を宿したその瞳を見たとき、探ははっと気が付いた。馨の・・・父を思う娘の、純粋な思いに。

最近の策略だとか陰謀だとか作戦だとかにはばかり敏感になり、他人の気持ちの裏を探るようなことにはばかり必死になってしまっていた。馨は何も邪な思いまじしぐなど抱いておらず、ただ悪の道から父親を助け出したいという純粋な気持ちを持っているだけなのだ。

そんな思いに気付かず馨に接していた探は、自分を恥じた。

「・・・すいません。どうかしてました」

うつむく探に、馨は浅い溜め息を投げた。

「気にしないで。そう言わなかった私も悪いんだし。素直じゃないのよ、私・・・」

最後の一言を聞いたとき探は、彼女の溜め息が探に対してなのか、もしくは馨自身に対してなのかわからなくなった。

しかし馨は、そんなことなどさっさと通り過ぎて話題を変える。

「つまりね、私はこれ以上パパにバカなことを続けて欲しくないの。でもパパは、顔を合わせたら『お前も組織に入れ』って言うだけで私の話に耳を貸してくれないから、こうしてパパの敵にまわったってわけよ」

探は、今でこそその思いが理解できる。

誰だって、自分の父親が犯罪に手を染めているなんて辛いことだ。

どうにかしてやめさせたいと思うのは当然である。

だが、探たちの味方についたということは、つまり父親の逮捕に協力するということ。

馨はきつと、ものすごく悩んだらう。辛かったらう。

再びグラスの水滴を指でなぞっている馨は、そんな様子など微塵も見せていないが、逆にそれが探の心を痛ませた。

こういう強がりなところが、さっき彼女が言った『素直じゃない』部分なのかもしれない。

気を取り直し、二人は本格的に話を展開させ始めた。

馨は探の手帳を机の上に開き、ペンを握る。

「まず、あなたは組織についてどれくらい知ってるの？」

ペンのキャップを外しながらの馨の質問に、探は目を泳がせる。

「ええつと・・・まだ詳しくは知りません。確実なのは、彼らの中の有力者11人のコードネームがスペイン語数字だということだけです。セロからクワトロまで、ドス以外は顔だけならわかります」なるほど、と呟き、馨は手帳にペンを走らせた。

『0』を表す『セロ』から『10』の『ディエス』までを、横一列に書いていく。

「まず、セロはうちのパパでしょ」

馨は『セロ』の文字の下に、『父』と書いた。

「1のウノは、セロの右腕とも言える一番の部下で、他の部下の統^リ率者^{イダー}」

『ウノ』の下に、『リーダー』の文字を加える。

「3のトレスは大柄で雑な男、4のクワトロは比較的若いサングラ

スの男」

それぞれの文字の下に、『大柄』『サングラス』の文字。

「で、2のドスは私」

「え!？」

思わず大声を上げた探に、数人の客が振り返る。

だが探は、そんなことになど気付かずただ混乱した。

「ど、どういうことですか!? あなたは組織に加わってはいないと・・・」

『ドス』の下に『私』と書き終えた馨は、少々迷惑そうな表情で探を遮った。

「落ち着いて。これは周りが勝手に言ってるだけよ。パパの話じゃあ、ウノに次ぐ2番目のポストは私が加わったときのために空けてあるんだって。だから、正確には今は誰も就いてない」
更に馨は文字を書き足す。

「5のシンコは白髪交じりのおじいちゃん。60歳近いんじゃないかしら。で、6のセイスはお堅い眼鏡かたの男。彼はパパの部下で警察関係者よ」

『白髪』『眼鏡』を書き終えたところで、馨は一旦ペンを止めた。
一呼吸置いてから、再び口を開く。

「7のシエテは、私のママ」
探は、はっと顔を上げた。

相変わらず馨は表情を崩さないが、『シエテ』の下に書いた『母』の文字が、心なしか乱れているように見える。

あえて何も言わず、探はメモに視線を戻した。

「8のオチヨは、口の悪い若い男。9の又エベは、よくわからない気難しい男で、10のデイエスは嫌味な野郎。又エベとデイエスも、パパの部下の刑事」

それぞれ『口悪』『謎』『嫌味』と書き足し、組織の主力11人の表が完成した。

探はその表を眺めながら、本日何度目かの驚きを経験していた。

11人のうち、警察関係者が副総監を入れて4人もいる。

自分の周りがいかに危険かを、改めて思い知らされた。

その気持ちを知ってか知らずか、馨が言葉を継ぐ。

「もちろんこの他にも、かなりの人数が構成員として在籍してる。

パパの下で直接働いてる部下も、一人残らず構成員よ。パパが私に教えてくれたことだから、間違いない」

「そうですか・・・」

失望感丸出しでメモを見つめる探を、馨はちよつと哀れむように見て言った。

「じゃあ次に、組織の目的」

その言葉に、探は素早く顔を上げた。

先ほどの失望感は、どこかへ吹き飛んでいる。

「そのことなら、つい昨日調べました。不老不死の宝石パンドラが狙いなのでしょう?」

馨は両眉を上げ、驚いた表情になった。

「どこでそんなこと調べられたの!？」

そこで探は、葵からの手紙、フランス、イギリスでのそれぞれの情報収集についてを、順を追って説明した。

馨は始終感心したように聞き入っていた。

「なるほどね・・・」

溜め息ともとれる息が、馨から漏れる。

「私の知ってることと、ほとんど一致してる。よくそんな幸運に恵まれたわね」

探は、自分でも不思議です、と肩をすくめて見せた。

馨が言う。

「もう一度整理して考えると、組織の狙いは不老不死の宝石パンドラ。それが隠されてるビッグジュエルは葵さんの持つてるブルーダイヤでほぼ間違いない」

探はそこで、難しい顔をした。

「そうです。でも不思議なのは、組織は宝石を手に入れたのになぜ足踏みをしているのか、ということですよ。葵さんからの手紙によると組織は『パンドラの見つけ方を教える』と彼女を尋問しているよ
うで」

それを聞いた馨は、ああ、と声を出した。

「それはね、パンドラをどうやって確かめればいいのかわからないからよ。パンドラの伝説は存在するんだけど、ものすごく断片的で頼りない情報だからあやふやな部分が多いの。パパとママがよくグチってるのを聞くわ。せつかくブルーダイヤを手に入れたっていうのに、パンドラが入っているのか確かめ方がわからないから手も足も出ないって」

それは、ベンに聞いたことと一致している。

だから組織は、その見つけ方を葵に話させようと躍起になっているわけだ。

だが、葵は何も知らない。

恐らく知っているのは、葵の母親の華代だったのだろう。
誰にも教えないまま、彼女はこの世を去った。

「組織は彼女を問い詰め、彼女は知らないと言い張る。その繰り返し状態なのね」

馨がまた、一日の溜め息の回数を増やした。

探もつられて、力無く息を吐く。

事実の情報と推理の組み立てに夢中になって話し込んでいるうちに、かなりの時間が経っていた。

馨が思い出したようにカクテルを一口飲むと、グラスは空になった。

馨の情報によって、状況は好転している。

しかし、それ以外に馨が協力できることは見当たらなかった。

話し合うべきことを一通り済ませた二人の会話は、自然と行き場の

ない雑談へと流れていく。

「いろんな意味で厄介な組織ですよ、全く」

馨が、何も見ていないような目をして答える。

「そうね。メンバーも、なかなかのキレ者ばかりだし」

「彼女が拉致されたときに出くわしたんですが、あのウノという男・
・ただ者ではないですね」

その探の何気ない一言に、馨のまつ毛がピクリと動いた。
焦点の合っていないかった目に、次第に光が戻ってくる。

探の背後の壁を睨みながら、馨が独り言のように言った。

「ウノはね・・・普段何考えてるのか全然わからない。無口だし、
無愛想だし。組織の中では尊敬されてるけど、同時に恐れられても
いるの」

ふいに視線を探に移す。

「彼と互角に渡り合えるのはパパくらいよ。冷酷で、それに賢い。」

その中に、優しさを隠すのが上手いの」

馨の最後の言葉に、探は何か感情的な響きを感じ取った。

ある種の個人的な思いが含まれているような気がしてならない。

一瞬ためらったが、彼は尋ねてみた。

「もしかしてさっき言った、よくここに連れて来てくれる『ある人』
というの・・・」

馨が、はっと我に返る。

だがすでに直感で何となく悟っている探の顔を見て、彼女は諦めた
ような表情になった。

「ええ。彼の^{ワフ}ことよ」

探の中で、確信に近い疑惑がうずく。

心なしか悲しげな馨の瞳を見据えながら、探は問うた。

「彼とは、どういう関係なんですか？」

馨は探から目を逸らし、空のグラスを持ち上げて眺め始めた。

そのグラスの向こう側を見透かすように、透明なガラスの一点を見
つめて言う。

「男女の関係よ」

探は、グラスの向こうの馨を見た。

馨も、グラスを透かして探を見ているようだった。再び、その唇が開かれる。

「もっと詳しく言っと、キス以上の深い仲」

探は、言葉が見つからず俯いた。

掲げ持ったグラスを眺める馨は、無表情を変えない。

だがその心中を、探は痛いほどにわかつていた。

馨は両親だけでなく、愛する人までもを敵に回したのだ。

どれだけの痛みや罪悪感に襲われているか、探には想像もつかない。

彼女は愛する人々のことを思って、あえて彼らの罪を告発した。

自分も、半端な覚悟ではいられない。

探は膝の上で、拳を固く握り締めた。

家族、そして恋人を思う気持ちが屈折し、運命を変えた。

痛みを伴う決意が、探に幸運をもたらした。

誰かが犠牲にならなければならない。

善と悪が存在する世界では、犠牲なしでは解決など不可能である。

喜劇の結末を望む役者が新たに加わった。

しかし彼女にとっては『悲劇』となる。

悲劇なしでは、喜劇など成り立たない。

役者は揃った。

あとは彼らが、自分の役を精一杯演じるだけだ。

喜劇になるか、悲劇になるか・・・
それを決めるのは、もはや観客次第

第48話 それぞれの思い

雪が降っている。

鉛色の空から舞い降りる純白の花びらは、暗い大気の中には哀れなくらい不似合いだった。

それが道に落ち、うっすらと積もる様子は、葵の位置からでは見えない。

彼女はただ、窓の外の僅かなスペースに思い出したようにやってくる数少ない来訪を眺めていた。

この窓からワトソンが飛び立って数日。

状況は、一向に変わっていない。葵の毎日に、全く変化はなかった。相変わらずの平坦な毎日が、この白い部屋で繰り返される。

あれから、窓の外を眺める回数が増えた。

いつか、再び希望を携えたワトソンがその力強い翼の音を響かせてくれるのではないかという、虚しい期待がそうさせているのである。だが、自分でもわかつていることだ。そんなことはあり得ないと。

彼が探のところに帰って手紙を届けてくれた、という希望は持てても、葵を助ける手段を持ってここへ戻ってくることは不可能に近い。鷹は鳩と違って伝書としての能力は乏しく、どちらかという狩りに向いているのだ。

だから、ワトソンがたまたま一度来たことのあるここに戻ってくることは無理だろう。

やはり、地道に待つしかないのであろうか。

空は、淡々と花びらを舞い散らせていた。

葵の溜め息が、部屋に響く。

同じ建物の中を、靴音を響かせて歩く女性がいた。

彼女はいくつもの難しそうな名前のついた部屋を通り過ぎながら、突き当たりの重々しい鉄の扉を睨んでいる。

両開きのその扉からは、冷たい金属が放つものだけでなく、何か別の独特の雰囲気漂っている。

この扉を開けるのは久しぶりだった。普段は、できれば来たくないところだからだ。

彼女は扉の前に立ち、一度深呼吸をした。

そして、そっと左手を持ち上げる。

「パパ・・・居る？」

ノックをしながら呼びかけた。

すぐに声がする。

「馨か。居るぞ」

馨は扉を開けた。

そこは、だだっ広い部屋だった。

電気は点いておらず、代わりにいくつものパソコンが放つ機械的な光が室内を照らしている。

一つだけある窓の外には、しんしんと降る雪が見えた。

その窓の前の大きなデスクに、伊勢谷副総監がこちらに背を向けて座っている。

「珍しいな、お前が自分からここに来るなんて」

その背中が言った。

同時に、白い煙が立ち上る。

「パパ・・・また煙草、吸い始めたの？」

馨の父は椅子を回転させ、煙草を灰皿に置いた。立ち上がって娘と向き合う。

「で、どうした？組織に加わる気になったか？」

その声は、多大な期待を帯びていた。

暗い中でも、彼の瞳が輝いているのがわかる。

馨はぎゅっと拳を握り、無理に笑って言った。

「残念ながら、違う。・・・ちよっと話したいことがあって」

「そうか」

若干トーンの下がった声だったが、副総監は娘に笑顔を向けた。

「話したいことは？」

馨は笑顔が引きつらないように注意しながら、口を開いた。

「監禁してる女の子・・・何かしゃべった？」

副総監が、一瞬目を丸くする。

「どうしてそんなこと聞くんだ？」

馨は手足が震えた。

「別に……。ちよっと気になっただけよ。最近パパもママもあんまり家に帰って来ないから、行き詰まってるのかと思って」

副総監は、視線を落として煙草を取った。

それを口にくわえながら、眉間にしわを寄せる。

「相変わらず何も話さない。華代がさんざん言っていたから、娘の彼女が情報を持っているのは間違いないんだが」

「そう・・・」

副総監は窓に向き直り、深い溜め息をついた。

白い煙が、外の雪と重なる。

「ねえパパ。もう諦めたら？きつとその子、本当に何も知らないのよ」

物言わぬ父親の背中に、馨はわざとらしいくらい明るい声を投げかけた。

「だからさ、他の警察の人に気付かれないうちにこんなこと止めて、葵さんを解放」

「馨！！」

突然、父が怒鳴った。

馨はビクッと飛び上がり、身を固くする。

背を向けたまま、彼は静かに言った。

「・・・そんなことを言いに来たのか？」

馨は言葉を選びながら、声を絞り出す。

「私はただ、こんな無駄なこといつまでも続けることないと思って・

・・・」

副総監が振り返った。

その顔は、怒りに歪んでいる。

「無駄なことではない！これは、素晴らしいことなんだ。人類の夢なんだ！！」

馨は父の勢いに圧倒され、何も言えなくなってしまった。

全身から冷や汗が吹き出している。

そんな馨を見て、副総監は少し表情を緩めた。

「馨・・・わかってくれ。これはお前のためでもあるんだ。私はいつだって家族のためを思っている」

馨の目に、涙が盛り上がった。

「ごめんなさい・・・」

涙声でそう言うと、馨はくるりと体の向きを変えて部屋を飛び出した。

雪の映る窓を背に、副総監は悲しげな瞳で娘を見送った。

馨は部屋を走り出ると、そのまましばらく止まらなかった。

背後で、重い扉が閉まる音が聞こえた。

闇雲に走り続ける。

彼女は必死に、涙をこらえていた。

泣いてはいけない・・・！

心の中では、悔し涙が溢れていた。

自分はただ、父にこれ以上犯罪を続けて欲しくないだけなのに、何を言ってもわかってもらえない。

自分や母のために、不老不死なんてくだらないものに夢中になっている。

今日説得すれば、まだ希望はあるかもしれない。父や母が犯罪者として捕まる前に止めさせられるかもしれない。

そう思っただけで来たが、結局無駄足だった。

最初は両親の悪事を警視總監の息子に告発したことに、多大な罪悪感と後ろめたさがあった。

父の顔を直視するのが辛いくらいに。

しかし、これで迷いは断ち切れた。

もう両親に、自分の制止の声は届かない。

やはり捜査に協力し、自分が敵に回って無理矢理止めさせるしかない。

心の一部分が崩れてなくなってしまったような喪失感を抱えながら、馨はふらふらと歩き続けた。

しばらくそのまま建物の中を彷徨さまよっていると、自販機の休憩スペースでウノが煙草を吸っているのを見つけた。

ここでもまた、罪悪感が湧き上がる。

馨は足を速め、彼に気付かないフリをして通り過ぎようとしたが、そのとき。

「久しぶりだな」

背後から声を掛けられた。

馨は足を止め、意を決して振り返る。

ウノが、壁にもたれてこちらを見ていた。

「本当に久しぶりね。最近忙しいみたいで」

馨は平静を装うが、声が上がってしまう。

そんな馨の様子に気付いたからかどうかはわからないが、ウノは一瞬表情を曇らせた。

だが、すぐにまたいつもの無愛想に戻る。

「何かあったのか？」

ウノが近付いてきた。

「涙目だぞ」

馨はとつさに目元を拭い、ウノに背を向けた。

「べ、別に。そんなことないわよ」

「相変わらず、素直じゃねえな」

背後で、ウノの笑う声が聞こえた。

一度背を向けてしまい引つ込みがなくなつた馨は、じつとその姿勢を保つしかない。

しばらく沈黙が流れた。

背中にウノの視線を感じるが、馨は窓の外の雪を意味もなく見続ける。

僅かな時間の中に、雪は大粒に変わっていた。

ふいに、ウノが言った。

「帰るんだろ？送ってやる」

目を丸くして振り返る馨。

だが、もう彼は廊下を歩き始めている。

一瞬ためらつたが、馨は大人しくついて行つた。

彼の広い背中に、心の中で繰り返しごめんなさい、と呟きながら・

その頃探は警視庁にいた。

馨の境遇を聞いたら、自分も何か行動を起こさないといてもたつてもいられなかつたのだ。

何もしないよりは、多少収穫があるだろう、と。通い慣れた、しかしかなり久しぶりの警視庁捜査三課へと足を踏み入れる。

三課と言えばもちろん、窃盗犯担当の部署である。

警視總監の息子であり、更に今までの数々のキッドとの対決で、すっかりここが顔なじみになっている探は、ここでは顔が利くのだ。

彼は早速、お馴染みの中森警部に声を掛けた。

「ああ。ロンドン帰りの探偵さんか。一体何の用だ？」

警部は、あからさまに迷惑そうな顔をした。

それもそうである。

彼は20代の頃からキッドを追い続けているほどあの怪盗にはこだわりがあるというのに、たかが高校生の訳のわからない探偵ごときにいつも割り込まれているのだから。

「そんな露骨に嫌な顔をしないで下さいよ。誘拐事件のことで調べたいことがあるんです」

それを聞いた中森警部は、更に嫌な顔になった。

「誘拐事件？そんなの一課の仕事だろ？」

「し！声が大きいです！！」

探は声を低くし、無理矢理警部を引っ張って廊下に出た。

「おいおい！一体何がしたいんだ！？」

ぼやく警部にぐっと顔を近づけ、探は更に声を落とす。

「僕が誘拐事件の捜査しているということは、くれぐれも内密にお願います」

「だから、誘拐事件なんてウチでは扱つとらんと言ってるだろうが！そもそもどの誘拐事件のことを言ってるんだ！？」

探は辺りを見回して人がいないのを確認した。

「若宮グループ令嬢誘拐事件です」

その言葉に、警部が両眉を上げる。

「ああ、あれか。確か、被害者の令嬢は死亡、ということになってるんじゃないか？」

辺りを気にしている探の様子になど全く気付かず、中森警部はいつもの声の調子で話す。

そんな彼に、探は溜め息をついて言った。

「詳しいことは言えません。ただ、そのことで捜査三課の資料を調べさせて欲しいんです」

いかにも怪しい探の要望に、中森警部はうさんくさそうな表情を投げた。

「誘拐事件と窃盗の資料の、どこが関係あるんだ？そう簡単に見せられはしないぞ」

探は苛立たしげに言う。

「だから、詳しいことは言えないんです！」

尚もぶつぶつ言う警部だったが、探はあることを思いついた。ぱつと顔を輝かせて言う。

「父の了解は取ってあります。というか、父に頼まれた極秘の捜査なんです。お願いします」

『白馬警視總監』の名が出た瞬間、警部の表情が一変した。

とてつもなく焦っている。

「それならそうと早く言ってくれ！！白馬警視總監の頼みなら、急がなきゃならんじゃないか！！」

そう言つて、中森警部は手続きに走っていった。

彼は、というか世の中の警察官は、警視總監には頭が上がらないのだ。

そんな警部の後ろ姿を眺めながら探は、あとで父に口裏を合わせてもらおう、と思った。

そういう意味では、副總監と同じくらい職権濫用だ。

探が調べたかったのは、以前にも他のビッグジュエルが盗難に遭っていないか、ということだった。

もしそれに少しでも組織の影があれば、手掛かりになるかもしれない。

しばらく根気強く資料を調べると、つい最近の事件で見事にヒットした。

『北米最大のオパール レインボー・オーシャン』

探は込み上げる喜びを抑え、夢中で資料にかじりついた。

・・・が、その宝石を盗んだ犯人の名前を見て、目を見開く。

そこにあつたのは、探が予想だにしなかった人物の名前だった。

『怪盗1412号

怪盗キッド

』

第49話 独り語り

探は驚きを隠せなかった。

つい先日日本で公開されていたビッグジュエルのうちの一つ『レインボー・オーシャン』は、一度怪盗キッドに盗まれていたからだ。そして彼にとってはいつものことだが、次の日にはちゃんと博物館に返されている。

驚くべきことは、それだけではなかった。

彼は以前にも、他のビッグジュエルにいくつか目を付けている。

『インド最大のサファイア ブルーバースデー』 『世界最大のエメラルド グリーンドリーム』 『世界最大の黒真珠 漆黒の星ブラックスター』である。

正確には、予告状が届いただけで結局持ち主のところに戻ってきてはいるが。

探にはこの偶然が、必然のように思えてならなかった。

もともと謎の多い盗みを働くキッドだが、ビッグジュエルを過去に3つも狙ったということに、何か意図を感じる。

探の心に、新たな手掛かりを得たという確かな手応えが芽生えた。

しかし今回は、そう簡単にはいかない。

ベンるときとは違い、事情を聞きたい相手は警察相手に無敗を誇っている、あの怪盗キッドなのだ。

お縄につかず、今も神出鬼没に大空を飛び回っている。

収穫を得たものの新たな問題が浮上したところで、探は調査を切り上げて帰宅した。

その場の全員が息を呑むのがわかった。
その中央で、探は身を固くしている。

怪盗キッドに関する自分の推理を、一同に聞かせたばかりだった。
今日は探の家で作戦会議が開かれている。

イギリス、フランスでの捜査報告と、警に関するこれからの対応に
ついて話し合う予定だったのだ。

しかし、そのあとに探が話したキッドの捜査報告を聞いて、その場
の父、英吾、神原氏、そして椿は驚きを隠せないでいる。

しばらくの沈黙のあと、かすれた声で椿が言った。

「怪盗キッドも・・・パンドラを狙ってるってことですか？」

「そういうことになります」

探は静かに答える。

新たに浮かび上がってきた意外な関係者の存在に、その場の空気は
張りつめていた。

「彼はビッグジュエル以外の宝石や美術品にも予告状を送りつけて
いますが、それは恐らくカモフラージュでしょう。その証拠に、盗
んでも後日必ず送り返してきます。今まで盗んだビッグジュエルも
全て持ち主に返還されていることから、まだ本命は^{パンドラ}見つかっていない
いのですよ」

椿が黙ったままなので、再び沈黙が訪れた。

事態は、思ってもみなかった方向へと進んで行っている。

パンドラに関わっているのは、組織だけではないのだ。

また一人、敵か味方かわからない人物が現れた。

「まあ・・・とにかく、葵さんを無事に救出すれば良いことだ。監
禁場所もわかっていることだし」

神原氏が溜め息混じりに言った。

白馬氏も同調する。

「そうだな。まず人質の救出だ。そうすれば堂々と伊勢谷を逮捕できる。それから細かいことを調べれば良いだけの話だ」

何ともしつくりこない作戦会議は、また沈黙に包まれた。

確かにそうすれば何も問題は無い。

葵を助け出せば組織に切り札はなくなり、探たちが恐れている事態にはならないのだ。

だが、この複雑に絡み合ったパンドラの謎は、きちんと処理しなければならぬように思えてならない。

組織の逮捕だけでは、今のこの状況は収まらない予感がする。

きつとそう思っているのは探だけではないはずである。

副總監の部下が一人残らず魅了されているという宝石に、驚異を覚えないはずがない。

「そう・・・あの怪盗キッドが・・・」

虚ろな視線で、馨がつばやいた。

ここは例のバー。今日はカウンター席だ。

こっそりと、探が馨と話し合いをしている。

「まず間違いないと思います。彼の狙いも不老不死かどうかはわかりませんが」

「・・・」

馨は俯いて黙り込んだ。

「・・・馨さん？」

「何でもないわ。それより、葵さんが監禁されてる情報ビルに行っ

てきた」

「本当ですか！？一体どうして!？」

馨が、何事もなかったかのように顔を上げた。

「監禁されてる部屋を突き止められるかと思って」

そう言つて、探に少し沈んだ表情を向ける。

その表情を見て、探は結果を期待できないと悟った。

「・・・でも、ダメだったんですね？」

馨が苦笑して頷いた。

「ええ。『夕日が眩しい』って手紙に書いてあつたんでしょ？だから西側の部屋で、周りのビルの頂点より高い位置にある部屋を手当たり次第に確かめようと思つただけど・・・」

ふっと短い息を吐く。

「ダメだった。いくらボスの娘だからって、さあどうぞって言つてビルの中を歩き回らせてくれるわけないから。3階より上の階には、絶対に入れてもらえなかつたわ」

「そうですか・・・」

溜め息混じりに、探が返す。

そこで会話は終わりかと思つたが、唐突に馨が声色を変えた。

「それとね、パパの説得も失敗しちゃつた」

探は、はっと馨を見た。

彼女の横顔は笑っているが、目にはうつすらと涙の膜が張っている。その瞳のまま、馨は不自然に明るい笑い声を上げた。

「全く・・・。バカだよね、私。無駄だつてこと、最初からわかつてたのにさ。パパはもうハマりきつてる。私が何か言つたところで、意志が変わるわけないよね・・・」

自分自身に言い聞かせているようにも聞こえるその言葉は、段々と涙声になつていく。

探は何も言わず、馨の口から出る言葉に耳を傾けていた。

「しかもそのあと、運悪くウノに会つちゃつてさ。もう会わないつて決めてたのにね。落ち込んでるの、あっさり見破られちゃつた・・・」

「情けないよ、ホント。結局家まで送ってもらっちゃったし」
これ以上続けると涙がこぼれそうだとわかったのか、馨は鼻をすすって口をつぐんだ。
俯く馨と、それを見守る探の間に、しばし沈黙が流れる。
店にかかっている、ゆったりとしたジャズのBGMだけが、二人を包んでいた。

「一つ・・・聞いて良いですか？」

ジャズの曲が変わった頃、探が沈黙を破った。

「何？」

だいたい落ち着いた馨が、気を取り直して探を見る。

「組織の狙いは、本当に不老不死なんですか？そんな夢のような伝説を、あの副総監ともあるう人が本気で信じているんですか？」

それは、探がずっと気になっていたことだった。

伝説しか存在しないような、お伽話おとぎばなしのような話を信じてここまでするなんて、探には納得できなかったのだ。

馨が答える。

「パパはね、もう周りが見えてないの。だから自分の信念だけで生きてる。本気で不老不死を信じてるわよ。パパは早くに両親を亡くしたらしくて、愛する人の死が憎い・・・というか、怖いんだって。だから、不老不死のパンドラのことを知ってすぐ飛びついた」

馨は一旦言葉を切り、顔を前に向けた。

「私たち家族、そして同志の仲間たちに不老不死という『スバラシイモノ』をもたらしたいんじゃないかな。私はそんなもの願ひ下げだけどね」

探も馨と同じように前を向き、何気ない風を装って尋ねた。

「他の人、例えばあなたのお母様や・・・ウノさんは？」

横目では、馨の表情の変化はわからない。
変化のない口調で、馨が話し始めた。

「ママは・・・自分がどう思っているように、パパについてくつもり

みたいだからさ。ていうか、パパを崇拜してるからね、パパの言うことが何でも正しいこと、『スバラシイコト』に聞こえるのよ」
探が静かに相づちを打つ。

馨は更に続けた。

「で、ウノはね・・・実際、よくわかんない。無愛想で、おまけに無口だからさ、いつも何考えてるかわかんないのよ。ただ・・・『不老不死』なんて空想的なこと、信じるタチじゃないと思う」

ではなぜ副総監に従っているのか、と聞こうと思った探だったが、その問いは呑み込んだ。

代わりにアテのない、だが重い質問が出る。

「そんな『無愛想で無口な』彼を、どうしてあなたは愛しているんですよね？・・・本当に、逮捕に協力していいんですか？」

馨は最初、反応しなかった。

視界の隅に入る彼女の姿は、身動き一つしない。

探はきまりが悪くなり、今の質問は忘れて下さい、と言おうと馨の方を見たときだった。

「ねえ・・・。私とウノのこと、聞いてくれる？」

馨は相変わらず前を向いたまま、指を組んでその上に額を乗せる格好になった。

「・・・聞かせて下さい」

探のその言葉を聞き届けると、馨は額を手の甲に押し当てたまま息を吸った。

そして、ぼつぼつと語り始める。

彼のことは昔から知ってた。パパがよくウチに連れて来てたから。

初めて会ったのは、今から7年前。私が中1のときだった。

紹介したい人がいるからって、パパが私に会わせてたの。

第一印象は、はっきり言って最低だった。無口で無愛想で、目付き悪いからさ、怖かったの。

そのときも、パパばかり話してた。

そこで初めて、組織の存在を知った。

パパがボスで、ママも仲間で、彼がNO.2の『ウノさん』だったことも教えられた。

当然、私も組織に入れて言われた。一緒に夢を叶えようって。

でも、即断った。犯罪組織なんてまっぴらごめんだもん。

それでも私は何回も誘われて、しつこかった。

パパもママも、もちろん彼も大嫌いだっただ。

みんな、顔を合わせれば私に「組織に入れ」って。毎日辛かった。

家庭に居場所が無くなったの。

そんな中で中学生生活は過ぎて、高校受験の時期になって・・・

無事に合格の結果をもらって、ウチに帰った。

でもね、ウチにパパもママも居なかったのよ。いつものことだけど。

組織のほうか警察のほうか、どっちかの仕事で二人ともいつつも家を空けてた。

自覚はしてなかったけど、寂しかったんだろうね、あの時は。

でもね、テーブルにカードが置いてあったの。

彼からだった・・・

どうやって調べたのか知らないけど、『合格おめでとう』って書いてあった。

それ見たとき、いきなり今まで大嫌いだっただ彼への気持ちが変わったの。

ウノさんって優しいんだ・・・って。

それから、何か意識するようになって・・・。

相手は悪い人なんだから、犯罪者なんだから好きになっちゃいけないって自分に言い聞かせてた。

でも、彼に会うたびに惹かれていく。怖かった。そんな自分の気持ち。

ちが。

だから尚更、組織に入るのを拒んだ。

これ以上彼の近くに行ったら・・・彼と同じ世界に染まったら、もう抜け出せなくなりそうで・・・。

自分がどんどん黒くなって、底のない闇と同化しちゃうんじゃないかって不安だったから。

でもね、どんなに頑張っても好きになっちゃうんだよね。

彼って、見た目はかなり格好良いからさ。見とれちゃうんだ。いざって時に優しいしさ。

そんな彼が好きだった。でも、そんなこと言えない。

私なんかただボスの娘ってだけの存在だし、20歳も年下のガキだもん。

だから素直になれなくて、彼には冷たくあたってごまかす日々が続いた。

でもね、先に行動を起こしたのは彼の方だった。

ちよつと恥ずかしいんだけどね、17歳のある日・・・

いきなり「俺のこと好きなんだろう」って言われたの。

「そんなわけないじゃない。誰があんたなんか」って、焦って言い返した。

ホント、素直じゃないよね。

そしたら彼、私の腕を引っ張って無理矢理キスしてきて・・・

「俺のものになれ」・・・だってさ。恥ずかしいよね・・・

それから、男女の仲になった。もう引き返せないとこまで・・・

髻はほんの少し頬を染め、息をついた。

額の下で組んでいた指をほどき、カウンターに頬杖ほおづえをつく。

そのまま、どこを見るときもなく視線を固定し、話を再開する。

私はね、結局幸せだったの。だって、彼が好きだったから。

でも、彼がどうだったかはわからない。

何で私になんか手を出したのか、今でも疑問に思う。

こんな、かわいげが無くて生意気で、素直じゃないガキの私なんかを、何で選んだんだろうって。

一番それっぽい理由は、口止めのためかな。

組織に好きな人がいるんじゃないやあ、警察にも突き出せないから。私が裏切れないように、関係を持っただけなのかも。

純粹な恋愛感情でって理由は、考えられないな。私ってこんな女だし。

いつもいつも、幸せの影にあるこの疑問に苦しんできた。

私と彼は男女の関係はあっても、ちゃんとした『恋人同士』って言える自信がなかった。

何か言葉に矛盾があるかな？とにかく、恋人同士みたいな付き合いはしてるけど気持ちに伴ってないってことよ。

心の底では、彼のことに信じられなかった。

馨の声が、再び震えてきた。

ぱつと上を向き、雫がこぼれないようにまばたきする。

まだかすかな涙混じりの、しかし強い声で、馨が言葉を継いだ。

「だから私は、あなたの捜査に協力するの。両親のためだけじゃなくて、ウノの気持ちを確かめるために。自分の悩みに、ケジメをつけるために。もしウノが私に恋愛感情を持ってってくれるなら、私は彼が罪を償って刑務所から出てくるまで待つつもり」

再び、沈黙が訪れた。

3曲目のジャズが、妙に悲しげに聞こえていた。

「では、今日はこれで失礼します」

探がバーのドアの前で、馨に会釈した。

「うん。私はもうちょっとここで、マスターにグチつくから。．．

・何か、一人で長々としゃべっちゃってごめんなさい」

探はにっこりと笑う。

「いえ。ありがとうございました」

その言葉に、馨は弱々しい笑みを返して頷いた。

「じゃあ、また」

「失礼します」

そう言つて、バーのドアが閉まるのを背後に聞いた。

地面に積もる厚い雪が眩しい。

その光から目を逸らそうと思つても、上を向くしかない。

そうすると今度は真冬の淡い日差しが眩しくなる。

探は俯くことも上を向くこともせず、その二つのおぼろげな境界線である『虚空』という空間をぼんやりと見つめながら歩き始めた。

目の奥には馨の涙ぐんだ横顔、耳の奥には彼女の言葉が残っていた。

あんなにも悲しい恋があるものなのか。

あんなにもやりきれない恋があるものなのか。

あんなにも純粹な恋があるものなのか。

そんな思いが、頭の中をぐるぐる廻つた。

素直じゃなく、意地でも涙を見せない強い彼女が、逆に弱々しく見えた。

己の信念だけで立っているような、ボロボロの精神状態だということとがひしひしと感じられる。

自分が葵を助け、一連の事件に終止符を打つことが何より望ましいことなのだが、それによつて彼女のように悲しみを背負うことになる人もいる。

100%のハッピーエンドは、無理なのか・・・

探は自問した。答えはもうすでに出ているというのに。

彼は今まで、様々な犯罪を解決へと導いてきた。

しかしその裏にある、悪の側の心理など考えもしなかった。

ここにきて、いかにそれが大事か思い知らされた。

悪があつてこそ、善が成り立つ。

善と同じように、悪の人間にも事情がある。

それをどうにもできない無力感が襲つてきた。

探は冷たい大気中に、真つ白な溜め息をついた。

すぐに消えていくその儚さが、彼の今の心情を代弁しているように思えた。

「ただいま帰りました」

探が暗い声で言うと、すぐにバアヤが玄關に現れた。

何やらひどく慌てているように見える。

彼女は探に「おかえりなさい」も言わず、奥に向かって緊迫した声を張り上げた。

「旦那様！探坊つちやまがお戻りになられました！」

訳がわからないまま、探はリビングに入った。

そこにはすでに父、英吾、椿、神原氏といういつものメンバーが揃っている。

緊急に招集されたらしかった。

一同はテーブルを囲んで、神妙な顔をしている。

そのテーブルの中央に置かれたモノに、探は注目した。

と、すぐに衝撃で目を見開く。

彼の目に最初に飛び込んだできたものは、テーブルに置かれた『紙』

に浮かぶ、見慣れたキャラクターのイラスト・・・

白馬氏が口を開いた。

「怪盗キッドから、新たな予告状が届いた」

第49話 独り語り（後書き）

はい。つまりウノの旦那はいい年して当時17歳の女子高生に手を出したわけです（それ言っちゃあかん！）

ツンデレな馨さんは、時折口にする「私は素直じゃない」という発言、そして絶対に涙を見せない意地っ張りな性格が特徴です。

第50話 駆け引き

明日 月光の下、もと聖なる木を目印に

『氷の琥珀コハク イエロー・アイス』を頂きに参上する

怪盗キッド

一同は沈黙した。
幸か不幸か、送りつけられた予告状。
まるで探たちの必死の努力をあざ笑うかのように、この白き犯罪者は謎を重ねていく。

ふいに白馬氏が予告状を手に取り、息をついた。

「この『イエロー・アイス』というのは、米花博物館に期間限定で公開されている世界最大のコハクだ。……つまり、ビッグジュエル」

「とうとう来ましたね」

探も、細く息を吐いた。

「ではいつものことだが、この暗号の解明にかかろうか」

神原氏がソファから身を起こして言ったとき、即座に探が反応した。

「それならもう解けました」

一同がぎょっとして、探を見る。

とくに神原氏の驚きようは、相当なものだった。

彼は探を圧倒するほど鋭い洞察力を持っているが、こういったなぞなぞは逆に探のほうが解きやすかったりする。

探は説明を始めた。

「『月光の下』のところは単純に『夜』と考えれば良いでしょう。」

問題は『聖なる木』です。しかしこれも、ある知識があれば簡単なこと……」

人に語って聞かせるときの、あのもったいぶった仕草に、白馬氏がしびれを切らして言った。

「とにかく、早く教えろ」

探は父を軽く睨んでから咳払いをした。

「『聖なる木』というのは美称です。それは、キリストが磔はりつけにされた十字架を指す。『十字架』は『十字』とも呼ばれます。つまり『十時』。『月光の下、聖なる木』とは午後10時を意味していると考えられます」

ほう、という納得の聲が、辺りに満ちる。

神妙な声で、英吾が言葉を発した。

「では明日の午後10時が、怪盗キッドの予告時間ということか」
探は黙って頷いた。

ドサツとベッドに倒れ込み、長く息を吐く。

探は自室で、イギリスを発つ直前と同じことをした。

ふと、そのときのこと 생각이出される。

あのと時彼は、荷造りの終わった自分の荷物をヒントに、ある推測を立てた。

それは、例のブルーダイヤが何故あんなに小さいかについてだ。

確信に近いものがあるが、かといってそれを怪盗キッドに教えたり何の意味もない。

神秘の謎は、解いては増え、どんどん重なっていく。

だがその一方、葵を助け出す方法については完全に停滞していた。

警の協力により希望は見えてきたが、いざ救出、となると危険すぎる状態だ。

相手は警視庁のNO.2で、部下も一人残らず悪。他の役職の人間にも、いや、もしかしたら父の部下の中にも内通者がいるかもしれない。

捜査や救出作戦を行うには、本当に信頼のおける者たちの中で極秘に進めなければならぬことになる。

それに警察の人間なら、拳銃だって持っている。

強行突破で突入しても、居場所もわからない葵の身が危険にさらされることだってあり得るのだ。

心がどんどん重く、暗くなり、探は目を閉じた。

彼女を、盗み出すようにこっそり助け出せば希望はあるんだが……

そんな突拍子もない考えが頭をよぎる。

人質さえ連れ出せば、あとは特殊部隊を突入させるだけで取り押さえられる。

探はしばしの間、その夢物語に身を置いた。

本当に夢のような、現実味のない作戦……

探ははつと目を開けた。

そのまま全身を硬直させる。

目は天井を見ているが、そんなものは視界に入ってこなかった。

今、彼に見えているものは、自分の頭の中を埋め尽くしている白い影だけだ。

唐突にガバツと体を起こすと、彼は父親を探しに部屋を飛び出した。

翌日 午後9：55 米花博物館上空

真冬の強風をモノともせず、その『彼』は軽々と降り立った。事前に調査済みの、警察のヘリの死角に、彼は立っている。

そこにはヘリのライトの光も届いていないというのに、闇に浮かび上がる白い衣装は異様にくつきりと見えた。

風を味方に付けたかのように、はためくマントが何とも威厳がある。その彼 怪盗キッド は、いつも通りの凜とした気配を見せつけながら降臨した。

同時刻 米花博物館内

「キッドの予告時間まで、あと5分だ!! いいか、油断するな!!」
恒例の変装チェックをされて頬の腫^はれている警官たちが、中森警部の指揮のもと、続々と展示室に集結してきていた。

彼らは即座に持ち場につき、中央に鎮座するコハクを見つめる。

緊迫した沈黙の中に、執念を燃やす警部の声が響いた。

「あと1分だ!! 宝石から目を離すな!!」
その言葉に、警官たちが心なしか浮き足立つ。

秒針が、いつもと変わらない間隔で警部の時計の文字盤を回り、やがて『12』の位置にびつたりと重なったとき

「うわっ!!」

「くそっ……!!」

突然、どこからともなく煙幕が立ち上った。

このパターンには慣れっこの警部は、その中でもしぶとく宝石を凝視しながら駆け出した。

まだコハクは、ガラスケースの中で燦然さんぜんと輝いている。

まだ間に合う・・・！

そう思った時だった。

唐突に、そのガラスケースの上にキッドが現れた。

そのまま、立ちこめる煙の中に消え、床に足をつく音が聞こえる。

警部は叫んだ。

「キッドだ！キッドが宝石の側に居る！！取り押さえろ！！！」

その声を合図に、警官たちも死に物狂いで宝石に突進した。

警部が先頭をきって、シルクハットのちらつく影を頼りに飛びつく。続いて、大勢の警官たちも重なった。

「やったぞ！！確保し・・・」

警部が喜びの声を発しようと、自分が必死で掴んでいる人影を見下ろしたとき・・・

「につ・・・人形！？」

彼の手の中にあつたのは、怪盗キッドを精巧に真似て作られた実物大のゴム人形だった。

「くそうっ・・・！そうだ！宝石は・・・」

「警部！コハクが・・・コハクがありません！！」

周囲にどよめきが広がる。

ようやく晴れてきた煙の中に浮かび上がったガラスケースの中はもぬけの殻で、ついさっきまでそこにあつた美しいコハクは、影も形もなかった。

「おのれえええっ・・・キッドめええええええ！！！」

中森警部の怒濤な叫びを聞きながら、警官に扮したキッドは外の廊下を走っていた。

その手には、植物特有の神秘的な輝きを放つコハクが握られている。彼の口元は緩んでいた。

警部をからかうのは実に面白い。

彼はキッドを捕まえるのに躍起になりすぎていて、宝石の価値になど興味がないのだ。

だからキッドの姿が見えた瞬間、宝石なんかそっちのけでキッドに飛びつく。

おかげで、警官に変装したキッドは堂々と無防備な宝石に近付くことが出来るといっわけだ。

もちろん彼の変装も、警部が引つ張ったくらいではバレないような完璧なものであることも忘れてはならない。

「上空にはヘリがあります。だからキッドは、上空ではなく地上の一般人に紛れて逃げるでしょう」

展示室の扉が開いたあとに聞こえてきたのは、その声だった。

「ですから、早く警官を出口に向かわせて下さい！」
キッドは走りながら、思わずビクツと反応した。

その声の主は紛れもない、あのホームズ気取りのちょっと（いや、かなり）イタい高校生探偵・白馬探だった。

キッドはその姿を確認する余裕もなく物陰に飛び込んだ。

そのまま、大勢の足音は遠ざかっていく。

彼はふうつと安堵の溜め息をついた。

あの探偵が現れるとは予想外だった。

最近めつきり姿を見せなくなつて、盗みがしやすかつたのだが。

彼が捜査に絡んでくると、絶対に一騒動起きる。

獲物に近付くことも危うい時だつてあつた。

だがまあ、しばらく怪盗を追っていなかつたからかもしれないが、

上手く勘違いをしてくれた。
キッドは最初から上空へ逃げるつもりだったため、屋上に警官たちがいなくなることは好都合だ。
彼は物陰に警官の衣装を脱ぎ捨てると、白いマントをひるがえ翻してさっそう颯爽と駆け出した。
目指すは、屋上までの階段。

遙か遠くに、ヘリが何機も浮かんでいるのが見える。

葵は窓から身を乗り出し、そのただならぬ様子を見つめていたと、そのとき。

唐突に、鍵の開く音がしたかと思ったら、ウノが姿を現した。

葵は瞬時に身を固くする。

彼は葵の背後の窓に目を向けたあと、唇を片方だけ上げて笑った。

「あそこは、米花博物館だ。怪盗キッドが予告状を送りつけたそう
だぞ」

葵は、何でも見透かしてしまうのではないかと思われるくらいに鋭いウノの眼差しを避けながら、窓を背にした。

「そうなんですか・・・」

電気の点かない薄暗い部屋の中でも、ウノの目だけはわかる。

葵はワトソンに手紙を託したその日から、彼に会ったたびに冷や汗が流れるようになった。

彼は恐ろしい男だ。恐ろしく鋭く、そして賢い。

毎日、葵はワトソンのことがバレていないか不安だった。

今も、足が震えている。

そんな中、声まで震えるのを必死で抑えながら、葵は尋ねた。

「ところで・・・何か用ですか？」

ウノは表情を変えず、歩み寄ってきた。

葵は唇をぎゅっと引き結ぶ。

だがウノは、そんな彼女から視線を外し、窓の外を見ているようだった。

葵の隣に立つと、彼は意外なほど静かに窓を閉めた。

「お前がここから飛び降り自殺でもするんじゃないかと、急に心配になってな」

そしてまた、意外すぎる言葉を放った。

葵は目を見開く。

「そんなこと、考えたこともありません」

「そうか。だったら良い」

それきり、ウノは黙ってしまった。

相変わらず、窓の外を見つめたまま。

その視線の先がどこにあるのかは定かではない。

だがそれが葵に向いていないことは確かでも、彼女はウノの隣はひどく落ち着かなかった。

「なあ・・・」

前触れもなく、ウノが言葉を再開した。

「自殺か不老不死、お前ならどっちを選ぶ？」

「・・・え？」

葵はウノを見た。

彼の視線は、やはり窓の外。

そんな彼は、今まで葵が恐れていた、人を震え上がらせるほど恐ろしい男だとは思えなかった。

どこか、人間らしい感情に浸っているような気がする。

戸惑いながらも、返事を返した。

「そんな・・・2つとも選びたくありません」

ウノはしばらく何も答えなかったが、やがてぱっと体の向きを変え、

ドアに向かって一直線に歩き出した。

そのままドアを開けたところで、ふと足を止める。

「つまらないことを聞いた。今のは忘れてくれ」

振り返らずにそう言い切ると、彼はドアの向こうの暗がり姿を消した。

重い鍵の閉まる音が、葵が取り残された部屋に響く。

啞然と立ち尽くす彼女の背後の窓からは、遙か遠くを飛行するへりの明かりがはつきりと見えていた。

探的はずれな推理のおかげでひと気のない階段を駆け上がり、キッドは屋上に出た。

下からは大勢の騒ぐ声が聞こえる。

上空に浮かんでいるへりもライトを全て地上に向けて、人混みの中にいるはずのキッドを血眼になって捜しているのだろう。屋上の彼に気付く気配はなかった。

キッドはコハクを握りしめていた手をそっと広げ、その深い黄色の宝石を覗き込んだ。

こんな暗がりでも、それは僅かに存在する周りの光を残らず吸収して輝いているように思える。

だが彼の求めるものは、その輝きの更に奥に眠っているかもしれない、命の石。

彼は、体の奥底から湧いてくる期待と興奮に、寒ささえも感じていなかった。

もう一方の手で恐る恐るコハクを掴み、そのまま月に向かってその手を掲げる。

月光がコハクを突き抜けた。

その宝石は、今までにないほど強く輝く。

・・・だが、それだけだった。

コハクの奥には、何も無い。

キッドは深い溜め息をつき、腕を降ろした。

今回も、パンドラは入っていないかった。思わず、やりきれない声が漏れる。

「ハズレ、か・・・」

肩眉を上げて、冷たい月に苦笑を見せたあとコハクをポケットに入れた、その時だった。

「なるほど・・・。月にかざせば、パンドラが入っているかどうかわかるんですね」

突然背後で、その声があった。

反射的に振り返った彼の視線の先に立っていたのは・・・

それは、信じられない人物だった。

まんまと勘違いして今頃地上を走り回ってくれているはずの、ホームズ気取りの探偵が、そこに居た。

今日はホームズの格好に身を包んではないが・・・。

モノクルの向こうの瞳が一瞬揺れたが、キッドはご自慢のポーカーフェイスで探に向き直る。

「これはこれは、白馬探偵。お久しぶりですね。てつきり勘違いなさって下に降りられたのかと思いましたがよ」

その嫌味なほど丁寧で余裕の口調に、探も自信たっぷりな言葉を返す。

「フ・・・。まさかあの華麗なあなたが、大混乱の一般市民の中などという逃げにくい場所から逃走するわけがないと思いませんか」シルクハット越しに探を観察するキッドの視線が鋭くなった。

「だから、悠々と空から逃げるだろうと見越して、わざと警官たち

を下に向かわせたんですよ。あなたを油断させるために」
そう言い切った探の目も、妖しげな光を放っている。

瞳の奥に、何か思惑を秘めているように見えた。

それを引き出してやるうと、キッドはわざとその気配に気付かぬフリをする。

「さすがは、私の専任探偵だ。実にお見事。ですが、他の警官たちはあなたの頭脳について来られなかったと見えますね」

そう言つて、彼は自分たちの周りに広がるただっ広い屋上をぐるりと見回した。

彼ら以外に、誰かが潜んでいる気配はない。

「あなた一人では、私を捕まえられない。見事な推理でしたが、ここまでです」

そう言つて、彼は口元に不敵な笑みを浮かべる。

だがそんな彼の予想に反し、探までもが妖しい笑い顔になった。

「あなたを捕まえるためにここに来たのではありませんよ。警官を追い払うために、わざと間違った推理をしたんです」

その妙な余裕を含んだ言葉に、キッドの笑みがピクリと反応した。

「ほう……。それでは、何故ここに？」

それを聞くやいなや、探は良く通る声で言葉を発した。

「取り引きをしましょう」

その声が耳に届いた瞬間、とうとうキッドは表情を変えた。

表面上は何の変化もないが、不敵な笑みの中に、困惑したような色が浮かんでいる。

その変化は、若干上ずった声に表れていた。

「……取り引き？」

探もキッドの心情の変化を読み取ったのか、尚更自信の溢れる声で言い放つ。

「調べさせて頂きました。あなたが狙っているのは、世界中に散らばるビッグジュエルのどれか一つに隠されている、不老不死の力を持つ宝石・パンドラだということを」

キッドは何も答えない。

探が続けた。

「先ほどのあなたの行動と言葉でわかりました。パンドラは月の光にかざせば姿を現す、ということがね。違いますか？」

キッドは答える代わりに、より一層深く探の瞳を観察し始めた。更に探が続ける。

「そこで、です。もし仮に僕が、パンドラの在処あじかを知っている、と言ったら、あなたはどうしますか？」

「・・・！」

キッドのポーカーフフェイスは完全に崩れ去った。

暗闇でもはつきりわかるほどに、彼の笑みは消えている。

「・・・何が言いたいんですか？」

キッドの反応を見て、探はいよいよ勢いに乗ってきた。

「取り引きがしたいんです。僕がパンドラの在処をあなたに教える代わりに、あなたにある任務を行って頂きたい」

「任務？」

「『若宮グループ令嬢誘拐事件』をご存じですか？」

キッドの脳裏に、ニュースキャスターの単調な声が甦った。

確か、謎の犯人グループに誘拐されて、何の手掛かりもないまま不慮の事故で人質死亡、という衝撃的なニュースだったのを覚えている。

だが、それがどうしたと言うのだろうか？

パンドラとは全く無関係の話に思える。

第一、もう終わった事件に何故自分が関わらねばならないのかわからなかった。

そんなキッドの混乱を表情から察したのだろう、探が説明を始めた。「その被害者の女性が持っているブルーダイヤに、どうやらパンドラが隠されているようなんです。それが原因で、彼女は拉致されました」

急に、夜風の冷たさが頬を刺した。

さつきまで全く感じていなかった冷気が、急に体を襲う。

キッドはその得体の知れない寒さをはねのけるように口を開いた。

「そのブルーダイヤとは、どんな宝石なんですか？」

探が淡々と答える。

「イギリス王室に伝わる、大英帝国最大のブルーダイヤです。彼女はそれを、母親の形見としていつも首から下げていました」

それを聞いて、キッドは今までの緊張がぶつとりと切れた。

思わず口元を緩める。

「残念ながら、それは間違っているようですよ。ビッグジュエルは、首から下げられるようなアクセサリー感覚の宝石ではありません。とてつもなく大きいんですよ、こんなふうに」

そう言つて、彼は手の平大のコハクを掲げて見せた。

だがそれでも探の、何かを企たくらんでいるかのような表情は変わらない。

「僕も最初はそう思いましたよ。しかし良く考えてみると、ある推測が立てられたんです」

キッドは掲げたコハクを、ゆっくりと降ろした。

いきなりずっしりと重くなったような気がする。

その傍らで、探が言葉を継いだ。

「そのコハクのように、世界中のビッグジュエルはその名の通り『その国最大』として有名です。では、もしあのブルーダイヤがビッグジュエルのうちの一つだとして、何故世間に知られていないかわかりますか？」

キッドは黙つて、首を横に振る。

こういう時は、素直に相手の情報を聞くのが一番の得策だ。

「それは、あのブルーダイヤがビッグジュエルだと知られてはいけない理由があった、と考えられませんか？つまり・・・あのブルーダイヤの中に本当にパンドラが入っていて、それを狙う悪党から隠す必要があった」

瞬間、一本の糸のような鋭い光がキッドの頭の中を駆け抜けた。

探を刺すように見つめる。

「パンドラを隠すため、ブルーダイヤが分割されたとしたら・・・
？その分割された欠片カケラが、偶然彼女の手に渡ったのだとしたら・・・
？」

凍りつくような外気の中、いつでもポーカーフェイスを崩さない無敵の犯罪者・怪盗キッドは、その冷気に全身が麻痺してしまったかのように呆然と立ち尽くした。

突き刺すように冷たい風に、彼のシルクハットが危うげに揺れる。そんな彼を、探は黙って見つめ続けた。

これから彼は、昨日父たちと一日かかって立てた作戦への協力を、キッドに提案する。

探にとつても、これは賭カケだ。
だがもうこの他に、道は残されていない。

それぞれの複雑な思いと共に向き合う二人を、かすかに雪の匂いのする風が取り巻く。

その風に乗って、遙か下の地上の何百人という人々のざわめきが、かすかに聞こえてきた。

第50話 駆け引き（後書き）

読んで下さってありがとうございます。洋です。

ブルーダイヤが他のビッグジュエルに比べてあんなに小さいのは、パンドラが見つかるのを防ぐために分割されたからだったわけであります。

探は帰国直前にイギリスのホテルで、いくつかに分けられた（分割してまとめられた）自分の荷物からヒントを得たわけですね！。

それと、探はキッドの狙いを『パンドラ』だと疑って、今回捜査の現場に出向いたわけですが、キッドがコハクを盗んだあと「ハズレか・・・」と言ったことで、完全に「キッドの狙いはやはりパンドラ！」と確信するに至った次第です。

今回の重要ポイント。

『ウノの旦那の「自殺か不老不死、どっちがいい？」という言葉』
これはラストに、ウノの旦那の過去等と関係していきます。

第51話 小道具

雪のちらつく天気の下、一羽の白い鳥が都内上空を舞っていた。

こんな天気の日になぞわざ空を見上げる者などおらず、その白い鳥は雪に紛れて堂々と飛んでいる。

やがてその鳥は翼をたたんだかと思いきや、そのままつつすらと雪の積もるビルの屋上に着地した。

ついさっきまで翼の役割だった純白のマントがゆっくりと引力に従って下がり、仰々しいシルクハットが露わになる。

その彼はしっかりと二本足で立ち上がると、くすんだ鉄の塊のように寒々とした屋上を歩き始めた。

下からは、車が道路脇の雪解け水をはねる音とクラクションの音が響いてくる。

自分が雪を踏む軽い足音だけが身近に聞こえていた。

結局最後まで顔を出してくれなかった太陽が、分厚い雲の向こうで沈みかけている、薄暗い夕方だった。

やがて彼は屋上の端まで辿り着くと、縁に積もる雪に身を隠すようにかがみ込んで双眼鏡を構えた。

それを通して、50メートルほど先に立ちはだかる白いビルをじっくり観察する。

双眼鏡を上下左右に動かして目的のモノを見つけるのに、そう時間はかからなかった。

彼は一瞬目を細めて『それ』を見定めると、懐からいかつい無線機を取り出す。

「こちら怪盗キッド。情報ビルの22階の右端の窓に、ひっかき傷を確認。鷹の爪痕と思われます」

砂が流れるような雑音のあと、器械特有の響きを含んだ応答が返ってきた。

「こちら白馬。了解しました。中の様子はどうですか？」

キッドは再び双眼鏡を覗いたが、すぐに眉間にシワを寄せた。

「電気が点いていないため、確認出来ません」

「了解。そのまま観察を続けて下さい」

キッドは全神経を集中させ、窓を凝視した。

だが、何かが動く気配はない。

やがてその変化のない空気に疲れてきた彼は、つい昨日の米花博物館での出来事に思いを馳せ始めた。

冷たい風が頬を刺す中、自分の宿敵が何かを頼むような色を瞳に浮かべている。

ふてぶてしい表情を作っているが、人間というのはその瞳を見ればだいたい心理状況が読めるものだ。

「僕がパンドラのヒントをあなたにお教えします。その代わりに、あなたにあるものを盗み出して頂きたい」

キッドは慎重に尋ねた。

「何を・・・盗むのですか？」

その言葉に、探は短く息を吸って答えた。

「副総監の情報ビルに監禁されている人質です。彼女は生きていて、あの中に居るんです」

キッドの目が大きくなる。

まさか、冗談でしょう。

そんな表情をして見せたつもりだったが、はつきり言ってそんな顔が出来ている自信はなかった。

きつと困惑で埋め尽くされていることだろう。

その顔のまま、キッドは言った。

「それは出来ませんね。怪盗キッドは、物は盗んでも人は盗まない主義なんです」

探はあからさまに口の片側をつり上げた。

「フツ……。主義だなんて言っていて良いんですか？パンドラの手掛かりはあなたが、咽のどから手が出るほど欲しい、宝物なんですよ？？」

その不敵な笑みに挑発されたキッドは、探を見下ろすような眼差しで言った。

「そう言うあなたの方こそ、宿敵の私に頼んでまで助けたがっている人質たからものとは、一体どんな人物なんですか？」

二人の間に張りつめた緊張が凍りつくのがわかった。

もはや両者に微塵の余裕さえ感じられない。

お互いの弱点を垣間見せ合っているから、尚更だ。

眼下の喧騒が、一瞬静まったような気がした。

それを意識してかはわからないが、探が静かに口を開く。

「『彼女』は、僕の大切な人です」

風が吹き抜けた。

しかし探の揺れる髪の間から覗く碧い瞳は少しも揺るがない。

キッドはそれで全てを悟った。

探が今日、何故ホームズの格好をしていないのか。

どうしてプライドを捨て、宿敵の自分に取り引きを申し出たのか。

全て、『探偵』としてではなく『一人の男』として、『大切な人』のために闘うためだったのだ。

最後に対峙したときより何倍も、いや何十倍も、心が強くなっている。

それが、一心に自分に注がれている視線からじりじりと感じられた。

「・・・その取り引き、お受け致しましょう」

その言葉が、雪を誘う風に乗って、夜空に舞い上がった。

そこまで思い出したとき、キッドは無線機の声で突然現実を引き戻された。

「こちら白馬。その窓に、カーテンや雨戸はありますか？」

暗い窓に目を凝らす。

「・・・そのようなものは見当たりませんよ」

了解、という返事を残し、無線は再び静かになった。

その無線機の向こうに消えた探偵の姿を思い浮かべ、キッドは思わず苦笑する。

あの自信満々な白馬探と自分が協力しているなんて、滑稽というか皮肉というか、とにかく無性におかしかった。

だが何より、『大切な人』という一言、いや一単語で、自分が白馬に協力する気になったということ自体、キッド自身不思議なことだ。まあ一番の理由は、パンドラを拝ませてもらえるかもしれない、ということなのだが。

こればかりは、何があっても譲れないのだ。

白馬がかなり深いところまで情報を仕入れていることから察して、恐らく彼の言うパンドラの隠し場所の情報については疑う必要はないだろう。

それを考えるだけで、彼は体の奥底から喜びの渦がじわじわと広がっていくような感覚に襲われる。

ビッグジュエルと聞けば挑戦状を送り付け、毎回命がけで盗み出し、いくつものハズレを悔しい思いで手にし、またふりだしに戻る・・・そんな怪盗キッド生活に、ようやく終止符が打てるかもしれないのだ。

父を殺した得体の知れない組織の野望を打ち砕き、敵を取^{カタキ}る。

その、暗く報われない日々にもうすぐ決着が付くかもしれないと思うと、跳び上がりたいような、しかしただ静かに喜びを噛みしめたような、そんな複雑な思いが波となって押し寄せてくる。

だが、その例のブルーダイヤが本物という確かな保証はない、と白馬は言っていた。

令嬢を監禁している組織が独自に仕入れた情報のため、かなり断片的であやふやな部分が多い、と。

『組織』という言葉に、キッドの頭の奥がふつと光った。

自分も大切な父のカタキのために、パンドラを狙う組織と戦っている。

そして白馬も、大切な人を助けるために別の組織と戦っている。

先ほど不思議に思った、何故自分があっさり白馬に協力する気になったかがわかったような気がした。

全ては『大切な何か』のためなのだ。

怪盗だから、とか、探偵だから、とかではなく、白馬探、黒羽快斗として、大切なモノのために戦うという根本的な信念に従って動いている。それだけのことだ。

俺と白馬^{アイツ}は、同志ってことか・・・

キッド、いや、快斗は再び苦笑した。

どうしてこう、人間というものは、同志^{なかま}に協力したくなる生き物なのだろうか？

まあたまには『怪盗と探偵』ではなく、同じ立場で『黒羽快斗と白

馬探』として出会うのもいいかもしれない。
そんなことを思いながら、彼はふっと息を吐いた。
辺り一面を覆う雪に負けなくらい白い息がはかなげに揺れ、どこかへ流れて行った。

「……………」
同じ頃、馨は自宅のリビングに居た。
側には、何やら慌ただしくしている母。
馨は黙って母の行動を目で追いながら、そっとマグカップを口元に運んだ。

「じゃあ馨、行ってくるわね。悪いけど晩ご飯は一人で食べて」
「わかった」

馨の返事を背中であいて、母は小走りに玄関へ向かって行った。
彼女は急に夫に呼ばれて、例の情報ビルに行かなければならぬらしい。

表情からして、あまりいいことではないようだ。
少なくとも、馨や探に不利になるような事態が起こったわけではな
いだろう。

母がドアを飛び出していく音が聞こえたあと、馨はしばらく聴覚だけに神経を集中させていた。
母の足音が遠ざかり、やがて外に誰の気配も感じられなくなると、
彼女は飲んで見せかけていた紅茶のマグカップを置いて立ち上がった。

階段を上がり、廊下を音もなく歩く。
自分の部屋のドアを通り過ぎると、『書斎』とプレートの掛かった

白いドアの前に立った。

馨は目を閉じて大きく息を吸うと、その息を吐きながらゆっくりとノブを回す。

元々鍵など付いていないそのドアは、難なく開いた。

そのまま隙間を広げ、そこに体を滑り込ませる。

と同時に、すぐに後ろ手でドアを閉め切った。

目の前に広がっているのは、今までほとんど入ったことのない父の書斎だった。

壁を埋め尽くすほどに並んでいる書棚の中には、警察関係の本ではなく、膨大な数のファイルと書類の山が乱雑に詰め込まれている。

その光景に、馨は思わず息を呑んだ。

彼女がこれからやろうとしていることが、とてつもなく無謀に思えてきたからだ。

だが、そんなことは言っていられない。

馨がやらなければ、探の作戦は失敗に終わるのだ。

唇をぎゅっと引き結び、彼女は窓際の大きなデスクに近付いた。

その上にも、やはり書類の山。

馨はまずデスクの引き出しを手当たり次第に探ってみた。

だが、目的のものは見つからない。

次はデスクの上の書類の山。

父に、馨がいじったことを悟らせないよう慎重にめくっていく。

しかしここにも無かった。

残るは、巨大な書棚のみ。

それらをぐるりと見回した馨の目に、あるものが飛び込んできた。

それは、一冊だけ他のファイルと色の違う、黒いファイルブックだった。

何かを感じてそれを手に取る。

ずっしりと思いそれは埃をかぶっていたが、表紙の文字ははっきりと読み取れた。

馨は夢中でページをめくった。

何やら異国の文字や地図の資料、それに走り書きした数十枚のメモばかりだったが、最後の最後に、やっと欲しかった書類を見つけた。激しく波打つ鼓動を抑えながら、震える手で慎重にファイルの金具を外す。

かなり古いようで、白い色が少し黒ずんでいる。

それを両手で持った、そのときだった。

誰かが軽快に階段を上がってくる音が耳に飛び込んできた。

この足音は、聞き慣れた母のものだ。階段の軋み具合でわかる。

出掛けるときかなり慌てていたから、忘れ物でもしたのだろうか。

馨は急いでファイルを元に戻し、書類をセーターの中に押し込んだ。デスクの下に潜り込むと同時に、部屋の外を足音が通り過ぎていく。

次いで、隣の両親の寝室のドアが開く音がした。

馨はデスクの下で体を丸めたまま、息を潜める。

やがて隣の部屋のドアが閉まる音がして、足音が戻ってきた。

そのまま通り過ぎるかと思いきや、唐突に馨のいる書斎のドアが開いた。

思わず、息が止まる。

冷たい汗が、全身から吹き出した。

だが足音はそれ以上近付いては来ず、代わりにドア付近の棚をこそそする音が聞こえてきた。

やがてその音もすぐに止み、数歩の足音と、ドアの閉まる音がした。

そしてまた、軽快に階段を降りていく音。

それを最後に、沈黙が戻ってきた。

全身ががたがたと震えている。

母が出て行っただけからも、馨は恐怖の名残でしばらく動けなかった。体が震える度に、服の下の書類がカサカサと音を立てる。

馨はそれを握りしめ、長い間デスクの下にうずくまっていた。

無線機を切り、探は一同を振り返った。

「葵さんが監禁されている部屋を特定しました。22階の西側の一番奥です」

キッドが報告してきたことを踏まえながら述べる。

「窓にはカーテンや雨戸はありませんし、ワトソンが手紙を受け取ったときについたと思われる爪痕も見つかりました。間違いないでしょう」

それを聞いて、英吾と椿が安堵の溜め息を吐いた。

ワトソンの爪痕を辿るというアイデアは、椿の物だった。

姉経由で黄昏の館事件の話を知っていたのを思い出した彼女はそれを提案し、一同を感心させたのだ。

それが功を奏し、彼らは葵がワトソンと出会った部屋を特定した。

手紙には一つの部屋のことしか書かれていなかったため、四六時中その一部屋に閉じこめられているのだろうと察しがつく。

あとはキッドのこれからの内情調査と、馨に頼んだ書類、それと最後の仕上げが揃えば準備は整う。

探はこれから、その『最後の仕上げ』にかかる。

「神原本部長、例の部屋の調達は大丈夫ですか？」

探のその問いに、神原氏は深々と頷いた。

「ああ。しっかり頼んでおいた。何も問題はない」

「わかりました」

探も頷き返す。

その言葉を待っていたかのように、白馬氏が口を開いた。

「じゃあ探、残るは・・・」

探は父を振り返り、彼がその先を言う前に言葉を発した。

「はい。これから、悦に頼みに行きます」

『五条』と表札のかかった大げさな門をくぐり、探は久しぶりに悦の家に足を踏み入れた。

結婚式の一件以来、五条家は責任を感じて行動を慎んでいる。それが、今の状況では逆にありがたい。

探は客間に通された。

しばらくして入ってきたのは、意外にも悦一人だけだった。

顔中に、不安の色を浮かべている。

彼女が席に座ると、探は驚いて尋ねた。

「お兄様やお父様は？」

悦は申し訳なさそうに苦笑して答えた。

「何だか、探と顔を合わせづらいみたいで・・・。探に対して、あまり良い仕打ちをしてこなかったから、あの二人・・・」

探は悦の心をくみ取り、小さく頷いた。

確かにあの二人のことを、探はあまり良く思っていない。

だがそんなこと、今の今まですっかり忘れていた。

「だから、私一人で用件を聞いてこいって言われて。私だけでも大丈夫？」

悦のその言葉に乗じ、探は早速本題に入った。

「ああ、問題ない。要は、悦がお父様に頼んでくれればいいんだ」
「何を頼めばいいの？」

探は真つ直ぐに悦を見据える。

「^{オトリ}囷になる宝石を貸して欲しいんだ。怪盗キッドの盗難被害に遭うオトリを」

あまりに突拍子もない言葉に、悦の目が大きくなった。それもそうだろう。

悦はてつきり、葵を助ける手助けを頼まれるかと思っていただろうから。

それをいきなり『怪盗キッドの盗難被害に遭う宝石を貸して欲しい』などと言われては、訳がわからない。

「オトリ!? 一体、何をするつもりなの?」

探は眉間にぎゅっとシワを寄せて辺りを見回すと、ひときわ低く囁くような声で悦に耳打ちした。

それを注意深く聞いている悦の顔が、どんどん驚きに歪んでいく。全て話し終わったとき、彼女が何か口走らないうちに探が言った。

「今の話は、できるだけ秘密にして事を進めて欲しい」

しばらく口をパクパクとさせていた悦だったが、やがて深刻な顔になつて頷いた。

「わかったわ。お父様に頼んで、必ず協力する」

それを聞き届けた探は、安心してわずかに微笑んだ。

「ありがとう。頼むよ」

役者たちに引き続き、小道具も揃った。

舞台はもう、クライマックスを迎えるだけ。

BGMが、一番の盛り上がりに向かって音を高めていく。

役者たちの顔にも、緊張が走る。

それを敏感に感じ取る観客たちは、この先のクライマックスに、一

体どんな顔をするだろうか？

その表情で、全ての運命が決する。

舞台は終焉しゅうえんを前に、一気に加速し始めた。

『運命』という名の結末がどうなるかは、やはりまだ誰にもわからない。

喜劇に終わることを願い、いざ、作戦開始・・・！

第52話 作戦開始!

警視庁内

捜査一課で、高木刑事が事件の報告書に頭を悩ませている。ふと気晴らしに、彼が外の廊下に目を向けたときだった。

「・・・?」

廊下を、数人の警官たちがぞろぞろと歩いていくのが目に留まる。普段は廊下を通り過ぎる人など気にしてはいないのだが、そのときばかりは思わず凝視してしまった。

大の大人、しかもいかにも警官らしい体格をした男たちが固まってぞろぞろ歩いていてるのだ。

それも、何か大きな箱のようなものを全員で抱えながら。

その異様な光景を、高木刑事はきよとんと見つめた。

と、そのとき、背後から上司の声が降ってくる。

「コラ、高木!早く報告書を書き上げんか!」

「すつすいません!」

日暮警部にどやされたものの、彼は好奇心に負けて、背後に立つ上司に問いかけた。

「あの、警部……。あの人たちは何をやってるんですかね?」

「んん?」

そこで初めて廊下に目を向けた目暮警部だったが、彼もやはり不思議そうな顔で答えた。

「あれは・・・お偉いさんたちじゃないか？顔だけなら見覚えがあるんだが・・・」

高木刑事も廊下に視線を戻しながら答える。

「なんでお偉いさん方が荷物運びなんかをしてるんでしょう?」

目暮警部が「さあ・・・」と答えようと口を開いたとき、別の声が代わりに答えた。

「あの箱の中身は、高価な宝石らしいぞ。上から直々の命令でな」

「「松本管理官!」」

いつの間にか、側に松本管理官が来ていた。深い傷が横切っている目を二人に向けて、彼が説明する。

「神原警視長を知っているだろうか?あの人が部下に頼んだ仕事だそうだ。何でも、白馬警視總監の知り合いの、五条つちゅう宝石会社の社長が自分のところの商品を警視庁の中に置いて警備して欲しいと頼んできたらしい」

「ホォー・・・警視庁に預けたいということですか?」

「そういうことだ。その社長が言うには、最近周りに泥棒まがいのヤツがうろついているから、自分の会社の金庫じゃ心配なんだと。商

談が成立して売れるまで、警視庁に安置しといてくれってことらしい。だから神原さんが適当な空き部屋を用意してやったわけだ」

管理官が溜め息混じりに答えた。

その顔には、半ば呆れのような表情が浮かんでいる。

「金持ちのワガママってところだ。警視総監の知り合いだから、神原さんも断り切れなかったんだろう」

彼がそう言い終わるとほぼ同時に、宝石の入った箱を抱えた男たちの群れは捜査一課の前を通り過ぎ、廊下の奥へと姿を消した。いきなり殺風景になった廊下に何気なく目を向けたままの3人だったが、やがて目暮警部がハツとして叫んだ。

「高木！余計なことを気にしとらんと、さっさと書き上げろ！」

「ははははいつ！すいません！」

捜査一課は、いつもの雰囲気を取り戻した。

しかし、一見いつもの雰囲気警視庁内だったが、『変化』は着実に起きつつあった。

どこから広まったのかはわからないが、警視庁に時価数億円の宝石が預けられたというウワサはその日のうちに、警視庁内の人間、そしてその周辺の一部の一般市民の間にまで知れ渡っていった。

ウワサというものは、一度誰かの口から飛び出してしまえば次々に飛び火するものだ。それこそ火事のように。まるで火事のように、ウワサはどんどん大きさと勢いを増して広がっていく。

そればかりは、いくら警察のトップの警視庁でも消火できない。

だがそれが、実は探たちの狙いだということも知らず、『火事』は大きくなる。

それが招くものは、探たちの切り札である『大爆発』・・・

翌日 警視庁内

「まあ、たく何ちゆうことだ！警視庁に宝石を守ってもらおうなんて、ふざけた輩やからがいるもんだ。警視庁は警備会社じゃないんだぞ！」

聞いてくれと言わんばかりの大声で、不満という名の独り言をぶちまける中森警部。

「宝石というもんがそんなに大事かね、その金持ちさんは！だいたい宝石なんてもんが高価で取り引きされるから、キッドみたいな派手な泥棒が現れるんだよ、ちくしょう！」

最近の彼は、実にご機嫌ナナメだ。

それも当然であろう。オパールに引き続きコハクまでキッドに盗まれたのだから、面目丸つぶれだ。

しかも両方がすぐに持ち主に返されているため、ナメられているとしか思えない。

そんな爆発寸前の彼の怒りは軽く聞き流し、部下が最新の話題をふった。

「でもその宝石って気になりますよね。時価数億円なんて・・・どんな宝石なんですかね」

まだむくれた顔で、中森警部が答えた。

「『深紅の姫君』とか評判のルビーだそうだぞ。中世でどっかの国のお姫さんのお気に入りだったつちゅう伝説があるから、そう呼ばれてるらしい」

「へえ・・・」

警部が頬杖をついてフンつと鼻を鳴らしたそのとき、いきなり捜査二課が騒がしくなった。

何事かと目を上げる警部と、その部下。

とたんに、彼らの目はそれ以上ないほど大きく見開かれた。

数人の部下を引き連れた白馬警視總監が、まっすぐ彼らに向かって歩み寄って来るではないか。
キャスターの付いた椅子が後ろに滑っていくほど勢い良く、彼らは立ち上がって敬礼した。

警視總監の穏やかな声が、緊張で静まりかえった捜査二課に響き渡る。

「久しぶりだね、中森君。うちの息子がいつも世話になっているみたいで申し訳ない。捜査の邪魔はするなといつも言っているんだが」

「いえ！そんな、とんでもありません！探君の協力にはいつも感謝しています！」

心にもないお世辞を精一杯返す中森警部に満足げに頷いてから、白馬警視總監は懐ふところに手を伸ばした。

そこから出てきたのは、二つに折りたたまれた真っ白な紙切れ。それを警部に差し出して、警視總監が言う。

「それが今朝、私のところに届けられた」

警視總監に困惑した表情を向けながら、それを受け取った警部が紙を開く。

「・・・これは・・・！」

たちまち表情を変える中森警部。

そこに書かれている内容を目で追ううちに、彼の紙を持つ手に自然と力がこもっていった。

そんな彼を見据え、真剣な顔で頷く白馬警視總監。

明日の夜

警視庁で最も大切な姫君を頂きに参上する

怪盗キッド

それだけの単調な文章が、純白の用紙に印刷されていた。そして全てを説明するかのような、いたずらっぽい笑いを浮かべたシルクハットの怪盗のイラスト。中森警部は顔を上げて警視総監を見た。お互いに、言いたいことはわかっている。

「・・・怪盗キッドからの予告状だ。文面からして、警視庁に盗みに入るようだ。そして狙いの『姫君』というのは、今警視庁に預けられているルビー『深紅の姫君』だろうと思われる。すでにウワサになっているから、それを聞きつけたのだろう」

「しかも今回は、『夜』だけしか書いていない。何時に来るかもわかりませんね」

「そうだ。凝った暗号も無く、予告時間の宣言も無い。警視庁に侵入するという、かつて無いことをしでかすのだから、いつもとは少し違った予告状を出してきたのかもしれない。それに、だ」

この、一見穏和だが警視庁のトップの座に相応しい威厳を秘めた白馬氏は、一旦言葉を切って周りを見回した。

その眼差しは、目が合った他の刑事たちの心臓をひと突きにするような鋭さと、言葉には出さないが誰でも感じることできる強い意志を含んでいた。

思わず、周りの刑事たちも背筋を伸ばす。

「警視庁のトップの私のもとに予告状を送り付けてきたということ、警察全体への挑戦状と受け取っても良いだろう。・・・諸君、くれぐれも警視庁の顔を潰さないよう、全力で警備にあたってくれ」

「ハッ!!」

一同が、一斉に敬礼した。

中森警部に「頼りにしているよ」と言葉を掛け、白馬警視総監は去っていった。

残された中森警部は、ぎゅっと唇を引き結ぶ。

その手に握り締めた予告状・・・いや、挑戦状が、妙に重く感じられた。

周りの刑事たちとて例外ではない。

彼らは警視総監の内に秘めた強い意志を感じ取り、使命感に燃えていた。

しかしその中の誰一人として、警視総監の『強い意志』が、『警察の顔を潰されたくない』というものなどではないことに気付いていなかった。

「そうか、上手くいったか」

そう言って携帯電話を切った英吾は、椿を振り返った。

「上手くいったそうだな」

椿の心配顔が、少し和らいだ。

「そうですね。良かった・・・」

英吾は椿を向かい合う形でソファに腰を下ろし、短く息を吐いた。

「しかし、葵と探君を引き裂くきっかけとなったあの姫君^{ルビー}が、今度は葵を助けるための重要な役割を担うことになるとは・・・皮肉なものだな」

そうなのだ。

実は今回予告状が送り付けられたあのルビーは、葵が五条家との縁談を受け入れざるを得なくなった根本的な原因のものだった。

あのルビーの取り引きを五条財閥と若宮グループが争い、結果として負けた若宮グループは危機に陥り、葵と探は一時別れることとなつてしまつたのだ。

そしてその縁談を受け入れたあとの結婚式で、葵は拉致された。すべての始まりとなつた宝石^{オトシ}だったのだ。

囷^{オトシ}となる宝石を警視庁に預ける役目は若宮グループにも出来たのだが、葵が死んだことになつている状況で積極的に仕事をしていたら副総監らに不審がられるかもしれないため、五条に頼んだ。

ここは、葵の死に落ち込んで引きこもっているフリを続けることが一番の安全策なのだ。

そのことを探に、悦を経由で頼んでもらつたところ、五条はすんなりと宝石を差し出した。

やはり葵が事件に巻き込まれたことに、少なからず責任を感じているのであろう。

しかし葵を悲しませる原因となつた宝石が、今回の救出劇に一役買うことになるとは、運命とは本当にわからないものである。

そんな物思いから英吾を現実に戻したのは、椿の一言だった。

「お父様……大丈夫でしょうか」

俯く彼女の肩は、小さく震えていた。

「作戦は成功するでしょうか。姉さまは、ちゃんと無事に帰って来られるでしょうか。私は……怖いです」

英吾はしばし黙って、不安に支配される娘を見つめていた。

やがて彼は立ち上がり、椿の横に腰を下ろすと、その震える肩をそっと抱いた。

「私にもわからない。だが、それしか道は無いんだ。……信じよう」

涙声で、椿が答えた。

「何をですか？何を信じればいいんですか？」

椿が答えを期待していないことなど、英吾には分かり切っていた。彼女はどうしようもない不安の中で、何一つ確信を持って信じられるモノが存在しないことを見抜いている。

自分たちの味方には、どれも足場が不安定で、もろく、全てを巻き込んで崩れ去ってしまいそうなものしか付いていない。

この少女が恐ろしく不安がるのは当然のことだった。ただその不安を口にするだけで、その不安から少しでも逃れたいと思っ、彼女は英吾に問うたのだ。

『何を信じれば良いのか』と。

それを十分承知の上で、英吾が口を開く。

「信じよう、自分自身の心を。『葵は必ず無事に帰ってくる』と信じる心を、信じよう」

温かい父の腕のに包まれ、椿はその言葉を心の中で何度も何度も反芻した。

『葵の無事を信じる』という自分の意志を信じることで、探やキッド、他の協力者たちを信じることに繋がる。椿は目を閉じ、姉の無事をひたすら祈った。

それぞれの思いを胸に秘めた人々の背後で、今にも消え入りそうなほど細い月が光を放っている。

それを自室の窓から眺める探も、やはり自分自身を信じていた。葵の無事を信じられる心を信じる。もうそれしか、彼に出来ることはない。

彼は目を閉じ、長らく会っていない大切な人を思った。たった一人で閉じこめられ、探の助けをひたすら待っている葵。彼女に再会できたら、言いたいことがたくさんあった。いや、正確には、謝りたいことばかりだった。

守りきれなかったこと、ずっと助けてやれなかったこと、彼女が死んだと思ひ込んでしまったこと・・・考えれば考えるほど、未熟で無力だった自分のせいで守れなかった彼女への懺悔の言葉が頭を埋め尽くす。でもその懺悔の言葉も、彼女を助け出さなければ言うことは出来ない。

すべては明日次第だ。

明日、すべての運命が決する・・・

翌日。朝からいかつい警備が、警視庁を取り囲んでいた。

何と言つてもあの怪盗キッドが、警視庁に盗みに入るといふのだから、警視庁内の誰もが気合いを入れて持ち場についている。

捜査二課の者たちだけではない。

目暮警部を始めとする一課の刑事たちも、様々な分野で二課に協力していた。

建物のまわりのマスコミを整理していた目暮警部と、たまたま通りかかった中森警部の視線が合う。

「ゲツ・・・目暮のタヌキ・・・！」

いつも通りの露骨な反応など気にも留めず、目暮警部は中森警部に歩み寄った。

「よお。今回、総指揮を任されているらしいじゃないか。しっかりな」

それを聞いた中森警部は、フンツと顔を背けた。

「お前に言われんでもそのつもりだよ。そつちこそ、一課のくせに出しゃばって、何かミスでもしたら許さんぞ」

目暮警部が苦笑する。

「出来る限り、努力するよ。たまにはワシらを信じてくれ」

中森警部は相変わらず顔を背けたまま返事をしなかったが、否定もしなかった。

それを満足げに見届けて、目暮警部は持ち場に戻っていった。

今までに例を見ないほど嚴重な警備が警視庁内を取り囲みながら、日が傾いていった。

キッドが予告した『夜』という時刻にはまだまだ時間があつたが、この真冬の時期はかなり早く日が暮れる。

『真つ暗』＝『夜』ということも考えられるため、現場の刑事たちの表情は夕日を見るたびに険しくなつていった。

西日が差し込む家の中で、伊勢谷副總監がコートを羽織っている。今日は警視庁にキッドが現れるということで、白馬氏から直々に現場監督を頼まれたためだ。

警視庁の一大事に、彼が現場に行くことは不思議ではない。

そのとき階段を降りてくる音がして、馨が姿を現した。

「パパ、私も車で乗せてつてくれない？」

娘の意外な頼みに、驚く父。

「お前もキッドを見に行くのか？」

馨はちよつと笑って答えた。

「うん。友達の間で話題になってるからさ、私もたまには野次馬に加わろうかと思って」

そんな笑顔の仮面の下で、馨は悲しげに父を見つめていた。

自分が、探たちに父を売った。

もう探しか・・・父を捕まえてもらうしか、道はなかったのだから。これ以上、悪事を重ねる父を見ていられない。

自分の味方が誰もいなかった状況で、探しか頼れる人はいなかった。初対面の探だろつが、馨にはどうでも良かった。

一緒に組織と戦ってくれる人なら、誰でも良かった。

だから馨は探に協力したのだ。

自分のしていることが、正しいと信じて。

すべて、父と母、そしてウノたちを、悪い夢から目覚めさせてやりたい一心だった。

ねえパパ・・・。こういう親孝行も、アリだよな？

警は心の中でそつと呟くと、父について現場へ向かった。

現場には、探たち一同も集結していた。

日が暮れ、辺りは闇に包まれる。同時に、巨大なライトが一带を照らし出した。

このとてつもない勝負を見ようと、すさまじい数の野次馬が周りを取り囲んでいる。

いくつものカメラのフラッシュが光り、あちこちから実況中継をするリポーターの声が聞こえてくる。

本格的に夜が近付き、その場の全ての者の顔が次第に緊張で張りつめていった。

探は遥か遠くにそびえる白い情報ビルに目を向け、ぎゅっと拳を握り締めた。

いよいよ作戦開始だ。

史上最初にして最大の救出劇が今、幕を開ける・・・！

第52話 作戦開始！（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

前回神原さんが調達した「部屋」というのは、宝石を安置するための警視庁内の空き部屋でした！。

そしてその宝石を用意したのが、前回探に頼まれた五条財閥。しかも葵と探が一時別れるきっかけとなった宝石です。

ところで今回、松本管理官が神原本部長のことを「神原警視長」って呼んでました。

わかる方なら当然の知識ですが、ちょっと解説を…

警察とは

『警視総監 警視監 警視長 警視正 警視 警部 警部補 巡査部長 巡査』

という順に階級が存在します。その中に副総監とか管理官、服部パパの大阪府警本部長などの役職が与えられます。

で、神原さんは警視長という地位で、『神原本部長』という呼び名は、葵の事件の捜査本部の長なので『本部長』ということ、服部パパの大阪府警『本部長』とは別です。

葵の事件に加わっていない松本管理官が『神原本部長』と呼ぶのも変だと思いましたので、あえて階級名でいきました。

第53話 意外な応援

宵闇よいやみが辺りを覆い、空気が冷たさを増してきた。

今宵は新月だ。月が全く出ていない。

夜空を支配する月光がその姿を見せていないというだけで、星々もいささか元気がないように思える。

そのせいか、今は時間的には夕方だが、暗さは十分『夜』と言えた。『夜』の何時に姿を見せるかわからない怪盗キッドに、大勢の警戒と期待が寄せられている。

警視庁の警備は今までにないほど嚴重だった。

神原氏が用意した部屋とはまた別の、重い扉の倉庫に宝石は移され、あちこちに警報装置が設置された。

部屋の中にも外にも大勢の警官が並び、蟻の入る隙間もないほど堅く守られている。

中森警部が、本日何度目かのチェックを施していく。

・・・まあチェックと言っても、警官たちの頬をこれでもかと言わんばかりに引つ張る、少々原始的な方法ではあるが。

警部のチェックの結果、今のところ宝石の半径20メートル以内に居る者の中にキッドは紛れ込んでいないようだった。

「警視庁に侵入するなんて、自ら捕まりに来るようなものだな。さあキッド、盗れるものなら盗ってみろ!!」

中森警部が、倉庫の前の廊下を歩き回りながらしきりに呟いている。

「今日こそお縄につかせてやるぞ!!」

彼の気合いの入りようは、半端ではなかった。

警視庁に、半分挑戦状のような予告状を送り付けてきて、わざわざ警視総監まで立ち上がらせたキッドへの執着心が、メラメラと燃えている。

だがその顔には、少々勝ち気な笑みが浮かんでいた。

それもそうであろう。

今回は、キッドよりずっと警視庁の内部に詳しい警察官たちのほうが圧倒的に有利だ。

建物全部が警報装置だと言っても過言ではない。

それに今回の警備は何度も言うように、今までよりケタ外れに嚴重なのだ。

宝石の所有者である五条氏も建物の外に出てもらい、警備に一切口出しさせなかった。

他の警察官たちも外のマスコミや野次馬の整理、検問などに回っていて、建物の中には人っ子一人いない。

他の事件があつたらすぐに対処できるように連絡機能も完璧にしてあるし、外にテントを張って常に誰かが待機している。

警察の役割をこなしつつ、キッド逮捕と宝石の守りに全力を尽くせる状態というわけだ。

キッドが警察の本拠地に乗り込むということが、どれほど警察にとての一大事を思い知らされる。

静まりかえった廊下で、中森警部が改めて気合いを入れるように大きく深呼吸した。

しばらくののち、警視庁の建物のすぐ外では。

冷たいコンクリートの広場に、大勢の警官たちが待機している。

この広場は関係者以外立ち入り禁止のため、まさに切迫した空気しか漂っていない。

広場の端には、マスコミやキット目当ての群衆が大量に押しかけ、それを押さえる警官たちをも呑み込んでしまいそうだ。

探はその中間、広場のほぼ中心に直立していた。

無線や重機器で通信をする警官たちの声を右耳で聞きながら、左耳からは溢れんばかりの群衆の騒音が聞こえてくる。

そんな彼はただじっと立っているだけだったが、おもむろに懐ふところから「自慢の懐中時計を取り出した。

時間を確かめると、浅く息を吐いてそれをしまう。

まだ、思ったより時間は経っていないかった。

それも当然だ。先ほども時計を確認したばかりなのだから。

作戦の開始時間までには、まだほんの少しだけある。

来て欲しいような、来て欲しくないような、そんな微妙で絶妙な時間を時計の針が指すのを、探は冷や汗を浮かべて見守っていた。

と、そのとき、背後から自分を呼ぶ声がした。

聞き覚えのあるその声に、探は意味ありげに振り向く。

防寒対策万全の響が、こちらに向かってきていた。

赤いセーターにミニスカート。

そこから覗く長い脚を、踵かかとの高いブーツが覆っている。

羽織っているロングコートが風を受けて後ろになびくのに合わせ

るように、黒いニット帽から出た髪も魅惑的に流れていた。

ブーツの靴音を探の目の前で止め、馨が話しかける。

「こんなところに入っているの？」

探はまだ冷や汗の乾かない顔を馨に向けると、無理矢理な冷静さで答えた。

「はい。今回もキッド捕獲に協力すると言って、中に入れてもらいました。あなたこそ、よく入れましたね」

馨が、肩で息を抜くように答える。

「うん。私、パパと一緒に来たからさ、建物の中に入らないって条件で広場に入れてもらったの。パパは裏の本部で、総監と一緒に待機してる」

探は素早く周りを見回し、馨にしか聞こえないような声で言った。

「ところで、例の書類のほうは・・・？」

馨は黙って、目でコートの内ポケットを示した。

それを了解した探も、黙ったまま頷く。

そして、まるで示し合わせたかのように揃って顔の向きを変えた。二人の視線の先にあるのは、高くそびえる白いビル。

月の光を浴びていないその姿だったが、何故か輪郭まではっきりと見える。

まるで、自ら光を放っているような妖しげな雰囲気秘めていた。

と、そのとき。

唐突に、辺りが昼間のように明るくなった。

警視庁ビルの周りに設置された大型ライトが一斉に点灯されたのだ。

二人が時計を見ると、ぴったり7時だった。

だからライトが点けられたのだろう。

そして、探たちの極秘の作戦の開始時間でもある。

本格的な警察の始動に、『キッドLOVE』などのプレート掲

げ持った一般民衆が興奮して大声を上げた。

それと対照的に、彼らを抑える警察官は苦しそうな顔になる。

そんな様子を横目で見ながら、探が口を開いた。

「いよいよですね」

馨も、ゆっくり頷いて答える。

「ええ」

そう言うと、二人は再び情報ビルに視線を移した。

馨は遙か遠くの白いビルの窓の一つ一つを見つめながら、その中に居る『大切な人たち』のことを思った。

誰より自分のことを想ってくれて、優しかった父。

夫に忠実すぎる面もあるが、母親としては立派だった母。

そして、自分の一番奥にある温かい気持ちに気付かせてくれたウノ・

彼にとって自分は単なる遊びか、都合の良い道具でしかなかったかもしれない。

だが少なくとも、馨にとっては幸せな恋だった。

目を閉じれば鮮明に浮かんでくる、彼との思い出。

周りの友達とは180度違う恋愛だったが、そんなこと気にならな
いほど、明るく美しい思い出だ。

記憶の彼方に、ウノの姿が浮かんでくる。

馨はある春の日の、穏やかなひとときを思い出していた。

『ねえウノ』

『啓吾だ』

いきなり彼の口から飛び出した、訳のわからない言葉。
馨は思わず、素っ頓狂な声を上げた。

『へっ。』

ウノは煙草の煙を見つめたまま、何事もなく答える。

『俺の本名だよ』

ウノはそれきり、何も言わなくなった。
ただ自分の横で、前だけを見つめている。

ねえウノ・・・それって、本名で呼べってこと？

私と居るときは、組織のこと忘れてくれるってこと？
それって、恋人の証……？

私は素直じゃないから、嬉しくても可愛く喜べない。
照れ隠しに乱雑な言葉を投げた。

『じゃあこれから遠慮なく呼ばせてもらおうかな』

ウノ……いや啓吾は、ふっと笑って馨に顔を向けた。

その笑顔は、組織の仕事をしているときの冷酷な笑いなんかじやなくて、温かい笑い。目でわかる。

『好きにしる』

そう言って彼は、また視線を戻した。

わかってる。彼の『好きにしる』は、『了解』の意味。

素直じゃなくてゴメンね。意地っ張りで幼稚だから、私は……

「……………」

幸せな物思いから醒めた馨の目に、陽光にはとても敵わない、明るだけのライトの光が飛び込んできた。

まだうつすらと涙の膜が張った瞳を細め、誰にもなく言葉を発する。

「誰も、完全な悪じゃない。悪い人にだって、心はある。そう信じてる」

探はそんな響を、静かに見守った。

ほぼ同時刻。

情報ビルの中に、一人の男性が入っていった。入口から、堂々と。

彼を見た人々が、口々に驚きの声をかけてきた。

「ボス、今日はキット騒ぎの応援に行ってるんじゃないですか？」

「副総監じゃないですか。今日は警視庁のはずでしょう？どうしてここに？」

そんな彼らに、男はワンパターンの返事を返していった。

『忘れ物だよ。ちょっとしたものなんだが、無いと困るんだ』

そうかわし続けて、ようやく彼はひと気のない階段に足を踏み入れた。

一旦立ち止まり、懐ふくろから細かく書き込みがされた地図を取り出す。

その地図の右下には、子供のように笑うシルクハットの少年のイラスト

そう、彼の正体は怪盗キッド。

ご自慢の変装は、今日も完璧である。

本物の伊勢谷副總監は、当然警視庁で白馬警視總監と職務を全う中だ。

彼は素早く地図をしまつと、キビキビと階段を昇り始めた。

あらかじめ仕掛けた盗聴器で、入念にビル内や部下たちのことは調べてある。

まずクリアすべき第一ステップは、これからすぐ行われる『集会』だ。

事前調査から、組織の人間は出払っている者を除いて必ず7時に談話室に集まり『集会』を開く習慣があるらしい。

まあ『集会』といっても、話し合うことがなければただの雑談会のようなものようだが。

副總監・・・いや怪盗キッドは、談話室の扉を開いた。

とたんに、むわつと煙草の臭いが鼻をつく。

中身はまだ高校生の彼は、咳き込みそうになるのを何とか抑えて部屋に足を踏み入れた。

見回すと、暗いランプだけに頼った室内に何十人もの男たちとくわすかな女性がいるのが見えた。

皆、思い思いにソファに腰掛け、くつろいでいる。

そんな中、意外なボスの登場に一同は慌てて立ち上がった。

「ボツボス!! どうしたんですか!? 今日警察の仕事のはずじゃあ……」

「忘れ物をしてな。ちょっとしたものなんだが、無いと困るんだ」

本日何度目かのセリフを難なく言っただけ、彼は歩き始めた。忠実な部下たちの椅子の間をゆっくりと通り過ぎる。その間に、部下たちは腰を下ろしていった。

「いやあ、警察の堅苦しい中にいるのは疲れる。やはりここが一番だ」

偽ボスがそう言うと、表の職業が刑事らしい若い男が同調した。

「本当にそうです。あいつらは地位や階級にこだわりすぎている。だから責任逃れや不祥事が絶えないんですよ」

ちらほらと、賛成の声が上がった。

偽ボスは彼ら一人一人の肩を軽く叩きながら、ゆっくりと進んでいく。

ここまでは、キッドの思惑通りだ。

だがここで、そんな彼の策を危うくする男が立ちはだかった。いや、正確には座っているのだが、立っていると錯覚させられるほどの威圧感を覚えた。

その男の鋭い目と、キッドの心の目が合った。瞬間的に身構える。

その男は、探たちから『ただ者ではない』と聞かされていたウノだ

った。

彼はじつと偽ボスを見上げているだけで、何も言わない。だがその眼差しの奥に、何か心の不安をかき立てるようなモノが伺えた。

余裕が無くなってきたキッドは、額に浮いた冷や汗をごまかすかのよつにそそくさと目を逸らし、ウノの肩にも手を置いた。

「……これからも私の右腕として、期待しているぞ」

その言葉に、ウノは表情を変えずに答えた。

「はい」

キッドは後ろ手に談話室のドアを閉め、大きく息をついた。全ては、あのウノが原因だ。

今のところ誰にも正体はバレていないだろうが、どうもあの男の側にいると内心かなり焦る。

根拠のない不安と後ろめたさに襲われるのだ。

まだ心に深く突き刺さっているウノの視線を振り払うかのように、キッドは大きく首を横に振って再び進み始めた。

ここからは、余計な感情に振り回されている場合ではない。正体がバレてさえいなければいいのだ。

いよいよ、最も大切な任務を実行するときが来た。

高鳴る心臓の鼓動が息苦しいくらいだ。

長年の父の敵と、自分の二重生活の終止符がすぐそこまで迫っている。

第一の任務はたった今、無事に成功した。

最後の戦いが始まる・・・

警視庁外庭、午後7：15

探と馨はそわそわと、情報ビルを気にしていた。

作戦開始から15分経つが、未だキッドからの連絡はない。

考えたくはない嫌な想像が幾度と無く頭をよぎっていく。

と、その時。

探の手元の無線が雑音を発し、くぐもった男の声が聞こえてきた。

『こちらキッド。第一の作戦は無事成功しました。これから10階へ向かいます』

探と馨が、ほうっと胸をなで下ろす。

「了解しました。引き続き、慎重にお願いします」

『了解』

それを最後に雑音が途絶え、二人は長く浅い息を吐いた。

今彼らが居るのは、外庭の片隅にある、ひと気のない大木の下。

周りにはコンクリートの広場が続いているだけで、別の人間が隠れられそうなものは無い。

はるか向こうに、彼らが先ほどまで居た場所を忙しく走り回る警官たちの姿が見える。

安心して、馨が言った。

「あとは、大した障害は無いわね。22階に行っちゃえばこっちのもんだし」

その言葉に探が同意の返答を返そうとした、その時だった。

「なあ、副総監のご令嬢ハン。声の大きさには氣イ付けなあかんで」

ぎよつとして、声のした方を見る二人。

馨は完全に動揺していたが、探の頭は一瞬にしてひらめいた。

聞き覚えのある、出来れば思い出したくはなかったその声と、口調。

彼の予想通りそこには、どこから現れたのか知らないが、月のない暗闇でもわかるほどの黒い肌をした健康そうな顔つきの男が立っていた。

彼こそが、探の探偵としての自信と威厳を一瞬にして崩壊させ、どん底まで転落させた張本人、探と色々な意味で同じ立場の男

西の高校生探偵・服部平次が、そこに立っていた。

第54話 白馬探という男

「そんな、あからさまに嫌そうな顔すんなや!!」

関西人特有の、聞きようによつては少しきつい口調で、平次が言った。

探が文字通り『あからさまに嫌そうな顔』をしていたからだ。

「・・・何故君がここに居るんです？僕が頼んだのは君のお父様であつて、君ではありませんよ」

くだけた挨拶もなしに早速本題に入る探に、平次は苦笑した。

「冗談の通じんやつちな」

彼は探たちのほうに歩み寄りながら、ことのいきさつを話し始める。

「お前と警視総監が俺の親父に応援を頼んできたとき、親父がそれを俺にも教えてくれてな。今回の事件とか作戦のこととか、詳しくう聞かしてもらたんや」

そうなのだ。探たちは、白馬警視総監が最も信頼している官僚の一人である平次の父に、極秘に今回の作戦の真意を明かして、頼りになる部下を数人貸して欲しいと頼んでいた。

その結果、有能な刑事が大阪府警から数人派遣されて来て、今は神原本部長と共に別場所で待機している。

「そしたら親父が俺に、『自分の代わりに警視総監の手伝いさせてもろてこい』言つて、ほっぽり出されたっちゅうわけや」

そこで平次は一旦言葉を切り、未だに不審な表情を浮かべている馨の方を向いて言った。

「なんせ、副総監が一枚噛んでるっちゅう、けつたいな事件やからな」

平次のその言葉に、馨の不審な表情に嫌悪の表情が加わった。

「この変な関西人、誰なの？」

『変』という言葉に絶句した平次を横目で見ながら、探が答える。

「大阪府警本部長・服部平蔵氏のご子息で、僕と同じく高校生探偵をやっている服部平次君ですよ」

「彼が大阪府警本部長の!？」

馨の両眉が吊り上がる。

黙っていられなくなって、平次が口を挟んだ。

「あんなあ！仮にも副総監の娘のあんたが、何で俺のこと知らんねん!!新聞とか読まんのかいな!？」

馨はツンとそっぽを向く。

「だって私、警察になんて興味ないし」

尚も食ってかかろうと身を乗り出した平次だったが、寸前のところ

で探に押しとどめられた。

「まあまあ。とにかく服部君、君の応援にはとりあえず感謝します」
とりあえずって何やねん！という平次の言葉を聞き流しつつも、探の内心は防衛態勢をとっていた。

探は1年前の探偵甲子園で、平次を「野蛮だ、熱すぎる」と見下して痛い目に遭った。そのトラウマは、まだ完全に癒えていない。「彼に関わると、自分の探偵としての自信を粉々にされる」と、探の脳が警告を発していた。

せつかく最近、そのトラウマが消えかかっていたというのに。最近の葵のことで、自分の推理を疑ったりくよくよするヒマなど無かった。何より大切な人がかかっていたからだ。

だが、そのトラウマを作った張本人が目の前に現れるのはさすがにキツイ。

探偵甲子園では、探のほうが100%悪かったのが明らかだけに。そんな気持ちを隠すように、探は平次に向き直った。

「それで？熱血探偵君は一体どんな手伝いをしてくれるつもりですか？」

譬にも探にも邪険にされ、平次は眉間にシワを寄せる。

「まあ、お前らに協力してる怪盗キッドからの連絡聞いて、作戦の経過を見守ることぐらいはできるんとちゃうか？」

その彼が視線を移した先には、月のない闇に浮かび上がる白いビルがあった。

だがそのとき、それとは別のものが探の目に留まる。

彼らから少し離れたところに止められている、何やらいかつい乗り物……

「……君、バイクに乗れるんですか？」

怪訝けげんそうな顔をする探とは対照的に、平次は「まかしとき！」と得意気に笑った。

さつきから表情がくるくる変わっていく。そういう感情豊かなところが、どこか冷めている自分とは圧倒的に違うのだと、探は漠然と思った。

だから彼は、あんなに熱くなれるのだ。

同じ頃、偽ニセ副総監は探に予告した通りビルの10階に向かっていた。

これも、数日間にもわたる盗聴器調査の結果得られた情報である。

今回キッドが何としてでも手に入れたいモノ……ブルーダイヤは、ビルの10階に安置されている、と組織の構成員が話している声を拾ったのだ。

第2ステージの舞台が近づくにつれ、階段を昇る彼の足取りは自然と速くなっていった。

副総監が愛用している革靴が、階段に高らかな靴音を響かせる。

同じく副総監になりきるために着込んできた警察の制服は重く、

動きにくい。

思うように動かない体に精一杯の力を込めて、怪盗キッドは希望への道を夢中で駆け上って行った。

ここまでは、すべて順調に進んでいる。キッドがようやく階段を昇りきり、10階の床を踏んだときも、その順調さを乱すようなものは何も感じられなかった。

恐らく階全体の明かりが点いていないのだろう。

宝石が置かれている以外は、ほとんど利用されていない階らしい。辺り一帯は、乾いたホコリっぽい臭いで満ちていた。

そしてありがたいことに、人の気配が感じられない。何度も警備の厳重な建物に侵入してきたことで培つちかわれた彼の気配察知能力がそう感じ取っているのだから、間違いないだろう。

本当に、順調過ぎて少々不安になるくらいだ。

だが『不安』というものは、彼の変装術において大変禁物である。心に隙ができ、ターゲットになりきることに集中できなくなる。

そのため彼は、いつも警備の厳重なところに盗みに入るため、無防備な今の状況に違和感があるだけだ、と無理矢理自分を納得させた。

そうこうしているうちに、彼は目的の部屋へと着実に近付いて行った。

10階のどの部屋に宝石があるかは知らなかったが、廊下に並ぶ数々のドアを一目見れば容易に見当がついた。

一番奥の正面を向いたドアが、明らかに他の部屋のドアとは違うのだ。

重々しい金属製の巨大なそれには、同じく金属製の南京錠が3つも掛けられている。他の、何の変哲もない部屋のドアと比べて、そこに宝物が有ることは想像に難くなかった。

その確信が胸をよぎったとき、キッドの心臓が今までにないほど大きく波打った。

とうとう目の前に、長年探し求めてきたモノがある。

自分の大切な人の敵が、もうすぐそこまで迫っているのだ。

全身が震え始めた。体というよりは、心の底から湧き上がってくる、歓喜と恐れ半分半分の震えだった。

変装用のゴムマスクの下で、顔がほてって熱くなっていく。もう彼の目には、ずっしりと構える鉄の扉しか映っていない。

一方、そこから垂直に12階上がった22階の奥の部屋では、何も知らない葵が、一人放心状態に陥っていた。

ワトソンに手紙を託して、もう何日も経った。しかし一向に、何の動きもない。

今日のように月のない夜が照明のないこの部屋にもたらすものは、どこまでも続く闇だけだった。

街の明かりも、部屋が高すぎるため届かない。

静かな空気の流れが際立って感じられ、暖房機具の無機質な音だけが響いていた。

言いようのない不安が、葵を襲う。

たった今自分を取り巻いている暗闇が自分のこれからの人生のように思えてきたのだ。

どれだけ目を凝らしても何も見えない。ただ、自分を置き去りにして流れる時の音が感じられるだけ。

無理に進めば、あらゆる障害にぶつかり、傷付く。

傷が重なるにつれて絶望が心を蝕み、やがて暗闇の中で足を止めてしまう。

永遠に……

全身に悪寒が走り、葵は座ったまま身震いした。寒かった。

暖房が効いているにも関わらず、この体の芯からしみ出してくるような寒さがたまらなく恐ろしかった。

こうして座って、暗いことを考えてばかりではいけないと思い、葵は立ち上がった。

途端に襲ってくる、めまい。彼女はあっけなく膝を付き、うなだれた。

長い間閉じこめられたままで、快適な睡眠も摂れず、食事もあまり受け付けない。

そんな彼女の体は痛々しいほどに細く、弱くなっていた。

ふと、記憶のひもが解かれる。

前にもこうやって精神的に悪い、体調を崩して入院したことがあった。

そう、探に別れを告げられた、あの時だ。

退院してからもずっと心が晴れなかった。ずっと心に日が照らず、寒かった。

だから探が「一緒に逃げよう」と言っただけ抱き締めてくれたときは、涙が出るほど温かった。

彼の温かい腕が、今は何より恋しい。

カサカサに乾いた手を擦り合わせ、葵は無心に手を温めた。

とにかくここから解放されたい。ただ、それだけを思った。未だに目的のわからない組織に捕らわれているままなんて耐えられない。死よりつらい苦しみが、目の前に横たわっていた。

しかし、組織は葵の言うことは何一つ信じてくれない。あの恐ろしい尋問も、相変わらず続いている。

「何も知らない」と言い続けていても、逆効果なだけだった。

葵は本当に何も知らないのだ。『パンドラ』という宝石のなんて聞いたこともない。

『パンドラの箱』という神話を、名前だけ知っている程度だ。

だが『パンドラ』という言葉の響きを感じる度に、記憶の片隅をつつかれるような錯覚を覚えるのは確かだった。

思い出せる気はしないが、何か関係があるような気がしてならない。

一体母は、どんな重大な秘密を抱えたままこの世を去ったのだらう？

『不老不死』なんて人間の手に負えないものを背負っていたにも関わらず、彼女は死んでしまった。

ここへ入れられてから幾度となく思い浮かべてきた母の顔が葵の

思考を支配していた、その時。
ゆっくりゆっくり慎重に、鍵を回す音が響いてきた。
静かな空気の流れが乱れる。

やがて扉が開いてすぐ見えたのは、丸くて白い、機械的な懐中電
灯の明かりだった。

その持ち主を見た瞬間、あの得体の知れない恐怖が全身を支配し、
葵は目を見開いた。

それからしばらくののち、10階。

キッドは用意していた特性の針金で得意のピッキングを済ませ、扉
を開いた。

想像以上に重い扉を自身の腕でしっかりと押し進みながら、手探
りで電気のスイッチを入れる。

パツと明るくなった部屋の全容はシンプルだった。まっさらな床
や壁にはほとんど何も無い。窓さえも。

だが代わりに、この事務的な部屋には似合わないものがたった一つ
中心に置かれていた。

キッドの心臓が高鳴る。

興奮しておぼつかない足を何とか進め、その『箱』に近付いた。

そこには、フルタイムヤ獲物が入っていた。

上質な布製の台に置かれ、分厚いガラスのカバーで囲われている。
そのガラスを通り抜けた照明の明かりを受けて、宝石は上品な輝き

を放っていた。

喉の辺りから全身に、すさまじい震えが走った。現実感が薄れ、ぼうつとする。

自分が今まで必死に追い求めていた宝石が、目の前にあるのだ。

言いようのない喜びが溢れてきた。何か大きなことを命懸けで達成した瞬間のような、どうしようもないくらい大きな歓喜だった。思わず涙がにじむ。

ずっと、つらい夢を追っていた。復讐を伴う、暗く重い夢だった。だがその夢の終わりは思ったより遙かに綺麗で、明るかった。それくらい、このブルーダイヤは美しかったのだ。

深い海のような碧と、それに巻き付いている魅惑的な銀細工の女神像……

キッドは強引に夢心地から心を引き戻し、ガラスケースの角を掴んで持ち上げた。

思った通り、入ることさえ難しいビル内に安置してあるためか、そのケースは簡単に持ち上がった。

こうした場合のガラスケースは、中のモノを汚れから守るのが役割で、防犯の必要は無いからだ。

素早く手袋をし、震える両手で宝石を手を取った。

この世で一番高価な宝物に触れるように、慎重に、仰々(ぎょうぎょう)しく。

感極まってしみ出してきた涙を押しとどめ、彼はそれを内ポケットに丁寧にしたった。

それからくると体の向きを変え、真っ直ぐに出口へ向かう。

これで気を抜いてはいけない。まだこれから、一番厄介なモノを盗まなければいけないのだ。

紳士的なイメージで怪盗家業をしているからには、白馬との取り引きの約束は守らねばならない。

宝石を手に入れた感動は、もはや違う緊張によって薄れ始めていた。

気持ちを新たに部屋から出て階段に向かった偽副総監の姿を、廊下の物陰から見つめている鋭い目があるとも知らずに……

まだしょーもない話で騒いでいた3人に、無線が入った。

一同が一斉に口をつくむ。

探が無線にかじり付いた。

『こちらキッド。10階での任務、無事完了しました。これから2階へ向かいます』

「りよ……了解しました！くれぐれも、気を付けて……」

そう返答し終わった探は全身の力が抜け、思わずその場にへナヘナとしゃがみ込んだ。

「うわっ気色悪！おい白馬、こっからが本番やる！？男やったらシヤキツとせえシヤキツと！！」

相変わらずの平次の毒舌だったが、探の耳にはそんな言葉など聞

こえていなかった。

今彼は極度の安心と緊張に支配されているのだ。

正直、ここまですんなりと宝石を手に入れられるとは思っていなかった。

今まで何度も騙されたキッドの変装を信用していないわけではないのだが、やはりあのウノの存在が、探の不安をかき立てていたのだ。まあ見つかりにくくするために、わざと集会でひと気のない時間帯を選んで作戦を練ったわけであるから、必要以上に怯える意味もなかったのだが。

一方の馨はというと、少々複雑な表情だった。

当たり前だ。両親や恋人が逮捕される瞬間が近付いているのだから。

だがやはり、安堵の表情の方に傾いている。

ちよっと口元を緩めて、短く息を吐いた。

探はうずくまっただまま顔を膝に押しつけ、ぎゅっと目を閉じた。いよいよ、この時が来た。

このまま何も障害が無ければ、葵を取り戻せる。やっと会えるのだ。

彼女に再会できたら、謝りたいことがたくさんあった。

守りきれなかったこと、ずっと助けてあげられなかったこと、一度死んだと思って諦めたこと……

早く早く、とにかく早く、彼女に会いたかった。

だが、それももうすぐだ。

胸を震わせる喜びをぐっところえて、探はつぶやいた。

「良かった・・・」

膝に顔をうずめて、人生最大の喜びのように肩を震わせている探を、平次は黙って見下ろしていた。

この姿に、もう1年前の探偵甲子園でのふてぶてしい探の影はない。事件に感情的になって突っ走ることを「野蛮だ」と言い放ち、自分のことを「熱すぎる」とバカにしていた彼からは想像もつかない姿だった。

ようやく顔を上げて立ち上がった探に、平次は静かに告げた。

「オマエ・・・変わったな」

「・・・はい？」

きよとんとする探。平次は繰り返した。

「しばらく会わんうちに、変わったな思て。内面的に」

「そうですか？特に自覚はないんですが」

平次はしみじみと探を眺めて答えた。

「オマエ、俺のこと野蛮やか熱すぎるとか、なんや偉そうなこと言うてきたやろ？あん時と全然ちやうで。実際、今はオマエの方がどえらい感無量やんけ」

探がはっとする。

「親父に頼まれたんもあつたけどな、ホンマは俺オマエの探偵としての行動がどないなつたんか見たる思て今日来たんや。オマエがどえらい事件抱えてて、自分で作戦まで立ててる言うから興味持つてん。そしたらオマエ、なんか滅茶苦茶頑張ってるし、さつきみたいにちよつと何かあると冷静やなくなつてしまふし・・・ホンマ、『熱いやツ』になつてんで」

そう聞き終わると、探は苦笑した。

「フツ・・・まさか君にそんなことを言われる日が来るなんて、思つてもいませんでしたよ」

平次も面白そうに笑う。

「俺も、こないなことオマエに言う日イが来るなんて思つてへんかつたで。やっぱ、その葵っちゅう姉ちゃんのおかげかいな」

探はふつと優しい表情になると、確信めいた口調で言った。

「大切な人ができると、誰でもそうなるんですよ、きつと」

「大切な人・・・かあ」

平次の頭に、ポニーテールの幼馴染みの姿が浮かんできた。

『大切な人』ができる誰でも『熱いやツ』になるというのなら、平次には生まれつき大切な人が存在することになる。

妙に照れくさくなって、彼はその思考を無理矢理頭から追い出した。

調子はずれなほど簡単に宝石を盗み出せた怪盗キッドだったが、彼にはまだ重要な任務が残っている。

「宝石は盗んでも、人は盗まない」主義を、ここで捨てなければならぬ。

だがここで、彼はふと汚い感情を抱いた。

自分の目的は達成された。宝石を手に入れられたのだから。

だからここで、白馬との取り引きを無視してトングズラしても、自分には全く不利益にならないのだ。

父親譲りの主義を曲げることは、出来ればしたくない。

だが、そんな卑怯な考えが頭に浮かんでから、また別の方向の疑念が湧いた。

いや、待てよ……？

白馬は本当に、本物のパンドラを自分に差し出したのだろうか？

もしかしたら先ほど手に入れたばかりのブルーダイヤの中には、パンドラが入っていないかもしれない。

キッドを釣るために、白馬が自分を騙した可能性もある、と。

ある程度興奮が冷めて冷静になって考えると、実に疑わしい疑念だった。

白馬が自分の今までの盗みの狙いを見事に言い当てたため信用したが、必要以上に賢い彼のことはあなどれない。

キッドは、その疑わしい宝石を取り出した。
相変わらず美しい。

確かに、全てのビッグジュエルの頂点に立つに相應しいとは思った。
今まで盗んできたどんなビッグジュエルよりも美しく、清らかだ。

だが本当にこれは、キッドが今まで求めてやまなかった本物の宝石なのだろうか？

本当にこの中に、パンドラは入っているのだろうか？

しばらくじっと考えながら歩を進めっていると、いつの間にか階段にさしかかっていた。

とりあえず地道に22階まで昇ることにする。

と、途中の踊り場に大きな窓があった。

キッドはちょうど良かった、と、月の光にかざしてパンドラを探すため宝石を窓に向かって高く掲げた。

お願いだ、パンドラよ光ってくれ……！

「……！！！」

だが次の瞬間、キッドは目を見開いた。

しばらく呆然としていたが、大きく舌打ちをして宝石をしまつ。

「クソツ……白馬のヤロオ……！！！」

今夜は新月。月はカケラも出ていない。

ブルーダイヤの中に、本当にパンドラが入っているのか確かめる術^{すべ}はないのだ。

当然探は知っていて、わざと作戦実行を今日にした。キッドが裏切れないように。

これでキッドは『パンドラについて重要情報を握っている』と探から聞かされている『葵』を助け出し、直接話を聞くしかなかった。どうしても葵を救い出すしかない状況になったのだ。

『人を盗む』ということと『パンドラが手に入る』ということと頭が一杯だったキッドは、今夜の月の状態などを気にしている余裕はなかった。

そこを突かれ、白馬にハメられてしまったわけだ。

あいつの方が一枚上手だったか・・・と悔しながらに認め、キッドは葵を助けるために暗い階段を昇り始めた。

その先に待ち構えている番人の存在など、彼はもちろん、知るよしもない・・・

第54話 白馬探という男（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

前々から「今夜は新月だから月の光は全くない」って匂わせておいたんですが、お気づきでしたか？

でもって今回は、ちょっとだけ平×和が…（笑）

第55話 番人

その頃、警視庁ビル表では。

「……来ませんね、怪盗キッド」

伊勢谷副総監が、何の気なしに呟いた。

その言葉に、白馬警視総監の内心は冷や汗でダラダラになった。

「まあ……来て欲しいわけではないが、これだけ警備させておいて結局来ないのはちょっと調子外れだな」

慎重に言葉を選びながら答える。

ちらりと副総監を見やると、彼はこちらのことなど気にせずぼつと正面を見つめているだけだった。

ひとまず安心する白馬氏。

すでに7:30を回っている。警視庁周りのライトが点灯されてずいぶん経った。

だが、一向にキッドの現れる様子はない。

今回は時間を予告して来なかったためいつ来るかわからないあの白き奇術師に、押し寄せたマスコミや群衆はいい加減しびれを切らしたのか、夕方の頃のような威勢の良さは見られなくなっていた。

警備する面々も例外ではない。

全神経を集中させて警備に当たっている彼らに、いよいよ疲れと苛立ちが目立ち始めてきた。

事の次第を監督している伊勢谷氏も、次第に口数が少なくなっていく。

あまり好ましい状況ではなかった。
彼が不審がれば、情報ビルに連絡を取られ、ただ今真つ最中の作戦がバレるかもしれないのだ。

今のところ彼に、どこかに連絡するような気配はないし、そうさせないために怪盗キッドにも計画をしてもらった。

だがその第一ステップを、キッドが成功させたかどうか、白馬氏は不安だった。

意を決し、なるべく平静を装って席を立った。

「伊勢谷君、悪いが少し部下と話をしてくる」

「わかりました」

何も不審がることなくそう返事をした副總監を注意深く見つめながら、白馬氏は本部のテントを抜け出した。

「探！」

本部の裏の大木の下に、白馬警視總監はやって来た。

そこに、探と馨の他に居るはずのない少年を見てぎょっとする。

「君は……確か服部平蔵君の……」

「あ、連絡せんと来てしてもすんません。親父から、何か手伝いして来い言われまして」

「そうか。まさか彼がこんな心強い応援をよこしてくれるとは」

その言葉に、平次は満面の笑みで答える。

「いやー心強いやなんて、嬉しいこと言うてくらはりますなあ！」

だがそう言い終わった瞬間、探の復讐が幕を開けた。

「お世辞を聞き分ける能力を身につけるべきですよ、服部君」

またしても始まりそうな口論を予測して、警が素早く口を開く。

「総監、どうなさったんですか？」

「ああ、作戦の進行は大丈夫かと思ってな。なかなかキットが現れないから、群衆も副総監も気が萎なえているんだ」

そう言っつて、彼は探の手にある無線に目をやった。

それをひょいと持ち上げ、探が答える。

「今のところ、2つ目の作戦が無事に成功しています。残すは、葵さんの救出だけです」

白馬氏が安堵の返事を返そうとした、その時。

無線が、特有の雑音を立て始めた。

ちょうど同時刻、キッドは22階まで階段を昇りきっていた。まだ集会は終わっていないらしく、辺り一帯は暗く静まりかえっている。

彼が側のビルから鷹の爪痕を発見した部屋は、この階の一番奥。先ほど宝石を盗み出した部屋と、間取りとしては同じだ。

彼はその白いドアに向かって一直線に歩を進めながら、無線のスイッチを入れた。

「こちらキッド。22階に到着しました。今のところ順調です。これより、葵嬢の救出を・・・」

だが彼の言葉は、そこで途切れた。

無線機の向こうがにわか騒がしくなる。

『どつしたんです?』

そう言う探の声の他に、いつの間が増えたのか、聞き慣れない関西弁や、何度か耳にしたことのある警視總監の声が「どつした?」と言っているのが聞こえる。

だがそんな声など、今のキッドには全くどうでも良いことだった。彼の意識は、目の前の光景に注がれている。

どの階もだいたいそうだったが、簡素な造りの床や壁やドアのある廊下にはほとんど電気が灯っていないかった。

呆然としている中で最初に我に返った平次は、言葉を詰まらせながら言った。

一方、探と白馬氏の脳裏には、ある記憶が甦る。

今の悲鳴は、前に一度聞いたことがある。

そう、全ての悪夢の始まりとなったあの悲劇の結婚式で、拉致される葵が最後に残した悲鳴だった。

「葵さん・・・！！」

一瞬にして、すさまじい恐怖に襲われた。

無線を持つ手が震える。

冷や汗が止めどなく流れ、歯がガチガチと鳴った。

「何やて！？今の、あの姉ちゃんの悲鳴やったんかいな！！」

探の頭の中で、結婚式の悲鳴と今の悲鳴が重なった。

恐怖に歪んだ葵の顔が、彼の思考を支配する。

全身が震え、思考が完全に停止した。

葵が拉致されたときの映像が、頭の中をぐるぐると回る。

まさか彼女の身に…何か危険が…

と、その時、その思いの回転を止め、探の脳からきれいさっぱり消し去るモノが飛んできた。

突然こちらに向かって放たれたそれをすんでの所でキャッチすると、彼は驚いてそのモノの支点を見やった。

そこにはまん丸いヘルメットをかぶり、バイクにまたがっている熱血探偵の姿があった。

「作戦変更や！姉ちゃん助けに行くで！！」

尚もぽかんと口を開けたままの探だったが、そのときやっとまともにも、自分の腕の中に収まっているモノを見下ろした。

それもやはり、まん丸いヘルメット。

「何してんねん白馬！早よ乗れや！！」

「・・・・・・・・」

しばらく呆然としていた探だったが、やがてぎゅっと唇を引き結び、ヘルメットを片手に、力強く一步を踏み出した。

先ほどの悲鳴を生で聞いたキッドもやはり、硬直していた。

あれきり何の物音もなくなっている。

恐ろしい悲鳴の後に訪れた静寂のほうか、よっぽど不気味だった。

その時、前方のドアが前触れもなく動き始めた。

妙にかすれた軋きみ音と共に、ドアの隙間がどんどん大きくなっていく。

そうなるに連れて、その向こうに広がる闇に一つの明かりが見えてきた。

それは丸く白い機械的な、懐中電灯の明かりだった。

そしてドアが完全に開ききり、懐中電灯の持ち主が露^{あらい}わになる。

「よお、ボス。忘れ物は見つかったんですかい？」

その人物は、偽^{ニゼ}ボス 怪盗キッド に向かつて、ぞっとする
ような笑みを向けた。

その手には懐中電灯の他に、周りの闇にも劣らないほど黒々とした
鉄の塊が握られている。

キッドが変装の下で必死にポーカーフェイスを装おうとするのを
嘲^{あざけ}るかのように、その男は腕を真っ直ぐに持ち上げ、鉄の塊にぽっ
かりと空いた空洞をこちらに向けた。

ウノが、拳銃をキッドに突きつけた。

第56話 突入！

いつからだっただろう？

父を『悪い人』だと認識し始めたのは。

いつからだっただろう？

父の夢に共感できなくなったのは。

いつからだっただろう？

母の言うことが信じられなくなったのは。

いつからだっただろう？

自分が独りぼっちだと気付いたのは。

いつからだっただろう？

大切な人たちが、みんな『悪い人』だと気付いたのは。

子供の頃の夢も、初めての恋も、みんなみんな、もうすぐ終わる。
終わりはこんなに明確なのに、どうして始まりが思い出せないのだ
ろう？

一体、こんなに悲しくなったのは

いつからだっただろう・・・？

まだ、大人が巨人に見えていた頃だった。

台所の椅子に上るのが、手に負えないくらい大変な頃だった。

自分の部屋のドアが、見上げるほどに大きかった頃だった。ほとんど教科書が入っていないはずのランドセルが、たまらなく重かった頃だった。

小川の側で、母と二人で遊んでいる。

背後から、大好きな父の声がした。

「馨！」

馨が、満面の笑みで振り返る。

「パパ！」

小学生になって買ってもらったばかりのピンク色の靴で、馨は駆け出した。

目の前では、父が大きく腕を広げている。

小川の心地よいせせらぎが聞こえていた。

色とりどりの花が、辺りを埋め尽くしている。

一歩踏みしめるたびに、足の裏で柔らかい音がした。

「パパあー!!」

馨は、父の腕に飛び込んだ。

そのまま持ち上げられて、高い高いされる。

気付くと、自分のまわりのあらゆるもの　草や花や、父の顔までも　が、自分の下にあった。

いつも父のことは、『世界でいちばん大きな人』だと思っていた。立派なお仕事をして、家族のために夢を持って、誰より優しかった。そんな『世界でいちばん大きな父』を、馨はいつも見上げていた。

だからこうして父に抱き上げられると、自分は世界でいちばん高いところにいるみたいに思える。いや、きつとそうに違いないと思った。

「パパ、おしごと終わったの？」

そう聞くと、父は馨を抱き上げたまま、子供のような笑顔で答えた。

「馨、やったぞ！とうとう見つけたよ、重要な手掛かりを！もうすぐ、私たちの夢が叶うぞ！！」

父が笑うと、自分も嬉しくなった。

その『夢』が、世界でいちばん素敵なものに思えてきた。

いつだって父は、自分にとって『世界でいちばん』だった。世界でいちばん大好きな人だった。

母は、世界で『にばんめ』。だから自分は、世界で『さんばんめ』の大人になるんだと、漠然と思っていた。

父も笑い、母も笑う。

世界でいちばん、素敵な夢だ。

だが、いつからだっただろう。

それが『世界でいちばん悪い夢』だと気付いたのは。

あの頃はただ、小川のせせらぎに包まれて、夢を見ていた。

父も、母も、自分も。

だが今は、自分だけが夢から覚めている。
独りぼっちだ。

小川のせせらぎが聞こえる。

「馨、私たち家族は、ずっと一緒に居ような！いくつになっても、
ずっとずっと、永遠にだ！！」

「うん！！」

ああ・・・一体、いつからだったろう・・・？

いつから、あの綺麗な小川のせせらぎが聞こえなくなったのだ
らう。

いつから、こんなわざとらしい、作りモノのようなせせらぎし
か聞こえなくなったのだろうか。

一体、いつから・・・？

父の夢は、不老不死の方法を手に入れて、家族全員が永遠の命を
共に生きることだった。

幼くして両親を失った彼にとって、家族の死は耐え難いものだった。
この世の何より、『他人の死』が怖かった。

だから彼は、愛する者たちと永遠の時を生きたかったのだ。

当時の馨は、それがとてつもなく素晴らしいことに思っていた。
大好きな父や母と、永遠に一緒に居られるなんて、素晴らしいとし
か言いようがない。

しかしいつからか、その夢は馨にとって悪夢に変わっていた。自分の家族以外の大切な友人や親戚が、次々と自分たちを遺して死んでいくのを見送らなければならなくなる。自分の大切な人たちが最後の一人になるまで、真つ黒な喪服に身を包んで葬式に参列しなければならなくなる。

『永遠』というのは、底なしの沼のように恐ろしい。一見輝かしい言葉のように思えるが、絶望の中で経験する『永遠』は、死よりもつらいことだ。

いつまで経っても、底に足が付かない。終わり無く沈んでいくだけだ。

よく『どん底から這い上がる』と言うけれど、その『どん底』に行き着かないのだ、永遠というものは。

どん底に付かなければ、這い上がることも出来ない。ただただ、着実に深くなる闇の底に沈んでいくしかないのだ。

そう気付いたのは、いつだったろうか。それから、父と向かい合うのが怖くなった。

その父を心から尊敬し、どこまでも付き従う忠実な母の言葉が怖くなった。

馨は恐怖の沼に落ちていった。

だがその恐怖の沼には、『底』があった。啓吾と出会うことで、彼女の落下は止まり、『どん底』に着いたのだ。

這い上がる手を、彼は差し延べてくれた。

いつか、彼と二人でこの沼の『どん底』から這い上がり、どこか綺麗な小川で、体を洗い流したい。

子供の頃とは違う夢を持って、あの安らぎの小川のせせらぎの中に、
帰りたい・・・・・・・・

馨が目を開けると、せせらぎの音がだんだん遠ざかっていった。
代わりに聞こえてきたのは、何かに向かって猛然と進んでいくよう
な、力強いバイクのエンジン音。
二人の勇敢な少年たちを乗せたそのバイクは、あっという間に見え
なくなつた。

お願い。私の大切な人たちを、悪い夢から救つて。探偵さんた
ち……

馨は震える手で、コートの中の書類を握り締めた。
自分にも、やらなければならぬことがある。
だがそれは、あの少年たちがこの状況を打開してくれなければ意味
を成さない。

今はただ、過酷な運命に逆らつて走り出した若き探偵たちを信じる
しかなかった。

探は初体験のバイクの凄まじい風圧に必死に耐えながら、平次の後ろでバランスを取っていた。
本当なら、こんな予定ではなかったのだが。

予定の作戦では、あれからキッドが22階にいる葵を救出して解決するはずだった。

だが、その最後の段階で思いがけず聞こえてきた葵の悲鳴と、冷たい響きを持ったウノの声が立ちはだかつたのだ。

手短に父や馨と相談してから、勢いで平次のバイクに飛び乗ってしまったが、正直今後が心配だった。

何より不安なのは葵の身だ。

あの悲鳴が、無線越しでさえあれ程長く大きく聞こえたのだから、きっと命の危険にさらされているに違いない。

ウノがただ者でない男であるがゆえに、一層探の不安と焦りをかき立てていた。

どうも腰が安定しないバイクは、今まで探が経験したことのないスピードで爆走していった。

キッド騒ぎで警視庁へ向かう車の波も、そこから離れていく過程で序々に減っていき、彼らが今走っている大通りは普段と同じ程度の交通量になっていた。

そのおかげで、スムーズに走れている。

探は、キッドが電源を入れっぱなしらしい無線の音を何とか拾おうとしたが、こんないかついヘルメットを被っているは無理だ。

彼は迷わずそれを脱ぎ、無線を耳に押し当てた。

バイクのスピードのせいで何倍にも鋭くなった冷たい風が、探の髪を吹き抜ける。

吹き荒ぶ風の音がまだうるさかったが、何とか無線の声は聞こえ

た。

探の行動を背中を感じたのだろう、平次が首をわずかに背後に回して怒鳴った。

「おい！お前それ交通違反やろ！！早よヘルメットせえや！！」

探が怒鳴り返す。

「こうしないと無線が聞こえないんですよ！！こんな状況での交通違反は仕方ないでしょう！？後で父に何とかしてもらいます！！」

「なんちゅーやっちゃ！！捕まっても弁解したらんで！！」

そう叫ぶと、平次はそれ以上何も言わずに前に向き直った。

探は耳に押し当てた無線に意識を集中させる。

ニセ副総監とウノの話し声が聞こえていた。

バイクの爆音と、犯罪スレスレの会話で騒がしい無線を片手にぶら下げたまま、キッドは銃を構えるウノと向き合っていた。

びっしりと額を覆う冷や汗は、ありがたいことに変装マスクの下に隠れている。

彼は副総監の声色を作って言った。

「何の真似だ、ウノ」

ウノは口の片端を上げてほくそ笑んだ。

「とぼけんな。あんたはボスじゃねえだろ？白馬探の音がする無線を持つてる時点で、明らかに俺たちの敵だ」

それを聞いたキッドは、もう悪あがきが無駄だと悟った。声色を戻して、顔のマスクの端に手を掛ける。

「お見事です」

一気にマスクを脱ぎ、同時に警察の制服も体から引きはがした。

変装の細かい切れっ端が、まるで桜吹雪のように辺りに舞う。それを一瞬で吹き飛ばして、キッドは純白のマントをひるがえ翻した。

どこからか取り出したシルクハットを被ったこの白き罪人の姿に、ウノは驚きもせずと言う。

「やっぱりお前か、怪盗キッド」

相変わらず自分のほうを向いている銃口から目を離さず、キッドは問うた。

「一体いつから、私が偽物だと？」

ウノの不敵な笑みは、まだ消えない。

「最初からだ。お前が談話室に来た、あの時から。知らねえかもし

れねえが、ボスは最近禁煙を止めてな。胸ポケットにはいつもタバコの箱が入ってたんだよ」

ウノが、自分の胸を指しながら言った。

「それが、あの時のお前は持ってなかった。こりやおかしいと後を付けたら、案の定警視庁に戻る気配がない。だから俺は反対側の階段を駆け上がって、ここに先回りしたってわけよ。宝石も盗んだみてえだしな」

それは予想外だった。警視總監らから聞いていた分には、副總監はタバコを吸わないはずだったのだ。

以前にもタバコが原因で正体がバレていた、という記憶がちらつと頭をかすめたが、彼はそれを覆い隠すように笑みを作った。

「ほう……さすが副總監の右腕に君臨するお方ですね。それだけで見抜くとは」

「もちろんそれだけじゃねえさ。俺はボスと付き合いが長いんだ。雰囲気の違いぐらい一発でわかる」

「しかし、仮に私を偽物だと見抜けたとしても、なぜ私だとわかったんです？」

キッドの顔は笑ってはいるが、実はこの疑問はかなり重要で、そして不安な点だった。

もし予告状を出した時点でウノが、キッドが何か企んでいると気付いたのなら、すでに何か先手を打たれているかもしれない。

この会話がしっかりと探に聞こえるよう、キッドは無線をそれとなく持ち上げた。

ウノの瞳に、強い光が宿る。

「まあ、半分以上は勘だ。宝石も盗んでたし、あそこまで完璧な変装が出来るヤツなんて、お前くらいしか思い当たらなかったからな」

一瞬「なるほど」という顔をしたキッドだったが、すぐに真剣な表情に変わってウノの背後の扉に目をやる。

「・・・葵嬢に、何をしたんですか？」

真つ直ぐにキッドを見据えるウノの目が、彼を射抜くようだった。

「心配すんな。スタンガンで眠ってもらったただけだ。騒がれると厄介だからな」

その会話の一部始終を聞いていた探は、一人で身を固くした。

恐ろしく鋭い男だ、ウノというのは。

これから現場に行っても、何も出来ないかもしれない。

葵が気絶しているだけだということがせめてもの救いだったが、このままでは作戦が失敗して何もかもばれ、監禁場所を移されてしまつ可能性もある。

その時、平次が振り返った。

「おい白馬！今、どんな状況なんや！？」

その言葉に、探は無線を切って答えた。

「非常に危険です！！ウノに、何もかも見破られています！！とにかく急いで下さい！！」

現場に行っても、何も出来ないかもしれない。

だが、「行かねばならない」という確かな思いが、探にはあった。

大切な人一人守れないで、何が探偵だ。自分には、持てる力一杯で運命に立ち向かう義務がある。

彼は諦めなかった。

前方に高くそびえる白いビルが、もう目前にまで迫っている。

再び無線のスイッチを入れると、ウノの声がした。

「お前の狙いは、やっぱり宝石か？だったら何で、警察と組んで葵を助ける必要がある？」

キッドは答えなかった。

非常口の緑のライトに照らされた銃が、物言わず自分を捉^{とら}えている。

その視線に気付いたのか、ウノは急に話題を変えた。

「そついえばお前、談話室で俺たち全員が持ってた銃と携帯を摺^すつたみてえだが、無駄だったな」

そうなのだ。キッドがわざわざ談話室に顔を出したのは、組織の連中が一人残らず集まっている時に銃と携帯を密かに回収するためだった。

具体的には、彼が全員に声をかけて肩を叩いた、あの瞬間に。

もし不審に思われて、誰かが携帯で本物の副総監に連絡を取ったり、もしくは何らかの用件で、警視庁に居る副総監がビル内の誰かに連絡を取ったりすれば、この作戦はおしまいだ。

そのためにキッドは探から、全員の携帯電話を事前に摺るように言われていた。

それと、万一の時に組織を無防備にするため、懐の銃も一緒に、と。

その任務を完璧にこなした自信はあった。

回収したそれらは一つにまとめて、途中で見つけたトイレの中につきりと隠してきたはずだ。

だが、今日の前に居るウノは、キッドのその自信を嘲笑うかのようについに銃をつきつけている。

「甘かったな。俺は用意周到な男だからよ、自分の部屋に予備を持つてんだ。携帯もな」

そう言うウノは、ズボンのポケットから黒い携帯を取り出した。

「これはプライベート用のだな」

もはや、事態は絶望的だ。

キッドはポーカーフェイスを装いながらも、これからどうするか必死に頭を回転させていた。

無線の向こう側に聞き耳を立てていた探に、平次が急に声を掛けた。

「あのビルやる!？」

そこでようやく前方に目を移した探は、慌てて叫んだ。

「一旦停めて下さい!!あの路地に入って!!」

「ちよっ・・・何や!？」

「いいから早く!!」

訳がわからなかったが、探のただならぬ形相に平次は急いでハンドルを切り、言われた通り細い路地に車体を滑り込ませた。

少々強引なその運転に、バイクは停車と共に彼らを振り落としそうになった。

「うわっ」とと!!」

半ば転げ落ちる形で、二人は地に足をつけた。久々の硬い地面の感覚に、探は思わずよろける。が、すぐにしっかりと体勢を立て直した。

平次が息を荒げて尋ねた。

「一体どうしたっちゆうねん!? 何で止めたんや!？」

探も同じく荒い息で、額に浮いた汗を拭う。

「言い忘れてましたが、ビルの周りは見張りに囲まれているんです。
迂闊うかつに近付くと見つかります」

平次は言葉を失って、短く舌打ちをした。

ビルに近づけないのなら、何も出来ない。

先ほどの無線の会話から、ウノがキッドに銃を突きつけていることがわかった。

これでは状況は、圧倒的にこちらが不利だ。

「どつやら白馬探が、こつちに向かってるみてえだな」

キッドの手の無線から聞こえてくる声を拾って、ウノが言う。

「あいつもなかなかだな。何で葵が生きていることがバレたんだ」

そうつぶやくと、ウノは再びキッドに視線を戻した。

「まあ良い。おいお前、俺についてこつちへ来い」

銃をこちらに向けたまま後ずさりを始めたウノに、キッドは一定の距離を保ったまま続いた。開けっ放しだったドアの中に、じっくり時間をかけて体を滑り込ませる。

始終油断なくにらみ合ったまま、彼らは葵が監禁されていた部屋へ入った。

まだ、暖房が付いている。廊下よりもぬるい空気が、二人を迎えた。

ドアの上の非常口を示す緑色のランプが、部屋の中の底なしの沼のような暗闇をほんの少しだけ照らし出す。

向き合うウノの冷徹な顔に更に影が差し、ギラギラ光る目がより一層際立った。

と、彼のその目がふいに脇へ逸れた。

その視線を追ったキッドの目に、うつぶせに横たわる女性の姿が浮かび上がった。

彼女は背を天井に向け、細い手足を床に投げ出している。

豊かな髪が顔を覆い、おぼろげに開かれた唇だけが見えた。

着ている白いカーディガンに、緑色の明かりが不気味にこびり付いている。

その姿を顎で示しながら、ウノが言った。

「お前もこいつと同じように、しばらくここで大人しくしてもらおうか」

キッドはウノに視線を戻し、力強く言い放った。

「例え私をここで足止め出来たとしても、あなた方の犯罪は警視総監に見破られているんですから、悪あがきは通用しませんよ」

「フン・・・そんなことあわかってるよ。だが俺がボスに連絡して、どっかヘトンズラする時間くれえは稼げるだろ」

ウノは、再び携帯を取り出した。

「まあ、ボスへの連絡は後回しだ。とりあえず・・・宝石を返せ」

「一体これから、どうすんねや!？」

平次が苛立たしげに言った。

そびえ立つビルは目の前にあるというのに、ここまで来て足止めをくらうとは、何とももどかしいことだった。

「何とかキッドがウノを振り切つて、葵さんを連れ出してくれれば全て終わるんですが・・・相手は銃を持っているし・・・」

探は頭を抱えた。

そう・・・キッドが葵を、ビル内から助け出してくれるだけで良いのだ。

それさえクリアすれば、こちらが勝ったも同然だ。

しかし、今はそれが出来ない。

何とかキッドを援護するしか無いのだが・・・

「おい白馬！あの階段、非常口とちゃうか！？」

唐突に、平次が言った。

驚いて、彼の指差す方を見た探の顔に、一筋の希望が差した。

そこには、ビルの外壁に沿って淡々と取り付けられている非常階段が見えた。

建物の敷地内の地面から、ビルの最上階まで続いている。もちろん、今キッドたちの居る22階にも入れるようになっていた。

数分間、探と平次は無線のスイッチを切って小声で話し合った。

それが終わると、それぞれの準備にとりかかる。

やがて彼らは、もう突入するだけの状態になっていた。

バイクにまたがって、威勢の良いエンジン音を響かせている平次を振り返って、探が言った。

「すみません、服部君・・・たまたま来ただけの君に、こんな危険なことをお願いしてしまって・・・」

だが平次は、そんな探の暗い声を吹き飛ばすかのように、ヘルメット越しにカラッと笑った。

「血の気が多い男に、何今さら謝ってんねん！ここまで来て何もせ

んかったら、探偵の名が泣くわ!!」

一通り笑うと、平次はぐつと拳を突き出した。

「お互いに・・・健闘を祈るで！」

きよんととしていた探だったが、やがてフツと笑って、拳を出した。

二人の拳が、鈍い音を立ててぶつかる。

彼らは前方に向き直り、力強く走り出した。

第57話 決着

じりじりと、時間だけが過ぎて行く。

キッドとウノは向かい合ったまま、黙りこくっていた。

「……早く返せ。あの宝石はな、泥棒なんかが扱えるような代物じゃねえんだ。美術的価値の他にもっと重要な力があるんだよ」

ウノが冷酷な目でキッドを睨んで言った。

しかしキッドはウノを睨み返すだけで、何の動きも見せない。

「何があつたか知らねえが、お前は今日警視庁のルビーを盗む予定だったんだろ？別の宝石に乗り換えて予告無しに来るなんて卑怯じやねえか」

ウノのその言葉に、キッドはふつと口元を緩めて答えた。

「確かに『狙った獲物は逃さない』私としては卑怯ですね。しかしそれは、私が『本当にあのルビーを狙っていたならば』の話です」

ウノの瞳が、少しだけ揺らいだ。

「……どういうことだ？」

キッドの笑みが深くなる。

「私は最初から、あのルビーを狙ってなどいなかった、ということですよ」

言い返すウノの声のバランスが、若干乱れた。じゃっかん

「じゃあお前は、予告状でウソをついたってことか？」

「ウソなどついていませんよ。予告状に『ルビーを頂きに参上する』なんて書いてなかったでしょう？皆さんが勝手に勘違いなさっただけですよ」

「だがあの予告状は、明らかに『深紅の姫君』を盗む」という内容としか思えない！」

キッドは、一瞬脇に倒れている葵に目をやってから答えた。

「そうともとれますね。しかし『宝石』というものに限定しなければ、いかがです？『警視庁で最も大切な姫君』・・・警視庁のトップ・白馬警視總監、そして伊勢谷副總監にとっても、大切な『姫君』・・・」

ウノがハッと息を呑む。

「まさか・・・葵か!？」

「1」名答」

そう。これも、探たちの策略の一つ。

大勢いる副總監の部下たちの目を警視庁に集中させ、ビルから注意を逸そらすため、わざと誘導したのだ。

そしと同時に、ビル内にいる構成員たちも油断させるために。

しばらく驚いた表情を浮かべていたウノだったが、やがてゆっくりと苦笑した。

「さすが奇術師だな。一本取られたぜ」

だがすぐにまた、あの冷徹な表情に戻る。
構えた銃を、しっかりと握り直した。

「さあ、お遊びはここまでだ。撃たれなくなったら、さっさと返せ」

しかし一方のキッドは笑みを消すことなく、ウノを見つめたまま微動だにしない。

「なあ・・・俺は今まで一人も殺してねえからよ、できればお前を撃ちたくねえんだ」

しかし、尚も動かないキッド。

彼は気付いていた。はるか下の地上が、にわか騒がしくなったことに・・・・・・・・

路地から飛び出した探と平次は、勢いを緩めることなく爆走していた。
当然のごとく、バイクにまたがった平次はすぐに探を追い抜いていく。

彼は派手なエンジン音を響かせて一気にビルの敷地の正面まで来ると、簡素な造りの門をバイクに乗ったままはじき開けた。そのままスピードを落とさずコンクリートの上を走り抜け、建物の周囲を回るように大きくバイクを走らせる。

突然の侵入者に度肝を抜かれた見張りたちが、慌てふためいて平次のバイクを追い始めた。

「おい！何だお前は！！」

「止まれ！止まるんだ！！」

平次が圧倒的なスピードで、門とは反対側のビルの裏手に走り去る頃には、ビルの外壁を取り囲んでいた見張りの男たちは全員彼を追って持ち場を離れていた。

それを見届けた探は、周囲に誰もいないか十分注意しながら門をすり抜け、地面を力一杯蹴って疾走した。

平次が見張りを遠ざけてくれたおかげで、そんな探に気付いた者はいない。

彼は無心で走り続け、ビルの反対側に辿り着いた。

荒くなった息を出来るだけ整えながら、ビルの外壁に取り付けられている非常階段をそっと覗く。

すでに平次が通り過ぎて見張りを一掃したらしく、付近には人影が無かった。

黒い闇の中に、所々さびた褐色の階段が見えるだけだ。
探は目を閉じて大きく息を吸うと、それを吐き出す前に非常階段に突進した。

「本部長！今、妙なバイクがビルの中に・・・！！」

焦った部下に、神原本部長の鋭い声が飛ぶ。

「大丈夫だ！さっき探君から、作戦変更の連絡があつた！！」

ここは、先ほど二人が突入した門の前の通りを、一本奥に入った路地だ。

神原本部長とその部下、それから大阪からの応援の刑事数人が息を潜めている。

暗闇にぼんやりと浮かぶ不安そうな部下の顔に向かって、本部長は再び声を掛けた。

「我々の作戦に変更はない。とにかくキッドからの『合図』が出るまで、彼らを見守ろう」

一方、警視庁の広場では。
白馬警視総監が無線を切って、馨に言った。

「探が非常階段で22階まで昇って、キッドを援護するそうだ。ウノが銃を持っているらしい」

彼の淡々とした口調は職務をこなす警察官そのものだったが、表情には危険に向かっていく息子を心配する色がありありと現れていた。

それを瞬時に読み取った馨は、無造作に声をかける。

「……大丈夫ですよ、きっと」

不安定に泳いでいた白馬氏の視線が、ぱっと馨に注がれた。

「大丈夫ですよ」

馨は繰り返した。

その真意は複雑だ。愛する人が敵となり、自分の味方に銃を向けている。

馨の大嫌いな、ウノのあの冷たい笑いが目に浮かんだ。

彼女の『大丈夫』には、自分に言い聞かせる響きも含まれている。

それを察した白馬氏は、しばらくじっと馨の横顔を見つめていたが、ふいに視線を逸らした。

なるべく何でもない風を装って言う。

「馨さん、例の書類……君がもし辛いなら、私が持っていて良

いが」

だが馨は、表情を動かさずに答えた。

「いえ、大丈夫です。・・・私の父です。私が、決着をつけます」

その『大丈夫』に先ほどの響きがもう存在していないことを確認した白馬氏は、それ以上何も言わずにビルを見やった。

固い鉄を力一杯蹴る音だけが響く。

この状況にそぐわぬ甲高い音を立てて、探は非常階段を駆け上がっていた。

ところどころ褐色の塗装が剥げてざらつく手すりを思い切り握り、遠心力にまかせて踊り場を回り込む。

もう何度、そうやって踊り場を通過したかわからなくなっていた。

さすがに息が上がってきていた。激しい方向転換を繰り返したせいで、視界が薄く浮き上がって見える。

足の裏にぶつかる鉄の板は、探の体力を容赦なく奪っていった。

苦しい息の中で、彼は必死に葵の無事を祈っていた。

油断すると、先ほどの悲鳴が耳に甦りそうになる。

それを振り払うかのように、探は北風に煽られて目にかかった髪を乱暴に跳ね上げた。

大丈夫だ。彼女は必ず無事にいる……………

そう祈るうち、ふとある女性の声が頭をかすめた。

『死を確信するまで、生を信じ抜くことが、名探偵の名探偵たる所^ゆ以^{えん}だもの……………』

それは1年前、大切な親友を思うあまり殺人を犯した、探偵仲間の言葉だった。

死を確信するまで……………生を信じ抜く……………!!

一度は死んだと思った愛しい人。あの頃の自分は、弱かった。生を信じ抜くことができなかったのだ。

今度こそ、強くなりたい。大切な人を守れるくらい、強くなりたい。この階段を昇りきったら、そうなれる気がした。

探は拳を握り締め、足の裏に力を込めた。

相変わらず、キッドは身動きをしない。

とつとつウノの目に、怒りの色が浮かんできた。

キッドがそれに気付いた瞬間、先ほどの葵の悲鳴より恐ろしい重低

音が一つ、耳を支配した。

ドオンツ

それは想像していたより重く、しかし速く、腹の底に響く音だった。キッドの背後の鋼鉄の扉から、白い煙が細く上っていく。

「・・・いい加減にしねえと、今度は本気で当てるぞ」

そう言ったウノの声も、そのものに身を震え上がらせるような響きを含んでいた。

「威嚇いかくのためなんかで、発砲しても良いんですか？葵嬢に当たりでもしたら元も子もないでしょう」

予想外のウノの気迫に、キッドの声が強ばった。

「あなた方は彼女に、『重要な秘密』を聞き出さねばならないそうじゃないですか」

もはや完全に笑みの消えた声で、ウノが答える。

「ほお・・・かなり深いとこまで俺たちのこと知ってる口ぶりじゃねえか。一体どこまでバレてんだ？」

まだかすかに煙の上がる銃口に注意深く目を向け、キッドは言葉を選びながら話し始めた。

「そうですね・・・全て話してしまえば、あなた方の狙いはパンドラで、パンドラの見つけ方を葵嬢から聞き出そうと監禁している、といったところでしょうか」

ウノの瞳が一瞬揺らぐ。

それを見て、キッドの心にも僅わずかながら落ち着きが戻ってきた。

探から事前に聞かされていた組織の実態は、パンドラが隠されているらしいブルーダイヤが狙いで、そのパンドラを見つける方法を聞き出すために葵を拉致した、ということだった。

どうやら、ブルーダイヤを手に入れたのは良かったが、葵が肝心なことを何もしゃべってくれないためにあと一歩のところまで足止めをくらっているというのだ。

キッドがただ純粹に宝石の金銭的価値だけを求めて侵入したのではないことを悟ったウノは、しばらくじっと彼を見据えていた。

その頃探は、先ほどキッドが宝石を盗んだ10階の踊り場に差し掛かっていた。

北風に乗って、もう随分下での騒ぎの声がかすかに聞こえてくる。まだ平次が、見張りたちを足止めしてくれているらしい。

完全に呼吸が乱れ、息を吸うのがやっとになっていた。

太ももに鉛が押し込まれているように、足が重い。

鉄の手すりを握ったまま冷たい風にさらされていた拳は、もはや感

覚が無くなっていた。

探はつかの間足を止め、指先が紫色に変色した手で額に浮いた汗の粒を拭った。

走るのを止めると、息苦しさが倍増して襲ってくるように感じる。体をくの字に折り曲げ、ぎゅっと目をつぶった。

やはり普段から、もつと運動すべきだな・・・

思わず湧いてきた苦笑を噛みしめて体を起こし、大きく息を吸う。汗ばんだ髪を抜けていく風は、かすかに雪の匂いがした。

探が再び走るのを再開しようとした、その時。

自分のすぐ横の、建物内へ通じるドアのガラス部分のかすかな動きが、視界の端に飛び込んできた。

はじかれたようにそちらを見る探。

そこには同じように、顔中を驚きで引きつらせているサングラスの男が居た。

・・・クワトロ！！

薄い扉一枚隔へだてているだけの二人の間に、緊張が走る。

クワトロの顔が怒りに歪んだかと思うと、あっという間に踵かかを返して、ドアの向こうの闇に姿を消した。

と、その瞬間

「おいお前！そこで何してるー！！」

真下から、男の太い声が聞こえてきた。

急いで目を走らせると、はるか下の地上に、自分を見上げて声を張り上げている数人の男たちの姿があった。

その群れから数人が離れ、探の視界から消えると、すぐに階段を駆け上がってくる音が聞こえ始めた。

探は一目散にその場を離れた。

たった今建物内からクワトロに見つかり、更に下からも見つかって追われている。

とにかく早く、キッドたちの居る22階まで辿り着かねばならない。

葵は虚空を彷徨さまよっていた。

夢を見ているような、しかし無理やり現実的な意識を取り上げられたかのような、不思議な感覚だった。

だがこれは、完全に夢だ。

目の前で、死んだはずの母が幼き日の葵と向き合って笑っているのだから。

これは私の・・・記憶？

葵はぼんやりと思った。どこかで見たことがあるような、だが思い出せない光景だった。

母が、銀の女神に抱かれた碧い宝石を葵に差し出し、何か語りかけ

ている。

だがその時、頭上から大きな音が聞こえてきた。重く、腹の底に響くような音だった。

そのせいで、母の声が聞こえない。

その音が去ったと思ったら、今度は視界が霞かすみ始めた。

幼い葵が宝石を受け取り、母と共ににこにここと笑い合っている輪郭りんかくが歪む。

夢が覚める。現実には、戻される……

まだお母様に聞きたいことがたくさんあるのに！

お願い、もう少しだけ……！！

ハッハッと短い呼吸を繰り返して、探はようやく22階の踊り場に辿り着いた。

重い足を無理やり動かして気合いで駆け上ったおかげで、下から追ってきている男たちとはまだ大分離れている。

だが、そんなに時間は無い。探はキッドに報告しようとする無線の電源を入れ、建物内へ通じるドアに手をかけた。

「……！！」

だがそれを開ける前に、ドアのガラスの向こうに、突如クワトロの

姿が浮かび上がった。

先ほど探を目撃してから、建物内の階段で先回りしてきたのだろう。彼はたちまちドアを開け、探の居る踊り場に飛び出してきた。

「この野郎!!」

飛びかかってきたクワトロの体を寸前のところで避けたのは良かったが、全力疾走してきた探の体力には限界が来ていた。脇へ飛び退いた弾みで足がもつれ、体が大きく後ろに傾く。

「うわあああ!!」

探の腰の辺りまでしかない手すりは、彼が重力に従って落下するのを止めてはくれなかった。

一瞬間に浮いたような感覚に襲われ、足が踊り場の床を離れる。がむしゃらに振り回した両手は、虚しく宙をかいただけだった。

探の体は手すりを乗り越えた。

が、右手がかるうじて何かを掴む。

それは、縦向きに取り付けられている手すりの棒だった。

「チツ・・・そのまま落ちれば良かったのによお」

頭上から、冷酷なクワトロの声が降ってきた。

と同時に姿を現し、黒々としたサングラスで探を見下ろす。

今探は、右手で何とか柵を掴んでいるだけで、宙に吊られている状態だ。

左手には、さつき電源を入れたばかりの無線機。

「くっ……！」

探は歯を食いしばった。

空いている手足をどう動かしても、何も無い。

逆に、動けば動くほど手すりを掴んでいる手の平がこすれて辛くなってくる。

雪が降りそうなほどの気温の中、手袋もしないで一気に走ってきた探の手はかじかみ、麻痺しはじめていた。

クワトロが余裕の表情を浮かべて言った。

「外が騒がしくて覗いてみたときは驚いたぜ。お前が目の前にいたんだからよお」

彼が、片足を持ち上げる。

「何が目的で来たか知らねえが、このビルへの侵入は許さねえ！！」
そう言うと同時に、クワトロの固い靴底が探の右手を力一杯踏みつけた。

「っ……！！」

声にならない呻き声^{うめ}が喉につっかえ、探はしびれるような痛み^{うめ}に顔を歪めた。

右手が、もう限界に来ている。

ひっかかる程度に手すりを掴んでいる指先が、だんだん解^{ほど}けていった。

こんなところで・・・

こんなところで、負けるわけにはいかない・・・！！

必死に手に力を込め、ぎゅっと目を閉じた。

瞼の裏に浮かんできたのは、大切な人の笑顔・・・

必ず助けるんだ・・・

葵さん・・・！！

胸の奥に、熱い塊が湧き上がってきた。

それは探の喉を駆け上り、無意識に外へ飛び出した。

「葵さ　　んっ！！」

探の叫びが轟いた、その時だった。

ぎりぎり自分の右手に食い込んでいたクワトロの足の重みが、ふいに軽くなったのだ。

それからすぐ聞こえてきたのは、クワトロの鈍い呻き声。

驚いて探が目を開けると、褐色の逞しい腕が伸びてきて手首を掴んだ。

そのまま引っ張り上げられ、探はガクガク震える両足をようやく固い地面につけることができた。

自分の背を支えてくれているのは、平次だった。

その手には無駄に長い木の棒きれがしっかりと握られている。

「大丈夫か白馬!？」

「え、ええ。ありがとうございます」

荒い息で周りを見回すと、気を失っているクワトロがドアに寄りかかって倒れていた。

階段の途中には、探を追って昇ってきた男たちが苦しそうに呻きながら同じように倒れている。

「君が・・・倒したんですか？」

探が問うと、平次は得意気に棒を振りしてニツと笑った。

「あいつらが俺に襲いかかってきよったからな。剣道部主将をナメたらあかんで！」

そういえば以前、聞いたことがあった。

平次は全国で勝負できるほど剣道の實力があると。

その力は、並みの男では相手にならないほどだという。

探はたった今のことや、先ほど途中でバテてしまったことが情けなくなつた。

だが同時に、そんな平次を頼もしく感じられる。

探は彼と、力強く笑みを交わした。

「……………!」

葵は、ハッと夢から覚めた。

自分と呼ぶ探の声が聞こえたような気がしたのだ。

事実それは、キッドの無線から聞こえてきたものだったのだが。

彼女が目覚めて最初に目に入ったのは暗闇と、非常口を示す僅かな緑色の光だけだった。

訳がわからず身を起こしてから、彼女は信じられない光景を目にする。

「っえ……………」

先ほどまでの母の夢とは正反対の現実世界。

そこには銃を構えるウノと、それと対峙する白き罪人の姿があった。

「か……………怪盗キッド!?!」

今までテレビや新聞でしか見たことのない彼が、どうしていきなり自分の目の前に居るのか。

そもそも今のこの状況は、どうなっているのか。

葵は全く理解できなかった。

葵の覚醒を確認したキッドは、唐突に懐ふしに手を入れた。

やがて取り出されたのは、僅かな光の中でも煌々(こうこう)と輝く、ブルーダイヤ。

彼はそれをウノの目の前に掲げた。

「あなた方は、パンドラの見つけ方がわからないそうですね。ならばお教えしましょう。月の光にかざすと、命の石・パンドラは赤く輝くんですよ！」

そう言い放つと、彼はいきなり宝石を投げた。

ゆるやかな弧を描いて飛んできたそれを、ウノは考えるより先に反射的にキャッチした。

ようやく今まで求めてきた答えを手に入れた彼は、目の色を変えて背後の窓を振り返り、月の光を求めてブルーダイヤをかざした。

「・・・!!」

彼の目は驚きと戸惑いで大きく見開かれ、全身が呆然と硬直した。

「月が・・・出てねえ!!」

そう。今宵は新月。月の光は全く無い。

キッドはその隙を見逃さなかった。

宝石のほうに気が逸れたウノの手を、足で蹴り上げる。

ウノの驚きの声と共に、銃は緩んでいた彼の手から解放されて宙を舞った。

そしてその一瞬について彼の無防備な脇腹に突進し、体当たりをくらわす。

「ぐわっ・・・!!」

ウノの体は大きく押され、窓のすぐ横の壁に背中を打ち付けた。

本当に、一瞬の出来事だった。

キッドは素早くトランプ銃を取り出して連射し、ウノの服を体ごと壁に張り付けて、身動きを取れなくした。

衝撃で飛んだブルーダイヤは、葵がとつさに拾ってぎゅっと胸に抱いている。

ウノが壁に張り付いて呆然とキッドを見つめ、葵は恐れと戸惑いが複雑に入り交じった顔で、キッドとウノを交互に見ている。

それぞれが全く違う心理状態で、沈黙が訪れた。

暖房機具が音を立て、静かな空気が流れる。

キッドは平然と、床に転がっている銃を回収すると、まだ呆然としている葵に、何事もなかったかのように向き直った。

「あなたを助けに来ました。・・・行きましょう」

数分後、母親の形見の宝石をしつかりと胸に抱いた葵を軽々と抱き

上げ、キッドは窓辺に立っていた。
すぐ横には張り付けとなったウノが、完全に戦意を喪失して放心状態になっている。

そんな彼をちらつと見てから、葵が戸惑いの抜けない口調で言った。

「あの・・・助けて頂けるのはありがたいんですけど、一体何がどうなってるんですか？」

葵が戸惑うのも無理はない。いきなり気絶させられ、目覚めたら怪盗キッドが加わっていて、あの恐ろしいウノが負け、拳句の果てに初めて会った怪盗キッドに「助けに来た」と言われたのだ。
状況把握をしろと言うほうが間違っている。

キッドがシルクハット越しに、ちよつと笑って答えた。

「詳しいことは、後で白馬探偵に聞いて下さい」

「え！？探さんも居るんですか!？」

「はい。もうすぐ会えますから、大丈夫ですよ」

葵が、探も関わっていると知って安堵の表情を浮かべたのを見届けると、キッドは窓を開け放った。

と同時に、背中のハングラライダーも起動させる。

しかし、まさに飛び立とうとしたその時、ふいに横でウノが言葉を発した。

「待て。パンドラのこと知ってたってことは、お前も不老不死が欲

しいのか？」

キッドと葵は、ウノに顔を向けた。

彼はただ正面を、全てを諦めきつた目で見つめている。

「いいえ。事情があつてパンドラを探しているだけです。あなた方と一緒にしないで下さい」

「ハツ・・・俺だつて別に、そんなくだらねえモン欲しかねえよ」

「だつたらなぜ組織に？」

ウノの口もとが苦々しげに歪む。

「俺は若い頃自衛隊に居たんだがな、あることがキツカケで絶望したんだよ。そこで拾ってくれたボスに、どこまでもついて行くと決めたただけだ」

『あることがキツカケで絶望した』と聞いて、葵は以前ウノが自分に「自殺か不老不死、どっちを選ぶ？」と聞いてきたことを思い出した。

きつとその『あること』が、何か彼の中で底無しの闇となっているのだろう。

キッドも同じことを感じ取ったのか、何も言わなかった。

三人は、しばらく沈黙する。

その沈黙を破つたのは、以外と芯のしつかりした葵の声だった。

「ウノさん、お世話になりました」

暗闇でよく見えなかったが、ウノが少し笑ったように見えた。

それを合図に、キッドは改めて窓に向き直る。

彼は窓からそよいで来る風に目を細め、おもむろに左手を持ち上げた。

その指のパチンツという『合図』に、夏の暑さにぎやかさを思い出させるような音が上がった。

ヒュルルルル

「あかん！また下から追ってきよったで！！」

切羽詰まった平次の声に、探は手すりから身を乗り出して階下を覗き込んだ。

カンカンカンと荒々しい足音を立てて、数人の男たちが階段を駆け昇って来る。

「くそつ・・・！どんだけおんねん！！」

平次はバイクで見張りたちを蹴散らしてから木切れを拾い、探を追って階段を昇って来たらしい。

そのとき置いて来た男たちが、未だにしぶとく追いかけて来たのだ。しかも、こんな狭い踊り場に追い詰められては多勢に無勢で、圧倒

的に不利になる。

「一体どうすれば……」

もはや逃げ場は無い。

探の頬に冷や汗が一筋伝った、その時だった。

ヒュルルルルル……

パァンッ

希望の光が　運命の花火が、天高く上がった。

第58話 私の父

ヒュルルル

パアンツ

「!?!」

季節外れの花火の音に、その場にいる全員が動きを止め、空を見上げた。

探も平次も、そして彼らを追いつめようとしていた男たちも、全員。

普通ならそんなこと気にも留めず、そのまま階段を駆け上がって来るのだろうが、今回だけはそんなことをしていられない。自分たちのいるビルの屋根から花火が上がったのだから。

しかもそれは、あのいたずらっぽい怪盗キツドの顔の形をした、真っ赤な花火。

白いビルの壁が、赤く照らされる。

月のない夜が、一瞬にして明るくなった。

「な……んだ?あれ」

「何であんなモンが……」

男たちが呆気あっけに取られていたその時、平次が喜びの声を上げた。

「やったやんけ白馬!!!キツドが言つてた」合図『や!!!』

「っ……」

だが肝心の探は、呆然と上空を見つめたまま何も言わなかった。いや、言えなかったのだ。

待ちに待った、希望の花火。それは作戦の成功を意味していた。ずっと待ち望んでいたにも関わらず、探はすぐには信じられなかった。実感がない。

夢心地で、ただぼかんと口を開け、突っ立っている。

だがそんな彼も、窓からひらりと飛び立った白い鳥の姿を見た瞬間、胸の奥から何かの感情がどっと溢れてきた。

「あれってキッドの花火じゃない!？」

「どいどい!?!」

「ホラ、あの白いビルの上!?!」

警視庁の周りに集まっていた群衆の目が、一気に情報ビルに注がれた。

意外なところからのキッドの登場に、わあっと歓声上がる。

その花火を見届けた白馬警視総監も探同様、すぐには実感出来なかった。

ぱあっと明るく輝いて、そして段々と夜空へ消えていくキッドの顔

を、目を大きく見開いて見つめている。

すかさず、警が声をかけた。

「総監！早く指示を！！」

白馬氏はようやく我に返り、今までとは別の無線を取り出して、思い切り声を張り上げた。

「行け！神原ア！！」

「突入！！」

警視総監から指示を受けた神原本部長は、辺り一帯の部下に大声で言った。

とたんに、路地に潜んでいた警官たちがどわっと大通りへ溢れ出し、次々にビルの門へ殺到する。

武装した何十人もの特務部隊はあっさりと入口を破って中へ突入し、更に外壁の向こう側にも回り込んで、非常階段付近の男たちをあっという間に取り押さえた。

ビル内の男たちは今さらになつて懐ふくろに銃てつが無いことに気づき、抵抗出来ぬまま降参せざるを得なかった。

その勢いに半ば圧倒されながらも、探と平次は無事に保護され、非常階段から地上へ降り立った。

手錠をかける金属音が辺りに響く中、探はひたすら上空を見つめていた。

怪盗キッドがこの東京の大都会を網羅する^{もっ}ように、悠々と飛んでいる。

その腕には確かに、一人の女性を抱えていた。

「葵さん……」

涙が込み上げる。喉が震え始めた。

「おい白馬！お前はもう行け！！」

平次が周りの刑事たちを手助けしながら言った。

「え……いや、しかしまだ警視庁に伊勢谷副総監が……」

探のそんな、心中とは正反対の言葉を、平次が遮る。

「それは俺がちゃんと片付けといたるさかい、お前は先に姉ちゃんト行け……！」

平次の口元が力強く笑う。

「あの姉ちゃん、きつとお前のこと待ってんで」

自分を待っている

それを聞いて、今まで無意識のうちに封じ込められていた気持ちが溢れ出した。

彼女に、会いたい……！

探はごった返す敷地内を走り出した。

上空では、ベルトでハングライダーに固定され、しっかりとキッドに抱えられている葵が、はるか地上の星のような光をぼんやりと見つめていた。

真冬の身を切るような風が、絶えず髪を乱す。

しばらく感じたことの無かった、全身を風が包む感覚は、実に開放感があった。

「寒くないですか？」

薄着の葵に、キッドが声をかけた。

まだ、何かに酔っているような顔で、葵が答える。

「いえ、大丈夫です」

そんな寒さなど気にならないくらい、彼女は『ある温もり』に包まれていた。

気絶していた時に見た夢。

あれは確かに、今の今まで忘れていた、幼い日の葵と母の記憶だった。

スタンガンで襲われた拍子に、偶然思い出したのだろうか。

キッドは一つ咳払いをすると、遠くにそびえる警視庁を眺めながら言った。

「ところで葵さん。あなたは本当に、宝石について何も知らなかったんですか？」

これを聞くことが、今回の彼の最大の目的だ。

月が出ていない以上、手掛かりは聞けるだけ聞き出しておいたほうが良い。

パンドラについて、まだ彼が知らない重要な何かを、彼女は知っているかもしれないのだ。

葵は先ほどの記憶をそつと引き出し、目を閉じた。

「今さっき、夢で思い出しました。母が私に言ったことを」

キッドが、一言も聞き漏らすまいと意識を集中させる。

「監禁されているとき組織の女の人に、母が言ったことを聞かされたんです。『華代は私にだけ宝石の秘密を教えるって言ってたんだ

から、私が何も知らないわけない』って。それを、今やっと思い出しました」

つきぬけるような夜風を思い切り吸い込んで、葵は目を開けた。

「母は私に宝石を見せて、言ったんです。『このブルーダイヤの中にはないけどね、世界のどこかにある命の石は、月の光にかざせば見つかるのよ』・・・と」

キッドの体がこわばる。

「それだけ、ですか？」

葵が、申し訳なさそうに苦笑した。

「はい。あなたも知っていることですよね」

キッドはポーカークフェイスを崩し、顔に落胆の色をありありと浮かべた。

葵の封印された記憶からは何の収穫も得られず、しかもこのブルーダイヤの中にパンドラは入っていない、ときたら、今までの自分の苦勞は何だったのだ。

一通り落胆すると、今度はそれを通り越して、呆れ笑いが込み上げてきた。

彼は口の片端を苦々しげに歪め、押し出すように息を吐いた。

「フツ・・・私もまだまだ未熟ですね」

葵もつられて、小さく笑う。

頬にできたエクボが、なかなか可愛らしかった。

まあ……この人が助かったわけだし、いいか。

キッドは自分を納得させると、目的地へ向かうべく、ぐうんとハン
グライダーを旋回させた。

その頃、警視庁の本部では。

飛行するキッドに湧き上がる群衆の歓声を背景に、伊勢谷副総監
は呆然と、その白き罪人の姿を見つめていた。
周りの部下たちが、怪訝けげんそうに声を掛けてくる。

「あの……副総監、さっきの花火は副総監の情報ビルから上がっ
たようですが……」

「どうしてキッドが情報ビルから出て来たんです?」

そんな言葉など耳に入っていないように、彼はひたすら、嫌な予感
にさいなまれていた。

そこへ、最後の一撃が入る。

「報告によると、怪盗キッドはあのビルから若宮葵嬢と思われる人物を抱えて出てきたらしい」

振り返った先には、白馬警視總監が立っていた。その横には、何かを諦めたかのような顔の、馨も。

「總監……」

副總監が顔面蒼白で絞り出した声を、白馬氏が遮る。

「伊勢谷君、つまり君が葵嬢を監禁していた、ということだろうか？ あちらのビルで取り押さえられた君の部下たちも自白したそうだ」

諭すようなその口調は、どこか厳しさを秘めていた。

馨は白馬氏の横で、どんどん青さめていく父の顔を見つめていた。本当にこれが、あの夢に一途だった父の姿だろうか。

もう何日もこらえてきた涙が盛り上がってきた。

だが、崖っぷちの人間ほど恐ろしいものはない。

副總監は次の瞬間、馨たちが思ってもみなかったことを口にした。

「……誤解です、總監！！私は何も知りません！！」

白馬氏の眉間にシワが寄る。

「だが現に、葵嬢が君のビルから出て来たではないか。それをどう説明するんだ」

だが尚も、副総監はわめき続けた。

「あの怪盗キッドが私に罪を被せようとしているに違いありません！あいつはコソドロです！きっと私の知らない間にビルに侵入して

「しかし、向こうで捕まった君の部下も自首しているんだぞ！！」

白馬氏の鋭い声にも負けず、副総監は更に声を張り上げた。

その顔には、狂気の色さえ浮かんでいた。

「部下が勝手にやったことかもしれないではありませんか！！あなたに、私を犯人だと断定する権利はない！！」

その勢いに、思わず白馬氏がひるんだ。

それを目ざとく感じ取った副総監は、更に勢いを増して、逆に白馬氏に詰め寄り始めた。

そんなやりとりを、馨は黙って見つめていた。

幼い頃大好きだった父の姿が色あせていく。

世界でいちばん素晴らしい人だった父が、今では自分の罪を必死でごまかし、悪あがきをしている。

馨の目に、涙が溢れた。

あんな父を見ていられなかった。

あとからあとから流れてくる涙で視界が霞み、だんだんと現実感が

薄れていった。

「では、証拠を見せて下さい！！私が葵嬢を監禁していたという、明確な証拠を！！」

父の声が響いた。

白馬氏は、響を振り返る。

「響さん！！早く、あの書類を！！」

だが響は、動けなかった。

片腕で目を押さえ、顔を歪めて俯いたまま、ひたすら昔の父の姿を思い起こしていた。

世界でいちばん大きな父。

世界でいちばん素敵な父。

父が、今のような姿になったのは自分のせいだ。

自分が、心の底から父を『悪い人』だと認められず、ただ黙って見ていることしかできなかつたせいだ。

父が副総監という地位にいる限り、自分が父を警察に突き出しても無駄だと思っていたが、それは逃げていただけだ。

心のどこかでは、また昔のような父に戻って欲しいと願っていた。だからこそ、警察に突き出せなかつたのだ。

自分は言い訳を重ねてきただけだ。

そうわかっているても、響は一步が踏み出せなかつた。

いつか、昔のような父に戻ってくれるかもしれない。

そんな思いが湧き上がってきて、どうしようもなかった。

「馨さん!!早く!!」

警視總監の切羽詰まった声が頭の中にこだまする。

『馨、私たち家族は、ずっと一緒に居ような!!ずっとずっと、永遠にだ!!』

あの春の日の、温かい声が耳を占領していた。

パパを悪者になんて、出来ない……!!

馨が心の中でそう叫んだときだった。

背後に砂利を踏む足音が聞こえたかと思うと、背中に誰かの体がぶつかった。

次に聞こえてきたのは、どこか人を安心させるような、深い声。

「なあ、姉ちゃん。あれは、誰や?」

「……………」

ゆっくりと顔を上げた馨に、平次が繰り返した。

「あれは、一体誰なんや?」

震える喉で、馨は言った。

「…………あれは、私の父」

そうだ。あれは、自分の父なのだ。
悪者でも何でも無い、自分のたった一人の父なのだ。

不老不死という悲しいものに魅^みせられた父を、娘の自分が救ってやらないで誰が救えるというのだろうか。

馨はぐいっと涙を拭^{ぬぐ}い、コートの内ポケットから一枚の書類を引き出すと、父の目の前に突きつけた。

幼い時、伊勢谷副総監は病で次々に両親を失った。
棺^{ひつね}の中の、蒼白な父と母の顔が、今も目に焼き付いている。

あの頃は、絶望のどん底に居た。
愛する人が、自分を置いてどんどん逝^いってしまう。

小さい頃にその感覚を植え付けられるのは、本当に恐ろしいこと
だった。

これから出会っていく人が皆、死んでしまうのではないか。
誰かと出会っても、また独り残されてしまうのではないか。

彼は恐ろしかった。

『他人の死』というものが、本当に恐ろしかった。

みんな、死ななければいいんだ。みんなみんな、永遠に生きら

ればいいんだ・・・

子供心に、彼は思った。

絶望の人生で、生まれて初めて夢が出来たのだ。

やがて大人になると、その夢も次第に薄れた。

大学で必死に勉強して、警察に入って、結婚して、子供が生まれた。

愛しい我が子を腕に抱いたとき、ふと、昔の夢を思い出した。

昔まいた種が、忘れた頃に芽を出し、ぐんぐんと伸びていくように、その夢は彼の中で開花した。

愛する者と共に、永遠に生きられたなら・・・

その日から馨は、彼の夢と希望の象徴になった。

その娘が、今、自分の前で泣いている。

「パパ、もうやめて!!」

馨が突き出した紙切れを見た瞬間、それまで狂ったようにわめき続けていた副総監の動きがピタリと止まった。

その場の全員が、紙に注目する。

『ブリリアント・ダークネス 構成員名簿』

書類の一番上には、大きくそう書かれていた。
続いて、細かい字がびっしりと紙面を覆っている。

それは、構成員の名前と、そして拇印ほいんだった。
もちろんその名簿の一番始めの名は、伊勢谷副総監……

「……………!!」

顔から血の気が引いていくのがわかった。

今自分の目の前に、もはや言い逃れ出来ない証拠を突きつけている
のは他でもない、自分の娘だ。

「馨……お前が、裏切ったのか……?」

驚きと怒りに震える喉から、押し出すように声を発した。

「どうしてだ!? 小さい頃から、私の夢に共感してくれていたでは
ないか!!」

再び、馨の目から涙が溢れる。

「パパ、お願いだからもうやめて!! パパの夢は悪夢よ!! 早く気
付いて!!」

副総監の唇が、ワナワナと震え始めた。

「悪夢だと!? 愛する者と永遠に一緒に居られることが、悪夢だと
言うのか!?!」

馨が、喉も張り裂けんばかりに叫び返す。

「そうよ、悪夢よ!!!自分だけ生き延びて孤独に暮らすなんて絶対に嫌!!!」

「孤独ではない!!!父さんも母さんも、組織の仲間も一緒に、永遠の時を生きるんだ!!!」

二人の周囲は、水を打ったように静まりかえっていた。

ビルから大急ぎで帰ってきた平次も、荒い息を必死に押し殺している。

誰もが緊迫した表情で、この父子二人の激しいぶつかり合いに聞き入っていた。

「私は永遠になんか生きたくない!!!普通に生きたいの!!!」

「・・・何だつて?」

副總監の顔が怒りに歪む。

「パパ、私は不老不死なんか欲しくないのよ!!!この世界の全員と同じように生きていきたいの!!!」

副總監は、もはや何も言えなくなっていた。

馨の、半分叫ぶような大声が響く。

「お願いだからもうやめて!!!パパたちのしてること、犯罪なのよ!?!」

自分が何を言っているのか、段々とわからなくなってきた。半狂乱になって夢中で叫ぶうち、父は何も言わなくなっていた。動揺と、そして悲しみの入り交じった瞳で、呆然と馨を見ている。

「これ以上、犯罪を重ねないで。パパの仲間に、これ以上悪いことさせないで!!」

馨の脳裏に、啓吾の顔が浮かんだ。ずっと愛しく思ってきた、馨の『大切な人』だ。

これ以上、大切な人たちを思って苦しむのは嫌だ。父には辛いことでも、言っただけならいけなことがある。

「私、ずっと辛かったんだから……。パパもママも犯罪者で、ずっと悲しかったんだから!!」

涙に濡れる瞳で、馨は父を力強く見据えて叫んだ。

「親がまっすぐに生きてくれなきゃ、子供はどう生きていいかわからないんだよ!!」

そう。親が正しく生きてくれなければ、子供は幸せにはなれないのだ。いくら子供のことを思ってすることでも、まっすぐでなければ、逆に子供を悲しませるだけだ。

伊勢谷副総監・・・いや、馨の父は、何か堅いもので頭を殴られたような感覚に襲われた。

今まで彼の中で輝きを放っていた『正当性』が、音を立てて崩れ落ちていく。

その結果露あわになったのは、ひたすら涙を流す娘の悲しみだった。

彼は、馨を食い入るように見つめた。

彼女の瞳から伝う涙の雫しずくに、また次の雫が重なる。

そして行き場がなくなると、星のように輝きながらどこかへ落ちていった。

周りのライトの光を浴びたそれは、この世のどんな宝石より美しく光って見えた。

「ねえパパ・・・もうやめよう？」

今まで家族のために、『大切な人たち』のためになると思って、組織を動かしてきた。

それが『正しいこと』だと思っていた。

その『正当性』は彼の中で光り輝いていた。

だが娘の『犯罪者』という言葉に、その正当性は崩れ去り、自分は今まで大切な人たちに対して『まっすぐなこと』をしてこなかったのだという自覚が、痛みを伴って胸に突き刺さった。

馨はもはや表情を保てず、両手で顔を覆って俯いている。

そんな彼女の背後に立っていた平次が、今まで黙っていた口を開いた。

「なあ、おっさん。この世には、もちろん『愛する人』がぎよーさんおるわ。でもな、『そうでない人』だって同じようにぎよーさんおんねん。その二つがあつて、この世界は出来てるんとかやうか？」

虚空を彷徨さまよっていた副總監の目が、平次に移る。

「せやから、『愛する人』たちだけで永遠に生きていくつちゆうんは、それこそほんまものの『独り』になつてしまつやる。人は独りでも生きていけるんやろうけど、それは『生きているだけ』でしかあらへんと、俺は思つ」

副總監は苦々しく眉根を寄せ、がっくりとうなだれた。

響がすすり泣く声だけが切々と耳を打つ中、平次はいつか自分が口にした言葉を、心の中で呟いた。

命には、限りがあるから大事なんや。限りがあるから頑張れるんやで……

冷たい風が抜けていったかと思うと、静かに雪が舞い始めた。

第58話 私の父（後書き）

読んで下さってありがとうございます。

今回、馨さんの書類が切り札になったワケですが。

『あの書類、見つけた時点で副総監を逮捕できたんじゃない？』と思われた方もいらっしゃるかと思いますが、私から少し述べさせていただきます。

あの書類を、馨がすぐ証拠として突き出せば、こんな手の込んだ作戦は確かに必要ありませんでした。しかし副総監は部下もみんな悪なので、素早く手を回して、葵をどこか別の場所に移される可能性もあります。

なので、出来るだけこっそり葵を救出する必要がありました。それこそ『泥棒に盗まれるように』。

で、武器も回収したし、人質を無事に保護しましたよ〜という合図があの花火だったワケで、そこでようやく神原さんが突入した、という経緯でございます。

つまりあの書類は、副総監が無防備になった時に突き付けるための『トドメの一撃』って役割でしょうか。

第59話 This Love(前書き)

アンジェラ・アキさんの名曲『This Love』をご存じの方は、曲を思い浮かべながら読んで頂けると嬉しいです^^

第59話 This Love

平次に促され、探はビルを出て走り出した。

先ほど階段を昇ってあんなに息を切らせたばかりなのに、葵に会えると思うとそんな疲れなど微塵も感じられなかった。

キッドと示し合わせた場所は、ビルから1キロほど離れた公園だ。

そこは小高い丘がそのまま公園になっている場所で、周囲が見渡せるだけでなく他の場所からも見つけやすい。

だから探はキッドに、葵を助け出したらその丘まで飛んで連れてきてくれるよう頼んでおいたのだ。

この瞬間を待ち望み、事前に何度も何度も地図上の道を指でなぞった。

すぐに葵を迎えに行けるよう、しっかりと道順を目に焼き付けた。

ずっとずっと、この瞬間を待っていた。

降り始めた粉雪が、街のネオンに照らされて七色に踊る。

何度もくじけそうになった。

一度は彼女が死んだと思い、本気で絶望したこともあった。

だが、全てはこの瞬間のために乗り越えなければならなかった困難だったのだと、今は思えた。

組織も崩壊し、心強い仲間にも副総監のことも任せることができ、あらゆる責任や緊張から解放された探の胸にあるのは、ただただ早く葵に会いたいという、胸から込み上げるような切ない感情だけだった。

派手な花火のせいで、ビル周辺には次々と人が集まり始めていた。もともと警視庁でキッドを待ちわびていた群衆が、早くもこちらに流れ込み始めているのだ。

警視庁とビルとの間に位置する例の公園への最も近い道は、大勢の人や車で溢れかえっていた。

探は、自分とは逆方向へ向かう人の波にもまれ、しばらく身動きが出来なくなつた。

やっこの思いで体をねじり、近くの路地へ逃げ込む。

長く息をつき、額の汗を拭った。

大通りを進んでいくには、この状況では時間がかかりすぎる。

少々遠回りになるが、探は別ルートで公園に向かうことにした。

一方、それとは逆に何の障害もない大空を悠々と飛ぶキッドは、ふと葵に言った。

「葵さん。そのブルーダイヤ、しばらく貸して頂けないでしょうか？」

地上の景色を何の気無しに眺めていた葵は、きょとんと顔を上げた。

「へ？でもこの中に、あなたの求めるものは入っていませんよ？」

キッドは雪の舞う広大な天空をぐるりと見回して言う。

「ええ、わかっています。念のため月にかざして確かめたいんですよ。しかし今宵は月がない。なので少なくとも1日、お借りしてもよろしいでしょうか？」

葵は困ったような、申し訳ないような顔になった。

「お貸しするのは構いませんが・・・あなたがお確かめになった後、私はどうやって受け取ればよろしいんでしょうか？」

とたんに、キッドの顔にいたずらっぽい表情が浮かんだ。

「それはご安心を。ちゃんと、あなた様のご自宅へお届けにあがりますよ。ある時は副総監、またある時は宅配便屋の怪盗キッドにお任せあれ」

しばらくぼかんとしていた葵だったが、やがてその言葉の意味に気付くと、両眉を上げてにんまりと笑い返した。

その頃、警視庁では。

大勢の人間に見守られながら、白馬氏が副総監に手錠をかけた。無情な金属音が、静まりかえった辺りに響く。

副総監は始終うなだれ、全く抵抗しようとしなかった。

両脇を固められて歩き出そうとしたとき、ふいに響がおぼつかない足取りで、父に近付いていった。

戸惑ったような表情で、おずおずと娘を見る父。

響は顔をぐしゃぐしゃに歪めて、父の胸に顔をうずめた。

くぐもった泣き声が漏れる。

副總監の両脇の警官たちも、同情した顔を響に向けた。

彼女の両手は、父親の警察の制服をぎゅっと握り締めていた。

じわじわと心を浸食して、静かに押し寄せる波のような後悔の念に、副總監は目を潤ませて、娘の涙を受け止め続けた。

繊細な雪の結晶が、全速力で走る探の顔にぶつかる。

ほて火照った体に冷たい風が吹きつけ、手足の感覚が失われていくのを感じた。

それでも探は走り続けた。大切な人のもとへ。

曲がりくねった路地を抜け、人もまばらな道を一気に駆け抜ける。自分の荒い息遣いだけが聞こえる中で、探はずっと言いたかったことを心の中で繰り返していた。

彼女に再会できたら、謝りたいことがたくさんあった。

守りきれなくてごめんなさい。

長い間助けてあげられなくてごめんなさい。

ずっと怖い思いをさせてごめんなさい。

一度でも、死んだと思って諦めてごめんなさい……………

胸に渦巻き、泡立つような切なさ、探の目を潤ませた。

その潤んだ視界に、公園の丘が見えてきた。

キッドは地上に丘を見かけると、じょじょにハングライダーの高度を落とし始めた。

驚いた葵が声をあげる。

「あのお…………どこかへ降りるんですか？」

キッドは丘に目を向けたまま答えた。

「ええ。あの丘の頂上へ」

言われて、下を見下ろす葵。

色あせた芝生に雪が落ち、うっすらと淡い白に染まっているのが見えた。

それを見たたん、葵の胸に、ふっと小さな温もりが宿った。

その温もりはじんわりと熱を広げ、目頭を熱くした。

ここは、雪も降れば風も吹く、そして草木が息づく外の世界なのだ。
.....

そんな思いが、心を満たしていく。

ずっと閉じこめられてきた、小さく景色を切り取る窓だけを眺めてきた葵を、その開放感は柔らかく包み込んだ。

それまで、偶然思い出した母との思い出に浸って感じていなかった安堵感　自分は助かったのだ、という安心感　が、ふつつつと胸に湧き上がる。

葵は潤んだ瞳をそっと閉じ、しばしその感動を実感した。

キッドはゆるやかに降下し、地面に足をついた。

探は、丘に白い影が降り立つのが見えた。

それに気付き始めた人々が、段々と丘の周りに集まってくる。

夢中で人混みをかき分けながら、探は丘の上に立つ二つの人影をひたすら目指して走り続けた。

「それでは数日、この宝石をお借り致します」

葵からブルーダイヤを受け取ったキッドは、再びハングライダーを起動させて飛び立つ姿勢を取った。

それを見て、葵が慌てる。

「えっ、あの、私はこれからどうすれば？」

ようやく地面に降りられたのは良いが、ここは小高い丘の上だ。

周囲にはもちろん誰もいない。

葵はキッドが、一旦ここに降りてから自分をどこか安全な場所に連れて行ってくれると思ったのだ。

こんなところに置き去りにされるとわかって不安になったのだろう。

キッドはそんな葵に優しく微笑み、彼女の肩を抱いてくるりと向きを変えさせた。

公園の敷地の柵の向こうに、大勢の野次馬が集まっているのが見えた。

「もう私の役目は終わりました。ご安心を。あそこをご覧下さい」

キッドが指差す方を見た葵の目が、大きく見開かれる。

「探さんっ……」

そこには、人混みを必死にかきわけ、前のめりになってこちらへ進んでくる探の姿があった。

キッドはかすかに体を震わせて立ち尽くす葵を見届けると、微笑みを残して天に舞い上がった。

公園に近付くほど濃くなる人混みに、探は苦戦していた。視界が遮られ、前方が全く見えない。あと少しというところで進めないこの状況に、探は心が軋むようなじれったさを感じていた。

「すみません！通して下さい！！」

男も女も関係無く押しつける。

ただただ、はやる気持ちを抑えながら。

ようやく、人混みを抜けた。

唐突に開けた視界に、思わず立ち止まる。

その瞬間だった。

探の目に、丘に佇む一人の女性の姿が飛び込んできた。風に靡いて流れるしなやかな髪と、こちらに向かって大きく見開かれていた漆黒の瞳は、遠くからでも間違えようのない。この世で一番、大切な人の姿だった。

やっと、会えた・・・

幻ではないかと思った。
だが、彼女は確かにそこに居る。

粉雪を踊らせる風に、その輪郭を揺るがせることなく、しっかりと立っている。

長い間会いたくてたまらなかつた彼女の姿は、周りの、いや、この世の何よりもくっきりと、鮮やかに見えた。

葵の顔が、ゆっくりと変化していき、喜びに輝いた。

目が段々と形を崩し、雫が光る。

葵の口が動き、言葉を紡ぎ出した。

さぐるさん

「……っ」

探の目にも、涙が盛り上がる。

彼は力一杯駆け出した。

足の裏の感覚が無くなるほど、無我夢中で丘の斜面を駆け上る。

向かい合う彼女も、同時に走り降りてきた。

二人の距離が、どんどん縮まっていく。

彼女に再会出来たら、謝りたいことがたくさんあった。

守りきれなくてごめんなさい。

長い間助けてあげられなくてごめんなさい。

ずっと怖い思いをさせてごめんなさい。
一度でも、死んだと思って諦めてごめんなさい……………

やがて雪の中に、涙で顔をぐしゃぐしゃにした葵の顔が現れた。

二人の手が触れ合い、絡み合う。

次の瞬間、探の胸に温かいものが飛び込んできた。
彼はそれを受け止め、力一杯抱き締める。

同時に、葵の激しい泣き声が上がった。

探の腕の中で、探にしがみつくようにして泣き叫ぶ葵の細い体の温もりが、全身を満たしていく。

探の喉に、熱いものが込み上げた。

謝ろうと思った言葉などどこかへ消え、代わりに、声にならない何かが漏れた。

ぎゅっと目をつぶり、葵の髪に顔をうずめる。

「探さん……探さんっ……………!!」

ただただ、聞こえるのは葵の泣き声、感じられるのは葵の温もりだけだった。

生きている、ちゃんと血の通っている、ちゃんと自分の腕の中に居るといふ証の温もりを、もう二度と逃がさないように、探は葵を抱く手を緩めなかった。

それに応えるように、探の背中に回された葵の腕にも力がこもる。

「良かった……無事で、本当に……」

喉に詰まらせながら、探はようやく声を出した。

「ずっと、ずっと……会いたかった……」

何とか絞り出した探の言葉に、葵は顔をうずめたまま何度も何度も頷いた。

やわらかい髪が、探の頬ほおをくすぐる。

探の背中を掴む指先に、さらに力がこもった。

ひらひらと舞い落ちる粉雪が、いつまでも堅く抱き合う二人を静かに見守っていた。

第60話 待ってる

今もなお騒がしい警視庁内。

白馬氏や平次、部下たちは、対応に追われていた。

混雑する人混みを抜けて、平次が一息つく。

「まあったく、かわなんわ……。こっちはこんなに忙しいしてる
つちゆうのに、今頃白馬はあの姉ちゃんといちゃついてんねやるな
あ……」

その言葉に、白馬氏が苦笑した。

「まあまあ。さっき部下に、丘まで2人を迎えに行かせたから、も
うすぐこちらに着くと思うが……」

そこへ、連絡を受けた英吾と椿が、息を切らして駆けつけた。

「白馬!どうだ!?!」

白馬氏は疲れ切った顔で振り返るも、親友に笑顔を向けた。

「大丈夫だ。大きな問題も無く、無事に全員逮捕できた。娘さんも
無事だよ」

それを聞いて、ほっと胸を撫で下ろす英吾。

一方の椿は、そわそわと辺りを見回していた。

白馬氏と英吾が話す横で、しきりに人混みを覗き込んでいる。

と、その時。

「……姉さま!」

椿の歡喜の聲に、その場の全員が示し合わせたように一斉に話をやめた。

彼らの目は、広場に入ってくる二人の人影に注がれている。

そこには、探のコートを羽織はった葵と、彼女の肩を支えながら歩いてくる探がいた。

椿はもう、二人に向かって走り出している。

ようやく救護班もはっと気付き、慌てて椿の後を追った。

「姉さまあ!」

「椿!」

姉の胸に飛び込んで泣きじゃくる椿を、探は傍らで温かく見つめる。

「葵!」

英吾も走り寄ってきて、椿ごと葵を抱き締めた。

「葵……本当に良かった……」

「お父様、ご心配をおかけしました」

自然と、周囲から拍手が起こる。

英吾は体を離すと、潤んだ瞳で探に向き直り、その手を握って言った。

「探くん、本当にありがとう・・・本当に・・・!」

探は力強く微笑み返すと、少し離れたところに立って、穏やかな瞳でこちらを見ている平次を振り返った。

「僕だけの力ではありませんよ。そこにいる服部くんや・・・」

次に探は、雪の舞う夜空に視線を移す。

「今もどこかを雪に紛れて飛んでいる、あの白き罪人のおかげです」

救護班が葵に分厚い毛布を掛け、建物の中に入るよう促した。

探たちも空に感謝の眼差しを向けると、揃って警視庁の中へ入っていった。

雪の冷たさをほんのり感じながら、キッドは夜空を舞っていた。葵から借りたブルーダイヤを手の中で転がしながら、今回の組織のことを考える。

彼らは結局、キッドのためになる情報を一切持っていなかった。

あの組織は、人の死で歪んだ愛に囚われた、悲しい欲望のためだけに作られた組織だったのだ。

再びキッドの怪盗人生は、振り出しに戻った。

だが、いくつか増えた謎もある。

葵の母の美術館にブルーダイヤがあるという情報を、組織はどうやって仕入れたのか。

そもそも組織は、どうやって命の石パンドラの伝説を知ったのか。

そして大きな手掛かりは、この世界のどこかに散らばるブルーダイヤのカケラに、パンドラが隠されている可能性が高いということだ。

父を殺した組織にはまだ近づけないが、希望は見えてきている。

キッドはブルーダイヤをポケットに入れると、しんしんと降る大粒の雪に目を細めた。

いつかきつとこの視界が晴れ、明るい朝がやってくる。

この世のどんな宝石より美しい朝の太陽を浴びられる日が、きつとくる。

彼は口元に微笑をたたえ、寺井が待つ地上へ降り立つべく着陸態勢をとった。

一方、情報ビルでは。
門の外には何台ものパトカーが止まり、白い外壁に真っ赤な影が踊っている。

ビル内から、次々に組織の構成員が連れられて出てくるのを、馨はじっと見つめていた。

その目には大粒の涙が光り、次から次に頬を伝って落ちていった。

馨は自分に言い聞かせる。

私は泣いてるんじゃない。

冷たい空気が目にしみて、涙が出るだけだ。

私は『涙なんか見せない、かわいくない女』だから・・・
そのままの姿で、彼を見送らなきゃいけない。

両脇をがっしりした警官二人に挟まれ、ウノが出てきた。

両手首の手錠が、パトカーの光を受けてキラキラと光っている。

ウノは前を見つめ、意外としっかりとした足取りで歩いていた。

彼らが馨の前を通り過ぎようとしたとき、ウノが足を止める。

「まさかお前の涙が見られるなんてな・・・俺のせいで泣かせちゃまって、悪かったな」

前を向いたまま、ウノは言った。

馨は静かに問う。

「ねえ啓吾。啓吾は私がボスの娘だったから、私に言い寄ったの？
組織を守るために・・・口止めのために、私を口説いたの？」

啓吾は、ふつとほくそ笑んだ。

「馬鹿野郎。そんなつまんねえ理由で、20も年下のクソ生意気な
小娘に手え出すかよ。もしそうなら、もっと若いヤツにやらせてる」

その言葉に、馨は素直に笑って答えた。

「・・・私も啓吾のこと、ちゃんと愛してたよ」

しばらく、戸惑うような複雑な感情が啓吾の瞳を揺らしていたが、
やがて彼は再び口元につつすらと笑みを浮かべた。

「今日はめずらしく素直じゃねえか。ま、せつかく素直な女になっ
たんだ。俺みたいなおヤジのことなんかさっさと忘れて、早くちゃ
んとした男見つけるよ」

脇の警官が、小声で啓吾に囁いた。

「もう行くぞ」

言われて、啓吾は短く息を吐く。

「じゃあな」

そう言い残して、彼は歩き出した。

真っ直ぐ、前方のパトカーに向かって。

俯いていた馨はふいに顔を上げ、去っていく啓吾の背中に向かって叫んだ。

「啓吾！私……私ずっと待ってるから！！罪償なぐさって帰ってくるまで、ずっと待ってるから！！」

前を向いたまま、啓吾が立ち止まる。

「……いつになるかわかんねえぞ」

馨は、すがすがしく笑って答えた。
溢れた涙が、ぽろぽろとこぼれる。

「いいわよ。あんたと違って私、若いもん」

「……好きにしろ」

『好きにしろ』……

馨の胸に、その言葉が響いた。

わかってる。

あなたの『好きにしろ』は、『了解』って意味。

私は泣いてなんかいない。

冷たい空気が目にしみて、勝手に涙が出るだけだ。

私は絶対に泣かない、強がりな女だから……

そのままの姿で、彼を見送らなきゃいけない。

例え涙が出たとしても、声を出して泣いてはいけない。
彼の背中に、聞こえてしまうから。

私は素直じゃない、強がりな女だから。

泣いてなんか、ないんだから・・・

馨は顔を歪め、その場にうずくまった。

膝に顔を押しつけてもなお、次々と溢れ出る滂沱ほうたの涙。

馨は粉雪の中だった一人で、必死に声を抑えながら膝を抱えて泣き続けた。

そんな彼女を残して歩き去る啓吾は、手錠の掛かった両手を器用に動かして、ポケットから携帯を取り出した。
キッドに盗まれていないプライベート用のほうだ。

どうせもうすぐ、没収されてしまうだろう。

だったら今のうちに、やっておかねばならないことがある。

彼はボタンを操作し始めた。

両脇の警官が驚いてやめさせようと口を開きかけたが、その画面に浮かぶ文字を見ると、静かに口を閉じた。

啓吾は最後のボタンを押し終え、画面の表示を確かめると、一瞬歩調を緩めてほんの少しだけ首を背後に回した。だがその目に馨の姿が映る寸前、彼は思いとどまって再び前向き直った。

前方には、パトカーの真っ赤な明かりがくるくと回っている。

後ろを振り返ってはならない。

彼女の泣く姿を見てはならない。

自分はこれから、目の前のあの赤いランプだけを見据えて生きていくのだ。

前だけを見て、振り返らずに。

馨が父親に望んだように、真っ直ぐに……

雪はもう、辺りをほの白く染め始めていた。

第61話 ありがとう(前書き)

今回はケルティックウーマンの曲『You Raise Me Up』(ドラマ『白虎隊』の主題歌でした)を思い浮かべながら読んで頂けると嬉しいです^^

第61話 ありがとう

警察での事情聴取がようやく終わったのは、ほとんど明け方だった。いつの間にか雪は止み、早朝の街並みに分厚く積もっている。

警察の人に送ってもらい、ようやく馨は家に帰り着いた。

今後何度か警視庁へ出向かなければならないが、一旦は区切りが付いたのだ。

肉体的にも精神的にも疲労の限界だった馨は靴を脱いでリビングに入るなり、手に持っていたものを全て床に投げ出してソファに倒れ込んだ。

久しぶりに、あんなにも泣いた。

泣きすぎて、頭がじんじんした。

そのまま、夢も見ないほど深い眠りに誘われる。

次に彼女が目覚めたのは、それからだいぶ時間が経ってからだった。横たわったままそつと目を開けると、積もった雪を反射した明るい光が、カーテンが開きっぱなしの窓からさんさんと差し込んでいた。もう昼近い頃だろう。

馨はしばらくその窓を、ぼんやりと見つめていた。

時折、隣の家の屋根から雪解け水の雫しずくが落ちる。

規則的に落下するそれは、昼間の明るい陽光を受けて輝いていた。

しばらくの後、馨はようやくソファから身を起こしたものの、何もする気が起こらなかった。

家には誰も居ない。

自分はこの広い家に、独りぼっちになってしまったのだ。しんとした家の中で、無気力に昨夜のことを考える。

自分が正しいと思ってやったこと・・・それが、父、母、そして恋人の逮捕という結果に終わった。

それしか方法は無かった。

彼らを悪い夢から救い出すには、そうするしかなかった。ずっと望んでいたことだった。

だが、いくら望んでいたことだったといっても、全く後悔していないと言ったらウソになる。

確かに人質も助かり、事件は無事に終結した。

『ハッピーエンド』になったのだ。

しかし馨にとっては、ハッピーエンドではない。

暗く渦巻く不安が、馨の頭に影を落としていった。

啓吾^{かれ}には「ずっと待ってる」と言ったが、自分にそんなこと言える資格などあるのだろうか。

自ら彼を破滅に落としておきながら、自分は勝手に「待ってるから、ちゃんと罪を償え」と宣言した自分は、はたから見たらずいぶんと身勝手な女だ。

彼は「好きにしろ」と言ってくれたが、本当なら嫌われたって不思議じゃない。

自分のせいで、彼は逮捕されたのだ。

待っている資格が無いどころか、彼に憎まれる義務があるような気

がしてきた。

「ごめんなさい啓吾・・・あなたは私を、恨むでしょうね・・・。

また涙が浮かんできて、馨は俯いた。

足下の床に、帰って来てから無造作に放り出したものが散乱しているのが目に入る。

コートにニット帽、財布、そして携帯・・・

涙で目がかすんで、よく見えなくなってきた。

が、そのとき。

輪郭のおぼろげな世界に、小さな小さな光が放たれた。

馨の視界に、わずかな青い光が見えたのだ。

それは彼女の携帯の、メールが届いていることを知らせるランプだった。

携帯の前面の小さなランプが、青く点滅している。

何も考えずに、馨は機械的にそれを取り上げ、開いた。

『未読メール1件あり』

と表示がある。

ボタンを操作して受信BOXを開いた、その瞬間だった。

今まで虚ろだった馨の目が、画面に釘付けになる。

そこには信じられない文字が平然と表示されていた。

『未読メール 啓吾』

とっさに、届いた時間の表示に目を走らせると、ちょうど昨夜彼が連行されていった頃だった。

一体どうして彼が今さら、自分にメールなんかしてくるのだろう。

夢中でボタンを押してメールを開いたとき、ふと馨の頭の中を、あの考えがよぎった。

一種の不安のような、でもどこか冷めた気持ちだった。

ひょっとしたらこの、今まさに開こうとしているメールは、自分への恨みの言葉でいっぱいかもしれない。

もしくは、一生の別れの言葉か・・・

そうこう考えているうちにパッと画面が変わり、文面が表示された。

「・・・っ!」

世界が、ガラリと変わったようだった。

全てのものが、優しい光に包まれたようだった。

一気に込み上げた涙で、何も見えなくなった。

そこにあったのは、馨への恨みのこもった言葉でもなければ、馨を拒むような別れの言葉でもなかった。

もっと簡単で、もっと温もりのある言葉だった。

ただ一言・・・

『ありがとう』

携帯の画面に、ポタポタと涙が落ちた。

馨は顔を歪めて、携帯を握った両手の拳を目に押しつけた。

胸に込み上げた熱いものがじんわりと広がり、馨の中の凍り付いた悲しみを溶かしていく。

春を告げる、雪解けのような温もりだった。

厳しい冬が去り、日が照り、雪は解けて水となる。

馨の心の中の雪解け水が、次から次に瞳から溢れた。

彼女はソファからずり落ち、膝ひざから床に崩れ落ちた。

溶けた悲しみの中から、今まで叫びたかった思いが姿を現し、喉のどを震わせて溢れ出した。

「わああああああああ

」

我慢なんて、もうどうだっていい。

プライドなんて、もういらない。

馨は大声で泣き叫んだ。

無口な彼らしい、たった五文字の平仮名の羅列いれつ。

その一文字一文字から、溢れんばかりの温もりが伝わってきた。

一体、何に対する『ありがとう』なのかはわからない。

自分を悪い夢から救ってくれたことかもしれない。

もしくは、自分が出所するまで待っていてくれることかもしれない。それとも、今まで自分の側にいてくれたことかもしれない。

もしそうなら、『ありがとう』を言わなければならないのは馨のほうだ。

底無しの沼から救い出してくれた彼の力強い腕に抱かれて、自分は幸せだった。

彼との様々な思い出が、走馬燈そうまどうのように馨の頭の中を駆けめぐる。

今まで素直じゃなくてごめんなさい。

もっともっと、あなたに笑いかけてあげればよかった。

飽きるくらい好きって言ってあげればよかった………

馨はひたすら、声の限りに泣き続けた。

馨の慟哭ういきうが、誰もいない家中に、いつまでも空しく響むないていた。

第62話 すべてのおとに

それぞれの心に強烈な刻印を残して、事件は解決を迎えた。

葵たちはマスコミを大きく騒がせ、一時はニュース番組やワイドショーの話題を占領していた。

しかしそんな事後処理に忙しい日々が続いたものの、日が経つにつれて一同は元の平穏な日常を取り戻していった。

厚く積もった雪が解け、木にはつぼみが芽吹き、若葉の匂いにする風が吹いてくる季節の移り変わりを、葵は穏やかな気持ちで感じていた。

事件から、4ヶ月が経った。もう季節はすっかり春だ。

あちこちで桜が満開を迎え、そよぐ風に花びらを散らせている。

事件以来、五条家は無言で葵から手を引き、今は若宮家にも安定した生活が訪れていた。

葵は、白紙になっていたイギリスへの留学が復帰し、あと数日で出発の日を迎えようとしている。

もちろん、探と一緒に。

婚約は解消されたままだが、晴れて二人は恋人同士に戻ったのだ。婚約者から恋人同士に発展する、というのも少々変ではあるが。

新しい土地への出発を目前に控え、二人は桜並木に沿って河川敷を

ゆっくりと散歩していた。

ひらひらと舞う花びらは、あの粉雪の夜を思い出させる。

葵の左手の薬指には、華奢みやしゃなシルバーのリングがはまっていた。

それは探がイギリスに、ベンを訪ねて戻ったときに買ったものだ。必ず葵を助け出す、という、決意の象徴。

前方にひたすら続く桜並木を眺めながら、葵がつぶやいた。

「組織の人たちの判決、どうなるんでしょう」

探も同じものを見つめて言う。

「彼らは殺人までには手を染めていないようですが、それでも他の罪は重いでしょね」

探の脳裏に、たった一人残された女性の姿が浮かんだ。

苦しくて苦しくて、やっと終わりを迎えたのに、その結末は彼女にとって更なる苦痛となっているはずだ。

人には意地でも涙を見せない彼女だが、今は両親や恋人を思って、ひっそりと泣いているのだろうか。

そんな探の思考を、葵の声がさえぎった。

「でもウノさんは、完璧に悪い人ではないような気がします」

探が顔を向けると、葵はどこか心配そうな表情になって続けた。

「あの人は一度私に、自殺か不老不死、どっちを選ぶかって聞いてきたんです」

葵は言葉の一つ一つを丁寧思い出していく。

「『昔、絶望したとき拾ってくれたボスにどこまでもついて行くと決めた』とも言っていました。だから・・・彼は不老不死なんか、本当は欲しくなかったんじゃないかって・・・何か深い悲しみに囚われて犯罪に走っただけじゃないかって思えてくるんです」

探の記憶の中には、そんな人間らしい彼の姿など見あたらなかった。彼は冷徹で恐ろしく賢く、急所を射抜くような鋭い目を持った、心のないロボットののような男だというイメージしかない。

「何だか・・・僕には信じられません。彼にそんな一面があるなんて」

びゅうつと風が流れて、若葉の匂いが吹き付けた。

新しい命を祝福するように、太陽の透明な光が辺りを優しく包んでいる。

そんな世界と同じくらい透明な葵の声が、青空を抜けていった。

「きっと、完璧に悪い人なんていないんですよ。ウノさんだけじゃなく。みんな『大切なもの』があって、そのために行動していただけなんだと思います」

そう言い切った葵の唇がゆっくりと持ち上がり、口元に優しい笑みが浮かんだ。

二人は足を止めて顔を見合わせ、しばし静かに微笑み合った。

キイツと軋きむ音を立ててドアが開き、入ってきた人物が真まっ直ぐに立つ。

目を上げたウノ　　啓吾はその意外な人物の姿に、驚きでハツと息を呑んだ。

その背後で警官がドアを閉める。

閉ざされた空気の中、その人物は歩みを進めて、無言で啓吾の前に腰を下ろした。

「馨……」

彼の乾いた唇から漏れた言葉は、ガラス一枚を突き通して自分を見据える恋人の名前だった。

面会室に入った瞬間、寂しさが心を突いた。

冷たく立ちふさがるガラスの壁が、向こう側にいる彼をまるで別世界にいるように見せていたからだ。

ガラスのちょうど口の高さの位置に、お互いの声が聞こえるように穴が円状に開いているのをサスペンスドラマなどでよく見るが、実

際のそれは全く違い、どうやらガラスが設置されている下のステンレスの部分に穴が開いているようだ。些細なことだが、自分が思っていたことと現実との違いが、痛みと成ってチクリと胸を刺した。

現実には、甘くない。

4ヶ月前最後に会ったときより、啓吾は少しやつれたように見えた。

彼は半ば独り言のようにつぶやいた。

「俺のことは忘れろって言っただろ……」

だが馨はケロリとして笑う。

「『好きにしろ』って言うてくれたじゃない」

そんな馨に、啓吾は敵わ^{かな}ないとばかりに眉を下げ、口元をゆるめた。

「どうだ、元気にやってるか」

「それはこっちのセリフ」

「まあ……普通だ。それなりにマジメにやってる」

「そう……良かった」

「髪、伸びたな」

「え・・・あ、うん。なんか最近、違うことに気を取られて髪にまで手が回らないっていうか・・・」

「そうか・・・」

そんな調子で、ぼつぼつとだが、二人はお互いの生活を話した。

馨は今日啓吾に、どうしても報告しなければならぬことがある。

先ほど言った、馨が今最も気を取られていることだ。

だが漠然とした 黒い沼に足を踏み入れるような不安が胸に壁を作り、最初の一步が踏み出せなかった。

今度こそ、という決心が何度も揺らぎ、結局彼女は無難な話題にする。

「就職決まったよ。念願叶って保育士になれた」

「本当か？良かったな。そついや昔から『なりたい』って言ったな」

一方の啓吾の生活は平坦で、毎日同じことの繰り返しらしいが、大きな問題は無いらしい。

二人とも、あえてあの最後のメールには触れなかった。

あれはお互いの心の中で、黙って分かり合っておくべきもののような気がしていたのだ。

言葉にして、解説や理由を付け足したら、純粹さが濁るだけのよう

に思えた。

だから馨はあえて遠回しだが、確実に啓吾の心に届く言葉で気持ちを表した。

「啓吾……」

「……何だ？」

「……ありがとう」

ガラスの向こうの彼の瞳に、優しい光が浮かんだのが見えた。それが、わずかに声にも現れているようだった。

「それはこっちのセリフだ」

鼻の先に、鋭い痛みのような感覚が走り、涙がにじんできた。馨は急いで深呼吸し、泣いていないということが無言で啓吾にアピールすると、彼の次の言葉を待った。

啓吾は静かに語り始めた。

「俺は昔、自衛隊に居たんだ。その時たまたま式典か何かでボス・お前の父親と知り合った。そのときは不老不死なんてバカげてると思ってたんだが」

彼はそこで一旦言葉を切り、わずかに眉間にシワを寄せた。

「……そんなときホレてた女がな、自殺したんだ」

馨の目が、悲劇に見開かれる。

目線を落としたままの啓吾は、思い詰めたような顔をしていた。

「本当に、あのときは絶望した。遺書も何も見つからなかったから原因もわからねえ。それで逆に、俺のせいだったんじゃないかねえかって思っちまっつてな」

一見冷めてはいるが、深い悲しみが心の傷となって血を流しているのが伝わってくる声だった。

「本当に俺のせいだったのかもしれない。訓練に忙しくて、なかなか会ってやれなかったし」

馨は、言葉が出ない。

ただただ、苦々しく歪む啓吾の顔を見守ることしか出来なかった。

「それで、『死』っていうものの考え方が変わっちまったんだ。『死』が何なのか、わからなくなった。自分から進んで選ぶような価値があるのかどうか考え続けて……。『死』とか『命』ってものに疑問を投げかける絶望の日々が続いた」

彼はふいに顔を上げ、歪んだ顔のまま口元だけ笑ってみせた。

「だからよ、お前の父親に弟子入りして『永遠の命』ってものに関わってみた。『命』ってのがどんなものか、この目で見てやろうと思ったんだ。例えばそれが犯罪でも構わなかった。どうせ落ちるところ

るまで落ちてるんだからよ、もうどうでも良かったんだ」

苦い空気が流れる。

しばらくの間ののち、馨は静かに問うた。

「今でも、どうでもいいって思ってる？」

啓吾はしばし無言で視線を落としていたが、ふいに馨と目を合わせた。

「いや、今は違う。あの頃の俺は、がむしゃらに突っ走ってた。でもな……」

自分を真っ直ぐに見つめる彼の目が、愛しかった。

「お前に出会って変わった。お前は強い意志があつて、まぶしかった。両親のことも自分で決着つけて……。だいぶ影響されたよ。だから今は、真剣に生きてるつもりだ」

馨の唇が、わなわなと震え始めた。

溢れそうな涙をこらえ、きゅつと唇を引き結ぶ。

今、言わなければ。

「実は私、啓吾に話さなきゃいけないことがあるの」

目の前の啓吾が両眉をひょいと上げ、聞く態勢になった。

馨に、もう不安は無かった。

「2ヶ月くらい前に病院にかかって、その時たまたまわかったこと
なんだけど・・・」

「どうかしたのか？まさか、何か病気でも見つかったんじゃない・・・」

「あ、ううん。そういうことじゃなくて。私・・・私ね、実は・・・」

「

彼が、自分の言葉を待っている。

生きること全力で、真っ直ぐな彼が、待っている。
今、言わなければ。

馨は口を開いた。

「私、妊娠してるの」

呆然と、目だけ見開く啓吾。

馨はすかさず付け足した。

「今、5ヶ月。女の子だって」

啓吾はずいぶんと長い間、夢でも見ているような顔で呆気にとられていた。

何と書いていいかわからない。

啓吾は混乱していた。

馨の言ったことが信じられない。

着ている服のせいか、お腹が少し大きくなっていることにも気付かなかったからなおさらだ。

よくわからない感情があつちへ行き、こつちへ行き、また戻って行き止まり……

ようやく、一つの結論かんがえに辿り着いた。

「俺の…子ども…か？」

「そうよ、啓吾の子よ。啓吾は私に、新しい『命』を宿してくれたのよ」

涙目で声を震わせ、それでもこぼれる笑顔でそう言った馨を見て、啓吾の胸に何か温かいものが広がった。

それが『喜び』だということに気付くまで、彼はまた夢見心地で馨の顔を眺めていた。

しばらくののち、喜びと期待、そして少しの不安の色が入り交じった馨の顔に、ようやく言葉をかけた。

「産んで…くれるのか？」

馨の顔から、不安の色が消えた。

「誰が何と言おうと、私は産む」

強い決意の声が狭い面会室に響き、啓吾の頭に幾度と無く響きわたる。

自然と、優しい笑みが浮かんだ。

「パパとママにも報告してきた。二人とも驚いてたけど、すごく喜んでくれた」

ようやく落ち着いていた啓吾に、馨は語って聞かせる。

「そうか・・・新しい命だもんな」

啓吾も、今まで見たことがないほど穏やかな目で言葉を発している。

「パパなんかね、まさか自分の親友が義理の息子になるなんて夢にも思わなかったって笑ってたんだけど、涙目だった」

それを聞いた啓吾が、無言で微笑む。

馨は興奮気味に、両親のことを話した。

「私、成人したばっかで母親になるなんて早いかなと思ったんだけど

ど、考えてみたらあの二人なんか40代前半でおじいちゃんとおばあちゃんだよ。でも良かった、喜んでくれて」

「これであの二人も、やっと救われるな」

啓吾のその言葉に、はっと気付かされる馨。

やはり啓吾は気付いていたのだ。

彼らが『死』に 『命』というものに縛られていることを。不老不死など幻想に過ぎないということを。

それでも辛い過去を背負い、自暴自棄に組織を動かしてきたのだ。今回の逮捕で、彼もまた救われたのかもしれない。

犯罪だとわかっていても引き返せず、必死に悪に染まろうとした立場がようやく崩れ、気丈な精神からも解放され、やっと本来奥に持つ優しさ 馨にかいま見せていた優しさ を出せて、こんな穏やかに微笑むことが出来るようになったのかもしれない。

そう思うと、また涙が盛り上がった。

啓吾がからかいを含んだ目で馨を見やる。

馨は持ち前の強がり、彼を見返した。

「泣かないよ」

大きく深呼吸する。

「泣かない」

馨は精一杯の笑顔を作った。

「ただの強がりじゃなくてね、強くなろうと思う。強い母親に」

啓吾が、穏やかな光をたたえた目で深く頷く。

そっと自分の腹部に手をやって、馨は目を閉じた。

「赤ちゃんのために、いいお母さんになるから。だからさ…名前、考えといてよ。『お父さん』?」

桜が舞う。

風に身を任せ、それでも最後の瞬間を精一杯踊り、どこかへ消えていく。

花の隙間から差し込む日差しを受けた葵の髪の毛の一本一本が透き通り、彼女の繊細さを際立たせているようだった。

そんな彼女の姿に、探は目を細めた。

降る雪も、散る桜も、この先ずっと2人で経験していききたい。

当たり前前に繰り返す季節の流れを、当たり前前に一緒に感じていききたい。

当たり前前に、側に居たい。

当たり前前に、お互いの世界の一部を共有できるようにになりたい。

お互いの『大切な人』から、『当たり前前に隣に居る人』になりたい。

その先にある2人の姿はきつと、当たり前前に自分の一部の人 かけがえのない人になっているだろう。

2人は川べりの草地に腰を下ろした。

目の前を、透き通った春の川がゆるゆると流れていく。

その流れの先は遙か彼方に延び、淡い光の中に消えていた。

2人の背後から吹き抜けた風が、頬を撫でていく。

葵の横顔に髪が揺れるのを、探はじつと見つめた。

長いまつ毛の下には、初めて会ったときに引き付けられた瞳が、変わらずに前を見据えていた。

水面みなもに反射した陽光が白い頬に重なり、ゆらゆらと流れていく。

まるで、日に透けているようだった。

愛しさと切なさが心地よく解け合った感情の波紋はもんが、探の全身に広がっていく。

彼はそつと葵の頬に手を添えると、髪を脇へどけた。

と同時に、まるでその動きを合図にしたかのように葵がこちらに顔を向ける。

もう幾度と無く繰り返してきた手順だ。

『その瞬間』への道をお互い無意識のうちに模索し、確立した愛の形である。

探が葵の髪や肌に触れると、葵が顔を向けて視線を合わせる。
一瞬ののちに待っているのは、最も幸せを感じるひととき。

どちらともなく目を閉じ、顔を近づける。

2人の間の空気は甘く張りつめ、風さえも動きを止めた。

触れ合った唇の温もりが、全身を包む。

唇を重ね、手を重ね、心を重ね……………

いつか、お互いの世界の一部になる日まで 共に歩んでいこう。

唇に宿る温もりに 身を任せて……………

エピソード

ロンドン

伝統ある町並みは今日も霧に包まれ、小雨が降っていた。

静かな通りの小ぎれいな店から出てきた一人の若い女性　　葵は、
その突然の雨に戸惑う。

葵は不安げに辺りを見回し、コートのポケットから携帯を取り出して時刻を確かめた。
そろそろ探との待ち合わせ時間だ。

朝の天気予報で、髪をきちんと整えて流ちょうな英語を話す気象予報士の『晴れ』を信じて家を出た葵は、傘を持ち合わせていない。
出来れば早く探に来て欲しかった。

初めて会った頃から彼の時計はいつも正確で、待ち合わせには必ず葵より早く来ていた。

事件から4年経った今でも、それは変わらない。

雨の匂いに混じって、あの頃よく待ち合わせをした図書館のベンチの懐かしい緑の匂いが甦ってきた。

2人は英国イギリスの大学を無事卒業し、もうすぐ日本へ帰る。

帰ったらまずあの図書館へ行こう、と探と約束してあった。

葵はふっと微笑むと、自分の左手を見下ろした。

薬指に、4年前プレゼントされたシルバーのリングが光っている。

日本に帰ってあのベンチへ行ったら、探は本物の婚約指輪をプレゼントしてくれるだろうか。
最近の彼は妙にコソコソと何かを隠しているようだから、期待する価値はあるかもしれない。

きつとまた、葵の想像もつかないようなクサイ言葉フロボーズが飛び出すのだろう。

赤いバラなんか一緒に渡されたら、笑ってしまふ。

そしてひとしきり笑ったら、そのままの笑顔で「Yes」と言おう。
きつと彼も、一緒に笑ってくれる。

幸せな未来を想像し、葵は目を閉じた。

雨がコンクリートを打つ音が、一つのリズムのように聞こえる。
そしてそのリズムに混じって、別の音が聞こえ始めた。

パシャパシャと水たまりを踏んで駆けて来る、かけがえのない人の足音

葵は目を開けると、その人の傘の中に向かって踏み出した。

その頃、日本では。

青く晴れ渡る空の下、もと二つの人影が前方の大きな建物に向かって歩

いていく。

娘の小さな手を引きながら、馨は言った。

「久しぶりだねえ、パパに会うの。きっとパパ、すごく喜ぶよ」

すると娘は顔を上げ、その大きくて真ん丸な瞳を輝かせた。

瞳の色は父親譲りだ、と思いながら、馨はまだ一度もその父親の広い胸に抱かれたことのない我が子に微笑みかける。

まだ足下は不安定だが、彼女の足は意気揚々と前方の建物に向いていた。

「パパに会うの、嬉しい？」

「うん！」

満面の笑みでそう答えた娘に、自然と自分も笑顔になる。

馨は前を向いて、一歩一歩歩んでいった。

探の傘に入って歩きながら、少し呆れた声で葵が言う。

「どうして私の分の傘を持ってきてくれなかったんですか？家を出るときにはもう、雨が降っていたんでしょ？」

すると傍らの探は、悪びれもなく答えた。

「こうして一つの傘に入りたかったんですよ、あなたと」

葵が、再び呆れたため息を漏らす。

だが今回は、そこに苦笑が加わっていた。

「狭いじゃないですか」

「じゃあもつと くつつきましよう」

そう言うと探は、葵の肩を引き寄せた。

葵は呆れながらも、幸せそうに笑う。

肩を寄せ合って歩いていく2人の後ろ姿が、雨の中にくっきりと浮かんでいた。

誰もが歩いていく。大切な人、かけがえのない人と共に

永遠に続く 未来への道を

完

『白馬探の大切な人』誕生秘話

こんにちは、洋です。

まずはここまで読んで頂き、本当にありがとうございます。ありがとうございました。

このページは『誕生秘話』だなんて言ってますがただの後書きです。完結後の総合的なまとめというか、ほぼ私が言いたいことを書くだけの自己満足な独白なので、真剣に読んで頂かなくて結構です。読み飛ばして頂いても問題ありません。

項目は

- ・この小説の裏事情。
- ・こだわり（自称）。
- ・最後に。（おまけ。）

でございます。

気になる項目だけでも、ちょちょっとななめ読みして頂けるとよろしいかと^^

この小説の裏事情

さて。何とというか、この小説・・・他の作者の方の作品に比べると『異色』？『異端』？ですよねorz
そもそも主役がとんでもない脇役の時点で、ちょっとおかしいです。しかもオリキャラいっぱいだし・・・。

で。なぜオリキャラいっぱいなのかといいますが、白馬探という男はかなり登場頻度の低いヤツで、家族のことや詳しい設定が無く、彼をとりまく人間もあまり登場していません。なので、彼が中心となって事件を解決していくとなると、どうしてもオリキャラで話を進めるしかなかったわけで。ま、言い訳なんですけどね。

しかも私、黒の組織の謎を解明するとかそういう絶対ムリですから、原作の主役たちと絡めることも出来ず、敵も自分で作ったという有様。

設定としては原作から1年経ってますので、コナンが今どういう状況なのかも私にはわかりませんので、原作の設定を極力壊さないようコナン（新一）はあえて登場させませんでした。

しかしこの小説がこんなに異端で異色である根本的な理由は、この小説の大筋を考えた当時の設定のままにしてあるからです。この小説の案を考えた当時の私は中2でした。

黄昏の館の話の再放送を見たのがキツカケです。あれを見て白馬にホレ、様々な妄想を経て誕生したのがこの小説の原点です。

しかし白馬には、『新一 蘭』『平次 和葉』というような、はっきり決まった相手がいません。

当時は『まじっく快斗』の紅子ちゃんの実在も知りませんでしたし
^^;

なので、恋人も自分で作りました（どーん）

そんなこんなで、何と高校生にして敬語で愛をささやき合うカップルが誕生したわけでございます。

当時は中二病という言葉はありませんでしたが、まさにその極みだと自分でも確信しています。

しかし当時は、こんなに話が膨らんではいませんでした。ぶっちゃけ宝石とか組織とか全く頭にありませんでしたし。出会って結ばれて引き裂かれて、最後に探が結婚式場から葵を連れ出して一件落着！という、何ともベツタベタのベタで古風で昼ドラちっくなシナリオだったわけでありませう。

そして何年か経ち、偶然この『名探偵コナンノベルズ』と巡り会い、私の3年前の妄想を小説にして投稿しよう！と思いい立ちました。

で、構想を練りました。

お相手がオリキャラで恋愛ONLYだと、ただの自己満足ですし、白馬ファンの方に申し訳ないので（笑）白馬にも、コナンたちが立ち向かっているような強大でやっかいな犯罪組織と戦わせることにしました。

本当にごちゃごちゃ複雑なストーリーだったので、かなり長い間頭をひねりましたねー。

大変だった・・・ぜえはあ・・・。

こだわり（自称）

で、冒頭からものすごい（ヤバい）設定ですよね； ちょ、婚約者！？はあ！？
もうホント、今思い出すと死ぬほど恥ずかしいです・・・穴があったら入りたい？というか・・・青酸カリがあったら飲みたい気分です。

中2の私の頭の中は一体どうなっていたんでしょう。もはや中二病という言葉では手に負えなくなってきました。私の性癖が・・・性癖がバレル・・・！！

おそらく婚約の設定とか窓辺でいちやく恋愛シーンとかは、昔お正月に放送されたモー娘。のドラマ『はいからさんが通る』から、かなり影響を受けていると思われれます。

そんなふうにして、最初っからわけのわからない設定で読者の方の度肝を抜いて走り出した『白馬探の大切な人』でございますが。

一応タイトルには密かな思いがあまりまして、『好きな人』とか『愛する人』とかではなく『大切な人』と表現することで、少しでも純愛っぽさが出せたらな、と。

そして白馬だけではない、馨などなどのキャラそれぞれの『大切な人』との人間ドラマを描けたらいいなあと思い、『大切』を全体のテーマに据えたわけであります。

映画『探偵たちの鎮魂歌』で華々しく？スクリーンデビューを飾った白馬が、話の中で『僕の大切な人もミラクルランドに居てね』って言うてるのを聞いたときビクツとしました。すんげー偶然。

あの映画を見たのは確か連載を始めてかなり経っていた頃、友達からDVDを借りたときだったので、その時までそんなセリフ知りませんでした。

なので別にあのセリフに感化されて題名をつけたわけじゃないです。

まあもともと20話くらいで終わらせて、サイトの隅っこのほうで細々と連載できたらいいなあって思ってたんで、タイトルは割とテキトーでした（ちよっ！）

もうホント、婚約者なんて設定恥ずかしくて仕方なくて、クレーム来たら夢オチでさっさと終わらそうかなとか思っちゃってた時期も（笑）

あと、やはりもう一つこだわったのは人間ドラマを入れよう、という事です。

馨のような複雑なキャラを悩ませたり、暗い過去を持つウノの旦那を登場させたり。

『悪い人にも、それなりの理由がある』というのをモットーにいきました。

おまけ

さてさて。最後に再びお礼と、登場人物のその後のようなものを書かせて頂きたいと思います。

エピソードは近未来で、しかもすんごい中途半端で終わりましたが。葵が白馬葵になった（あえて遠回しな表現）ときの話とか、二人に家族が出来たシーンとかで締めてもよかったですけどね、そんなことしたら白馬ファンの方々に、密室で自殺に見せかけて殺されそうなので・・・。

私は、はっきり未来を書くよりもこうやって終わらせたほうが「未来は続いていくよ」ってことを表現できるかな、と思ったのでありました。

まあぶつちやけ私が未来を書く必要もないんですよ。あの2人、ほっといても結婚するでしょうから！。

たぶん結婚式で、英吾パパは泣きながら探を殴ると思います。（ベタだ・・・！）

そして。馨さんは若いので（笑）ウノの旦那が出所するまで待ってます。そこは譲れません！

そして出所したら馨と結婚・・・するのかなあ？子供居るし、別れはしないでしょうが・・・年の差が・・・（今さら！？）

あ、ちなみにお二人のお子さんはエピソードで3歳になって登場してますが、名前は出しませんでした。なんか最後の最後だけいきな

り名前出てきても、取って付けたみたいなのがしますので。
一応考えてあります。考えてるだけですが。

お次は椿ちゃん。椿は、それはそれは美しい娘に育ちます。
でもなんか、最終的に神原さんとくつつくような気が・・・（マジ
でか！）そつ、そんな！

でもエリートな神原さんがすごい年下の幼な妻（妻！？）の椿にデ
レッツとしている図も見たい・・・（性癖がバレる！）

はっ！

なんか・・・くだらないことをいっばい・・・orz
果たしてここまで読んで下さった（人の良い）読者様はいらっしゃ
るのか！？（笑）

それでは！本当にありがとうございました！！！！

2007・4・30 完結御礼 洋

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7999a/>

白馬探の大切な人

2011年11月15日21時27分発行